

---

# カワパン

川上 宏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カワパン

### 【NZコード】

N46120

### 【作者名】

川上 宏

### 【あらすじ】

1969年、戦後は終わり学生運動も終息する頃、僕らは中学3年生を迎えていた。

僕の家は川崎の住宅街だけどまだ回りは畠があり、肥溜めもあって妹はその肥溜めに落ちてしまった。

犬殺しと言う保健所の職員が年に何回か僕たちの町を巡回し、ある日、我が家のトサはつかまってしまった。

助けに行かなければ。

そんな時代をカワパンは上原中学校で親友の石山と色々な出来事を

経験するのであつた。

チン

トースターからちよつとこげ田の強いトーストが2枚飛び上がる。冷蔵庫を開けると、独特的のツーンとしたイヤな臭いが鼻に付く。ノンスメルは入っているのに、冷蔵庫の中のイヤな臭いは取れやしない。キムコの方がいいのかもしれない。

僕は紙で作られている樽形の容器に入っているピーナツクリームと苺ジャムを取り、それをトーストに素早く付けると、前もって用意していた、砂糖をスプーン2杯入れた「コーヒーと一緒に、あつという間に腹の中に入れ込んだ。

弟が力チャカチャテレビのチャンネルを回している。

「8チャンネルはちゃんと映らないから、チャンネルに紙を挟むといいぞ！」

口をグチャグチャ噛みながら弟に言つと、弟は僕の言う通りチャンネルを8に合わせ、厚紙をチャンネルの隙間にに入れ微妙にチャンネルを動かし画像を調整し、一番きれいに映つたところで厚紙を思いつ切り入れ、チャンネルを固定した。テレビの右下に映る時刻が7：55と出ている。

「そろそろ行かない？」

僕はそう言うのと同時にイスから立ち上がり、台所から階段を下りて玄関に向かった。

僕の姿を見ると、玄関で寝ていた我が家の大黒牛トサが立ち上がり一緒に外に出ようとする。

「トサはここにいる」

僕は手でトサを制し、素早く玄関ドアを開けると外に飛び出した。温かくなれば玄関のドアは開け放しになり、放し飼いのトサも家と外を自由に行き来できるようになるが、今は春になつたとはいへ、まだ寒いため玄関ドアは常に閉まっている。

トサは僕が5才の時から飼つてているので、もう9歳になる。最初は犬小屋を作り外で繋いで飼っていたが、いつの間にか放し飼いにし玄関で暮らすようになった。放し飼いにしても近所を時々ぶらりと歩くだけでほとんど家の前の道路にいるか玄関にいる。近所の人も可愛がってくれているので、放し飼いにしているための苦情はまだ1回も来たことはない。しかし風の噂ではどこかにトサの子供がいるという。近所のメス犬が発情期になると夜中になつてもトサは帰つてこない時があるので、その噂は本当かもしれない。

放し飼いにして恐いのは犬殺しだ。保健所の係員が年に数回ノラ犬を捕獲しに来るが、僕達はその人間達を犬殺しと呼んでいた。

「おい、さつき神社で犬殺しを見かけたけど、大丈夫か？」

兄の心配そうな声に「大丈夫だよ、ここにいるよ。それにトサは頭がいいから見つかっても捕まらないよ」というような会話を年に何回かはする。

ところがある日、3日ほどトサが家に帰つて来ない時があつた。1～2日いないうちは時々あるので、一日位ならそれほど心配しないのだが、一日いないとさすがに心配になり兄弟みんなで町内を捜し回つた。

みんなで捜し回つても見つからないとさすがに不安になる。もしかしたら犬殺しでは。情報を集めるところ3日前に犬殺しが来ていたという近所のおばさんの証言。これはますます犬殺しに捕まつたのだと確信し、僕と一番上の兄は飯田の川沿いにある犬殺しの小屋に向かつた。

犬殺しの小屋は僕の家から歩いて一時間余りだが、トサのことが心配で早足で歩いたため、あつという間にその時は過ぎた。

僕達は犬殺しの小屋と呼んでいたが、その建物は鉄筋コンクリートで作られたちゃんとした大きな建物であつた。しかしさすがにその建物に近づくと犬の遠吠えや鳴き声が聞こえてきて、糞尿の臭いが鼻につくようになる。

兄が何やら手続きをし、建物の中に入ると檻が幾つも並び、その

一つ一つの檻に10匹位の犬がみんなおとなしく入っていた。

鳴く犬はない。みんな不安そうな顔をして僕達を見ている。

僕は「トサ、トサ」と大きな声で何回も呼ぶと正面の奥からワン

ワンとトサの声がした。

やつぱりいた。

僕は急いでその檻に駆け寄るとトサも他の犬をかき分け檻の最前に姿を現し、嬉しそうな顔をして尻尾を振っている。急いで檻から出してもらうと身体全体が糞尿臭く、とても抱きしめてあげることはできなかつた。もちろん家に戻り、身体全体をすぐ洗つてあげたが……。

兄が「一週間あの小屋に置かれ、飼い主が現れなければ殺されるんだ」と帰り道で言つていた言葉が、時間と共に恐怖に感じた。

僕の家の玄関を出たところの道は、両手をひろげると両方の手が壁に触つてしまうほど小さな私道で、8歩歩くと車2台がぎりぎり通れるほどの家の前の道路に出る。

僕の家は土地が20坪ちょっとでその土地に総2階の家が建つている。土地が20坪ちょっとで家が40坪弱ある。ということは田一杯土地を使って家を建てているということだ。そのため両隣の家とは50センチ位しか隙間がなく、窓から窓、屋根から屋根に移り渡ることもできる。

もともとこの土地は百坪位の土地を5つに分け、そこに田一杯の家を建てた建売住宅であった。

道路上に面した家の横幅5~6メートル、奥行き11メートル前後の小さな土地が5件きつちり並んでいる。

一番南側がかめやという食堂で隣がペンキ屋、その次が僕の家の隣家、鹿島さんというサラリーマンの家。次に僕の家があつて、一番北側が元ヤクザの寿司屋。

お客が来るとこの寿司屋から並寿司を取る。僕達はお客が残す寿司をいつも楽しみにしている。寿司屋の隣には舗装されていない住宅道路が奥に続いている。

僕の家の一階の半分、道路側に面したところは佐山さんに貸していて、佐山さんは妹と姉妹二人で食堂をしている。僕の家の前半分を佐山さんには貸しているので、僕の家の玄関は道路に面してなく8歩奥にあるのだ。

食堂がかめやと佐山さんと一緒にあるのは、僕の家の前に三和鋼管という百人くらいの工員が働いている工場があるからだ。もちろん工場にも社員食堂があるのだが、社員食堂ではリラックスできないうといふ工員がかめやとか佐山さんの食堂に食事兼酒を呑みに結構来るようだ。

工場といえば、三和鋼管の隣には三和鋼管よりも大きな東京樹脂という工場がある。この工場は入口にちゃんとした守衛室が置いてあり、外部の人間は絶対に中に入れないようになつていて僕も中を見たことはない。

三和鋼管は日曜日になれば会社は休みなので、そーと中に入れれば色々見学もできるし、普段の日でも子供が工場内を少し歩くくらいなら目をつぶつてくれるのでも、工場内がどうなつているかわかるが東京樹脂はまったくわからない。

バス通りには東京樹脂の何倍もある江原製作所という大工場もある。この工場の中には年に一回ある大運動会の時、江原製作所の社員の家族の振りをして入ったがあまりの大きさに迷子になりそうだった。

大運動会は社員の家族に弁当券やお菓子券が配られ、みんな美味しそうにそれを食べているのが僕にはとても羨ましく見え、何とかあのお菓子が食べられないかと大運動会が行われているグランドの周りを何周も回つてお菓子券が落ちていないかと探したが、お菓子券どころか弁当券一枚落ちていなかつた。

工場といえば大きな工場も三和鋼管位の小さな工場も、工場は全てまわりがコンクリートの塀で囲まれていたため家の南側を歩けばどこに行つてもコンクリートの塀を見ることができた。

僕の家の北側は住宅地域と商業地域だが、僕の家を含めて南側は

準工業地域であった。なんで住宅が5軒も建っているのに、僕の家の土地が準工業地域なのかよくわからないが、きっと僕の家の地主が準工業地域でも住宅が建つよう上手くやったのだろう。もっと僕の親がこの家に来た時、家の周りは工場と畠しかなかったので、明らかに住宅地域や商業地域ではなかつたようだ。

僕の親は僕が生まれた年にこの家に來たので僕はこの家で最初に生まれた子供であった。小学校に上がつた頃でも、まだ裏の小川でカエルを獲つたりトンボを追いかけたりできたのだから町ではなく田舎であつた。それに畠や肥溜めがあつたのだから、明らかに田舎だろう。

ある日2番田の兄、弟、妹、僕の4人がトサを連れて畠を歩いた時、トサが肥溜めの上を歩いた。肥溜めの表面は固くなつていたし、素早くその上を歩いたのでトサは歩くことができたみたいだ。ところがトサに続いて妹がその肥溜めの上を歩いてしまつた。

妹はまだ3才だったので、肥溜めを判断することはできなかつたみたいで、トサは歩くことができたが、妹は見事に肥溜めに落ちてしまつたのだ。近くにいた僕と弟は驚いたが妹が落ちたことにより、強烈な臭いが辺りいっぱいになり、その臭いにより、その田形の穴が肥溜めだとはつきりわかり大笑いしてしまつた。

ところがちよつと離れていた2番田の兄はびっくりした顔をして、「おい、早く助ける」と叫んだ。

確かに早く助けなければならぬ。小さい妹は肥溜めの中に身体が全て入つてしまつて死んでしまうかもしれない。今はまだ身体の半分しか沈んでいないが、ゆっくりと身体は沈んでいつている。

しかし、ウンコだけの妹に触るのはちよつと嫌だつたので躊躇していると2番田の兄が、「早く、助ける」と再び叫んだ。

その声に驚き反射的に妹の手を掴むと思いつ切り引つ張り上げた。妹はきょとんとした顔をしている。

2番田の兄も妹をひっぱり上げようと思えば引き上げられるとこにいたが、糞まみれの妹をつかむのは嫌だつたのだと思う。

家に戻る間、2番田の兄、僕、弟は妹と少し離れて歩き、やつとの思いで家に着くと直ぐにお母ちゃんを探しに行き、「ヨツコが肥溜めに落ちた」と大声を出した。

お母ちゃんは妹を見ると素早く服を全部脱がし、ホースから水を出すと妹の身体に勢いよく浴びせた。

「お母ちゃん、ヨツコの服捨てるでしょ」

誰が見たつてウンコだらけの服は捨てるだろつと思い、僕がそう言つと、「洗えば大丈夫だよ」とお母ちゃんは答へ、大きな木のタライに妹の服を入れた。お母ちゃんはたくましい。

お母ちゃんのたくましさのHピソード、パート2。

多摩川で口ボソという体長5センチメートル位の魚を、自分達で作つた投げ網で何匹も獲つて家に戻りお母ちゃんに見せた。

お母ちゃんに見せたのは何か適当な器を出してもうつてその中で口ボソを飼おうと思つたからである。

お母ちゃんは口ボソが泳いでいる大きな空き缶を手にすると台所に行き、あつとこゝ間に包丁で口ボソの腹を裂き、内臓を取りだした。僕達は抗議する間もなかつたが、口ボソはまづくはなかつた。パート3。

祭りの時や特別な日に露天でヒココをおじさんが売つている。1匹10円。決して安くはなかつたが、そのあまりの可愛らしさから2~3羽いつも買つてしまつ。

もう可愛いいくて可愛いくて、寝る時も一緒に寝るが、朝起きると背中の下でペツシャンコになつて死んでくるのを見つける。

悲しくてお母ちゃんに、「フリーが死んじやつた」と言つと(インスタンス)ラーメンのCMで3匹の子ブタが出てきて、名前をブー、フー、ウーと言つていたので、ヒココにもその名前を付けた)、お母ちゃんはフリーを拾い上げ、台所に行き、羽をむしり始めた。

「お母ちゃん、フリーをどうするの?」

「羽をむかなくちや、食べられないだろ」

僕は一生懸命頼んで食べるは何とか勘弁してもらつた。

家のふち、20cmの幅しかない庭にワーコーのお墓を作ったが、ブーとワーコーのお墓も一週間以内に作られた。

何でヒヨコはすぐ死んでしまうのかと悩んだが、ある時、ヒヨコは段ボールに入れ、触らなければ鶏に成長するということがわかり、可愛がり過ぎてはいけないということに気付いた。そして可愛がらないヒヨコは数ヶ月で鶏になるが鶏になるとコケコッコーと鳴くので近所から文句が出るようになり、人手に渡すことになる。

「ここで鳴くとうるさいから周りが静かで鶏を飼っているところにあげたから、そこはたくさんの鶏がいるからあの子も楽しいと思うよ」とお母ちゃんは言っていたが、僕には鶏がどこに行つたか確かめることもできなく、ただお母ちゃんの言葉を信じるしかなかつた。

家を出て、道路を北に向かつて歩くとすぐ右に汚くて大きな木造アパートがある。

僕が小学生の頃、その木造アパートの前はちょっとした空き地になつており、アパートの子供達のためのブランコ等が片隅にあつた。木造アパートの空き地はちょっととした公園になつていて僕もよくその空き地でかくれんぼや缶蹴りをして遊んだが、僕が中学生になった頃、このアパートの周りにも鉄筋コンクリートの塀ができてしまった。

僕は一人で退屈な時、三和鋼管の塀や木造アパートの塀の上に立つて歩いたり、軟式ボールを当てて一人野球をしたりしていた。

一人野球とは自分が投手になり、壁にボールを投げて跳ね返ってきたボールを打者が打つたボールとし仮定して、それを取つてまた塀にボールを投げ、それがスムーズに取れると一塁アウトということにし、スムーズに行かずボールがどつかにそれたらヒットにしたりする遊びである。

木造アパートはかなり汚い。そしてそのアパートの横の道は結構歩く。

夕焼け、海の夕焼け……

なんとなく鼻歌が出る。スパイダースの『夕陽が泣いてる』は僕の好きな歌の一つだ。

汚い木造アパートの先は太陽ベーカリーというパン屋。ここに「ペパンは旨く、一斗缶にたっぷり入ったピーナッツクリームを塗つて15円、よく昼飯代わりとなる。他にもイチゴジャムやバターもあるけど、バターはきっとマーガリンのはずで、名前だけバターとつけているに違いない。

太陽ベーカリーの前はクリーニング屋、その隣は薬屋。太陽ベーカリーの先は風呂屋、風呂屋の裏には山と積まれた廃材がある。風呂を沸かす燃料だ。近くに製材所があるので、そこから廃材をもらってくるのだらう。

ここはボイラー室だが奥の扉を開けると浴槽の横に出ることがで、そこは女風呂である。

前に一度、風呂屋のおじさんがその扉を開けるのを見たことがあるが、裸のおばあちゃんがチラッと見えただけで、はつきりとよく室内は見えなかつた。

風呂屋の塀は、ノジ板を横に打つてできているため、板と板の間に指の太さぐらいの隙間ができる。よく若いあんちゃんが夕方暗くなる頃、そこに手を当て、中を覗いていた。

風呂屋の前は万屋よろづや、小学校4年の時の同級生三沢が住んでいる。その万屋の隣は八百屋、その先の四つ角は肉屋、この肉屋のコロッケは旨い。僕は日本一と思っている。カレー味なのが普通のコロッケとは違う。

中学生になると色々な町から生徒が来るので、我が町のコロッケ自慢が始まつたりする。そんなに旨いのかとあちこちのコロッケを食べたが、やっぱり僕の町の肉屋が一番旨い。

風呂屋の先にある肉屋の前はこみや。ここも万屋だがどちらかといふと食品が多い。卵なんか店先に山と積まれている。

僕は卵を買うのは大抵こみやで、それも大きい1個13円のやつを買う。

卵は小さい順に10円玉、11円玉、12円玉、13円玉とあるが、13円玉は大きさに制限がないため、13円玉は時々とてもなく大きいのを見つけることができる。そのため13円の卵を買つのだ。双子の卵を見つけるのは当たり前で、時々三つ子の卵もある。ある日とてもなく大きな卵があつたので、それを買って割つてみたらなんと四つ子の卵であつた。とても嬉しい卵に出会える時もあるが、時々腐つた卵を摑む時もある。

卵を割ると腐つている卵があるから、卵は一度別の器に割り、腐つていなか確かめてから目的の器に入れる。もし腐つた卵を割つてしまつた時は、その臭い殻をこみやに持つていけば、新しいのに替えてくれる。

四つ角を右に行くと富城小学校の正門があり、ずつとその先は南武線の桃原駅がある。左だと富城商店街で市場や、酒屋がある。僕はよくお使いを頼まれるが、魚を買う時とお酒を買う時はこの四つ角を左に曲がる。1本40円で一合ある日本酒を毎日1本、お父ちゃんのため買つのも四つ角を左に曲がつて5軒目にある酒屋である。

僕はその二つ手前にある和菓子屋に入りたいのだが、高級すぎてこの店で買い物をしたことは一度もない。

四つ角を越えると右は富城小学校の校庭で校庭の一一番北側にはプールがある。このプールは僕達が卒業したからできたので一度も入つたことはない。

四つ角を越えた左側はずーと住宅街である。

「カワパン、ゆっくり歩いてるな。先、行くぞ」

後ろからサーパンが僕に声をかけるとあつという間に前に出てスタスタ前を速足で歩いていった。

サーパンは小学校4年の時の親友で、『サーパン』『カワパン』というあだ名はお互いが相手に付けたあだ名であつた。

サーパンは沢井と言い僕は彼のことをサラダパンとふざけて呼んでいたらサーパンは「川上はカワウソパンだ」と言い返してきた。

カワウソって何のことかよくわからなかつたが、動物だと後になつて教えてくれた。

サーパンはクラスで一番頭が良かつたので、さすが物知りだと感心したものだ。

時間が経つにつれてサラダパンがサーパンに、カワウソパンがカワパンに自然となつていった。

サーパンに声をかけられたので、僕は自然に口から出ていた鼻歌をやめた。

富城小学校の校庭を後ろに見るようになると道は左にカーブして目の前に道を横切つている新幹線の高架線が見えてくる。

新幹線工事が僕達の町に来た時はみんな大騒ぎになつた。家の2階の窓から試運転で走る新幹線を初めて見た時僕は、「カツコいい」と思わず呟いてしまつた。

新幹線は慶應の山にトンネルを造つたので、慶應の山に行き山の斜面から線路の工事現場に下りたことがある。日曜日だつたので、工事的人はない。真つすぐ伸びた高いところにある線路はどう表現していいかわからない初めて見る美しさがあつた。

トンネルの中にも入つたがひんやりしていて奥の方に歩いていくのはなんとなく怖かつたため、20歩も歩いたら戻つてしまつた。

新幹線の高架線の隣には神社がある。小さな神社だが夏になると必ずここで盆踊りが行われる。ワルの長瀬は時々ここに賛銭箱からお金を盗んでいるという噂だ。

高架線を越えると「カワパン」と声がした。声がした方を見るとチンチンだ。チンチンは小学校6年生の時の親友で中学2年になつた時、再び同じクラスになつた。

小学5年の時、クラス替えがあり、初めてチンチンと出会つた。噂は聞いていた。女みたいな男、女としか遊ばない男として有名だつた。

「お前、チンチンあるのかよ」と誰かに言われたのがだ名になつたと、吉永が言つていた。

女臭いチンチンは気持ち悪く感じ、しばらくそば寄らなかつたが、いつの間にか親友になつていた。

「カワパン、演劇クラブに入ろうよ」

チンチンが朝から元気の良い声を出す。わたりちやんとした朝飯を食べているからだろつ。

チンチンの家は父親が大会社の部長なのでなにかハイカラである。誕生日会をクラスの友達を呼んで開くといふこともチンチンの家で初めて味わつた。

優しそうなお母さんにケーキとか混ぜじ飯、それにお菓子の数々、僕にとっては夢のようなパーティーである。僕なんか誕生日会なんてやつたこともないし、誕生日すら親はいつも忘れている。

「ねえ、カワパン、演劇クラブに入ろうよ」

僕とチンチンは小学校の時、演劇クラブに入つていた。さつき僕を抜き去つていつたサー・パンも演劇クラブに入つていて6年の時、主役はサー・パンであつた。

僕の演技は自分で言うのもなんだが、結構いける。しかし、背が低いため主役にはなれず、2番目の役になつてしまつ。学年でやる演劇も主役ではなく2番手の役だつた。

「川上は背が低いから、お父さん役は無理なんだよ」

先生がなぐさめの言葉をかけてくれたが、納得はできない。

そんな訳だから、一度は演劇で主役をしたいと思っていたが中学の演劇クラブには男が一人もいない女の園なのである。そんなクラブに入つたら周りからどんな風に見られてしまうか。チンチンは女みたいなものだから抵抗はないだろうが、僕は物凄く抵抗がある。だからチンチンはことあるごとに僕を誘うが僕の返事は、「やだよ」であつたし、今もチンチンにそう返事をした。

「もう、カワパン、ちゃんと考えなよ」とチンチンが言つた直後、後ろから、「おはよう」と声がした。中原容子である。

「ようちやん、おはよう

チンチンはうれしそうに返事をする。

中原容子も小学六年の時のクラスメートである。今は違うクラスだがチンチンは兄弟みたく、いや姉妹みたく仲がよい。又、彼女は宮城小学校でもベスト3の美人だつたし、上原中学でもベスト3に入れる美人であつた。

チンチンは容子が来ると僕にはかまわなくなつたので、僕は歩く速度を少しずつ落とし、自然に一人の少し後ろを歩くようにした。しばらくすると声も聞こえないほど距離が離れたので、僕は再び鼻歌を口ずさんだ。今度の曲はタイガースの『君だけに』だ。

家を出て、しばらく歩いていると身体もだんだん元気になり、しつとりとした歌より活発な歌を歌いたくなつたのだ。

春の陽射しはだんだん僕を元氣にしてくれる。それに上原中学校に近づくにつれ、久しぶりに石山と会えると思うとあれもこれも話そうと言葉が沸き上がってきて、押さえられなくなるので、身体の内から元気になつていくようであつた。

僕の家の前の道を真つすぐ北に歩いていくと、いつかその道は学校通りにぶつかる。ぶつかって左に曲がれば川崎市立上原中学校の正門が見えてくる。

## カワパン

昭和44年（1969年）日本は、40年不況が終わり、いざなぎ景気の真つただ中、この年日本は元気いっぱいで、国民はこれら日本の未来を豊かでハッピーになると、信じて疑わなかつた。社会現象となつたモーレツ社員の誕生もこの年で、小川ローザの「モーレツ」も大ヒットした。

昨年、GNPがアメリカに続き西側で第2位と発表され貿易収支も黒字に変わり、チャールズブロンソンやアランドロンといった外国人タレントがCMに出てくるほど国際的になり、海外出国人数も50万に迫る49万2880人となる。

誰もが、日本から世界へと眼を向けはじめた年であるだけでなく、アポロ11号月面着陸成功により宇宙にも目を向けた年でもあつた。エネルギーいっぱいの年は学生達も同じで東京大学、安田講堂を学生が占拠し、それを機動隊が排除する光景はテレビで全国に流れ、その視聴率が95%を記録した。

エネルギーに変化していく国土は、汚い川や海、星の見えない空も作っていた。そんな年、僕は中学3年で中学生活最後の一年を送ろうとしていたのだった。

新学期校門に足を踏み入れる時、桜の花がどうしたつて目に入つてくる。暖かい春の風はなぜか心をウキウキさせ、新しい学年に何か面白い事が起きないかと期待を抱かせる。そんな気持ちだから、目に入った桜の色は遊園地の乗り物の色や、祭りの提灯の色のようを感じる。

僕達の中学校の校門は正門と裏門、それに正門と同じ並びにある東門があり、どの門から入つても桜がよく見えるが、校庭にある裏門は、北側と西側に一列に植えられた桜を一望しながら入れるので、

眺めながらこの門が一番である。しかしこの門を使う生徒は少なく、ほとんどの生徒は正門を使う。

僕達の中学校には、三つの小学校の卒業生が通つて来ており、僕が通つていた宮城小学校の半分と、一つの小学校のほとんどの生徒は正門から校内に入る。

僕は東門から入るのだが、下駄箱が裏門近くにあり、結局かなり歩かなければならぬため、裏門や正門を使う時もたびたびだ。

今年はいよいよ中学3年。中学生活最後の年で、高校受験の年でもあるが、1学期からそんな先の事は考えていらない。一番考えている事は夏休みの事である。今年こそ泊まりがけでキャンプに行こうと、春休みに入る前、石山と誓っていた。

中学2年の夏休み、僕と石山、それに細井、小泉、出川、加山の6人で伊豆にキャンプに行こうと一度計画したが、失敗に終つたのだ。中学3年の今年こそ成功させなければならない。だから教室に入つたらまずその相談を石山が言つてくるに違ひない。ところが、僕は今もっと面白い計画があるので、それを石山にすぐ話そうと考えている。

春休みは、夏休みや冬休みに比べ短い。どこに行く訳でもなく、なんとなく時間を潰していたら終つてしまつ。特に、暖かくなると無性に眠くなるので、ほとんど家で「口、口、口寝ていたようなものだ。「口、口、口寝て」いるといろんな事を考える。一番考えるのは友達の事だ。友達といつても近所の友達ではなく、クラスメートのことだ。なぜなら、近所に友達持てるのは小学校までで、中学になると近所付き合いは無くなり、友達と言えばクラスメイトに限られてしまうからだ。

僕と一番仲の良いクラスメートは石山と……加山……で、石山とは小学校も同じ宮城小学校だったが、石山は3組で僕は4組とクラスが違うから、存在は知っているだけの間柄であった。

石山とは中学1年は別クラスだが加山は同じクラスだった。中学1年の時一番仲のよかったのが加山であったが、2年生の夏休み、

ある事件があり、その後なんとなくぎくしゃくしている。

石山とは2年の時同じクラスになつた。キツイ目に、食いしばつた口、丸顔で小さな身体。人を寄せ付けない雰囲気で、笑顔を見せようとはしない。小学校の時は不良と噂され、あまり側に寄りたくないタイプであった。

「おい、貧乏揺すりやめるよ」

石山が僕に初めてかけた言葉である。開くか開かないかの口で、ドスのきいた低い声だ。その声に反応し振り向いた瞬間、石山と目が合つてしまつた。

こわい、でも目を反らしたら後々までなめられる。

僕は石山の目を見ながら、ゆっくり半回転している上半身を元に戻し正面を向き、貧乏揺すりはやめた。

僕は、暴力は嫌いだが暴力には負けたくない。

石山が立ち上がり僕の側に来て、胸倉を掴んで脅しをかけてきたら敢然と立ち向かうつもりでいる。でもいたずらに揉め事を起こすのも意味はないと考え、貧乏揺すりをやめたのだ。

『決して石山が怖い訳じゃない』心中で僕は一生懸命そう思おうとしていた時ちょうど、「カワパンも七組なんだ」とフカヒレが声をかけてきたので、石山との緊張感が解け僕はホッとした。

2年になり初めて入つたクラスはゴタゴタし、皆好きな席に座り、誰が入つて来たのだろうと辺りを見回している。机に座っている者もいるし、3～4人固まって話している者もいる。

僕も知っている奴はいるかと辺りを見回していたので、ついそつちばかり気がいつて、足は貧乏揺すりをしてみたみたいだ。

新学期初日は自分の好きな席に皆座るが、二日目は担任が席を決めていた。机はスチールの一人用で、男女が交互に座る。

僕は窓際の3列目で、右斜め前に石山が座つた。

僕の背は前から3番目、石山は5番目だから二人とも前方の席になつたのだと思うが、その席順が僕と石山井の仲を急速に近付け、一ヶ月もすると仲良しになつていた。

教室のドアを開くと、石山はもう来ている。

「オッス」と僕。

「メッス」と石山。

「キッス」と一人で言つと、唇を突き出しキスする口を一人ともつくりつた。最近流行りの挨拶である。

「石山、俺、春休みにいいこと考えた」

「世界征服か」

石山は僕が真面目な顔をして話すとすぐに茶化す。

「馬鹿言つてんなよ。面白い計画だ」

面白い計画という言葉に石山は反応した。おそらく彼は、夏休みに計画しているキャンプで、僕が何か面白いイベントを考えたと思ったのだろう。

僕と石山で何かやる時、大抵僕が提案し中身も僕が考へ、それに石山が賛同し、仲間が欲しい時は一人で集めるという形態をとっていた。

「あのよ、うちのクラスつて幾つかのグループに分かれてるじやん」

「俺のグループとカワパンのグループってことか」

「石山、真面目に聞けよ」

ちょっとと語氣を強めたので、石山は、「はい、わかりました」と笑顔を僕に向けた。

いつ頃からだろう、彼の笑顔が毎日見られるようになつたのは。小学校の時、廊下ですれ違つたり、校庭で見かけた事は何度もあるが、いつもしかめ面をしていた。

中学2年の初めて会つた時からしばらくは笑顔を見せる事は無かつたが、気が付いたら僕の前ではいつもニコニコした笑顔を見せている。

僕は石山と違つて、小学校の時からいつもへらへらと笑っている子供であった。

小学校の卒業アルバムを見ると、箱根の金時山頂上でクラスメー

ト5～6人で撮った写真が載せてあり、そこに写っている僕の顔は、これ以上ないといった笑顔である。他の友人達は、くたびれきった顔、ちょっとニコリとした顔ばかりなのに、僕だけは、何がこんなにうれしいのだろうと、本人が見ても笑いすぎじゃないかという顔を載せていた。

先生から叱られる時も「川上、笑うんじゃない」といつも言われる。自分では神妙にしているつもりなのだが、どうも顔はへらへらしているようなのだ。そんなへらへら顔の僕といつも接しているうちに、石山も笑うようになったのかもしれない。

「男はさ、川田、横山、小泉という野球のグループと、ホゾ、フカヒレ、加山」

僕は加山の名前だけをわざとぶっきらぼうに言つたが、石山はそのわずかな違いには気づかないようであった。

「まあ自分達は頭が良いと思っているグループ。ううと、そこに前原も入るかな。それと実藤、古畑、小久保、新城のグループともいえないグループ。後、俺と石山、出川、細井のグループ」

「え、俺達のグループに出川と細井が入るの。俺、嫌だよ」

「俺だって嫌だけど、周りはそう見てるんじゃないか。それに、去年一緒にキャンプに行こうとしたじゃないか」

「それはそうだけど、出川は嫌だな。一緒に仲間に見られたくないよ。あいつとは」

「別に今、班のグループ分けを話しているんじゃないなくて、俺らのクラスは一応、こんな風にグループ分けが出来るって話してんだから、おとなしく最後まで聞けよ」

「はい、わかりました」楽しそうな顔をして石山が返事をする。

「カツチン、長原、チンチン、松田が最後のグループ」

「おいおい、草津と石井はどうなっちゃうんだよ」

「あつそだつた。あいつらは誰とくつついているんだ」

「誰だろう。いつも孤独を楽しんでるよな」

「でも草津は、誘うと俺らに結構付きあうじやん」

「そうか、じゃあ俺らのグループなんじゃない」

「そういう事にしよう。草津と石井は俺らのグループ。

でも俺、石井と話した事ないぞ。それでも同じグループなのか

「石井は草津と仲が良いんだから、別にいいんだよ  
ジリリリリリーン。

始業のベルが鳴ったので、石山との話が中断された。ドアが開き、カツパが見た事もない男子生徒を連れて来た。

カツパとは僕達の担任で、髪の毛がカツパの皿のようなカットをし、顎が四角ばつて、口が大きく、誰が見てもカツパに似ているので、かなり前からそのあだ名をつけられている。

八つ上の僕の兄も、「お前の担任はカツパがなつたか」と言ったから、少なくとも8年以上前からカツパと呼ばれていたのだろう。

「えー、3年生になり今年は受験の年もある。我が上原中学は、例年なら3年になるとクラス替えがあったのだが、今年からは受験の年にクラス替えはマイナスではないかとクラス替えは無くなりました。そのため、又一年、同じメンバーで、僕も再びこのクラスを担任するからよく言う事を聞くよ。これから、クラスのメンバーは変わらないが、新しいメンバーが一人増えたので紹介します」  
カツパはそう言つと背を向け、黒板に大きく「熊田一郎」と新入生の名前と思われる字を書いた。

あちこちで含み笑いが起きると、新入生は怖い顔になつた。

小さな目に、潰れて上を向いている鼻、角張った輪郭にごつい身体。誰が見ても熊に似ているところに名前が熊田なので、あちこちから含み笑いが起きても当然だろう。

「えー、北海道から来た熊田一郎君だ。皆仲良くしてやつてくれ」  
カツパの言葉が終らないうちに、「北海道のヒグマが来たー」とフカヒレが大声をあげたので、一斉に笑い声が教室内に響いた。

いつもなら大声をあげ、騒ぐのは僕の役目だったが、転校生に意地悪する行為は昔から出来なかった。

「中学生の友」に載っている中学生生活の小説を読むと、必ず転校

生という存在は出てきて、その転校生はクラスメートにいじめられ、主人公がそれを助けるか、転校生が主人公で、そういういじめに負けずクラスメートと仲良くなっていくという話が大抵書いてあるので、僕は転校生に憧れていた。

出来れば自分が転校生になつて、見知らぬ学校に行きたいと本当に夢見ていたが、父の仕事は自営業なのでそんな事は有りえず、それならばと転校生にやさしくしてあげて仲良くなろうと思つていたのだ。

野球部の小泉も、中学1年の時僕達のクラスに転校してきたので、すぐに声をかけ仲良くなつた。だから僕は、転校生を皆と一緒に笑わないでじつと見ていた。

転校生の顔は真っ赤になり、心なしか目に涙があるように見えるが、彼はその目をフカヒレに向け睨みつけていた。

「笑うな！」 カツパの大聲が響く。

カツパの声に、じつと転校生を見ていた僕も、金縛りが解けたようになり石山を見た。

今日は新学期初日なので皆好きな席に座っているため、右隣に石山が座つているのですぐ目がいつたのだ。

石山は僕と同じく笑つてはいなかつた。他のクラスメートは大きく笑う者、小さく笑う者とその大きさは違つていたが、そのほとんどは笑つていて、カツパに怒鳴られたためその笑い顔が一瞬止まり、そーと元の顔に戻そうとしている顔になつていた。

僕の目が他のクラスメートに移る。神崎も笑つていない。

神崎は女だてらに、クラス委員長を中学一年生の間ずっとやつていた。女子がクラス委員長をするというのは非常に珍しく、他のクラスではないことであつた。

委員長は男性、副委員長は女性、書記は女性が8割、男性2割といつのが常識なのだが、神崎は中学1年の時から委員長が指定席であつた。

彼女は常にクラスで一番の成績だから、委員長になつても不思議

はないのだが、成績プラス姉御的な性格が加わっているため、委員長に選ばれたのだと思う。いくら頭が良くてもおとなしかつたら、副委員長が女の場合定位置なのだ。

「人の名前で笑うなんて恥ずかしいと思わんか。深田そこに立つてろ」

カツパの怒鳴り声に、教室内はシーンとなつた。

「転校生を暖かい気持ちで迎えてあげられないなんて、中学生として恥ずかしくないのか。もうお前達は大人なんだぞ。人の名前で笑うなんて子供のする事だ・・・。熊田、あの奥の席に座れ」

カツパに指された席に熊田は歩き始めたが、その目はずっとフカヒレを睨み付けていた。

熊田の座つた席は、フカヒレと一席しか離れてなく近かつたため、熊田の目はずつとフカヒレを睨み付けていたが、フカヒレもその目をそらそうとしなかつた。

席が離れていればその視線を外したり、知らないふりも出来るだろうが、これだけ近くてその視線を外すと、明らかにビビッタと周りから思われるため、フカヒレは視線を外さないのだろう。

カツパは簡単な連絡事項を言うと、すぐに教室を出ていった。

新学期初日は顔見せだけなので、これで終りであるが教室内の初日はまだ終つていなかつた。

「おい、お前」

カツパが去つた後なので教室内はいつぺんに騒がしくなつた。

そのため、熊田の声は近くの者にしか聞こえなかつた。しかし、聞こえた者にとつてその声はとても恐ろしく聞こえたのだ。フカヒレにも当然聞こえている。

熊田はフカヒレを睨み付けながらジカヅカと歩き、あつという間にフカヒレに近づくと、いきなり右拳を振り上げ左頬を殴つた。後ろに吹き飛ぶフカヒレ。

机が彼を受け止め、ガシャツという大きな音が響くと、近くにいた女生徒がキヤーと叫ぶ。

僕は初めて人がグーで殴られるのを見た。

小学生の喧嘩は相撲のように組みあつて相手を倒し、その上に乗り、組み伏せれば大抵周りの者がその時点で止めに入るので、勝負は終りであつたし、お互いたいしたダメージは受けない。

中学生の喧嘩も小学生の延長でたいして変わらない。ちょっと違うのは腕をひねられたりするが、その時すこし痛い位で、周りの者が身体を分けてしまえば、身体は興奮しているがダメージはなく、お互いの友達がなだめて終りである。

僕達の中学校には、マンガの世界には必ずいる番長や不良はいなかつた。

川崎の中学校というと他県の人間は怖がるが、それは市役所がある海沿いの地域で、そこは京浜工業地帯の中心地でもあり空気が悪く、田舎から出稼ぎに来る者も多く競馬場もあり、トルコも多かつたので、明らかにガラの悪い人間が集まっていた。

そんなひどい町で暮らしていたら学生も不良が多くなるだろうが、僕達の住んでいる所は東横線沿いの新興住宅地なので、家を買って新しい町に住もうという年代が多く、それなりの給料を貰っている人達が中心の地だから、若々しくとても穏やかな町だつたのである。後に小田急線沿いが今の私達の町のイメージになつたが、私達が中学生の時、小田急線沿いは完全な田舎で、日帰りか、一泊してハイキングに行くというイメージの場所であつた。

僕の家からは東横線の三島、南武線の清水は同じ距離にあつたが、清水の駅に行くより、三島を使うのがほとんどであった。

南武線は立川と川崎を繋ぎ、東横線は渋谷と横浜、桜木町を繋いでいる。どちらに出かけたいかといえば、やっぱり川崎ではなく、横浜とか渋谷であろう。

中学の生徒の半数も三島の駅の近くに住んでおり、清水の駅に近い生徒は、富城小学校卒業生だけであった。

のんびりして、暴力沙汰のない上原中学校だが、後でわかつた話になるが、そんな中学校だったのは私達の時代だけで、私達の前の

世代、又、後の世代は上原中学にも不良がかなりいたらしい。

私達の前の世代はまだ暮らしが苦しく、丁度私達の世代の親が、生活にゆとりがでてきたのだろう。

子供にピアノを習わせたり、お誕生日会にクラスメートを集めたりする家庭がとても多かったし、若々しいお母さんが多い町であった。そして、私達の後の世代になると豊かさがあたりまえになってきたのかもしない。

そんな平和な時代に暮らしていた訳だから、人がグーで殴られるなんて有り得ない光景だったのだ。

パーで殴られた奴ならこの中学校にも一人だけいる。それは僕である。

中学1年の時、社会の先生が急に休んだため自習になってしまった。しかし自習の課題は出され、皆、静かに自習をしていた。

僕は自習なんて大嫌いだったので、ケンちゃんと教室内を走り回り遊んだ。

翌日、休んだ社会の先生は僕達の教室に入ってきて、週番の上川純子から、僕とケンちゃん一人だけが騒ぎ皆が迷惑したとの報告を聞いた。

僕は社会の先生に前に来いと言われ、へらへらしながら前にでていった。ケンちゃんは風邪をひき学校には来ていなかつたので、僕一人が前に出ていったのである。

「川上、お前は皆が静かに自習していたのになんて騒いだんだ！」という怒鳴り声が聞こえたかと思うと、僕の身体は右横に飛んで倒れた。

何が起こったかその瞬間はわからなかつたが、倒れてから顔を社会の先生の方に向けると、ひっぱたいた後の動作が残つていたので、あーあ、僕は今ひっぱたかれたんだとわかつた。

「立てー！」

社会の先生の声に合わせ立ち上がると、今度は左横に身体が飛んだ。

「廊下に立つとれー！」

普段はやさしい社会の先生のその形相に驚き、すぐ廊下に僕は出ていった。

ひっぱたかれた頬はじんじんしていたが、痛みは感じなかつた。窓から見える教室内では、上川純子がわんわん泣いているのが見える。

彼女もこんな大事になるとは思わず社会の先生に報告したので、この起きた現状に泣くしかなかつたのだ。僕の目からも涙がこぼれて出た。

その平手打ち事件が、上原中学校にとって唯一の暴力シーンだつたが、それを上回るシーンが今、目の前で起きたのだ。

フカヒレは目を丸くして驚いた顔をしていたが、事態に気付き怒った顔になり、立ち上がり熊田を捕まえようとしたら、再びグーで殴られ吹っ飛んでしまつた。

相手はファイティングポーズをとつていてるんだから、捕まえに行けば殴られるに決まつている。

フカヒレの身体が机に当たり、ガシャンと大きな音が教室内に響き渡ると同時に、加山が熊田の身体に抱きつき「やめろ！」と、叫んだ。

フカヒレは机に背をもたらせたまま座り込み、今度は立ち上がるうとはしていない。興奮している熊田は、加山の腕を解こうともがくが、加山がそれを許さない。

加山は、身長180?の長身で筋肉質の、大人と喧嘩しても負けそうもない身体なので、熊田が多少腕の覚えがあつても、その腕を振り払うことは出来ないでいた。

「もう、いいだろう。2発も殴つたんだから、お前を笑つたフカヒレを許せよ」

加山の声に、鼻から凄い勢いで息をしていた熊田も、落ち着きを取り戻していくが、それでも、鼻息は僕の所まで聞こえてくる。

「離せよ、もう殴らないから

熊田の声に加山が手の力を緩めると、熊田は加山の手を振り払いフカヒレに近寄り「悪かつた」と小さな声を出した。

「いや、俺こそ子供染みたからかいをしてすまなかつた」

フカヒレは立ち上がりながらそう言つと、平静を装いわざとらしくニヤリと笑つた。

余りにも目まぐるしい展開に、僕は立ちすくんだままだが、騒ぎが収まつたのでフカヒレに近寄り、「フカヒレ大丈夫か」とやつとの思いで声をかけることが出来た。

フカヒレの側に行くと、石山がいつの間にかフカヒレの隣にいて、「カワパン行こう」と僕に声をかけたので、僕達はフカヒレの側を離れ、前の席の方に行つた。

石山は一番前でドア側の机に腰を下ろすと「フカヒレも殴られたままだと格好悪くて、皆に側にいて欲しくないだろうから、離れた方が良いんだよ」

石山は時々大人びた口を聞く。

確かにフカヒレは周りの者にどうこう態度をとつて良いのか戸惑つているようであった。

熊田が謝つてきたのに対し、ふざけるなど虚勢を張るのも格好悪いし、いいよいよと言うのも気が收まらない。それよりも何よりも、簡単にパンチを2発もくらつてしまつたので、男として情けないつたらありやしない。そんな複雑な心境だと思うから、ヘタな同情心や慰めはかえつてフカヒレを傷つけてしまうだろう。そんな時はそつと、彼の側から離れてあげるのが正解だが、14歳のガキにそこまでの考えは浮かばない。

「あの転校生ちょっとおかしいよな」

僕は小さな声で石山に話しかけたが、時々チラチラとフカヒレの方に目をやつた。

「確かに、いきなり人を殴り付けるのは尋常じゃないけど、転校生ってそういう所があるんじゃないのか」

「え！ 転校生ってそういう所があるってどうこうこと？」

「確かに、いきなり人を殴り付けるのは尋常じゃないけど、転校生ってそういう所があるんじゃないのか」

「え！ 転校生ってそういう所があるってどうこうこと？」

「知らない人間達の中にいきなり入つて行くんだ。ちょっとでも氣を許すとなめられてしまうだろ?」

僕には石山の言つていることの半分しか意味がわからなかつた。マンガの世界には、都會の人間が田舎に転校してそこの番長にいじめられるということがあるため、なめられない様に転校生は虚勢を張るが、あくまでもそれはマンガの世界であつて、現實には考えづらい。だから、なめられないために暴力を振るうということが、理屈はわかつても現實離れした話に思えて、理解出来ないでいたのだ。

石山の話を聞きながらフカヒレの方に相変わらず目をやつしていたら、加山がフカヒレと熊田の手を両手に持ち、二人を握手させているのが目についた。

「石山、見てみろよ。握手してるぜ」

「加山が仲直りさせたんだろう。加山は俺達と違つて高校生の様だから誰もが兄貴と感じてしまつんだよな。だからこういう場合も上手く事を收めることが出来るんだよ」

「事を收めるか。石山、洒落た言葉しつてるじゃん」

「俺は、力ワパンと違つて知性が身体中に溢れているからな」

「知性の意味も知らないでよく言うよ」

僕と石山が軽口をたたいている間に、フカヒレの周りにいた人間達もその場を順々に離れていった。

フカヒレと熊田は加山が教室内から連れだしたので騒ぎはすっかり收まり、教室内は帰り始める生徒の騒がしさが響き始めた。

加山がいなければこの騒ぎを先生に報告しに行く生徒が必ずいるのだが、加山が仲裁に入ったので誰もが安心してしまつたため、この騒ぎはこれ以上大きくならないのであつた。

## 面白い計画

「カワパン、とにかく面白い計画つてなんだよ」

教室内の騒めきが収まってきた頃、石山が今朝の話の内容を知りたくて聞いてきた。

やはり僕の計画を石山は気にしているのだ。

「それそれ、朝も話した通り、うちのクラスつてグループが幾つもあるだろう。

そこで石山君に出す問題だが、3年7組の学級委員は今回誰がなるでしょう」

「そりやあ、ホゾに神崎に水口だらう」

「なんで……」

「だつて、決まつてんじやん」

「なんで、決まつてるんだよ」

「奴らは頭がいいからな。

学級委員は頭のいい奴がなると、誰もが思つてゐるだらう」

「そりなんだよ、皆、学級委員は頭が良い奴、成績の良い奴がなると当たり前の様に思つてゐる。

それつておかしくないかい」

「そりやあおかしいぞ。

本来の学級委員はクラスのリーダーなんだから頭だけで決められるものじゃないよ。

でも監視を思つてゐるんだから仕方ないじゃん」

「いや、俺が言いたいのは学級委員を決めるのは選挙で決めるだろ。」

成績のいい奴を先生が決める訳じゃないだろ。あくまでも俺達が決めるんだから、俺達にとつていい学級委員を決めるのが筋だろう」

「お！ カワパン筋ときたか。言つことが凄いね」

「もう、眞面目に聞けよ。

俺が言いたいのは、俺達が選挙で決めるのになんでホゾと神崎と水口が学級委員になつてしまつということなんだ。ホゾのグループはフカヒレと加山しかいなくて、神崎なんか誰も友達がいないし、水口も立花と土屋しか友達がないじゃんか」

「カワパンそれはないだろ。」

神崎に友達がいないってことはないんじゃない。

神崎は誰とでも仲が良いし、水口だってそうだよ」

「いや、俺が言いたいのはグループで分けるとそつなるつていうこと。」

奴等のグループは3年7組で分けると小さいグループなのに、学級委員になれるつていうところがおかしいと思わないかといつ」となんだよ」

石山は返事をしない。

僕が何を言おうとしているのか把握できないからだ。

「自民党の中で総理大臣になるのは一番大きな派閥からなるんだよ。」

小さな派閥は大臣になるのがやつとなんだ。  
それが政治というもので、選挙といつものなんだよ

「派閥……何それ？」

「だからそれはグループみたいなものだよ。  
一番大きなグループからクラスの委員長を出すところのが政治と  
いうものなのだよ。  
石山君わかる？」

気取った言い方で僕は言ひ。

「カワパンそれはおかしいよ。  
委員長は一番能力のある奴がやるべきだよ

「なに真面目ぶつてんだよ。

神崎は成績がクラスで一番かもしれないけど、委員長の能力がク  
ラスで一番とは限らないだろ？」

「いや、神崎は、7組では一番委員長が似合ってるよ

石山は背が低く成績も下の方のため、クラスで目立つ存在ではな  
い。

ただ宮城小学校卒のクラスメートは、彼が不良だったと思つてい  
るので、石山を馬鹿にはしていないため、他の小学校卒のクラスメ  
ートも何となく石山には一目置いている。

しかし、小学校の時は不良でも、今はそんな姿を何一つ見せてい  
ないため、劣等生を馬鹿にするような態度は表面的にはとらないが、  
心の中でしているものが多い。

石山は勘がいいのでそれは充分感じとっているが、表面的には気付かない振りをしている。

そんなクラスメートの中で、神崎は石山を認めていたように石山は感じているみたいだった。

「石山君ってドキってさせられる時がある。

時々鋭いこと言つんだもの」

なんて言葉を石山に言つたためだ。

自分を認めてくれる人間を人は好意を持つものだ。  
だから、石山も神崎には好意を持ち、神崎には身びいき的になってしまふのだろう。

「神崎の人物論はもういいよ。

俺が言いたいのは、今まで成績の良かつた奴が当然学級委員になるという考え方を壊したいということを」

「神崎、ホゾ、水口を学級委員にしないということ?」

「そうさ、俺らのグループと女のグループで一番大きな力チャミのグループと手を組めば、今までと違った学級委員を選べるという寸法さ」

「力チャミのグループ?」

石山はけげんそうな顔をした。

力チャミはクラス一うるさい女で、彼女に何か文句を言つと何倍もの反撃がマシンガンのような言葉で返つてくる。

力チャミのグループは優等生のグループではないが、かといって

劣等生のグループでもない。

クラスでは女性版の僕達のグループといった所の位置であろう。

力チャミの親友は力チャミとは正反対のおとなしい鶴見。

鶴見はホッペと仲が良く、ホッペは三崎と仲がいい。そして、三崎は杉山と仲が良く、杉山の親友が阪部で、阪部、吉武、杉山の3人は富城小学校6年3組のクラスメートだったことから今でも仲が良い。

力チャミ、鶴見、ホッペ、三崎、杉山、阪部、吉武の7人は横に繋がったグループであり、7人がみんな仲良しのグループという訳ではなかつた。

もつとも僕達のクラスの女の子のグループはほとんどが2人から3人のグループで沢山の人数が仲良しというグループは存在しない。クラス委員長の神崎に至つてはクラスの中に特別仲の良い友人は一人もいない。

ただ彼女の場合、クラスの姉御的な存在なので、誰とも仲良く付き合つている。

「カワパン、力チャミとそのこと話すのか？」

『あのうるさい女と話すのかよ。俺はイヤだな』

という顔をして石山は言つた。

「そのつもりだよ」

「よせよせ、力チャミにそんなこと言つたら、『カワパン、頭お

かしいんじやないの』と言われておしまいだよ。

それに、いつ話すのさ。

力チャミはもう帰つてしまつたぞ。

明日の朝には学級委員の選挙があるから話す時がないじゃん

「えー、力チャミも帰っちゃったの？」

僕は教室内を見回したが確かに力チャミの姿はない。

力チャミだけでなくほとんどの生徒はもう教室内には残つていなかつた。

「カワパン、俺達も帰ろ。」

カワパンのせつかくの計画も失敗だな」

石山は軽く笑うと机から腰を下ろした。

「加山とフカヒレ達がまだ戻つて来てないじゃん。

石山、奴らが戻つて来るまで待つてよ。」

しばらくしてガラツとドアの開く音がしたので、ドアの方を見る  
と加山、フカヒレ、熊田の三人が笑いながら教室内に入つて来た。

「フカヒレ」

大声で呼び掛けるとフカヒレは、

「おー、カワパン。まだいたの、早く帰れよ」

と軽く笑いながら返事をした。

「おい、お前達……」

と僕がフカヒレ達にケンカの結果を聞こいつとした瞬間、石山が僕  
の腕を引っ張り、

「カワパン、帰ろ。」

と言い、僕の言葉をさえぎつた。

「でも……」

と僕は石山に言ったが、強く腕を引っ張られたので、

「じゅあな」

とフカヒレ達に言い残し、教室を出ていった。

「石山、あの後どうなったか聞きたかったじゃん」

廊下に出るとすぐ右に階段があり、僕はその階段を下りながら石山に話しかけた。

「フカヒレは殴られたんだから、あまり俺達とは話したくないだろうし、仲裁に入った加山もこのことに関しては『もう終つたことだからいいじやないか』と言いつつだし、あの転校生はいきなり人を殴るんだからやはり異常だよ。

そんな奴の話をこっちから聞きにいきたくないよ」

石山はそう言つと顔を少しづつに向け、僕と田舎を合わそうとしなかつた。

石山も熊田と同じように自分がなめられたらすぐに拳をふるう人間だったから、自分と似ている熊田を見るのが嫌だったのかもしれない。

裏門を出ると学校に沿つて南北に延びている道が一本ある。車が一台通れる程度の舗装もされていない道であるが、僕と石山が帰る時はこの道をよく使う。

舗装もされなく、細い道は逆に言つと車がほとんど通らない道だということだから安心して歩けるためだ。

今日も石山と僕はその道から家に帰ることにした。

「カワパン、明日の朝、カチャミヒタキの計画話すのか?」

桜を見ながら石山が話しかけてくる。

「どうじょうかな、もつちょつと考える。もつと時間があれば良かったんだけど」

学校沿いの道を一分歩くと正門沿いの舗装された道に出る。  
そこが僕と石山の別れの基点でもあった。

僕は左に石山は右。

「じゃあな、また明日」

「ところでカワパン。

神崎を委員長に選ばないなら、誰を委員長にするんだ。

カワパンがなるのか？」

石山が僕から離れながら叫び、「

「えー、俺が……。俺はやだよ」

と僕は答えてから石山に背を向け、手を振った。

僕は学級委員に自分がなれればいいだと考えていた。

石山に計画を話し、石山をのせれば出川、細井も賛成するだろう  
し、うまく力チャミのグループも協力をさせれば僕達のグループから  
学級委員を出すことが出来る。

僕達のグループで学級委員を選ぶとしたら、一番ふさわしいのは  
僕だと思っていた。

しかし、自分を学級委員にするために考へついた計画ではない。  
いつも成績の良い奴が学級委員になるところに反発したいため  
に考へた計画である。

でも心の奥底では上手くいけば僕が学級委員になるかもしれない  
と当然思いながら計画を考えていた。

石山が帰り際に、

「カワパンが委員長になるのか」

と聞いてきた時、はつきり自分にそういう気持ちがあつたというこ  
とを自覚し僕は自分が恥ずかしくなった。

小学生の時、学級委員を僕はしていた。

小学生の学級委員の選び方は一学期学級委員になった生徒は2学  
期にはなれない仕組になっていた。

しかし、3学期は1学期同様、クラス全員の中から選ぶため、1  
学期に学級委員になった生徒が選ばれることが多い。

そのため、その仕組は1年で学級委員になるものは最低六人が選  
ばれることになる。

僕のクラスで1学期に学級委員になるのはホゾと井上、ヤマで2  
学期はフカヒレ、鈴成と僕であった。

僕はクラスで6番目にランクされていて、クラスの友達は学級委  
員のヤマとフカヒレであった。つまり優等生のグループに小学生の  
時、僕はいたのである。

成績は小学生の時も中学生の時もそんなに大差がない。ただ付き  
合っている友達が違つていたため、小学生の時は優等生と見られ、  
今は劣等生に見られるようになつたのだ。

中学生のクラス委員は1学期も2学期も3学期も全て選挙によつ  
て決められ、一度委員になつた生徒でも再び委員になることが出来  
る。

だからほとんど同じ生徒が1年間委員になることになる。

僕は中学1年の時、ヤマと同じクラスになり相変わらず優等生のグループにいた。

そのため、クラス委員の選挙ではある程度票が入り、4位から6位ぐらいの位置を常に占めていた。

1年の2学期の選挙では3位に入り委員になりそうになつたが、小泉が僕の名前をふざけた書き方をしたため無効になり、3位の生徒が一人になつてしまい、一人で決戦投票をしたら僕は負けてしまい、委員になれなかつたことがあつた。

学級委員になると親に自慢できるし、生徒の中でも特別な位置にいるような気がして、自尊心が結構満足する。

だから選ばれると、

「俺、やだよー」

と言しながら心中では嬉しがつている。

僕の父は日本一大きな宗教団体の大幹部であつた。

そしてその宗教団体が政治に乗り出したので、僕の父も一度は県会議員に選ばれそうになつたが、尋常小学校卒という学歴のため外されてしまった。

しかし宗教団体の中では大幹部のため、衆議院候補の後援会長に選ばれた。

そのため僕の家は選挙になると選挙事務所のような感じになり、しおいちゅう選挙用語が家の中を飛びかい、僕の耳にも入ってきたのだ。

それが僕の中でいろいろ膨れ上がり、僕達のグループで学級委員長を作ろうといつ計画こまでなつたのである。

計画を頭の中で思い巡らしている時は楽しい。

自分にとつて都合の良いことをどんどん膨らませていつて、何もかもうまくこぐと勝手に思い込んでいるのだから楽しいに決まっている。

頭の中では自分が神様なのだ。  
世界は自分の考え方通りに進む。

しかし、現実は違う。

僕の計画に手放しで賛成すると思つた石山が全然のつてこない。  
おまけに自分の恥ずかしいことじゅうまで見透かせてしまつたよう  
である。

今朝、あんなにウキウキして学校に向かつたのに帰りの足取りは  
重い。

## 席替えに班作り

「石山 剛」

神崎が投票用紙に書かれた石山の名前を読み上げると、教室内は一斉に歓声が上がった。

「おい、だれだよ、ふざけてるのは」

「石山委員長だ」

ひやかしの声があちこちから聞こえ、その声に対し石山も笑いながら手を上げて応えている。

神崎が何票か票を読み上げた後、再び石山の名前を口に出した。再び上がる歓声、先程の歓声よりも今回の方が大きくひやかしの声も増え、またもや石山はその歓声に手を上げて応えたが、顔は先程に比べ笑ってない。

3度石山の名前を神崎が口にした時、教室内に歓声はなく、石山も憮然とした顔を見せた。

「カワパンが出川と細井に言つて、俺の名前を書かせたんだろう」

学級委員の選挙が終り、10分間の休憩時間に石山が僕のところに素っ飛んで来て怒った顔をして言つてきた。

「我が3年7組の学級委員にふさわしい名前を俺は書いたけど、それが石山かどうかはわからないな」

僕は気取つて答える。

「馬鹿言つてんじゃないよ。おかげで俺はいい笑い者じゃないか」

「笑う奴がおかしいんであつて、投票されたことに関しては名誉に思つていいいんじゃないのか。」

「このクラスで3人は石山がこのクラスのリーダーにふさわしいと思つてゐるんだから」

「何言つてゐるんだよ。ただ面白がつていただけじゃないか」

「石山、選挙は神聖なものなんだぞ。」

そりや、石山が学級委員になれば面白ことは思つたけど、その面白いつのまゝこのクラスが面白くなるつてことだから石山を馬鹿にしてゐる訳じやないぞ」

「カワパンと口で争つても勝てないな、カワパンは口がつまいか

「石山ほひといふと笑い、いつものじょひがないなという顔を僕に見せた。

「でも今回、神崎が14票、ホゾが8票、水口が6票でクラス委員になつたんだから、石山にあと4票入れば石山が水口に代わって学級委員になれたんだぜ」

「そうだな、確かにそうだけど、俺はやだぜ。カワパンか他の誰かがするんだつたらいいけど、でもカワパンにも2票入つてたじやないか」

「1票は石山が入れたんだろう?」

僕がそつ言つと石山は一ヤリと笑つた。

学級委員の選挙でいつも僕には数票、票が入る。

誰が入れてているのかはわからないが僕の票が読み上げられても、

石山が読み上げられた時ほどの反応はクラスではない。

1～2票くらいなら僕に票が入っても別段おかしくないという評価が僕にある。

学級委員が決まるとクラスの係を決める。

掃除係とか、保健係とかいった奴だ。

石山は席係、僕は掃除係の責任者に選ばれた。

教室内の掃除はクラスを3つの班に分け、1週間に1回に一つの班が受け持つ。

一つの班に13人もいるので、責任者はリーダー的立場の者が選ばれ、その立場はクラス委員に次ぐものだとみんなに認識される。つまりクラス委員3人と掃除の班長3人はちゃんとした者が選ばれ、他の係は適当に決められるのが通例であった。

僕達の掃除の班は、男が石山に、細井、出川、小泉、チンチン、

松田で、女が坂部、富武、三崎、杉山、寺本、野口であった。

僕は小泉、チンチンと仲が良く、石山は出川、細井、松田と仲が良い。

小泉は野球部の仲間と仲が良いし、チンチンや松田はカッチン、長原と仲が良い。

そしてカッチンと長原は前原とも仲が良いというふうに僕達3年7組のグループ構成は単純ではなく、それは女子も同じであった。そのためクラスを3班に分ける時の顔触れはその時のノリで大きく変わってしまう。

僕と石山が分かることはないが、他のメンバーが大きく変わることは充分有り得るのだ。

掃除の班とは別に4～5人の小さな班も作られることになった。今年は中学生活最後の年で修学旅行もあるため、小さな班を作つておくと何かと便利だろうとカツパが提案したのであった。  
4～5人ということは男女半々なので僕と石山が組んで女子のペアないしトリオと組むことになる。

一番人気の水口、立花、土屋のグループは早々とホゾ、加山のペアとくつついた。

僕が誰かいなかなつと教室内をキヨロキヨロしていたら、寺本と目が合つた。

寺本は2年の2学期から我がクラスに転校してきた女生徒で今まで前の学校の制服を着ている。

性格は見た目おとなしいが、話をするとつい「うつかり男言葉」を使つてしまつ。

僕が後ろに座つていた寺本をからかうと、

「ふざけんなよ、このやうつ」

と思わず口にし、その後慌てて口を押さえ恥ずかしそうな顔をするので、僕はその顔が面白くてしそうちゅう寺本をからかつていた。

寺本も僕のからかいを口では嫌がつていたが、顔では楽しんでいるのが良くわかつた。

「寺本、一緒の班になる?」

「別にいいよ」

男言葉で寺本が返事をする。

寺本は野口と仲が良いので、必然的に僕と石山、寺本、野口の班が出来上がった。

本当は水口紀子と同じ班になりたかった。

クラス委員で頭が良く、運動能力も高いので、水口紀子はクラスのアイドルの一人である。

同じようにクラス委員で頭が良く、運動能力も高い女子に神崎祐がいるが、神崎祐はクラス一成績が良く学内でもベスト5には必ず入るほどの秀才なので、僕達の仲間というより、姉御的な存在になってしまい憧れる存在とはちょっと違う。

水口紀子といつも一緒にいて、今回も水口と同じ班に入った立花由香はクラス一のアイドルである。

ちょっと冷たい感じのする水口紀子に比べ立花由香はいつも笑顔をふりまき、顔も加賀まり子に似ているのでとても愛らしい顔をしている。

背が少し低いのが難点であるが、キヤツキヤツ動き回る姿は背が低いゆえに愛らしく、それも魅力になっていた。

もちろん成績も良く、水口と同じバスケットクラブでレギュラーを取っているのだから、運動能力も高い。

「立花、背を高くしようと/or、バスケットに入ったのに、全然伸びないなあ」

僕がそう言つてからかうと、

「うるさいな、私は背を伸ばそうと思つてバスケットクラブに入つたんじゃないの。

純粹にバスケが好きだから」とムキになつて弁解していた。

立花が背を伸ばしたくてバスケットクラブに入つたと告白したのは彼女が大人になつてからで、子供の頃は絶対にその秘密は彼女の胸の中から出ることはなかつた。

アイドルといえば、私達が社会人になつた頃、世に出てきた中学生アイドル山口百恵と桜田淳子のイメージが水口紀子と立花由香のイメージであつた。

そんな一人だからクラスでの人気は大変なものがある。

一人を好きな男はクラスの中に10人以上はいると思われるし他のクラスで彼女達を好きな男もかなりの数になるだろう。

しかし、表向きその感情を表に出す男はいない。

少しでも出したらクラス全員にからかわれ、恥ずかしい思いをするからだ。

彼女達から好きだと言われるのであれば、多少恥ずかしい思いをしても勇気を奮つて告白する者も出るかもわからないが、彼女達が自分を好きだなんて絶対に言つ訳ないと誰もが思つているから、その感情を表に出す者はいないのである。

僕もその一人であつた。

僕は水口紀子が好きであつた。

可愛くて元氣があり、誰からも好かれる立花由香に対しては一度も恋心は起きたことがないが、クールで自分の意見をズバツと言つ水口にはある日突然恋をしてしまつた。

水口はクールであるが、おとなしい訳ではなく、普通の人よりは活発な女の子であつた。

その活発な女の子がある日憂いを帯びた日で外の景色を見、切な  
そうに一日過ごしていた。

たまたまその日はお腹が痛かったのかも知れない。

家族の心配事でもしていたのかかもしれない。

彼女の胸の内はわかりようもないが、普段活発な女の子が切なそ  
うにおとなしくしていると、ドキッとしてしまうのが男だろう。

石山にそんなことを言つと、

「それはカワパンだけだよ」

と言いつつだが、僕は男つてそういうものだと思っているし、そ  
れに気付いた僕が彼女に恋しても全然不思議な出来事でないと思つ  
ている。

僕の彼女への恋心は誰にも言つていないし、悟られてもいい。  
もちろん石山にも打ち明けていない。

僕が女の子を好きになったのは小学校4年生からで、今までに2  
人好きになったことがあり、水口が3人目であった。

最初の二人はクラスのアイドルという存在ではなく、どちらかと  
いふとおとなしい子達であった。

僕は、クラスのアイドルはまず好きになることはなかつた。  
でもクラスのアイドル達はみんな活発で明るい子達だからすぐ友  
達になることが出来た。

友達になるとそこから恋にはならない。

友達でいることが楽しいから女の子でも男の子のよつて思つてし  
まうのだ。

恋をする女の子とは遠くから眺めているうちに好きになっていくものだ。  
だからほとんど言葉も交わさない女の子を僕は好きになってしまつ。

基本的にはおとなしく、神秘的な女の子が好きなのだろ？  
そういうことでいうと水口は僕の恋の対象には絶対ならない女子であつたが、切なそうな姿を見つけてしまった時、突然好きになつてしまつたのである。

立花と争うクラスのアイドルを好きになつたなんてミーハー的な安っぽい男に思われるようで石山にもそのことは打ち明けられなかつた。

4～5人の小さな班が5分も経つとほぼ決まつてきた。  
しかし、一人だけうろちょろしている男がいる。

草津だ。

石山はそんな草津を目にすると、  
「草津、俺達の班に来ないか？」  
と声をかけた。

「別にいいよ」

草津は軽く言つと、ゆっくり僕達のところに歩いてきた。

草津と石井の二人は中肉中背の美男子であつたが、クラスで目立つ存在ではなかつた。

英語の女教師が、

「ハンサムな石井君、これ答えて。

そして次のをもう一人のハンサム君、草津君が答えてくれる?」

と言つたので、

『あー彼らはハンサムなんだ』

と僕はその時氣付いたのであつた。

クラスでおとなしい子はいくら美少女、美少年であつても目立つ存在とはならず、恋の対象にもならない。だからいくらハンサムでも彼らを好きになる女の子は我がクラスにはいなはずである。ただ彼らをよく知らない後輩の女の子には、彼らはモテタと思う。

おとなしくて優等生的な石井、それに反して草津は陰があるようにな見える不良っぽい生徒であつた。

石山にしても同じような雰囲気があるため草津は石山の誘いにすぐのれたのだろう。また、石山もどの班からも声がかからない草津に自分と似たところを感じ、声をかけたのだと思つ。

「カワパン、どの席に座りたい?」

「やつぱり窓際かな」

「周りの奴は誰にする?」

「うーん、後ろは寺本でいいし、前は立花が面白いかな。  
前が立花だと隣は水口になっちゃうのかな?」

「わかった。じゃあ、カワパンの周りはそのよつこしてあげるよ

石山は席係なので、クラスの席順を自由に決められる。

もちろん近視の人を後ろの席にするとか、背の高い人間を前の席にするということは出来ないが、あまり極端なことをしない限り問

題はない。

石山は中学3年生の1年間ずっと席係をしたので、僕達は常に窓際の席を確保することが出来た。また、冬はストーブの温かさが程よく来る席を確保することも出来たのであった。

石山は僕が前に立花、横に水口と言つたことに對し疑問を持たなかつたようである。

立花はクラスのアイドルで明るいから、側にいると樂しく過ごすことが出来る。

水口はクールだが別に暗いという訳ではないし、立花の友達だから横に水口を選んでも不思議ではない。

それに僕が好きな女の子は別にいると石山は思っているから、水口を隣にすると言つても何とも思わなかつたのである。

## 生徒会立候補者

班も決まり、それぞれの席も決まってみんなに落ち着きが出始めた時カツパが、

「今年は君達も3年である。

もうすぐ生徒会の選挙があるがどうせなら、このクラスから生徒会長を始め全ての役員をとつてみないか?」と提案した。

するとカツパの提案にクラス内は歓声があがり、沸き立つのであった。

生徒会の役員は個人が立候補し、それを全校生徒が投票して決めること。

立候補する人は生徒会に関心を持っている人間が主だが、時々おちやうけで立候補する者も出てくる。

立候補は1年生でも、2年生でも、3年生でも出来るが80パーセントは3年生で当選するのも80パーセントは3年生である。

一つのクラスから大体1~2人くらい立候補するのが平均だが、3年7組では5つの役員全てに立候補しようというのだから、5人が立候補することになる。

だいたい生徒会という組織は生徒が自発的に運営していくものだから、そこに先生が絡むことは少ない。

だから生徒会役員を全て一つのクラスで取ろうなんて担任が発言するということはとても問題なのだが、カツパの発言にクラス全員

が乗つてしまつた。

早速、それぞれの役員に誰を立候補させるかクラスで決めることにした。

立候補は個人が決意して決めるものなのに、クラスで決めようと いうのは明らかに生徒会の趣旨から外れているが、誰もそれをおかしいとは考えない。

実は3年になつたら生徒会役員に立候補しようかと僕は秘かに考えていた。

クラス委員も基本的に立候補を募つて選挙をするという形をとるのだが、クラス委員に立候補する者はまずいないので、そのままクラス全員を対象として選挙する。

クラス委員になることは国会議員になることと同じで、国民の下僕となる国会議員、クラスの下僕となるクラス委員というのが本来の姿だろうが、実際はどちらも自分達が特別な存在だと思つて いる。しかし、クラス委員に限つては自ら立候補するという奴は出て来ない。

うぬぼれでいると思われるからだ。

クラスのみんながクラス委員をやつてくれといふのなら、しうがないからやつてやるか、みたいなポーズをとつてクラス委員をやるのだ。

しかし生徒会役員となるとそれはいかない。自らの意志がない者に役員になる資格はないからだ。

はつきり自分は生徒会役員をしたいと表明できない者はお呼びで

ないから、クラス委員のようにみんながやれというからやります、という人間は生徒会役員には絶対なれない。

当然生徒会役員とクラス委員では生徒会役員の方が、段違いに格が上だから、クラス委員になっている奴はみんな生徒会役員にもなりたいに決まっている。

ところが僕達のクラスで生徒会役員になろうとはっきり意思表示しそうなのは神崎だけで、ホゾとか水口はまず、立候補しないはずである。

神崎は1年生の時も2年生の時も生徒会役員に立候補して落ちたから、きっと今回も立候補するだろう。

ホゾは人から言われなければ何もやらないタイプで、自ら何かチャレンジしようとする意欲は全くない人間だから、生徒会役員に立候補するなんて絶対ありえない。

また、僕がひそかに思っている水口はバスケット部のキャプテンでクラブ活動を大事に考えている人間だから、生徒会の役員になりたいと思っていないだろう。

クラス委員以外で生徒会に興味を持つていそなのは前原で、彼はクラスの討論会では僕と同じくらい積極的に意見を言いつ。

ホームルームの時間に毎週1回行われるクラスの討論会は、男女交際とか中学生らしい服装などがテーマに上がり、1時間みつちりみんなで意見を出し合いつが、意見をいつも僕と前原であつた。

そんな前原だからきっと生徒会役員にも興味があると僕は見ているのだが。

「えー、それでは我が3年7組から生徒会役員の候補者を決めた

いとります。

まず立候補する人はいますか？」

神崎がクラス内を見回してはつきりした声で呼び掛ける。教室内は静まり返つて誰も何の返事もしない。

神崎が一呼吸置いて、

「では、私がまず初めに書記に立候補を表明します」とニコッとして笑い、小さな目を細めて宣言した。

教室内に軽いどよめきが起こり、水口が黒板に書記候補、神崎祐とチヨークを走らせた。

「はい」

前原が手を上げ、神崎が前原の名前を呼ぶ。

「僕は生徒会議長に立候補します」

やはり前原が立候補を表明した。

「他に立候補する人はいですか？」

神崎が教室の隅々まで響き渡る声を出す。

僕はドキドキしていた。

生徒会長はさすがに荷が重いが、副会長もしくは議長に出来れば立候補しようかなと考えていたからだ。

議長は前原が立候補してしまったから、残りは副会長しかない。

「それでは、推薦を求めたいと思います。まず、生徒会長に誰か

推薦者はいませんか?」

神崎の言葉に横山がすかさず手をあげ、「川田君がいいと思います」と言った。

クラス内にオーッといつ歓声が上がる。

川田は野球部のキャプテンである。

我が住吉中学校は、スポーツはあまり強くない。どのクラブも市の競技会で2回戦か3回戦に進めば上出来で、県の競技会に進んだことはない。

そんな弱いクラブの中では一応野球が、一番人気がある。まあ一応なんだけど。

バレー・ボールもオリンピックで東洋の魔女が金メダルをとったのだから、人気があつてもよさそうなのだが、いかんせんかっこいい先輩が誰もいないから人気がない。

クラブ活動の人気度なんて弱いクラブばかりだと、親切な先輩がいるなんていうのが人気のバロメーターになってしまふものである。

川田は3年7組のクラス委員になることはない。

勉強の成績が普通よりちょっとといいくらいで成績では目立つ存在ではないからである。

しかし、本人は親分肌を氣取つてクラス内ではえばつて暮らしている。

石山に言わせると、

「単純で浅はかなのに自分で気付かないんだよな。

そこがこつけいだよ、あいつは「

という評価なのだが、僕はそんなに嫌いではない。

スポーツや遊びではすぐリーダーシップをとりたがるので、遊びの好きな僕はそんな彼がいると、苦労なく遊べるから彼は便利なのである。

クラス内は川田の評価でみんながざわめきたつている。

「川田ならト芝ブ近選だよ」

小泉の声がする。

確かに野球部のキャプテンなら全校生徒を対象にした選挙ではかなり有利である。

というより、当選間違いないだろ?と僕は思った。  
そしてクラスのみんなもそう思つたようだ。

僕はみんなと一緒に川田について、

「あいつなら受かるよ。」

なんてしゃべっていたが、心中では副会長のことで頭がいっぱいであった。

石山が、

『カワパンも副会長あたり、立候補したら?』

なんて言つたら、

『うかな』

と少し考えるふりをして、

『石山がそつたら、ちょっとせつてみようかな』

と言つて立候補するつもりでいた。

すると石山が僕に話しかけてきた。

「カワパン」

次の言葉を息をのみ待つ。

「お昼のパン何食べる?」

おいおい、今、選挙で盛り上がりがつてんだぞ、と思ひながら口では  
「うーん、カレーパン、コロッケパン、焼きそばパンにクリーム  
パン」と言つていた。

「では、次に副会長を誰か推薦して下さい」

僕が石山にパンの名前を言つている時、神崎が副会長の推薦を募  
集していた。

「横山君がよいと思います。」

神崎の声が終ると同時に今度は川田が手を上げ、横山を推薦した。

お前ら最初から作戦考へてたな。

川田と横山は野球部のレギュラーでありキャプテンと副キャプテ  
ンでもあつた。

一人の席は斜め隣り同士だから、話し合ひはすぐに出来る。  
きっと川田が生徒会役員になろうと横山に持ちかけて横山も同意  
したんだろう。

だから素早くお互ひが推薦人となり、発表したのだと思つ。

しかし、クラス内では横山の立候補推薦に納得する声が多い。  
野球部のキャプテン、副キャプテンで生徒会長、副会長を狙う。  
これは全校生徒の支持を得られるのではと考えたからだ。

横山は3年7組では信望が薄い。

勉強の成績は川田よりも良くスポーツも優秀なのだが、キザな

である。

横山は中学一年の時、私立中学校から石山や立花のいるクラスに転校してきた。

小学校から一貫して私立の学校に通っていたから、一つ一つの動作やしゃべり方がキザに映る。

よくよく観察すると別にキザでもないのだが、先入観があるためキザに見える。

中学3年になると頭に油をつけ、クシで髪をなでるのが流行ったのだが、それを川田や前原がするとカッコつけるなよと驅し立てるが、横山がすると、

「キザだな、あいつ」

と陰口をたたいてしまつ。

横山は中学一年の時、立花と噂を立てられ誰もが知っている公認の一人であった。

「お前、立花が好きなんだろう?」

とからかうと、軽く口を開きフツッと笑う。

そしてその顔は照れ隠しなのだろうがキザに見えてしまつ。

一度真剣に、

「横山、立花が好きなのか?」

と僕は聞いたことがあるが、彼は軽く、

「ああ、好きだよ」

と何でもないよう答えた。

上原の中学生で異性を好きだとクラスメートに「う奴はまずいな

い。

やはり私立から来た奴は違うんだなと僕はその時衝撃を受けた。

横山が立花のことを好きだというのはクラスのみんなが知つていて、立花の真意はわからない。

一人が親しそうに話している姿は見たことがなく、立花が横山に特別な感情を持つていてる素振りを見せたことはないからだ。

「立花、横山が好きなんだろ?」

とからかっても、

「そんな訳ないでしょ?」

という答えが決まってくるのも、立花がそんなに横山を好きではないんだなと感じてしまう理由だった。

生徒会役員の5つのポストのうち4つは候補者が決まってしまった。

残りは会計のポストだけである。

会計は女子がやるものだと誰もが考えているので、もう僕の出番はない。

もちろん一つのポストに複数立候補してもよいのだが、クラスで全ての生徒会役員をどうと盛り上がっている時に、同じクラスで同じポストを争うなんて票が割れてしまうし、裏切り行為にもとられてしまうので、とてもそれは出来ない。

結局、会計は水口に決まった。水口はバスケット女子キャプテンだから川田と同じ理由で誰もが納得した。

クラス委員でホゾ以外の一人の女子委員は生徒会選挙に立候補することが決まったのである。

ホゾの顔に悔しさとかあせりみたいな顔はない。  
飄々としている。

彼は学者タイプで世間のお祭り騒ぎには全然興味がないように見える。

誘われれば付いていくし、年賀状や暑中見舞いなどの決められたことに関してはきつちりやるのだが、自ら何か面白いことを探そうとはしないし、別にそれに参加出来なくとも悔しいなんて思わない性格なのである。

生徒会役員の立候補者5人が前に行き、それぞれ抱負を語った。

抱負といつても、

「3年7組の名誉のために頑張ります」

とか、

「中学生活最後の年を有意義な年にしようと考えています」

程度の抱負なのだが、クラス全員その抱負に拍手で応えた。

一通り5人の抱負が終ると僕はカツパに、

「クラス委員が生徒会役員になつたら、クラス委員はどうなるんですか?」  
と質問した。

5人全員が当選するとは思わないが川田と水口は間違いなく当選すると思つたからだ。

「えー、その場合改めてクラス委員を選び直します。」

「それは全員ですか、それとも当選した人ですか?」

「公平をきるために改めて全員やり直します」

カツパは少し考えて僕の質問に答えた。

ホームルーム終了のチャイムが鳴りると教室内はざわめきの始  
壇となる。

特に今日は生徒会役員候補をクラスで決めたので、その余韻がい  
つも以上にざわめきとなっている。

## 女子の体育館での身体検査を覗く

クラスの男子はいつまでもざわついていたが、女子は午前中に身体検査があるので、いつまでもそのざわめきの中にはいられない。身体検査は通常保健室で各クラスごとにするのだが、今年の女子は学年ごとにまとめてすることになった。

約140人の生徒がまとめて検査をするのである。とても保健室では出来ないので、体育館であることになった。

そのため早めに3年の女子は体育館に集合することになり、女子が身体検査をしている間、男子は自習をすることになっている。

僕達3年7組の教室は一番西側の木造校舎の2階にあり、教室の東側は階段になっているため、離れ教室みたいになっている。

普通の教室は北側が廊下のため、南側しか外が見える窓がないが、僕達の3年7組の教室は一番西側のため、南側と北側両方に外が見える窓がある。

南側の窓からは町の景色しか見えないが、北側は体育館、中庭、運動場が見え、また僕達の教室は2階のため、それらが特によく見える。昼休みなど、よく北側の窓から運動場を眺めながら石山達と無駄話をする。

校庭ではドッジボールをしたり、縄跳びをしたり思い思いの遊びを生徒達がしている。

体育授業での運動は体操着を着ているが、昼休みは、みんな制服で運動している。

風の強い日などは、女生徒のスカートが軽くひるがえり、白いシーツが見えたりして、それが僕達の秘かな楽しみにもなっていた。

「おい、あの下級生、青いショーツ着ているぞ。」

ある風の強い日、校庭を歩いていた女生徒のスカートがめくれ、青いショーツが見えた時、思わず石山が声を上げた。

僕もその青いショーツを見た。  
ドキッとした。

青という色にエロティックさを感じたのは生まれて初めてのことだ。

僕達は中学に入つてから様々な性的なことを先輩や同級生から教えられる。

クラブの先輩から男女のセックスの話を聞き、親を汚らわしく思つたり、女性に生理があると知るのも中学に入つてからである。

中学1年の時、隣のクラスのホゾが、

「カワパン、ヌード写真持つてきたよ」

と女性の裸の写真を見せてくれ、真面目なホゾがこんな写真を持つているのかと驚いたり、ヌードって裸のことなんだ、と、初めて聞くその言葉になまめかしさを感じたりした。

ホゾがヌード写真つて言つた時、僕はムード写真と聞こえ、最初ムード写真だから裸の写真なのかなと思つたりもした。

エッチな話をされた時、友達に対し真面目ぶつて嫌がつたりする時と、面白がつて自分の本能をそのままさらけ出したりする時と、時代時代によつて僕は態度が正反対になる。

真面目な友達と付き合つてゐる時は心の底では興味津々なんだが

エッチな話は嫌いだという態度をとり、不真面目な友達と付き合っている時は、もつとエッチな話をしてくれと先頭になつてスケベな男になつている。

今、石山と付き合つている時は後者のスケベな男の時である。だから、スカートがひるがえつてシミーズが見えたり、女生徒が身をかがめた時、チラツと見えるブラジャーを見ると身体全体を使って喜びを表す。

新学年が始まり、いきなり自習といつても真面目にやる氣にはならない。

僕は机に腰を下ろし、石山と馬鹿話をしていると、川田が「おい、体育館の中が見えるぞ」と声を上げた。

今、体育館では女子が身体検査をしている。

僕と石山はすぐに北側の窓に向かつたら、川田が、「カワパン、頭下げろ」と息を殺した声で言つたが、その声は小さくはない。

僕と石山は窓に近づくと慌てて腰を下ろし、そーっと窓の下に行き、窓から体育館を覗いた。

体育館の正面にある体育道具を入れる大きな2枚のドアは全面ガラスで中の様子がよく見えた。

体育館の中では下着姿の女生徒が順序よく、クラスごとに並んでいる。

「おい、神林がいるじゃんか、すげえ」

川田が声を殺して呟つ。

神林とは学年ベスト3に入る美少女である。

僕が女性に一番性的な興奮を覚えるのは身近なクラスメートや学校内の女生徒達である。

もつとも他に興奮するといつても映画のポスターで肌をあらわにする女優とか雑誌に掲載されている水着の女性、テレビでときたま映るパンチラくらいで多くはない。

また成熟した十八才以上の女性は年が離れ過ぎていてるためか、エロティックさを感じるより半分気持ち悪さを感じてしまう。よく熟した甘い果物より、固くてすっぱい果物の方が性的興奮を覚えるのだ。

その一番性的興奮を覚える女達が今、目の先にたくさん動いている。

しばらくはじっと体育館を凝視していたが、

「カワパン、ヨダレが出ているぞ」

という石山の声にハツとし、

「石山こそ、田が真っ赤だぞ」

とわざとふざけた声を出した。

石山の顔を見るのと同時に周りを見たが、窓の外につづくまつている男は4人しかいなかつた。

僕と石山、そして川田に熊田だ。

「小泉、来いよ」

僕が小泉を誘うと石山も出川と細井を小さな声で誘つた。

小泉は嬉しそうな顔をして窓の下に素早く来たが、出川は

「ふざけんじやねえよ」

とぼやきながら付き合つだから行くかと乗り気でない顔を見せながらゆっくり来た。

『ふざけんじやねえよ』は出川の口癖で特に意味はない。

僕と石山が三人を誘うのとほぼ同時に川田も手を振りながらフカヒレや横山を誘つていた。

僕と石山、川田、熊田の四人以外は少し体育館を見てすぐに自分の席に戻り、自習をしている。

また、前原はいくら誘つても自分の机を離れず、額から汗を流しながら自習をしていた。

前原のほかにも実藤、古畑、小久保のおとなしい連中は窓の下に来ようとはしないし、無理に誘つ者もない。

しかしその四人以外は少し時間が経つと再びそつと窓の下に来るか、誘うと素つ飛んで来るかしていた。

僕はこの時ほど石山を友達にしたおかげでスケベな自分でいられて良かつたと思い、真面目ぶつっている奴らを馬鹿な奴らだと心の中で笑つっていた。

「川田、生徒会長になろうという奴が覗きなんかしていいのかよ  
僕が小さな声で言うと、

「これも生徒会行事のひとつだよ  
とニヤニヤしながら川田が答える。

前原は生徒会議長に立候補した手前、体育館を覗きたくても我慢しているのかもしれない。

「あ、立花がいる」

全面ガラスの大きなドアといつても実際に体育館の中は一部しか見えない。

それも手前の1組と2組の女生徒達が主で、とても奥にいる7組の我が女生徒達は見えやしないのだが、僕はわざと大きな声でクラス一のアイドル立花由香の名前をクラスのみんなに聞こえるように言った。

僕は声を出すと同時に横山の表情も見ていた。

横山は立花を好きだからどんな顔をするか見てみたかったからだ。案の定、横山ははつきりとわかるほど狼狽した顔をした。

横山の向こうで小泉もびっくりした顔をしている。

小泉は六組の古宮が好きなんだからそれほど驚かなくてもいいのにと思ったが、やはりクラス一のアイドル立花だから小泉も興味があるのだろう。

「カツチン、何そわそわしているんだよ

川田が笑いながら言うと、

「何で俺がそわそわしなくちゃいけないんでえ」

と顔を赤くして口を突き出しながらカツチンが弁解している。

「立花、結構人気あるんだな。カワパンの声に反応した奴、7人

8人はいたぜ」

石山が思つてもいなかつたというような顔をして僕にそーっと声をかけてきた。

石山の言葉に僕も驚いた。

立花は横山とクラス公認のカツプルである。

人の女に興味を持つ奴がいて、それもたくさんいるなんて、僕にとって人の女はもう恋の対象にはならないから、きっと可愛い女の子の下着姿に興味を持っているのだろうとしばらくして納得した。

「水口だー」

川田の声に今度は僕が驚いた顔をしてしまった。

「カワパン、何びっくりしてるんだよ」

石山の声に「川田の声が大きいからだよ」と僕はやつとの思いで声を出したのだが、胸の中はドキドキしている。

川田は嬉しそうな顔をしながら、驚いた顔をした奴をからかって喜んでいる。

クラスの女の子が見えるのかと細井が鞄から何か取り出して窓の下に来た。

「カツカツカワパン、ほつ本当に水口がい、いるのか?」

どもりながら細井が言つ。

彼は小学生の時からどもりなのだが、それで彼をからかう人間はクラスにはいない。

「ばーか、いる訳ないだろ?」

僕がそう言うとすかさず、

「細井、本当に水口がいると思つて來たのか、馬鹿だなー」と石山が言つた。

「な、な、何だよ、だましたのか。

せつせつかく、こつこれを持って來たのに

と細いが双眼鏡を手にして僕達に見せた。

「えー、凄いの持つて来たな、このスケベ」

石山が笑いながらからかう。

「いつ石山にはかつ貸さない！」

「あー、うそそうぞ。えらい、細井はえらい」

石山はそう言うと細井の持つて来た双眼鏡を奪い取った。

もつとも双眼鏡といつても倍率の低いオペラグラスだ。

「あー、良く見える、すげえ、すげえ」

石山は騒ぎながら僕にオペラグラスを渡したので、僕もすかさずオペラグラスを使って体育館を覗いて見た。

「お、見える、見える」

僕も石山と同じようにほしゃいだが実際のところはそれほど見えてもいない。

中学一年の後半から近視になり始め、遠くが良く見えなくなってきたのである。

オペラグラスは確かに人を2倍くらいに大きく見せてくれるが、ぼやけ具合は肉眼と同じなので、あまり僕には意味がなかった。

しかし、冷めた態度をとるのが嫌なため、わざとオペラグラスの効果を強調し、騒いだのであった。

「カワパン、どうしたんだよ」

いつの間にか川田が隣にいる。

「細井が持つてきたんだ」

「俺にも貸して、細井いいだろ?」

細井はうなづく。

オペラグラスを手にした川田は小さな子供がおもちゃをもらつた  
ように喜び、それをずっと手にし、細井に返すことはしなかつた。  
細井はわざわざ持つて来たオペラグラスを一度も使えずにいるの  
である。

女生徒の下着姿、下着姿といつても全員シミーズを着ているので  
それほどエロティックでもないのだろうが、僕にとつては世界で一  
番エロティックな光景なのだ。

そんな世界一の光景を眺めながら、近視のためそれを100%味  
わうことが出来ない。

僕は体育館と教室内を半々で見て回っていたが、ふと前原の顔が  
目に付いた。

脂汗を流しながら一生懸命自習している前原の姿は滑稽に見える  
が、その時僕が目にした前原は汗をハンカチで拭うため、メガネを  
はずしている姿であった。

クラスの男子でメガネをかけているのは前原一人で女子は川中一  
人である。

川中は小学生の頃からメガネをかけていたが、前原は中学3年に  
なつてからメガネをかけ始めた。

メガネをかけるということは秀才になつたような感じがして、前  
原はメガネ姿を周りに自慢しているような態度をしていた。

その姿が多少、うらやましくも見え僕は前原のメガネを何となく  
気についていたのだが、今、彼のメガネを見てピーンとひらめいた。

「前原、ちょっとメガネ貸してくんない」

僕の頬みにニヤッと笑つて、

「いいよ」

と前原は言い、メガネを丁寧にはずすと僕に貸してくれた。

前原のメガネをかけた瞬間、世界の光が2倍になつたような眩しさを感じた。

今までぼやけていた輪郭がはっきり見える。

僕は急いで窓の下に行き、そつと体育館を覗いたら、はっきりと女生徒達の下着姿が見えるのであつた。

ぼやけて見えていた時は凄くエロティックに見えていたのに、はっきり見えるとその世界はエデンの園のように神々しい世界に見えたのである。

『きれいだな』と心の中でそう思つたが、口では、「見える、見える、よく見える。すげー、すげー」と騒いでいた。

「カワパン、よかつたな。これで君も大人の仲間入りだ」石山が笑いながら言つ。

体育館を覗いて二十分くらいが過ぎていた。

最初は僕と川田が騒がしくしていたが、だんだんクラス内は静かになつていった。

すると突然教室のドアがガラガラと音をたて開くと、外から十人以上の男子生徒が教室内に流れ込んできた。

「おい、やつぱり見えるみたいだぞ」

「本当か、すげー」

口々に興奮した声を教室内に響かせる。

川畠は嬉しそうな顔をして手招きをしていたが、僕と石山はその場でポカーンとした顔をして固まってしまった。

入つて来た男子生徒は3年5組のほぼ全員でいきなり教室内は動物園の如く騒がしい。

「おい、静かにしろよ。頭を下げるよ、ばれるだろ?」「うう

石山が怒鳴るが、彼らの耳には届かず、ニタニタ笑いながら全員立ち尽くし、窓にべつたり張り付いたようになってしまった。

川田も一緒になつて騒ぎ、熊田と僕はどうしていいかわからない顔をして、その場に座りこんでいたが、石山は一人一人強引に窓から引き剥がそうとしていた。

さすがにこれだけの騒ぎになると体育館でも気付く生徒が出来てしまつ。

僕達の窓を指さしながら氣付いた生徒は大声を上げ、先生を呼んだ。

慌てて走つてくる女教師はキッと僕達の窓を睨むとカーテンを素早く閉めたのである。

「やべえ、やべえ」

「逃げろ、逃げろ」

5組の男子は瞬く間に僕達の教室から逃げていった。

「カワパン、やべえよ。野口と目が合っちゃつた

「え、うちのクラスの女達いたのか?」「

「ほら、手前で身長測つてたじやん。

丁度うちのクラスの女達が手前に来たんだよ。

野口とか、増川とか、三沢って背が小さいじゃん。

だからみんなより先に手前に来たんだと思つよ」

「本当かよ。

うちの女達を見たのは、その三人だけか。立花もチビだから見たんじゃないのか？」

「いや、その三人だけだつたよ。

あと五秒遅かつたら、立花も来ただろうし、五分後だつたらクラスの女達全員見れただろうな」

「あー、もつたいない。

五組の奴ら、どうしようもねえよなあ。

あいつら礼儀とか知らない動物の群れだよ

しばらくするとカツパが物凄い形相で教室に入つて來た。

「お前ら、覗きなんて恥ずかしくないのか。覗いていた奴は誰だ。

手を上げる！」

大声が耳に響く。

僕と石山はそーっと手を上げると川田を始めクラスの大半が手を上げた。

「お前ら、バケツに水を入れ両手に持つて、廊下に一列に並び立

「つとれ！」

バケツはそれほど重いと思わなかつたが、時間が経つにつれ、だんだん重くなるように感じ始め、それが最高潮に達しようという時、我がクラスの女生徒達が廊下を歩き帰つて来た。

ほとんどの女生徒はブスッとした顔をしていたが、  
「私の裸、見た人いるの？」  
と坂部が明るい声で、バケツを持つてゐる僕達一人一人見ながら話しかけてきた。

坂部は色が黒く南方系の顔をした美人で僕達のクラスでは珍しく胸が出ている子であつた。

中学3年ともなると全員ブラジャーを着けていたが、本当にブラジャーが必要なのは数人で、その中でも坂部が一番必要としている。

「石山君、見たでしきう。私のバスト」

坂部は「ココ」笑いながら石山の前に立つた。

「坂部、お前の胸、偽物だつたじやないか」

「まあ、失礼ね」

石山と坂部は小学校6年3組の同級生だからお互ひ軽い言葉を交わし合える。

野口と寺本がヒソヒソ話しながらやつて来た。  
怖い顔をしている。

野口が石山を見つけると、

「最低！」

とひとこと言つて足早に教室に入つていった。

「ヒツチ」とか「スケベ」と言われたなら、石山も、

「あー、俺はどうせエツチだよ」

と開き直つた言葉を返したはずだが、「最低」は、人格を否定した言葉なのでその衝撃度は大きく、石山は見るからに情けない顔をした。

僕も石山に「最低！」と笑いながら言つと、

「あー、どうぜ俺は最低だよ。

ちきしきょう、たかだかシミーズ姿を見ただけで真っ裸を見た訳じやないんだから」「う

とブツブツ言つている。

僕は石山の真っ裸という言葉に反応してしまい、坂部の真っ裸を想像してしまった。

我が家3年7組のクラスで可愛い女の子といえば、まず立花があげられ、次ぎに坂部があげられる。

まあまあ可愛い子といえば三崎に土屋、そして水口である。見方によれば寺本もまあまあ可愛い方にはいるかもしれない。

クラスの女の子の裸が見られるとなつたら、当然可愛い子がいいに決まつていい。

しかし、立花は人の女だから興味ないので、一番は坂部になるだろう。

だから、女生徒の下着姿を見た後、最初に目につけたクラスの女の子が坂部だったのも関係して、思わず坂部の真っ裸を想像してしまつたんだろう。

## 生徒会選挙演説

生徒会役員の選挙は体育館で行われる。

選挙の前に候補者が十分間、全校生徒の前で選挙演説を行う。

生徒会長には4人、副会長、議長、書記、会計にはそれぞれ3人候補者が立つた。

合計16人だから演説だけでも160分。

始まりから終りまで3時間以上体育館に座っていなければならなかつた。

16人の内2年生が4人立候補していたが残りは全て3年生であった。

川田は極当たり前の演説内容でわかりやすい生徒会を目指すと締めくくつて終つた。

拍手が大きかつたので、川田はもう当選した顔つきになつていて

生徒会長最後の演説に3年4組の大森が出てきた。  
彼とは小学校四年の時、同じクラスになつたから少しあは知つていた。

た。

「今の生徒会ではだめです。

誰も興味を持つていらない生徒会、特に1年生は生徒会を自分達のものだとは考えない生徒が多くすぎます。

生徒会は先生のものではない。

まして一部の人人が運営するものではありません。生徒全員が自分達のものだと思わなくてはいけないんです。

わたくしは生徒会長に立候補しましたが、生徒会長という特別な人間になりたくて立候補した訳ではなく生徒全員の繋がりの接着剤になればと立候補したのです。

生徒会長なんて立派な地位じゃありません。  
生徒の雑用係です」

大森の演説は唾を飛ばしながら感情を込めてしゃべっていた。

「あいつ、くさいなあ。  
わたくしなんて言つてるぜ。  
あー、やだやだ、わざとらしい。  
昔からあいつ正義漢ぶつているところあるんだよな」

石山が僕につぶやく。

石山と大森は6年3組の同級生だったから石山は大森のことをよく知っているのであいつ。

確かに大森の演説は僕が聞いていても演技っぽく聞こえ、好きになれなかつた。

ただ、当たり障りのない川田の演説を聞いているより何倍も面白くはあつた。

最後に大森は、

「長い時間演説を聞いて皆さんも疲れたでしょう。  
ここでひとつ体操をしましよう。

皆さん両手を思いつ切り上に伸ばして下さい。  
伸ばしましたか？

はい次にその手を横に持つていって思いつ切り手を3回叩いて下さい」

と言つと、生徒のほとんどは大森に言われた通り、両手を伸ばし

その後、手を叩いた。

体育館に拍手の音が鳴り響く。

すると大森はすかさず、

「盛大なる拍手ありがとうございました」と言い、手を上げ、頭を下げ終わらせた。

これは生徒達につけた。

副会長候補横山の演説も当たり障りがなかつたが、川田と違つといふはキザに聞こえてしまつところだった。

前原は一生懸命なのはわかるが、言葉が上滑りしてしまい、聞く方からしてみれば何を言つてているのかわかりづらく、前原自身も演説が終り、所定の席に座つた時、ガックリ肩を下ろしてうなだれていった。

水口はハキハキしていて四人の中では一番しつかりした演説に聞こえ、水口は確実に受かるであろうと3年7組の生徒は誰もが思つたに違ひない。

最後に神崎が壇上に上がる。

「私は立候補した時、担任の飯島先生に『お前は石鹼だなあ』と言されました。

どうしてですか?と聞くと『石鹼もお前もよく落ちる』と言わされました

会場はワーッと笑い声が響いた。

水口と同じように堅い演説をすると思われた神崎だが、意に反してジョークを交えながらの演説をしたので、生徒達はみんな耳を傾けた。

ただでさえ長い時間体育館に座つてしているのである。

演説がつまらなければ聞いている顔をしていてもほとんどの生徒は話を聞いていない。

大森のような一人芝居の演説か神崎のようにジョークを入れた演説は退屈な時間を忘れさせてくれた。

## 生徒会選挙結果

「おい、カワパン。生徒会の選挙の結果が出たぜ」  
次の日、教室に入るなり、小泉が嬉しそうな顔をして声をかけってきた。

小泉の嬉しそうな顔を見てすぐに川田と水口が当選し、あと一人ぐらい当選したのかな、と推測した。

「で、どうだつたんだ」

イスの上に鞄を置き、机の上に腰を下ろし落ち着き払った声で僕が聞くと、

「神崎が当選したよ」と、小泉は答えた。

「へー」

と僕は言い、意外な顔を小泉に見せた。

「そしたら、うちのクラスから生徒会役員が3人出たのか」と僕が言つと小泉は首を横に振り、

「あとはみんな落ちた」

と明るい声とにこやかな顔で答えた。

「えー、川田も落ちたのか

「なんだよ。

あれだけ自信たっぷりだつたくせに落選だよ。

生徒会長はの大森が当選したよ。

下級生にあのべたい演説受けたみたいで、相当下級生の票が入ったみたいだぜ」「

大森の当選を聞いて生徒会選挙は3年生の票より下級生の票のほうが重要だとわかった。

下級生は3年生のことなんか良く知らないから演説で決まるんだなあと。

それなら僕も可能性があつたかも知れないとも後になつて思ったが、今は小泉の態度に違和感を持った。

「小泉、川田落ちて嬉しいのか」

川田が落ちたら同じ野球部の小泉は他のクラスメートより残念がると思いつのになぜか嬉しそうな顔をしているので不思議に思い聞くと、

「そんな訳ないだろ。川田が落選したから悲しいよ」とは言つ。

「だったらなんでそんな嬉しそうな顔してるんだよ」

「これは神崎が当選したからさ。」

神崎は1年と2年の選挙の時に落選したけど、今回当選して良かつたじやないか。

それも我が3年7組の委員長が当選したんだぞ。喜ぶのは当たり前だろ。」「

確かに小泉の説明に無理はないが、何かが違う違和感を僕は覚えた。

丁度そこに石山が来たので、

「石山、聞いたか」

と、言いながら石山の方に寄つて行った。

「あー俺、今、見てきたよ。

職員室の前に選挙の結果が貼られてたからな。でも驚いたよなあー」

石山は近くの机に座つたので、僕も隣の机に座つた。

「川田がよ、ペケだぜ。あいつ20票しか票取れなかつたんだ」

「えー、どういうことだよ。

うちのクラスだけだつて40票くらいあるのに、おかしいんじやないか」

「カワパン、川田に入れたのか?」

「当たり前だろ。石山入れなかつたのかよ」

「あー、入れてない」

「どうして?」

「川田は生徒会長になつちゃあいけないだろ。演説聞いただろ。

あいつ生徒会のことなんか何にも考えていないなあつてわかるじゃないか」

「でも3年7組の代表だぜ」

「生徒会とクラスは違つよ。

それに川田は学校の人気者のつもりでいたかもしけないけど、結構嫌われていたんだよ。

だからクラスの半分もあいつには入れなかつたんだよ」

「そうえいば小泉も嬉しそうな顔していたな」

「そりや そまさ、 小泉、 川田嫌いだもの」

「えー、 そうなの」

「見りやあ、 わかるじやん。 小泉は川田も横山も嫌つてるよ」

石山の説明に僕はうなずいたが、 納得はしていなかつた。

## クラス委員選挙

始業のチャイムが鳴ると同時に下を向きながら川田は教室に入ってきた。

誰とも田を合わせようとしない。

「川田、ドンマイ、ドンマイ」

小泉が川田の背中を叩きながら、はげましの言葉をかけていたが、顔は笑っている。

3年7組で野球部員は川田、横山、小泉の男子3名である。3人の中でレギュラーでないのは小泉一人である。

だから小泉は川田、横山の前に立つとどうしても卑屈になってしまい、特に川田に対しては見ようによつては子分みたく見える時もある。

もし、川田、横山、の2人が生徒会役員に当選したら小泉の立場はますます落とされていたに違いなく、2人が落選したことは小泉にとつて気が楽になつたんだなと僕は一人考えていた。

教室のドアがガラガラと音をたてて開くと、カツバがにこやかな顔をして入ってきた。

「えー、知つてゐる人もいると思いますが、我がクラスの神崎が生徒会書記に見事に当選しました。

神崎、前に来てみんなに一言挨拶を」

カツバに促され神崎は席を立つと、カツバの横に行きいつもの明るい声で簡単に抱負を語つた。

「えー、それで神崎が見事生徒会役員になれたので、クラス委員に一人欠員が出来てしまします。

そこで前もって話してた通り、もう一度これからクラス委員の選挙を行いたいと思います」

カツパはそう言つと後をホゾに任せた。

神崎は席に戻り、ホゾと水口が投票用紙を一番前の席に置く。

「水口紀子」

ホゾが投票用紙に書かれた名前を読み上げる度に水口が黒板に正の文字の一本を書いていく。

「神崎祐」

ホゾはそう言つと下を向きながら淡々と、「神崎さんは生徒会役員になつたので、この票は無効とさせていただきます」と言つた。

「誰だよ、神崎に投票したの。

選挙の時からずっと寝てたんじゃないのか」

ホゾの言葉が終わらないうちに熊田が大声をあげる。

「なんだよ、あいつ。

うちのクラスに転入してまだ一週間くらいしかたつていないので、何様のつもりだ」

僕が石山に耳打ちすると石山も頷いてはいたが、顔は笑っていて、

「カワパン、今は熊田のことは無視しろよ。

開票をひやんと見てゐるが  
と返事をした。

確かにやうである。

## 小泉の健闘

今回のクラス委員の選挙で僕と石山は3年7組の大改革をしようとこの一週間いろいろ工作をしていたのだ。

「小泉進」

ホゾがその名前を読み上げた瞬間、僕はやつたーっと心の中で叫んだが、クラス内には笑い声が充満した。

「誰だよ、さつきの神崎といふだけ投票するなよな  
またもや熊田が大声をあげる。

小泉はへラへラ笑いながら、

「そうだよ、眞面目に投票しろよ」

と小さな声を出す。

何票かホゾが投票用紙を読み上げた後、再び、

「小泉進」

と読み上げた。

小泉の顔は真っ赤になっていたが、目は輝いている。

「小泉進」

続けざまにホゾが小泉の名前を口にすると教室内にじよめき起つた。

ホゾがクラスの半分20票を読み上げた時、小泉の票は4票も入っていた。

1位はホゾで5票、2位に小泉と水口が4票ずつ、それに続いているのがフカヒレで2票入っていた。

残りの票は立花、加山、川田、神崎、そして僕に1票、票が入っていた。

僕に票を入れたのは誰だろう。  
僕はちょっと首をひねった。

小泉の名前が4回読み上げられた時、教室内は静かになった。

3年7組の生徒は40名。

この中で3名のクラス委員が選ばれる時、一番得票が低い者は5票から8票くらいが普通である。

今、小泉は2番手につけ票も4票取っている。  
あと2票から3票入ればクラス委員がまず決定になる。  
いくらなんでも小泉がクラス委員になる訳ないと3年7組のほとんどの生徒達は思っている。

数人の生徒がふざけて小泉の名前を書いただけだから、いくらなんでもこれ以上票は入らないだろうと思つているが、もしかしたらということも考えられるので、教室内は開票のなりゆきを真剣に見守ろうとしている。

そのため静かになつてしているのだ。

小泉は相変わらず顔を真っ赤にし、目をギラギラせりつかせながら、黒板を一心に見ていた。

「小泉進」

とうとうホゾが小泉の名前を5回口にした。

ホゾと同点トップである。  
教室内にオーッと歓声があがる。

「小泉進、小泉進」  
と連続してホゾが小泉の名前を口にすると教室内はあちこちでみんながしゃべり始めた。

小泉が単独トップで7票も入ったのだからもうクラス委員になるのは決定したようなものである。

## 熊田の反発

「小泉君がクラス委員になつたら、このクラスがうつっちゃうの」「小泉君がクラス委員なんて他のクラスに對して恥ずかしい」なんてヒソヒソ声でしゃべる女子もいる。

僕、神崎、熊田、川田に横棒1本、加山が3本、立花が4本、フカヒレが正、水口が7本、そしてホゾと小泉に8本と黒板に記され、最後の1票をホゾが今読み上げようとしている。

「小泉進」

ホゾが読み上げると同時に

「おい、ふざけるんじゃないよ」

と熊田が立ち上がり、大声を出した。

「選挙は神聖なものだろ。う。

こんなふざけたことが許されていいのか。

小泉、お前だつて嫌だろ。

もう一度こんな選挙やり直しだよ。

小泉、お前もそう思うだろ」

と言いながら、小泉をにらんだ。

最後の票が小泉進と読まれた瞬間、口を半開きにして、目を真ん丸に開け、宝くじにでも当たったような顔をしていた小泉であつたが、熊田の呼びかけに我を取り戻し

「ぼ、ぼくは……」

と何か言おうとしたが、言葉に詰まり田をぱちぱちさせながら辺りを見渡すと僕と田が合つた。

小泉の目がカワパン助けてくれと言つてはいる。

僕はすつと立ち上がり、

「熊田の方が選挙をバカにしているし、それよりも熊田は小泉と小泉に投票した人に対し、あまりにも差別的で人として許されないだろ」

と熊田に負けないくらいの声できつぱりと言つた。特に差別的に力を入れた。

差別的なんて難しい言葉を使ったのは、次兄が三日前に人種差別の話しを友人としていたのを横で聞いて頭に残っていたからだ。

「川上だな、小泉に票を入れたのは。  
だからそんなこと言つんだな」

熊田も負けていない。

鼻から息を吐き出し、肩を上下に動かしながら相変わらずの大声を出す。

「誰が誰に入れたかなんて関係ないだろう。

そんなこと言つたら、投票の意味がないじゃないか。

熊田にも一票入つてるけど、誰が熊田の名前を書いたかなんてみんなの前で発表する必要ないだろ」

「僕の名前を書いてくれたのは、きっと真面目な気持ちで書いてくれたんだよ。

でも小泉は違うって誰もが思つてゐるだろ」

「熊田の名前だって冗談で誰かが書いたかも知れないじゃん。

それとも自分で書いたのか

僕がそう言うと熊田は顔を真っ赤にし  
「なつ、何を言つてるんだよ  
と言つたが、言葉に迫力がなかつた。

## 小泉当選

「みんな静かにして」

僕と熊田の言い争いにクラスメートも参加し始め、教室内が騒音に包まれた時、カツパがおもむろに教壇に来て一喝した。

「川上の言う通り、選挙の結果は尊重しなくてはならない。小泉がクラス委員になるのはおかしいと思うのは差別だぞ」

カツパの声に教室内はシーンとなつた。

とつさに差別という言葉を僕は使つたが、その言葉がカツパにもクラスメートにも届いたらしく、差別する人間に自分はなりたくないという気持ちが小泉の学級委員を認めることになつた。

「えー、それでは一学期の学級委員が決定しました。

委員長は小泉君、副委員長は僕こと本田宗一、書記は水口さんに決まりました。

水口君、前に来てみんなに一言どうぞ」

ホゾは相変わらず淡々としている。

神崎が生徒会役員になつたため委員長は誰もがホゾだと思つていたし、ホゾ自身もきっとそう思つていただろう。

普通なら悔しくて仕方ないはずだが、ホゾの顔に悔しさはみられない。

ガタツ。

小泉が立ち上がった時、イスの音が大きな音を立てた。

緊張のためか小泉は右手と右足が一緒に前に出るぎこちない歩き方になり、歩き方を忘れてしまったようにもつづる。

やつとの思いで教壇にたどりついた小泉は、クラスメート全員に顔を向けた。

「僕がクラス委員に選ばれたからには、このクラスを立派なクラスにしたいと思います」

あがつて何も言えないと思っていた僕は意外とちゃんとした挨拶を小泉がしたので驚いたが、変な違和感が胸の中に残った。

「カワパン、うまくいったな」

昼休み、いつものように机に腰掛け石山と今朝の選挙のことを話しあつたが、声はヒソヒソ声である。

僕と石山が陰で選挙運動をしていたところのが、ばれるたままである。

「しかし、学級委員になるとは思っていたけど、まさか委員長にまでなるとは思わなかつたよ」

「そうだな、神崎に流れる票が分散したのと、意外とホゾと水口に票が入らなかつたからな」

僕達二人は辺りを気にしながらヒソヒソ話をしている。すると近くにいた坂部が片目をつぶりウインクした。

僕も素早く片目をつぶりウインクを返した。

僕と坂部のウインクのやり取りは五日前の僕達のやり取りを知らない者が見たら、二人は恋人同士に見えたかもしれない。

## 選挙の裏工作

生徒会の役員に水口が立候補した時、僕は確実に当選すると思い、そうなると学級委員の選挙をやり直すだらうから、かねてからの計画を石山と一緒に進めた。

僕達のグループから学級委員を出す。

心の奥底では僕がなりたかったが、裏工作する人間がなろうとしたら、回りから軽蔑されるのは目に見えている。

だから当然僕と石山は候補からはずす。

それならば誰にするか考えると、僕と石山の言つことを聞き、女性から嫌われていかない人物となる。

僕達男のグループの票は全部で頑張つて7票。

7票でも学級委員になれるかもしれないが、絶対ではない。絶対にするにはあと2票欲しい。

力チャミのグループは7人いるが、仲良しの人間が横につながつての7人なので、力チャミに話をつければオーケーという訳にはいかない。

又、力チャミのグループにはおしゃべりが多いので僕と石山が選挙の裏工作をしているなんてばれたら大変なことになる。

「力チャミに話すのは絶対反対」

と石山が言つたので、力チャミを仲間にするのはやめにした。

石山は力チャミを仲間にするのは反対だと言つただけでなく、

「坂部を仲間にしたらどうだ」と提案もしてきた。

坂部と石山は小学校六年の時、同じクラスであった。不良と噂されていた小学校時代の石山だからほとんどのクラスメートは彼に話しかけたりしなかった。

そんな中で坂部は石山に親しげに話す珍しい女の子であった。

不良の石山に話しかけることが出来るといつとは人をうわべだけで判断しない人間といえる。すなわち信頼出来る人間ともいえるので石山は坂部を仲間にしようと言つてきたのだ。

## 計画

「坂部か、いいかもな」  
僕も坂部を結構認めていた。

小学校の時は別のクラスだったが、1組の立花、2組の水口、3組の坂部と柴崎はそれぞれのクラスのアイドルとして4組の僕でもよく知っていたのだ。

だから中学2年のクラス替えで立花、水口、坂部と一緒にになった時、桃原小学校のアイドルとは全て同じクラスになつたんだなあと一人愉快な気分になつていた。

2年の時、同じクラスにならなかつた柴崎は中学1年の時同じクラスになり、同じ班にもなつて結構仲良くしたものである。

坂部はクラスメートになつてみるとひょうきんな部分をしおつちゅう僕に見せ、女にしどくのはもつたといなあと思い、もし男だったら僕のひょうきんライバルになつたかもしれないと一人秘かに考えてみいた。

僕達の計画はまず細井と出川に話した。

この二人は僕と石山の計画にはまず無条件でのる。  
今回もやはり無条件でのつた。

「ー」、小泉がつ、学級委員にすつ、するのおつ、面白そうじょんと、細井。

「小泉の名前を書けばいいんだな。

ふざけんじやねえよ。そんなことより夏のキャンプはどうなつた

んだ」

と学級委員のことなんてどうだつていいといわんばかりの出川の返事。

最初から四票は確実に押さえることは計算できたが、それ以上は多少のリスクを負うことになる。

チンチンは小学校からの親友だから、どうしてもつて頼めば僕に協力するだろう。

また、松田もチンチンが仲間になれば僕達に協力すると思う。しかし二人とも川田の手下になつていてる小泉をバカにしているので、小泉を学級委員にするのは反対かもしれない。

「カワパンがなれよ」

とチンチンはきつと言つだらけ。

石山と相談した結果、チンチンと話すよりまず坂部に計画を話そ  
うと決めた。

万が一坂部がこの話にのらなくとも、坂部なら他の人間にこのこ  
とを話さないだらうと思つたからである。

## 坂部の説得

5日前、学校から帰ろうとする坂部を呼び止め図書館に誘つた。

「坂部、頭がいいのが学級委員になるのっておかしいと思わない。クラスのためになる人間が学級委員になるべきだと僕と石山は考えたんだ。

そこで小泉を学級委員にしようと計画したんだけど、お前もこの話につてくれないか」

図書館に入り、少し落ち着いてから僕はこいつ話を切り出した。

坂部は最初笑っていたが、すぐ真剣な顔になつた。

「カワパンの言つことはわかるわよ、でもそつ思つなら、カワパンが学級委員に立候補すればいいじゃない。何も小泉君を学級委員にすることないんじやないの。

カワパンが学級委員になるんだつたら、結構面白いかもしれないから協力してもいいけど、小泉君を学級委員にするのは、ちょっとねえ」

僕は最初この計画をみんなに話したら、みんなすぐ面白がつて協力すると思ったが、そんな人間は細井と出川しかいないと、人に話してみて気がついた。

みんなそれぞれ自分の考え方があるのだ。

ただ、面白そうではのつてきてはくれないのである。つづづくカチヤミに話さなくてよかつたと思つた。

力チャミニに話したら

「カワパン、バカじゃないの。信じられない」

と言われ、次の日にはクラス中の話題になり、みんなから僕はバ力にそれでいたはずである。

坂部の言い分にも僕は頭を抱え

「そ、それは…」

と言つたところで

「坂部の言つことはよくわかるし、その通りだよ」と石山が坂部に話しかけはじめた。

「俺達だつて最初そう考えたさ。

こんな裏工作みたいなことしたくないよ。

でも学級委員つて立候補者と推薦された人をすぐに選舉するだろう。

生徒会だつたら立候補して、みんなに充分考える時間を与え、演説も出来るから、自分の考えを言つことが出来る。

でも学級委員はそんなこと何にも出来ないで、立候補したりすぐ選挙じやん。

仮にカワパンが立候補したとしても誰が票を入れてくれる

「私は入れるかもしないわよ」

「それは俺達といつこうつぶつこしゃべつていてるからだろ。

カワパンが学級委員になつたらつて真剣に考えられるからじやないか。

俺達が何にも言わないでいきなり立候補してもただのおふざけだと思って投票はしないだろ」

石山がそう言つと坂部は黙り真剣な顔で考え始め、少したつてか

15、

「そうかもしない」と言った。

「そりなんだよ。

学級員の選挙はみんな軽く見ているし、頭のいいやつがなればいいんだろうと生徒も先生も思っているんだよ。  
それってちよつとおかしくないかい」

坂部はますます真剣な顔つきになつた。

「カワパンは今のクラス委員の決め方に問題があるから、もつと真剣に学級委員を決めてもいいんじゃないかと思つて小泉を学級委員にしようつて言つてるのね」

## 小泉のわけ

ホームルームやクラスの行事の話し合いなどに石山は積極的に話すことはない。

「前の人と同じ意見です」「が彼のこつもの意見である。

僕と細井、出川を除けばクラスメートとも饒舌にならなくて、いつもおとなしく一言二言している。しかし一旦口を開けばなかなかの論客であり、僕も時々舌を巻くことがある。

そんな石山の饒舌を元クラスメートなりびつづるだらうが、坂部は当たり前という顔をしてくる。

「じゃあ、石山君がなればいいじゃなー」

「俺とカワパンはいつも裏で動いてるから学級委員になるのは男として出来ないよ」

石山の言葉に

「それはそうね」と軽く言い、坂部は納得した。

「でも、なんで小泉君なの?」

「俺達の言つことを見きそなのは小泉だろ。

そりやあ、細井や出川だつてこるけど、あこつひを学級委員に選

「ひうだりつ」と思つだらう

「なるせび」

と坂部は言つて、一ノ瀬と笑つた。

「よくわかつた。

カワパンと石山君の言つことはよくわかつた。  
確かに一人の言つことも一理あると思う。  
でもきれい」とだけじゃないと感じるところもある。  
でも賛成よ。ところで今仲間は何人なの

「一応、4人」

「誰？」

「俺と石山、それに細井と出川」

「小泉君は？」

「小泉に下手に話すとあいつすぐ顔に出るじやん。  
学級委員に選ばれた時、俺らが裏で工作しているとすぐばれるか  
らあいつには話してない」

「まあ、それはそうね。  
でも私を入れて5票か。ちよつと少ないなあ

「あと2~3票はなんとかするよ」

「私も吉竹さんに話してみる。彼女なら話にのると思つかる」  
「杉山は？」

「彼女はダメよ、彼女に話すと絶対三崎さんに言つだらうし、そ  
うなるとホツペにも伝わって鶴見さん、カチャマまで話が伝わるわ

よ。

そうなるとクラス中にこの話が知れ渡つてアカウトでしょ」

「そりやあそだ」

石山が納得した声を出す。

「だから6票はなんとかなるけど、やつぱりあと2~3票はカワパンがなんとかしなさいよ」

「うん、わかった」

「でも、うちのクラスも面白くなりそうね」  
と坂部は言うとクスクス笑つたが、その笑顔が何ともいえずセクシーで僕はちょっとドキッとして石山を見たら、石山はじつと坂部を見ていたので、僕はそのまま石山を見ていた。

すると石山は僕の視線に気付き、

「何だよ、カワパン」

と言つたが、僕は、

「別に」

と言い、何となく変な雰囲気を「まかした。

## 最後の仕上げ

次の日、僕は思いきって寺本に僕達の計画を話してみた。

「いいよ、別に」

相変わらずの男言葉で寺本はあっさり承諾し

「野口さんにも話しつく」

と簡単に野口を仲間に入れることを引き受けた。

これまで間違いなく小泉を学級委員に出来ると確信していたが、僕は黙々押しの一票を手に入れるため、チンチンにも話をすることにした。

チンチンとは学校からの帰り道が同じなので、一緒に帰る時、僕一人で話すと石山に言うと、

「大丈夫かよ、チンチンって結構小泉を好きじゃないぜ」と石山は心配したが、

「大丈夫、俺にはチンチンを説得する隠し技があるから」と言うと、

「わかった、任せた」

と石山はそれ以上何も言わなかつた。

チンチンと僕は宮城小学校6年4組の時の親友だから自分は余計なこと言わないでいいだろうと思ったのだろう。

「チンチン、俺さ、演劇クラブに入つてもいいぜ。」

学校からの帰り道、チンチンに僕がそう言つと、チンチンは誕生日会で見せた時の笑顔を僕に見せ、

「本当、カワパン」

とチンチンには似合わない大声を出した。

「本当さ、でも一つ条件があるんだ」

「何?」

チンチンは素早く聞く。

「あのさ、黙つて今度の学級委員に小泉の名前を書いてくれない

か

「小泉の？」

チンチンはそう言うとチンチンの嫌いな牛乳を飲んだ時の顔をしたが、すぐに、

「オッケー、それが条件なら、小泉の名前書くよ。  
でもカワパン、小泉に何か弱みでもつかまれたのか」と返事をした。

「バカ言うなよ。

何で俺が小泉に弱みをつかまれなくちゃあいけないんだ。  
小泉を学級委員にしたら、あいつなら俺達の言つこと何でも聞くから、

三年七組が住みやすい教室になるじゃんか」

チンチンの言葉には僕が小泉より下なのかといつよつ一二コアンスがあつたので、思わず僕が小泉を使いこなすんだと思えるようなことを言つてしまつた。

「カワパン、ワルだな」

とチンチンは面白そうに笑い、彼はそのことに関し何も言わなかつた。

チンチンも石山とは違つた大人の面影が時々見え隠れするが、この時のチンチンの顔も僕よりずっと大人の顔に見えた。

## 小泉の横暴

「でも、神崎が生徒会に受かつて本当によかつたよな。

全員落選だつたら、新しく学級委員の選挙も行われなかつたから俺らの計画も全て台無しになることだつたもんな」

僕が相変わらずのヒソヒソ声で石山に話してた時、いきなり小泉が

「カワパンと石山、机から尻をどけろよ。机は本を置くところで尻は椅子の上にのせるもんだよ」

と、みんなに聞こえるぐらいの大声を出した。

「何言つてんだよ、小泉。お前だつていつも机に座つていただやないか」

僕は小泉が冗談を言つてるんだと思い軽く言葉を返したが、小泉は僕と石山に手をかけると強引に机から僕達二人を降ろそうとした。

「何だよ、小泉。本気で怒つてるのか」

まだ僕の声は軽い。

「当たり前だろ。

カワパンももう中学最上級生なんだから、そんな行儀の悪いことはやめろよ」

小泉の顔は真剣そのもので、口はとがつて目はつり上がつている。

「お前なあ、委員長になつたらいきなり眞面目人間になつちゃつたのかよ」

「俺のことはいいだろう。

机の上に尻をのせるなんて見ていてみつともないと言つてるんだよ。早く降りろよ」

「カワパン、小泉君の言つ通りよ。机から降りなさい。」

僕と小泉の言い争いの声が大きかつたため、近くの者達も気にし始め、隣りにいた水口は小泉の意見に同調して僕を非難した。

「カワパン、降りた方がいいよ」

興奮している僕をなだめるかのように石山が僕の肩を叩いたので、僕も仕方なく机から尻を降ろし椅子に座った。

「これでいいだろ?」

と僕がふてくされて言つと

「最初から素直に従えよな」

と捨て台詞を残して小泉は僕達の場所を去つた。

「あいつ、何だよ。

俺達が委員長にしたつてわかつてんだろうな、カワパン」

小泉は中学一年生の時、住吉中学校に転校して来たために友達が少ない。

野球部に入つているからクラブの友達はいるがそれ以上に親しい友達は僕ぐらいなのだろう。

そのため小泉のことは僕がよくわかっているはずだと石山の言葉は言つている。

キーンコーン、カーンコーン。

午後の授業開始のチャイムが鳴るが教室内はまだ騒がしい。

「おい、みんな静かに席に着けよ。チャイムが鳴つたら昼休みは終わりなんだからな」

小泉の怒鳴り声が教室内に響く。

小泉の言つていることは正論なので誰も反対出来ないが、男子生徒は不快感が残る。

小泉の注意はチャイムが鳴り終つた瞬間に発せられた。

軍隊じゃあるまいしそんなすぐに静かになれる訳ないだろう、みたいなことを何となく思つてゐる男子生徒が多い。

## 小泉の変貌

「起立、礼」

先生が入つてくると小泉の誇らしげな号令が教室内に響く。僕は午後の授業中ずっと小泉の変身ぶりを考えていた。

小泉に票が入ったのは当然僕と石山が仕組んだものだと小泉もわかつているだろ？」、クラスメートのほとんどの生徒が疑っているだろう。

だからわざと小泉は僕と石山にきつい言葉を言ったんだ。

もし、親しげな言葉や感謝の言葉を僕や石山に小泉が言つてきたら、クラスの反感は凄いことになるからカムフラージュするために、今日のところはああいう態度をとつたのだろう。

少し時間が経ちほどぼりが冷めたら、いつもの小泉に戻り僕達の言つことも聞いてくれるに違いない。

僕の結論は出た。

石山にそのことを話したら石山も納得した。しかし委員長になつてからの小泉の暴走はおさまるどころか、ますます激しくなる。

「カワパン、シャツが出てるわ」

「教室内で口笛を吹くな」

なんて小言はもう一日中言つてはいるし、今まで川田の子分みたいだつたのに、

「川田、うちやんと帽子を被れよ

なんて偉そうに注意もある。

間違つたことは言つていながら、どうでもこいことを悉くぶつて言つものだから嫌になつてしまつ。

一度些細なことで偉そうに小泉が熊田を注意したら熊田がキレて、「小泉、何偉そうにえはってんだ。」

お前なんか川上達が冗談で委員長にしただけなんだから、おとな

しくしてろ」「

と、言つてしまつた。

小泉は熊田の言葉に顔が真っ赤になり、肩を震わせながら、

「俺はカワパンに何にも頼んでないぞ。クラスのみんなが俺を選んだんだ。

変なこと言うなよ。

自分が悪いことをやつて責任転嫁するな、熊田」と、熊田をにらみつけながら言つた。

回りで聞いていた女生徒数人も小泉の肩を持ち口々に熊田を避難したから、

「チエツ、もういいよ」

と熊田は捨て台詞を残しその場を逃げていった。

小泉の言つことは一応いつも正論なので女生徒を味方につけるが、ちょっととしたことでいちいち注意される男子生徒のストレスはたまる一方であつた。

「カワパン、小泉が委員長になつて一週間たつけど、全然変わらないじやないか。

それどころかますますひどくなるぞ。あれは本性が出たのであって、カワパンの言つていたこととは明らかに違うな」

石山の言い分に僕も納得せざるを得なかつた。

最初はわざといい子ぶつ正在中か、舞い上がりつているんだろうと思つていたが、明らかにそんなことはなく、小泉は委員長になつてすっかり人が変わつてしまつたみたいだつた。

「石山の言つ通りだ。

あいつ、権力持つとコロッとい人が変わるみたいだな

「そうだよ、今までおとなしく人の言つことをはいはい聞いていたのは、猫をかぶつてたんだ。

今の姿があいつの本当の顔だよ

「あいつはヒットラーと同じだな。

楽しかった三年七組がすっかり暗くなつたもの

「カワパンのせいだぞ」

「俺だって小泉があんな性格だつて思わなかつたんだから犠牲者

だよ

## 小泉の凋落

小泉が委員長になつて一週間がたつたが、クラスの雰囲気は最低であった。

もちろんその原因是小泉の委員長にあつたのだが、その裏工作をしたのではないかと僕にも冷たい目が向けられるようになった。が、小泉はそんな雰囲気は全然感じないようで、一日一日元気な顔をしてクラスのあら探しをしている。

しかし、そんな小泉独裁政権もあっけなく終わることになった。ホゾが体育の授業で鉄棒から落ちてしまい、足の骨を折り、一ヶ月以上入院することになってしまった。

一ヶ月くらいなら副委員長がいなくても問題がないように思えるが、3年7組の男子生徒ほぼ全員が学級委員の選挙をもう一度やり直そうとカツパに直訴したらカツパもそれを認めた。

小泉が次点のフカヒレを書記にして、水口を副委員長にすればいいと提案したが、大ブーリングが教室内に起こり、それはすぐに却下された。

選挙は委員長に15票入った水口、副委員長に8票のフカヒレ、書記に6票の立花ということになった。

水口が15票もとつたのは男子のほとんどが入れたからで、もちろん僕も入れた。

男子のほとんどが水口に入れたのは、水口は小泉に批判的であつたし、僕達のクラスはいつも神崎が委員長をしていたので、やっぱり女が委員長になつたほうが、クラスが平和になると多くの生徒が感じたからだろう。

39票（ホゾがいなため40票ではない）の内、29票が3人に集中したのは小泉みたいのが、一度と学級委員にならないため、手堅い人間を委員にしようと考えた生徒が多かつたためだろう。それでも小泉と熊田には一票ずつ票が入っていた。

「あいつら、自分で自分の名前書いたんだぜ」

という噂が選挙後しばらく飛びかけていた。

残りの9票は川田が1票、加山が3票、そしてなんと僕に5票が入つてしまつた。

投票用紙が配られている時、石山が僕にわからないように細井、出川に目配せし、僕を指差していたのは一瞬目にしたのでわかつた。後で聞くと、それに坂部ものつたらしい。

でもあと一票は誰が僕の名前を書いたのかわからなかつた。

前回の投票の時も僕に一票が入つたのできつと同じ人間だらう、一体誰だらう。

そいつだけは本氣で僕が学級委員にふさわしいと思つてゐるのか、それともやつぱりふざけてゐるのか……。

昼休み、一週間ぶりで机に尻をのせることが出来た。

教室内の騒がしさも一週間前と同じになつてゐる。

小泉は一週間前と同じく川田や横山のそばに行き、へラへラ笑つていた。

「カワパン、惜しかつたな。あと一票で学級委員になれたのに」

「ふざけんなよ、前の仕返しか。

もう少しで学級委員になつてしまい、小泉の一の舞いになるところだつただらう」「うう

「カワパンと小泉は違うぞ」

「いや、わからないうよ。

俺、本当、今回はつぐづく思つたよ。

権力が小泉を変えたけど、俺だつてもし学級委員になつたら責任感から小泉と同じことをしたかもしけないよ」

「そうかなあ、そうは思わないけど。

カワパンならきつとクラスの女をみんな教室内ではずっと水着でいろいろといふような法律を作つて7組をハーレムにしてくれたと俺は思つぞ」

「石山なあ、俺は眞面目なことを今から言おうと思つたのに、ど

うしていつもそつやつて茶化すんだ

「俺だって真面目に言つてるぞ」

石山は僕の言葉に茶々を入れたが、僕の言いたいことはわかつて  
いるみたいであつた。

学級委員になると「ひとまが誉なこと」ではなく、責任が付いて  
くるということなのである。

小泉は暴走したけど、あれは小泉なりに学級委員としての責任を  
果たそうとしていただけなのだ。

学級委員になることに慣れている秀才は学級委員が何をすればい  
いのかわかっているため、必要以上のことをしようとはしない。

これだけのことをしておけば先生も何も言わないといふことがわ  
かっているからその枠の中でしか行動をしない。

学級委員も、席係も枠の中での仕事と考えると同じなのである。  
しかし本来の学級委員とは枠を越えた存在であるし、その責任も  
ある。

枠の存在を知らない劣等生が学級委員になつたら、真剣に考える  
生徒ほど辛く大変なものになる。

僕は小泉を見てそのことがよくわかり、自分の器量では学級委員にな  
つたらその責任でつぶされてしまうと本氣で思つた。

そんな责任感をあまり考えない優等生が学級委員をやるのがちよつ  
といいんだろうとわかつた。

あと一票で学級委員になれなかつたが、それは本当に助かつたと  
思つてゐる。

石山は「冗談で僕の名前を書いたのではなく、僕なら学級委員とし  
て3年7組を面白いクラスに出来ると本氣で思つたに違ひないが、  
やっぱり今の僕には荷が重すぎる。

僕は石山と夏休みのことを考えたりしていた方が、性に合つてい  
るのだ。

## 多摩川園を無料で入る方法

僕の家から一番近い駅は東横線の元住吉と南武線の平間である。名前からしてハイカラな私鉄の東横線、堅くていかにも国鉄が付けそうな名前の南武線。

実際車両も南武線の方は古くさく、工場で働いている汗臭い工員がたくさん乗っているが、東横線の車両は冷房がよくきいていて、スーツ姿のサラリーマンがたくさん乗っている。

南武線沿いは大きな工場が多いし、武蔵中原や、向河原には社員寮も多いから工員が多いのも無理はない。

川崎という土地は地方からの出稼ぎや地方の中學、高校を卒業した学生の集団就職先として有名でそのほとんどの人が南武線沿いに住んでいる。

それに比べ東横線沿いは新興住宅地の集まりである。

もともと私鉄は何もない田んぼや原っぱに鉄道を引いて新しい駅を作り、その駅を中心として町を作るためそのほとんどが新興住宅地にきまっている。

僕達がたまに遠くに遊びに行く時、当然使つ鉄道は東横線である。元住吉、南武線と繋がっている武藏小杉、新丸子、多摩川を越えるとそこは東京で東京の一一番初めの駅、多摩川園前。多摩川園前はその名の通り、駅を降りたら目の前は遊園地である。

小学校の時、一番目の兄がよくこの遊園地に僕と弟を連れて来てくれた。

多摩川園は山の中にできた遊園地で裏手に回ると山の頂に着く。山といつても二十メートルぐらいの山だから山という呼び名はおかしいかもしれない。

それに入口から見たら奥に見える裏手は山に見えるが、裏手に回ると谷の中に遊園地があるように見える。

一番目の兄はこの裏手に僕達を連れて行く。

入口から見たら山だが、車が走る道路をゆっくり上がり上去り行くと、裏手に着きそこは二車線の立派な道路が南北に長々と続いているし、道路の向こう側は住宅街でそこはもう山の頂という感じではなく普通の平たん地だ。

南北につづいている道路と遊園地の境界線は延々とフェンスが付けられていた。

遊園地ができた頃は立派のフェンスだったのだろうが、今はかなり老朽化していて大きな桜の木が植わっているあたりのフェンスは穴があいていた。

兄は辺りをキョロキョロしながら、

「行けっ。」

と合図を送り、その合図とともに僕と弟は素早く穴から遊園地に入った。

当然兄もその後にすぐ続く。

## バナナ早食い競争

フーンスの穴を抜けるとそこは森になつていて。

木と木の間を散歩しているふりをして僕達3人は何食わぬ顔をして山を下りる。

山を下りればそこは数々の乗り物がある遊園地だ。

僕達3人はそこからそれぞれ別の方向を下を向きながら歩き、乗り物券が落ちていいか必死になつて探す。

入場券とセットになつてお化け屋敷の券はすぐに拾うことが出来る。

この券は間違つて落ちているのではなく、お化け屋敷に興味のない人が捨てるから、結構落ちているのだ。

ところが乗り物券はそう簡単には落ちていない。

だいたい一人一枚拾えれば上等なのである。

一度僕は10枚綴りを拾つたことがあるが、その時は飛び上がって喜んだものだつた。

乗り物券が拾えない時は仕方がないのでお化け屋敷に何回も入ることにしている。

作り物のお化けは怖くないがお化けの振りをしている人間がいきなり出てくるのと出口近くで頭から降つてくるお化けの人形はちょっと怖い。

「キャーッ。」

という叫び声が聞こえてくるのは大抵この辺だ。

そんな話を岩井に話してたら、日曜日に行こうことになつた。

多摩川園は1年ぶりであったが、裏手のフーンスの穴は相変わらずあつた。

「カワパン、本当にあつたな。」

石山は嬉しそうである。

僕達は素早くその穴から遊園地内に入ると走りながら山を下りた。下りた場所は催し広場で大勢の人がステージの回りを囲んでいたので、僕達もその人込みの中に入つていった。

ステージの上ではバナナの早食い競争が行われていた。

1分で何本バナナを食べられるかの競争である。

バナナは高級な果物でとても値段が高い。

僕は生まれてから3回しかバナナを食べたことがなかった。

僕の夢は腹いっぱいバナナを食べることだから、このバナナの早食い競争は夢みたいな催しである。

「石山、出ようぜ。」

「俺はいいよ、カワパンが出てみろよ。」

石山は絶対に無駄遣いをしない。サイダーやラムネは絶対に飲まないし、流行りのチエリオも飲もうとしない。

飲む物といつたら水道の水だけである。

そんな石山だから食べ物に関して必要な時しか食べようとしない。

だからバナナの早食い競争にも出ようとしないんだなと僕は思った。

「よし、わかった。俺は出るぞ。」

と僕は石山に言い残すと、早食い競争の出場者が並んでいるところに向かつた。

10本は食べてやるぞと僕の順番が来るまでステージを凝視していたら、1分間で終了した時、きれいにバナナを食べ終わらず半分くらい残す人が結構多いのがわかつた。

残ったバナナはそのまま持つていつていいみたいだから、僕も半分くらい残して後でゆっくり味わおうとも考えた。

ステージの上では出場者5人が開始の笛の音が鳴ると一斉にバナナの束から一本一本取つて食べていく。

1分で5人出場出来る訳だから、僕の前にたくさん人が並んでいたが、僕の番がすぐにやってきた。

今のところ一番はバナナ7本。よし、それぐらいならと僕は勇んでステージに上がった。

石山が二コ二コしながら手を振つている。

笛の音がする。

すぐにバナナを束からもぎ取り皮をむくと口の中に放り込む。簡単に喉を通ると思ったがなかなか胃に落ちない。やつとの思いで飲み込むとすぐ2本目を口に入れる。味なんてしまい。

回りも何も見えなくなる。

2本目は1本目より落ちていかない。

無理やり3本目を口に入れる。

口の中はバナナでいっぱいだ。

四本目のバナナの皮をむくがなかなか口に入れることは出来ない。もうすぐ終わりの笛の音がするはずだ。

無理やり4本目を口の中に入れようとするが、口の中はもうパンパンでバナナが口から飛び出そうとしている。

僕の左手はバナナが飛び出さないように口を押さええるが隙間からバナナが出てくる。

## バナナの味

ピー。

終了の笛の合図。

僕の右手は食べかけのバナナ、左手は口を押さえ隙間からグチャグチャになつたバナナがはみ出でている。

近くで見ていた人が思わず、

「汚い」

と叫ぶ。

恥ずかしくて早くこのステージから逃げ出したいが、司会者がそれぞれ何本食べたか見ていてる密に知らせなければステージを下りられない。

「3本、4本、3本、2本、4本」

司会者は出場者の前に行きバナナの皮の数を数えではマイクでみんなに知らせる。

一通り言い終わると参加賞としてバナナ一本をアシスタントが出席者に渡して速やかに退場となる。

アシスタントの女性が僕に参加賞のバナナを一本渡そうとした時あからさまに嫌な顔をした。

『泣きたい』

僕はバナナ一本を引つたぐるよつに受け取ると急いでその場を逃げた。

逃げた先に石山が笑つて待つている。

僕は黙つて参加賞のバナナを石山に渡すと口をモグモグさせながら右手を振つて何も言うなといつ合図をした。

何しろこの場から早く離れたかったので、速足で歩きだした。行先はどこでもいい。

なるべく人の少ないところに行きたい。

顔は下を向きながら口を一生懸命動かしなんとかバナナを胃の中

「おとしていく。

田の前に池が見えてくる。

口を押さえていた手を洗いたいと歩きながら考へていた時、ああそうだ、この先に池があつたと思い出し、方向をちょっと修正したので、池の前に辿り着いたのである。

池に着いた時には、口の中になつたバナナは全て胃の中にあがまつっていた。

池の水で手を洗い、洗つた手で口を拭つと顔を上げるとができ、石山を見た。

石山はゆっくり僕の後を歩きながらバナナをおこしきつて食べている。

「石山、買い物にはしないんじやないのかよ。」

「俺、そんなこと言つた覚えないぞ。」

それにこれは買い物じゃないだろ。

カワパンのプレゼントじやないか。

カワパンの好意を無駄にしちゃあいけないから仕方なく食べているのを、「

石山の嬉しそうな顔を見ていると僕もそれ以上何も言ひ気にならず、右手に持つていた皮がない半分のバナナを口に入れただ。甘い、西洋の甘さだ（後で西洋ではないと分かつたが）。甘さに品がある。

あんこの単純な甘さとは違う高級な甘さ。

ステージ上で食べた三本半のバナナの味は全く覚えていなかつたが、今食べているバナナの味ははつきり僕の舌に感じじるこどが出来る。

## 川田達のデート

至福の時を味わっていると石山が、「カワパン、あれ見てみる」と池を指差し驚いた声を出した。

石山の指先を見るとボンヤリとボートが池の上に5隻見える。「あれ、立花だよ。それに横山が一緒に乗ってる」

石山は目がいいが、僕は最近目が悪くなり始め、軽い近眼になつているので、ボートの人間が誰なのかはわからない。

「本當か、立花と横山が一緒のボートに乗つてているのか……。それって、あいつらデートしてるってことか」

「そうだろ、あそこで勉強している訳でも、飯を食べてた訳でもないだろ?」

一般的に言つなら『デート』をしているんだろ?」

「石山、見つかるとヤバイからあの木の影に行こう」「僕はそう言つと素早く走り出した。

「カワパン、川田もいるぞ」

木の裏に着くと石山がそう言つたので、

「えー、本當かよ」

と言葉は口を出だが、頭は混乱してしまつていて。デートといふ言葉だつて最近やつとわかつたのに、それをしているやつがいる。

それもクラスメートだ。

『中学3年の友』では確かにデートが一番の山場として描かれているが、現実に身の回りでそんなことが起こるなんて考えてもいいなかつた。

女の子を好きになる。

これは中学生になるとほとんどの生徒が経験する。しかしあくまで好きになるだけで、その後どうしていいのかほと

んどの生徒はわからない。

中学1年の時、3年の先輩が下級生の女生徒と一緒に下校したと噂になつた。

「あいつら、付き合つているんだぜ」

仲のよかつたワンちゃんが僕にそうささやいた。

『付き合つ』なんて甘酸っぱい言葉だらうとそのときは先輩が手の届かない大人に見えたものだつた。

女の子と付き合つ先にはキッスがある。

キッスはレモンの味というが、本当にそうなのだろうか。まさか、立花と横山は、キッスはしていないだらうな。

「川田は一人だけなのか

頭の混乱が少しあさまつた時、石山に聞いた。

「いや、四組の茅野と一緒にだ

川田、横山、立花、茅野は全員バスケットクラブ員である。

だからバスケットクラブの部活の一貫としてクラブ員が多摩川園に来たといふことも考えられるが、立花と横山、そして川田と茅野は学校公認の噂のカップルである。

これは明らかにダブルデートに間違いないだらう。

「あいつら本当に付き合つていたんだ」

驚きとうりやましさで氣のぬけた言葉を僕は発した。

僕と石山はずつと木の影から池を見ていたが、ボートに乗つているのは横山と立花、そしてもう一つのボートに川田と茅野だけで他の部員はいなかつた。

「カワパン、帰るか

石山の言葉に僕もうなずいた。

今日は多摩川園の裏のフエンスの穴からタダで入り、落ちている券を拾つて遊ぼうと考えていたが、川田達を見つけたことにより、自分達があまりにもみじめな遊びをしようとしていたことを見せ付けられたために、もうこれ以上ここにいたくなくなつたのだ。

帰りの電車で僕達は何もしゃべらず、三島の駅をおり、ちょつ

と柴こたといしんで

「じゃあな」

と叫びて呟れた。

## 告白

帰り道僕の頭の中は横山や立花達ではなく、水口の姿が占めていた。

僕は水口が好きだ。

夜寝る時、いつも水口に告白する場面を思い浮かべる。もちろんその先にデートがあり、キッスがあるのだが、どういう訳か告白だけでその先を想像したことがない。

僕にとってデートとかキッスは海外旅行に行くといふくらい遠い存在でとてもそこに自分が行くと本気で考えられない。

ところが告白するということならば、現実的である。

勇気さえあればいつでも実行出来る。  
でもその勇気が実はない。

石山がそばにいれば勇気も持てるのだが、女の子に告白する時、友達がそばにいるというのは何か情けない。

横山は立花に好きと告白したのだろうか。  
前に聞いた時、横山は立花が好きだとはつきり僕に言つた。

あいつはキザで鼻持ちならないやつだけ、そういうことは男らしい。

僕は横山よりも勇気がないのだろうか。  
頭の中はずっとそんなことを考えていた。

次の日、石山は横山、川田、立花に昨日のこと話をしない。

僕も話さない。

噂のカップルに対しては常に僕が中心になつてからかうのだが、噂ではなく本当ならそれは出来ない。

僕と石山は昨日のことなど全く忘れたように日々を過へりした。いや、僕に限つて言えばさうではない。

あの日から水口に告白しようか、告白しようかいつも考えてこる。

受話器を取る。

水口の家の電話番号を指で回す。

クラスの生徒の電話番号は藁半紙にガリ版印刷されたものが配られたから、それを見れば一発でわかる。

最後の3を回すとすぐに受話器をガチャンと下ろしてしまつ。そんなことを二二二三回繰り返している。

朝や昼間はそんな馬鹿げたことは出来るわけないと消極的になるのだが、なぜか夜になると一人で盛り上がり今日こそ電話しようとする決心をする。

しかし、いろいろ考えると結局何も出来ないで終わる。

ある日、そうだ、何も考えなければいいんだ、何も考えないで受話器を取りダイヤルを回せばいいと考えた。

そしてそれを実行した。

4……、2……、3……。

何も考えない頭にその言葉を焼き付けダイヤルを回したが、急に僕の家の家族が今この電話の場所に来たらどうしようと考えてしまった。

今日はそこまでであった。

次の日は外に出た。

寿司屋の斜め前には公衆電話があるから、そこから電話しようとした。

## 放課後までの憂鬱

ダイヤルを震える指で回す。

寒くもないのに身体が震えるなんて初めての経験だ。

針に糸を通す時、指先が震えるがその震えよりも何倍も震えが大きい。

何も考えない、最後の数字を回す。

ルルルルル……。

つながった。

「もしもし」

2回で声がした、早い。

「もしもし、あの川上です」

「あー、あーあ、カワパン、どうしたの？」

独特のこつもの言い回しあつさつきり水口だとわかる声が聞こえてきた。

「俺、はつきり言つナゾ水口が好きなんだ」

『何も考えない』と頭に刻んで電話をかけたから、何を最初に話そうか、まったく考えていなかった。

しかし妙に頭は冴えていたので、これはもうストレートに告白しようと思つた。

「え……、そななんだ」

驚いた声を出したが声は落ち着いていた。

水口はもてるから男の告白に慣れているのかな。  
でも僕は初めてである。

この後何を言つたらいいか、何も言葉が出てこない。

『そななんだ』だけじゃ「そななんだよ」と言つしかないからそう言つた。

「カワパン、わかつた。

でも今、家だし、いつにいつ電話で長々話せないから明日の放課後話そう。

でも私一人じゃ嫌だからタツチも連れていく。  
だからカワパンも石山君か、小泉君でも連れてきて

タツチとは立花のことである。

男は立花と呼ぶが女同士ではタツチと呼ばれている。  
ちなみに坂部は女の子同士ではさわちやんと呼ばれているが、水口は水口さんである。

同じ富城小学校のアイドルでもそこにはタイプの違いが出ていることがわかる。

僕は水口の言葉に従い、受話器を置いた。

「石山、今日放課後残つて付き合つてくれるか?」  
「いいけど、何の用?」  
「それはその時……」

朝、石山と会うとやつとの思いでそれだけ話した。

石山は何だらうという顔をしたが、それ以上は突っ込んでこなかつたので助かつた。

授業と授業の間の休み時間や昼休みなるべく誰とも話をしたくなかつたし、顔も見たくなかったので、ずっと本を読んでいた。

本を読むといつても放課後のことが気になるから文字は頭の中に入つてこない。

僕の席は回りに水口、立花、石山と今日の放課後の関係者がみんないる。

立花はもう水口から僕のことを聞いているのだろうか、気になるが立花の方を見る訳にはいかない。  
見たらどんな顔をされるかわかつたものじゃない。

授業中、これだけ先生が黒板だけを見たのはきっと初めてだろう。それ以外に目をやれないのだから当たり前の選択である。  
僕のいつもの授業風景は先生の目を盗んで石山と話したり近くの女の子にちょっかいを出すという時間がほとんどである。  
もちろん数学とか、美術など好きな教科の時はちゃんと授業を受けているが、嫌いな教科の時はほとんど遊んでいる。

いつもなら大好きな自習時間が今日はなくて本当によかつたと心から思った。

## 振りれる

「カワパン、今日おかしいぞ。どうしたんだよ  
昼休み、たまらず石山が話しかけてくる。

僕は本を読みながら

「別に

と返事をする。

「本が面白いのはわかるけど、俺の間にもちゃんと答えてくれ

よ

石山は今まで言われたので、頭を上げ、石山を見たらその後ろに立花がいて目が合ってしまった。

目が合った瞬間、立花はニヤリと笑った。

あ、これはもう水口から話を聞いているな。  
すかさず僕は目を本に落とした。

「まあ今は黙って放課後付き合ってくれよ。お願ひだから

小さい声で僕は石山に頼んだ。  
僕のただならぬ雰囲気に石山は  
「わかった」  
と言い、そのまま自分の席に戻ってくれた。

僕にとつて最良の日となるのか、最悪の日となるのか。  
放課後は時間どおりにやつてきた。

早くみんな教室から帰ってくれと願つたら五分もたたないうち僕と石山、水口、立花を残し教室には誰もいなくなつた。

僕は学校の授業が終つたらすぐ帰るし、そうじ当番の時もそうじが終わり、みんなで集まつて、

「終わります」

という号令をかけたら、すぐ帰るのでその後の教室の風景は知らなかつた。

今日はそうじ当番だったので、石山と一人自然に最後まで残り、「終わります」

と号令をかけた後もちろんたらと帰り仕度をしていたら、すぐに誰もいなくなつたので、意外な感じがした。

もつと遅くまで教室に残つている生徒がいると思ったからだ。でもこの状態は僕にとってラッキーであった。

僕と石山が前の方にいて、立花と水口が後ろの方にいる。

僕達四人以外に誰もいなくなると、立花と水口が僕達の方に寄つて來た。

「カワパン、昨日はありがとう。

正直、カワパンが私に対してもういう風に思つてたなんて考えたこともなくて昨日は私、何を言つていいのかわからなかつた。

でも私を好きだって言つてくれたのは女の子として嬉しいけど、私はカワパンのこと自分の意見がしっかり言える人間だと尊敬はしてるけど、好きだという感情はない」

水口が昨日の僕の告白をほつきりみんなの前で言つたので、石山

は驚いた顔をしている。

「だから、カワパンと友達としてなら付き合えるけど、それ以上となると今は考えられない」

水口はいつものはつきりとした口調で一気にしゃべった。

きつとあれからどうこうふうに言えばいいか、いろいろ考えたんだだろう。

隣で立花が「コニコニ」笑っている。

「わかった。俺は水口を好きだって言いたかっただけだから、気にはしないで。

俺の思いを伝えれば俺は満足なんだ」

僕達四人はすぐ学校を後にした。

立花と水口は家が近いので帰り道も同じだが僕と石山は違う。

僕は正門を出ると左、石山は右。立花と水口は田の前の公団住宅の道を真っすぐに行く。

僕達四人は公団住宅の道を一緒に歩いた。

正門の前で分かれてもよかつたのだが、立花がバス通りまで一緒に行こうと言ったからだ。

立花は水口が僕を好きではないということをはつきりわかっている。

水口の素直な気持ちを全部聞いているのだろう。

その上で僕を傷つけないためにはどうすればいいのかといつ」とも相談したに違いない。

立花は今日僕を見ていて最初は面白がっていたが、だんだん僕に同情し途中まで一緒に帰ろうと言つたのだと思つ。

女の子と一緒に帰る。  
僕の一つの夢だった。  
少し悲しい夢がかなつた。

公団住宅の道に入ると僕と石山は立花と水口の少し後ろを歩いていたので、石山が小声で話しかけてきた。

「カワパン、いいのか。  
水口は友達としてなら付き合つてもいいって言つてんだぜ。  
友達でも付き合えるんだから、いいじゃないか」

「いいんだよ、もう。  
俺は水口に好きだって言えればよかつたんだ  
と僕と石山が一人でヒソヒソ話をしていると、立花が後ろを振り向き、「カワパン、水口さんに告白してどうしたかったの。  
付き合いたかったの?」  
と聞いてきた。

「別にそういうんじゃないよ」と僕は言った。

確かにそういうんじゃなかった。

告白できればいいところより、その先を全く考えていなかつたの

である。

水口と付き合つてことじと自体よくわからなかつたし、水口とデートなんて本当に外国旅行に行くようなもので、現実感のない話だつた。

ただ『中学3年生の友』に描かれている男女交際といつ甘い響きの言葉に憧れていただけなのだ。

「1回ぐらい、この4人でデートしてもいいよ  
立花はよっぽど僕に同情したらしい。

「いいよ、本当にそういうんじゃないよ」  
僕はそう答えた。

僕の心中で水口に告白した瞬間がクライマックスであった。  
そのため、その後は祭りの後の淋しさと同じで、何も考えないぽけーとした心になつてゐるため、新たな挑戦は全く考えられなかつた。

公団住宅を通り抜けたところで僕達は二手に分かれた。

僕の心は結構晴れ晴れしている。

水口のことはどう好きでも嫌いでもなくなつてゐる。

やはり恋に恋していただけみたいだ。

でも今の僕は理屈的なことは何も考へないで家に向かつて歩いている。

ただ、頭の中ではすつきりとし、今までウジウジしていた気持ちはどこかに吹つ飛んでいた。

## キャンプ計画

僕と石山の今の関心事は夏のキャンプである。

昨年は親が反対したのと台風のために中止にしたが、中学生活最後の今年こそ絶対に成功させよ!と思つてこる。

新学期が始まると生徒会の選挙や学級委員の選挙で頭がそつちの方にいつてしまいキャンプのことは考える余裕がなかつたが、今はだいぶ落ち着いてきたので、キャンプのことを本気で考え始めた。

夏のキャンプでまず肝心なことは資金である。

僕と石山、細井、出川の四人はキャンプ資金のために毎月お金を積み立てるにし、その積立金を銀行に預けることにした。もちろん四人の名義には出来ないので、僕の名前で通帳を作り、判子は石山が預かることにした。

この預金は僕と石山が両方揃わないと引き出せない。

細井、出川もそれで納得した。

目標は一ヶ月千円。

出川や細いはお小遣いを節約すればいいと言つていたが、僕には毎月の決まったお小遣いはない。

石山も毎月のお小遣いをもらつているなんて言つたことはないのでは、きっともらつていないのである。

「石山、毎月千円、大丈夫か?」

と聞いたら

「何とかなるだろ!」

と言つたので何とかするのだろう。

問題は僕である。

僕は昼食代として一日百円、母親からもらっている。

昼食に食べる菓子パンが一個十五円、四個買うと六十円。

これに支給される牛乳を飲めば昼食はオッケーである。

百円から六十円を引くと四十円ある。

これが僕のお小遣いである。

いつもならこの四十円でコカコーラを飲むか、チャーリオを飲み大判焼きを食べたりする。

もちろん鉛筆や消しゴムなどの普段使う文房具代も百円の中に入っているから、買い物にばかりは出来ない。

一ヶ月に千円貯めるということは買い物や文房具類を全く買わないということをしなければ貯められない。

結構それはきついものがあるため、新聞配達をすることにした。

僕は小学校五年生の時から新聞配達をしていた。

初めは2番目の中の兄の手伝いから始まり、中学校に入ると一人で行なつたがここ一年はやっていない。

クラスメートの小久保が夕刊だけ新聞配達をしていて、「月8百円もらっているけど、もうやめたいんだ。

けどやめさせてくれないんだ」

と前々から言っていたので、

「それなら僕がやるよ」

と言つて小久保に代り、新聞配達を始めたことにした。

これで月千円はなんとかなる。

資金面はなんとかなったから、後は計画だけである。

僕達はキャンプの計画を暇さえあれば話し合つたが、クラスメートの関心事は一ヶ月後の修学旅行だ。

修学旅行の行先は京都。

小学校の時は日光だった。

どうして学校は寺巡りが好きなんだろう。

北海道とか信州でもいいのじやないのかと不満に思つたが、僕達の中学校は修学旅行といえば昔から京都と決まつていた。

僕の親は宗教団体の大幹部である。

宗教団体といつても普通の宗教団体ではない。

自分達以外の全ての宗教を徹底的に批判する新興宗教であるから、京都の寺に行くなんてとんでもないことである。

僕も絶対寺や神社に行きたくなく、知り合いの宗教団体の幹部に相談したら頭の中で御題目をあげていれば大丈夫だと言われたので少し安心した。

そんな訳で修学旅行よりも夏のキャンプの方が僕にはとても楽しみであるのだ。

僕の配達区域は公団住宅。

公団住宅は全て記号で配達するところがわかるから新入りには便利なのである。

メモ帳にA - 42とかC - 32という風に配るところを全て

書い

ておけばメモ帳さえあれば最初から間違えないで配ることが出来る。

しかし、公団住宅にはエレベーターがないため、四階に配る時など最悪である。

この階段を上ったり下りたりするのが嫌だからみんな公団住宅は配りたがらない。

だからその配達区域が新入りに回ってきて僕がそこを配ることになる。

一度面倒くさくなつて一階の郵便受けに新聞を入れたら、配達所に戻った時にはもう電話が入つていたらしく、新聞配達所の主人から大目玉をくらつた。

1階には全ての部屋のポストが並んであり、郵便はそこに入れてもいいのに何で新聞は直接持つて行かなければいけないんだあ、とか言つてもどうしようもない。

そう決まつているから雇われ者の僕はそれに従うしかない。  
それにも僕の配るところは4階が多い。  
全く嫌になる。

僕の新聞を配る自転車はお母ちゃんの自転車で車輪の小さいやつである。

五段変速で車輪も大きいサイクリング車が今は流行りで、僕もそれに乗りたいのだけど、絶対にそんなしやれた自転車は買つてもらえない。

三輪車を大きくしたようなおばちゃんが乗つて自転車をお母ちゃんが見て気に入り我が家では買つたが、新聞配達にその自転車を使うと実にみつともない。

荷台に新聞を括り付けてもがつちり固定されず、気を付けてないとすぐずり落ちてしまうし、荷台がサドルより一段下になつていて

ので、格好よく新聞を抜くこともできやしない。

新聞配達の自転車は乗ったまま右手を後ろにまわし、ステッと新聞を一部抜き取りそのままポストに入れるというのが格好よくきまつた形だが、僕の場合は段差があるためそんなこと出来やしない。せいぜい買い物カゴに入れた方の新聞から一部ステッと抜くことが出来るぐらいいだが、

ハンドルの前に付けてある買い物カゴに新聞を入れてはいるなんて石山に見られたら、

「カワパン、新聞買ってきたのか？」

とからかわれそうだ。でも新聞屋には余分な自転車はないというので仕方がない。

格好悪くても夏のキャンプのため頑張るしかない。

新聞配達で一番嫌な日は雨の日である。  
新聞を絶対ぬらしてはいけない。

ある大雨の日、僕はいつもの通り新聞配達をしていた。  
カツパを着ているため身体が濡れる心配はないが、雨の勢いが凄いので前がよく見えない。

そんな中で道路に空いている窪地に気付かず、勢いよくその窪地に自転車を入れたら、大きく転倒してしまった。

新聞は水溜まりに投げ出された。  
水浸し、泥だらけである。

『『ひょうじよひ』と同じく落ち込みながら考えたが、そのまま配つてしまつた。

『いろんな大雨の日だ、お密さんだつて多少日をつぶしてくれるだ

『うるさい

と考えていたのだが、配達所に戻ると主人がカンカンに怒り、「もう一度配り直せ」と言つてきた。

『すぐに電話するやつがいるんだ』

と大雨の中をもう一度配り直すことになった。

雨だから今日は休みなんてことはない。  
あくまでも仕事は厳しい。

今日も嫌な雨が降つていい。  
大雨ではないけれどカツッパを着ると身体が妙に蒸し暑い。

## 三かの矢へ

「雨がしつと日曜日、僕は一人で――」

新聞配達の時は大抵歌を口ずさんでいる。特に雨の日は結構大きな声を出して歌う。

雨の音で僕の声が回りの人に聞こえないからだ。

僕は結構歌を口ずせるのが好きだ。

小学校の時、お遣いでよく歌を口ずさんでいると、八百屋のおじさんが

「よお、つまいねえ」

なんて言つてきたりしたので、それから一応回りを気にしながら歌を口ずせる。

それでも時々自分だけの世界に入つて歩いている時、知らない間に大きな声を出して歌を歌うことがあり、そういう時は必ず近くにいた人が妙な顔をするので、その顔を見ると少しづつ声を小さくしていいく。

でも雨の日は僕の歌う声が回りに聞こえる心配はないので、思いつ切り歌うことが出来るから、それだけは雨の日の新聞配達で唯一の楽しみである。

雨はやまず、日も陰ってきたので、辺りはかなり暗くなってきた。

僕は新聞配達のために配達所に向かっている。

配達所は三島の駅の近くで、石山の家が近くにある。あるはずであると云つのは、実は石山から「駅のまつだ」とは聞いたことがあるが、ちやんと聞いたことはないからだ。

そのため配達所に新聞を取りに行く時、いつも石山の姿を探していたが、今まで石山と会ったことはない。

僕は親友になつた友達の家にまじゅつあひ遊びに行く。小学校の時のヤマの家ではお前に出前の「うどん」を貰うのが、出前の「うどん」のつゆの匂い。小学校の時に「うどん」と「うどん」の匂いが、あの匂いは自分の家で作る「うどん」は絶対にないおこじこ匂いである。

僕の家ではまず出前の「うどん」なんて食べられない。

僕の記憶ではヤマの家で食べたのがきっと初めてである。ヤマ以外にもチンチンと小学校の時仲がよかつたが当然チンチンの家にもしおつちゅう遊びに行き、時々おやつのケーキを食べさせてもらつた。

中学一年の時は加山の家にしおつちゅう遊びに行き、加山のおばあちゃんが時々だんじやおねぎを、「これ、食べな」と叫びて出してくれた。

まあ、だんじやおねぎも家でも時々食べる事が出来たので物凄く嬉しいとは思わなかつたがそこそこ嬉しかつた。

小泉の家だつてよく遊びに行く。

ちょっと遅くなると小泉のお母さんがきまつて、

「川上君も一緒に食べていきなさい」

と言つので、夕食を何回も食べたものだ。

でも石山の家には遊びに行つたことはない。石山から一度も、

「俺の家に遊びに来いよ」

と言われたことがないからだ。

石山が一度でも学校を休めば学校からの報告書などを持つて石山の家を訪ねることも出来るが、石山は一度も学校を休んだことがなかつた。

三島から電車を使って遊びに行つた時、帰りはいつも駅前で、

「じやあな」

と言つて別れ、石山は細い路地に消える。

細い路地に入つていけば石山に偶然会つ確率は高い。

しかし、今までに細い路地に入つたことはない。

なぜなら、その細い路地の先は、いかがわしい店が何件か並び、奥にはやぐざの親分の家があると言われているから、危ないから絶対行つてはいけないと周りから注意されていたのだ。

と言つより、この辺に住む者にとつては路地の先に行かないことは常識であった。

石山がその路地に入つて行くといふことは、いかがわしいところと関係があるのかもしれないと思ひ、三島で別れるとき、

「家はどの辺なんだ」

と石山に聞くことはできなかつた。

今日は思い切つてその路地に入らうと思つた。

こぎとなつたら、思いつきり自転車のペダルを漕いで逃げれば良い。

細い路地は突き当たりに見えるが右にカーブしていた。

カーブを超えると派手なネオンが店いっぱいについている『ランデブー』と言う店があった。

3階建てのビルで、その『ランデブー』は良く見ると2階にあるみたいだ。

隣の店もなんだか怪しい雰囲気を漂わす派手な店だ。一応バーみたいだが、看板の名前が難しくて読めない。

その隣に少し大きな家がある。

これが噂のやぐざの親分の家だらう。立派な門構えで、家は庭の奥に建てられている。

自転車でその家を通り過ぎる瞬間、石山がその家の玄関を出て行くのが見えた。

石山は僕には気づかない。

急いで僕は道を曲がり、そこで自転車を降り、そつと壁から石山の家をのぞいた。

「てめえなんか、息子とは思わない出でいけ」と言う怒声とともに石山が道路に投げ出された。

「あー、出でいくよ」

石山は玄関に向かつて大声を出す。

投げ出されたとき石山は倒れてしまった。

道路は舗装されていない。

石山はゆっくり起き上ると、服の泥をはたき、歩きだし、家の横の駐車場に置いてある自転車に手をかけた。

雨が容赦なく石山に当たる。

石山はカツパも着ていなければ傘もさしていない。

僕は見つからないように壁にぴたりと身体をつけた。

石山は静かに自転車に乗るとペダルを漕ぎ出した。

僕もそっとペダルを踏むと石山の後に自転車をつけ、石山の後を追つた。

最初は石山の自転車に追い付く、

「石山、どうしたんだ？」

と聞くつもりだったが、僕の前を通り過ぎた時石山の顔がよく見え、その顔が何か泣いているようにも見えたのが気になつて、追い付くために力強くペダルを踏む気にならなかつた。

雨が降っているため視界が極端に悪くなる。

そのため僕が石山の後ろを走っているなんて石山は全く気付かない。

もし雨が降つていなかつたら、ずっと後をつけている僕の自転車に絶対気付くだろう。

信号で止まっている時も、後ろの僕に気付く素振りもない。といつぱり一度も後ろを振り向かないから気付く訳がない。

石山が後ろを振り向き、僕に気付けば、

「いや、さつき石山を見つけて追いかけて来たんだよ」

と、言つつもりだったが、そのセリフを言つ必要が全く無かつた。

石山は真っ直ぐバス通りを川崎方面に走る。

どこに行くのだろうか、途中で引き返してもいいのだが、石山が心配でそのまま後をつける。

バス停を三つ過ぎると変則的な十字路があり、左へ曲がれば南武線の清水駅の方、真っ直ぐ行けば加瀬山、右にいけばバス通りで、川崎方面に向かう。

石山は右に曲がった。この十字路から先はよっぽどのことがない限り行くことはない。

なぜなら僕達上原中学校の学区内はここ今までだからだ。

ここから先はよその町、知り合いは誰もいなく、ただバスに乗つた時通る場所でバスからでしかこの町の風景は見ない。

石山は止まる素振りを見せせず、ただ真っ直ぐ進む。

さつき石山を突き飛ばしたのは、きっと石山の父親だらう。もしかしたらやぐやの親分だ。

父親とケンカし、家にいられなくなつて仕方なく自転車で適当に走りまわっているのだろう、と僕は考えた。

家に戻りたくないなら偶然会つたふりをして僕の家に連れてきてもいいと僕は考えたが、こんな僕達の縄張りでないところを走つたら偶然を裝つて石山に声を掛けることは出来ない。

## 追跡

仕方がないので僕達の縄張りに着くまで石山の後を付けて行こうと思つた。

石山もこんなところまで来てしまつたが、さつと突き当たりの信号のところで右に曲がつて中原街道までくると思つ。

中原街道な、

「今、小泉のところへいたんだよ、  
といひとも言ふ。

といひが石山は突き当たりの信号を左に曲がつてしまつた。

『いいつ川崎駅まで行くつもりなのか  
と僕は自分の行く末を心配した。

まだ、夕刊を配つていなかつたら、このまま石山についていて川崎まで行つたら、帰つてこられるのは夜七時を過ぎて配達所の主人はカンカンになるだろ。』

今から急いで戻ればまだどうにかなる。

『どうしよう、どうしよう  
ペダルを踏みながら歎む。

あの信号で引き返そ。』

石山があの信号を越えて真つ直ぐ行つたら僕はあそこでロターンしようと決心したら石山はそこで止まつた。

石山は道路を横切り小さな食堂が二軒並んでゐるところの裏に自

転車をつけた。

僕も自転車を止めじっと見ていると石山が食堂の横にある鉄の外階段を登っている。

バタンとドアの閉まる音がして石山がその建物に入つていった。そしてすぐに手前の一階の明かりがついた。

恐らく石山がつけたのだと思う。

僕も道路を渡り、石山が上がっていった階段のところにへと、その建物の一階はアパートになつていてるらしい。

一階にポストが置いてあり石山と書いてあった。

僕はその場をすぐに離れ今来た道を全速力で戻った。

修学旅行まであと一週間。

教室の中は修学旅行の話題でいっぱいである。

僕と石山は夏休みにキャンプを計画していたが、さすがにもうすぐ修学旅行だと思つと、どうしてもそつちに話題がいく。

あの雨の日の石山の姿は誰にも話していないし、もちろん石山にも話していない。

僕はあの雨の日の翌日、当然石山は学校を休むと思っていたが、いつもの顔で彼は登校してきた。

学校を休めば石山

「どうしたんだよ、カゼでもひいたか？」

と聞けば石山も畠の田の話をするかもしぬなことと思つたが、石山は全くいつもと変わらなかつたので、僕もそのままこした。

それから一々二日も経てばそのことは僕の記憶の片隅に追いやられ、いつもの如きへの学校生活となつた。

## 小泉の幸福

「カワパン、今日家に遊びに来ないか？」  
小泉が突然僕のところに来てそう言った。

小泉が委員長になり、横暴な小泉に変身したのを見て、僕達は裏切りにあつたと思い、あれからずつと小泉には接していなかつた。小泉もそのことを反省して、僕に謝りたいと思い、声を掛けてきたのだと思う。

「ああいいよ、後で、自転車で小泉の家にいくよ」  
僕は軽く返事をした。

小泉の家に遊びにいった後、新聞配達をしなければならないので、自転車は必需品だ。

小泉の家に行くと小泉は二口二口した顔で僕を迎えてくれた。

「カワパン、よく来たな、まあ上がれよ

小泉の家は小さな玄関の先に茶の間があり右に二つ部屋がある。家族は両親に姉弟で五人家族である。小泉は奥の部屋に僕を通した。

六畳ぐらいの小さな部屋に机が一つ置いてある。

小泉の机だが、この部屋が小泉の部屋という訳ではなく、両親の部屋である。

勉強だけこの部屋でするため机が置いてあるのだ。

「カワパン、昨日何があつたと思つ?」  
相変わらず小泉はニコニコしている。

「そんなのわかる訳ないだろ?。俺は小泉じゃないんだから

「カワパンが俺の訳ないだろ、何言ってんだよ」

ちょっと怒った顔をする小泉。

小泉は石山と違ひ冗談が通じにくい。

しかし怒った顔は一瞬ですぐにニコニコ顔に変わる。

「何があつたんだよ?」

という僕の質問に小泉はニコニコしていた顔をますます崩した。

「昨日よ、バスケットの女子部員が来たんだよ」「ふーん」

僕は気のない返事をしたが、小泉は僕の反応など全然気にせず自分がしゃべりたいことを早くしゃべろうとしている。

「誰が來たと思う?」

『だから俺は小泉じゃないんだからわからなによ』  
とまた言いたかったが、きっと同じ返事がくると思い「わからない。」  
と単純に答えた。

「立花と茅野それに木村と久保田だよ」「ふーん」

再び僕は氣のない返事をしたが小泉も再び僕の反応を氣にせず言葉を続けた。

「それでみんなでトランプをしたんだ」「何の?」

「それはどうでもいいんだよ。それでな、負けた奴が好きな奴を告白しようつてことになつたんだ」

「あつ、わかった、ばばぬきだ。トランプつていうとすぐみんなあれをやるんだ」

「そうだよ、ばばぬきだよ。でもそんなのはどうでもいいんだよ。要は負けた奴は立花だったといつことなんだよ」

小泉は本当に友達の付き合い方を知らない。

僕は当然小泉が学級委員長のことで謝るために呼んだと思い、小泉の家にきたのに、小泉は全然そんな話をしようと思はず、昨日来た女子の子達の自慢話をしようとしている。

学級委員長を小泉がやる前だったら僕も素直に小泉の話にのり一緒になつて、

「女の子が小泉の家に来たのか、すげえなあ

ぐらうと言つたと思うが、小泉が委員長になり僕達に物凄い権力を振りかざし、特に僕にはことあることに注意をしたのを、僕がとても嫌な思いをしたところとをよくわかつっていたはずだ。

だから小泉が委員長でなくなつた時も僕達は小泉を相手にしない  
いた。

小泉も僕達のところには来辛く、全くそばに近寄らず川田の方に  
ばかりいつていた。

だから当然小泉は僕達に引け目を感じていたはずだし、僕達が怒  
つっていたことも知つていたはずだ。

だから友達関係を修復したいのならまずそのことをはっきりさせ  
なくてはいけないのに、そのことは関係ない話をしようとしている。  
る。

僕が話にのらないんだからその辺を察すればいいのに僕の態度な  
んか全くお構いなしに自分の話をしようとしているのだから、本当  
にこいつは友達の付きあい方を知らない。

## 小泉の姉のシニーズ姿

「立花はさ、最初なかなか好きな奴を言おうとしないんだ。そこで木村なんかが、じゃあ10人名前をあげてつていうのさ。つまり10人、まあ立花がいいと思っている男をあげろつていうことわ。

まず川田の名前があがつて次に加山、フカヒレ、それに俺。  
ウヒヒヒヒヒ

『おまえはばかか、立花が好きなのは横山に決まってるじゃないか、小泉には言つてないけど俺と石山は一人がデートしているところ見てるんだよ』

と言いたかつたが黙つていた。

「カワパン、お前の名前もでたぞ、良かつたな」

『ばか言つてんじやないよ』

と思つたが黙つていた。

「あとバスケットの川村と風間、神田あとはえーとそういうホゾそれに…」

「横山だろ」

「まあな」

小泉は嫌そうな顔をした。

「まあいいんだよ、それは。

そしてな、次にその10人を4人に絞るうつといふことになり、そ

の10人の中でも特にいいと思っている男を4人選べっていうことになつたんだ。

その4人が加山と、カワパン、お前も入つてたんだぞ、嬉しいだろ。

ベスト4だぞ。

そして俺、ウヒヒヒヒ

小泉は思い出し笑いをしたらしく嬉しくて仕方ないという顔を僕に見せた。

『この野郎は立花の選んだベスト4に選ばれてこれだけ嬉しそうな顔を出来るのかおめでたい奴だ』

「まあ、あと横山」

表情が一変する、

『こいつの顔の構造はどうなつてんだ』

ガラツ

いきなり隣の部屋の仕切りとなつているふすまが開いた。

「あら、川上君來てたの」

驚いた女性の声と驚いた僕の顔。

小泉の姉さん代志子だ。

なぜ驚いたかといふと、小泉の姉さんはシミーズ姿だったからだ。

僕が中学1年の時、小泉の姉さんは学校一のマドンナと言われた

程の美人であった。

色白でタレントの真理アンヌに似ている顔はちょっとハーフみたいであった。

小泉も姉に似てかわいい顔をしているが、背が低いのと頭がそれほど良くないのが災いしてクラスではそれほど人気がない。

ただ女には愛想がよいのでまあまあの人気はあるようだ。

だから小泉が委員長になつた時、男は全員大ブーイングであったが、女は結構役にたつ小間使いぐらいに思つていたみたいであった。僕は小泉の家に遊びにいくと、小泉の姉さんともよく会つたので、まあまあ仲がよい。

小泉の家は台所と茶の間を除くと部屋が一つしかないが、僕がいくと茶の間ではなく手前の部屋にたいてい案内される。

その部屋で遊んでいると小泉の姉さんが帰つてきて僕達は茶の間に移るということがある。

なぜ茶の間に移るかというと着替えるからだ。  
着替えが終わると再び僕達は手前の部屋に移る。

今日僕達は奥の部屋について話に夢中になつたため、小泉の姉さんが帰つて来たのに気付かなかつた。

小泉の姉さんは小泉の母とおしゃべりしながら着替えをしていて僕達の声に気付かなかつたみたいだ。

「よしちゃん、みつともない姿で、早くせつこうしてくれよ」

偉そうな小泉の声によしちゃんは笑いながら、

「わかつた、わかつた。川上君あんまりこいつちばかり見ないで」と僕に微笑みかけた。

よしちゃんにやう言われ、僕は慌ててよしちゃんから視線を外した時、ふすまの閉まる音がした。

「全くしょうがないなあ。それでどままで話したっけ」

僕の頭の中はよしちゃんのシミーズ姿で占められ小泉の話なんかじうでもよかつたが、そんな僕の心理を知られると恥ずかしいのでわざと明るい声で、

「立花の好きな男ベスト4」と言った。

## 小泉を選んだ立花

「そりやう、それでいよいよ一人に絞られたんだ。誰だと想つ?」

「うーん、まず横山だろ?。それに加山だな」

よしちゃんのことがあったので僕は小泉の話しこわざと乗つている声をだした。

「加山は違うんだな。もちろんカワパンでもない。俺なんだよ、ウヒヒヒヒヒ」

まあ、立花も小泉の家に遊びに来たんだからサービスで加山ではなく小泉の名前をあげるだろ?なあ。

「そうか、よかつたじやないか」

まだまだ僕の声はのつている声だ。

よしちゃんのスリップ姿の後遺症は抜けていない。

「それでよ、とうとう最後の一人を立花が告白するといつ」と云なつたんだ。カワパン、ウヒヒヒヒヒ

『最後の一人は横山だろ?』

なんで小泉は嬉しそうな顔をしているんだ。  
本当にこいつの頭の中はわからん』

「どっちだと想つ。カワパン、ウヒヒヒヒヒ

「そりゃ、横山だろ」

僕は多摩川園での一人のデートを思い出した。

「違うんだよ、俺なんだよ。

ウイヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

びっくりした。

横山と立花のデート現場を見てからまだ一週間しか経つてないのだ。

僕は水口が好きだったが、告白したらその気持ちはなくなってしまった。

立花も横山を好きだったけど、デートしてみたら熱が冷めて好きな気持ちは消えたのだろうか。

僕がびっくりして無言でいると、

「どうしたんだよ、カワパン。

驚いた。俺も驚いたんだよ。

でな、その後またトランプ、まあばばぬきをやつたんだが、今度は俺が負けちゃったんだ。

それで俺も十人好きな子をあげたんだ

「3年7組のアイドル立花に告白されたら、そりゃあ男として嬉しいだろ。

僕だって立花に告白されたら嬉しいと思つけど、その瞬間困つてしまふだろ。

だって僕は立花を好きじゃないし、小泉も中学1年の時同じクラス

スだつた宮城小学校のアイドルの一人柴崎を好きだから同じだろう  
と思い、少し小泉に同情した。

「水口、神崎、土屋、立花、木村、久保田、茅野、川口、吉田、  
片岡の10人だよ」

水口、神崎、土屋、立花以外は女子バスケット部員なので僕はよ  
く知らない。

立花が3年7組の男を7人あげたのに、小泉は3年7組の女は  
4人であった。

その4人はクラスの中心的な女達で、頭が良く、明るい、そして  
運動神経の良い三拍子揃つた女達ばかりであった。

僕だつたら、立花、水口、神崎、土屋は10人の中に入れるとし  
ても、面白くかわいい坂部、おとなしいが頭が良く人を差別しない  
村田、すぐ男言葉を使う寺本、小学校の時仲の良かつた三崎と8人  
は3年7組の女の子を選ぶだろう。

どうせ本命の一人以外は本気ではないのだから、クラスの女の子  
を選ぶのが礼儀じゃないかと思っている。

でも小泉は単純に自分の好みの女の子10人あげたみたいだ。

バスケット部員の中には2年とか1年もいるらしい。  
でも何かおかしい、僕はちょっと考えて、

「小泉、柴崎が入っていないじゃないか」  
と言つた。

小泉は中学2年の3学期にはつきりと僕に

「柴崎が好きだけじ、柴崎は6組だから心配だよ。  
他の男にとられちゃうかな」

なんて言つていたから間違いなく小泉は柴崎を好きなはずだ。

「カワパン、こいつの話してんだよ。柴崎はこいつの昔に好きじゃ  
なくなつてゐるよ」

こいつの昔とこつたつて4～5ヶ月前だぜ」と言つたかつたが、  
「そりなんだ」と口では答えた。

「そりだよ、それでな、次にベスト4を言つことになつたんだ。  
茅野と立花、木村に久保田と俺は言つたら、もう凄く盛り上がつ  
ちゃつてよ。大変だつたよ。

木村なんか自分がベスト4に残つたからもつ喜んぢやつて、田の  
前にいるからお世辞で言つてるのにわかんないのかなあ。  
本当は俺のベスト4にお前が残る訳ないだろ、と俺は言つたかつ  
たけど黙つてたよ。

俺つてフュミニーストだろ?。ウヒヒヒヒヒ

「そしてな、とうとう一人に絞つたんだが、立花と茅野の名前言  
つたら、もう木村なんかがつかりしちやつて。  
あいつ鏡見たことあるのかな。

ベスト2に木村なんか入れたら俺のプライドが無くなつちやうだ  
る。

カワパン、そう思わない?」

『フュミニーストって意味知つてんのかよ。  
お前のプライドつて何だよ』

僕はずつと黙っていたが、小泉は全然気にせずずっと一人で盛り上がり喋り続けていた。

## 小泉絶頂

「そしてひとつ最後の一人を呼ぶ木村達に迫られたんだ。恥ずかしかつたから俺も下に向いやつてさ。

そしたら木村と久保田が早く早くつて急かすんだよな」

茅野は川田が好きなんだから普通に考へると立花の答はもう決まつているようなものだ。

「でも、俺も恥ずかしくつて恥ずかしくつて、でも、ひとつ最後に右手で下を向きながら立花を指差したんだ。

そしたら、もつ盛り上がって盛り上がって大騒ぎだつたよ、ウヒ

ヒヒヒヒヒ

「小泉、立花に先に告白されたら男としてお前もすぐこお前が好きだつて言つべきじゃないのか」

「カワパン、何言つてるんだよ。  
みんながいたんだぜ。

いたいけどおとなしい俺の身になつてみるよ

「でもよつ

と僕が言つたところで、隣からよしちゃんの

「いつもお茶にしない?」

という誘いの言葉がきたので、話はここで終わった。

茶の間での時間、僕はまともによしちゃんの顔が見られずトボツボかり見て、お茶を何杯も飲んだ。

僕の湯呑み茶碗がカラになると、よしちゃんが微笑みながらすぐ注ぐので、顔を上げられない僕はそのお茶を飲むしかなく、注ぐ、飲むの繰り返しが何回も行なわれたのだ。

自転車の帰り道、今日一日のことを冷静に思いだしながらペダルを踏んだ。

よしちゃんは、今、高校一年である。

成熟した下着姿の女性を見たのは、生まれて初めてであった。もちろん映画や雑誌ではある。しかし生で見るのは全然色が違うのだ。シミーズの白が光り輝いて見えた。

その姿はエロティックといつより神々しい姿であり体育館の中を、メガネをかけてみた時もそれは感じたのだが今日は田の前で起こったことであり、体育館よりも何十倍インパクトがあった。そして、それは女神が目の前に下り立つたぐらいの感覚であった。

家に帰る道程の半分くらいはよしちゃんのシミーズ姿を思い浮かべていたが、だんだん小泉の家にきた立花達の不自然さに気が付いてきた。

『最初から立花達は仕組んでたな。トランプやうつとか、バッゲームをしようなんて最初から計画していたことなんだ』

小泉は自然の流れで告白戦になつたと言つていたがそんな訳ない。きっとあの三人が、立花が小泉のことを好きだということを聞い

てこの計画を考えたのだろう。

茅野は立花と一緒にダブルデートをしたぐらいだから茅野が立花からいろいろ相談されていったのだろうなあ。

横山が好きだつたけど、多摩川園での、デートの後、好きではなくなつたと相談し、今は小泉が好きになつたのだけどどうしよう、ときつと言つたのだろう。

茅野もいろいろ関わつてゐる関係上なんとかしなくてはと考え、木村や久保田に相談したのだと思う。

小泉や茅野達は野球部とバスケット部でよく交流をしていたから小泉の立花に対する気持ちを見ていてわかつたのだろう。

両想いなら告白<sup>じつけ</sup>こをすればいいと作戦を立てたんだ。家に着く頃にはこいつ結論がでていた。

僕は自分から水口に告白した。

小泉は立花の方から告白されてから実は自分もと告白した。

絶対僕の方が男らしいと思つただが小泉の方が物凄く羨ましい。

僕の頭の中から今日のことと小泉の横暴な委員長のことは消えていた。

## 寺本への誘い

六月初めていよいよ中学生生活最大のイベント修学旅行である。

僕と石山は夏のキャンプが最大のイベントだと考えているが、クラスのみんなは違う。

修学旅行が最高のイベントなのである。

修学旅行では斑で行動することになったので、僕、石山、草津それに女子の寺本、野口が一緒に行動することになった。

僕は修学旅行に行く前に斑の結束を高めようと斑のみんなでおやつを買いに行こうと提案した。

「おひるんと石山はすぐその案にのつたが草津は、  
「子供じゃないんだぜ、おやつ買ひべりこ自分で買つよ」と賛成しなかった。

寺本は沈んだ顔をして  
「ちよつと考えさせて」と言ったから、

「わかった。行くのは今度の日曜日。嫌な奴は来なくていいよ」とちよつと怒った声をだしてしまった。

放課後、石山に僕は愚痴を言った。

「お菓子を買ひこないことが田舎じゃない、班の結束を強くする

「…」とが目的なのになんでみんな賛成しないんだ

カバンに教科書を詰め込みながら僕が怒った声を出すと、

「まあまあカワパン、草津の言つ通り俺達はもつ子供じゃないんだからいろんな考え方があつてもしようがないよ」と石山は僕をなだめるように言つた。

しかし僕は納得出来なかつた。教室を出てすぐ、

「誰も行かなかつたら一人で行こう。いいじゃんそれでも」と石山が言つたが、僕は何としても全員参加させてかつた。

野口は寺本が行くと言えば一緒に行くと言つだらう。

野口と寺本が行くとなつたら草津もぶつぶつ言いながら一緒に行くはずだ。

問題は寺本だな。  
僕の結論がでた。  
寺本を説得すればいいのだ。

今日これから寺本の家に行つて寺本を説得しよう。そう心に決めたら、なにか心が晴れ晴れしてきた。

寺本の家は本月4丁目で小泉の方だ。  
住所はガリ版ですつたわら半紙を見ればわかる。

僕は結構住所から家を探すのが得意である。

特に本月は宮城と違ひ新しい町なので、番地がきつちじと四角整

理されているから、電信棒に書いてある住所を見ながら簡単に探すことが出来る。

案の定寺本の家を見つけるのに大した時間はとらなかつた。

寺本の家はすぐ見つけることが出来たが、家を見つけた時僕はがく然となってしまった。

寺本の家は十軒位同じ家が縦横同じくらいに並んでいる集合住宅といつよりバラックが集まつた家といつよつな感じであった。

家は全て平家で一軒に一つ玄関があるから一家族住んでいいるのだる。

終戦直後バラックの家がいくつも集まつているといふがテレビのドラマにでてくるが、そんな感じである。

家と家の間にある道は水はけが悪いのか泥だらけである。まるで白黒の黒澤映画のようだ。

突然、僕は寺本の制服姿を思い出した。  
青のブレザーである。

「寺本の制服、セーラー服じゃないな

僕が石山に言つと

「あー前の学校の制服だる。

一年の時横山も私立のブレザーとかいつやつ着ていたぜ」

「ふうん、セーラー服よりあつちの方が都会的だから着てるのか

な？　寺本に聞いてみるか

「カワパン、そういうの訊くのよせよ。  
人にはいろいろ事情があるのでから」

そんなやり取りをしたのも思いだした。

寺本は石原中学校の制服が買えなかつたのだ。

石山の言つ通り何も聞かなくて良かつたと思うのと同時に  
『なんで石山はそういうことがわかるのだろう』

と思った瞬間、新聞配達所の近くにある石山の家と自転車で追い  
かけて行つたアパートを思いだした。

石山は寺本を同じようななおいを感じるのかかもしれない。  
だから石山は寺本のことが理解できるのかも知れない。

僕が玄関の前で寺本を呼び出して良いか躊躇しているときなり  
引き戸がひかれた。

驚いた顔の寺本の顔。

「やつ、やつのことでもう一度話したいと思つたからきた」  
何かしゃべらなくてはと急いで僕は口を開いた。

「わかった

と寺本は言つて、一度家の中に入り少し経つてからまた出てきた。

「ちよつと向こうに公園があるから  
と言つて僕の前を歩きだした。

公園は「ブランコ」とすべり台があるだけの小さな公園だ。  
寺本はブランコに腰を掛けると、

「うーん、弟と妹がいて日曜日は私が面倒見なくちゃいけないの。  
何とか親に頼んで日曜日行けるようにしようと思つてるんだけど  
……あんまりおやつ買うお金もないから……きっと私が付き合  
つてもみんながつまんないと思つだらうから」  
と下を向きながら僕に説明した。

## みんなでサンマーに

「あー、 そうなの」と僕は言い、そのまま黙ってしまった。

どうも僕の友達は貧乏人が多い。僕の家だって結構な貧乏である。

毎日のお小遣いはもらえないし、正月のお年玉もまわりの友達に比べると半分以下だ。

小学校の卒業写真撮影がある時はわかつっていたから、まわりの友達はずかしくてずっとそこを右手で隠していた。

その日に写真撮影があるのはわかつっていたから、まわりの友達はみんなきれいな服を着て来たのに僕にはそういう服がなかった。

中学に入り、詰め襟の学生服になつた時はこれでみんなと同じ服が着られると安心したものだ。

僕の家はなんて貧乏だと思ったが、小泉の家に行つた時はうすかり貧乏だと思ったし、石川のところなんて金持ちか貧乏かわからぬい感じだし寺本もうちより貧乏だらう。

「俺さあ、寺本と一緒におやつ買いに行きたい。  
別にいくら買うなんてどうでもいいじゃん。  
みんなで行きたいんだよ。  
何も買わなくたっていいんだよ。

買いに行くところだって三島のサンマーでいいんだから、お金も

かからないだろ？

お母さんに話して1時間でも何とかなるんだつたら行こうよ

少し落ち着くとスラスラと僕の口から言葉がでた。  
寺本は僕の言葉が終わると、今まで見せたことのないような嬉しそうな顔をして、

「そうだね。2～3時間なら許してくれるかも。

何とか頼んでみるよ。

明日結果言うからや」

と言いつと、「プラン」を降り家に向かつて歩いて行つた。

「カワパン、ありがとう」

寺本は少し歩いたところで、振り向きそう言いつと、

「あんまり外にいられないから、じゃあね」

と言つて帰つて行つた。

翌日、寺本は3時間なら大丈夫だと言い、野口もそれなら一緒に行く…となつたので草津もしづしづ一緒に行くことに決つた。

サンエーは三島の西側に出来た大きな新しいスーパー・マーケットである。

大きな店といえば川崎とか横浜まで行かなればならなかつたのに三島に造られたときは、大騒ぎである。

新聞の折り込み広告にサンエーのチラシが入つていた時はみんなサンエーに買いに行く。

商店街で買うより全然安いからだ。

僕達がサンマーで買つのは、安ことつともあるが品数が豊富だからである。

三島の駅にみんなで集まりサンマーに向かつ。

駅からサンマーまでは歩いて3分ぐらいだ。  
僕は歩きながらそつと石山に話しかけた。

「石山、いくら持つてきた?」

「学校で決められたのは500円だ。  
だから500円持つてきたよ」

次に草津にもそつと聞いたら、草津も500円だと叫び。  
野口もやつぱり500持つてきていた。

僕は親から500円もらい、新聞配達の給料をひりもらつた時なのでそこから500円持つてきて計1000円持つてきていた。

「石山、その500円俺に渡して

「何でだよ

「500円ずつ全員集めれば2500円になるじゃん。  
2500円でいろいろ買おうぜ。」

その方が種類も増えて楽しめるだ。班で行動するってそういうことじやないか

「なるほど、それは面白いかもな」

意外と石山は簡単に僕の案に賛成してくれた。

石山がグダグダ言うとサンエーに着くまで僕が昨日の夜考えた作戦が上手くいかないから、僕は安心した。

石山さえ賛成すれば草津はぶつぶつ言いつても反対はしないし3人が賛成すれば野口も従う。

サンエーに着いた時、僕は全員を集め石山に言つたことをもう一度みんなの前で言つた。

「みんなが持つて来たお金を全部一緒にして全員でおやつを買つことにしました。

おやつは同じ物をみんなで食べることにすれば、僕達の班の結束が強くなると思います。

会計係は寺本、おやつ保管係は僕と野口がします

僕が一気に言つと寺本が不安そうな顔をしたので、僕は一気に、「お金集めるよ」

と言い石山から順々に金を集め草津、野口、そして僕のお金を全部寺本にみんなに見えないように渡し、

「無くさなようひしゃんと持つてくれよ」と言つた。

寺本は不安そうな顔から困った顔になり何か言おうとしたので、

小声で、

「大丈夫

と寺本に言い、

「ああ、行こぜ」

と大声をだしてサンエーの中に入つていった。

寺本の手には2500円ある。

僕は500円じゃなくて集めた金の中に入れたからだ。

僕達がお菓子を選んでいる時、寺本が小さな声で、「ありがとう」と僕に言った。

## カワパンの読み

僕は昨日、寺本の家に行き、寺本がなぜ前の学校の制服を着ていたのか、また、すぐに男言葉を使つてしまつたことも何となくわかつた。そして、みんなでおやつを買いに行くのをためらつたのも弟や妹の面倒を見るというだけではなく、おやつ代のことを気にしていたのだろうと僕は推測し今日のこの作戦を考えたのだった。もし、僕の読みが外れれば、寺本は泣いて僕を非難するだろう。読みが当たつたとしても、寺本の家を見て寺本に憐れみをかけたという風にとられ、これもやつぱり泣いて非難するかもしれない。

このことは、昨日のうちに覚悟を決めた。

人は何かをする時に勝負を賭ける時があるのだと昨日僕は一人で盛り上がっていた。とはいっても全て強引にやるつもりはなかつた。三島の駅で石山に会いそこからサンエーまでの間に石山を説得出来なければ諦めるつもりでいた。

石山の家に電話があれば昨日のうちに説得出来たが、石山の家には電話が無い。電話がなくても小泉の家みたいに石山の家に気楽に行けるのであれば、夜遅くても石山の家に行つただろう。でもそれは出来ない。だから今日の一発勝負に賭けたのであった。

僕は約束の時間より20分も早く三島の駅に行つた。石山が早くくれば相談出来るからだ。しかし石山は、「みんな、早いなあ」と言いながら最後にやつてきたので僕は80%以上この作戦は諦めた。ところが上手くいった。次は寺本の反応だ。

僕は班でみんな仲良く楽しみたいと思つてゐる。これは寺本もきっとわかってくれるはずだ。

寺本に同情してゐる訳ではない。いや、本当は同情してゐる。でもそれは決して僕が寺本より高い位置について同情してゐる訳ではない。そういう微妙な僕の気持ちを寺本なりきっと僕はわかつてくれると信じた。

寺本は頭がいい。それは、学校の成績のこともあるが人の話を素速く理解出来るということも頭の良い基準だ。

僕が冗談を言つとすぐに笑つたり突つ込みを入れたり出来るのも頭の良さの基準である。

3年7組でそういう頭の良い感性を持つてるのは寺本と石山だけで、他の生徒はちょっと感性が違つた。

学校の成績なら頭のいい奴は沢山いるが、人の話の理解力や判断力をもつている奴は少ない。

石山と寺本は数少ない両方を持ち合わせた人間である、と僕は思つていてる。だから寺本は僕の気持ちを理解してくれるはずだと僕は確信していた。

寺本の「ありがとう」と言つ言葉を聞いた時、僕の確信が当たつたことを意味していたので心中で「よし！」と叫んでいた。もちろん表面上はお菓子を選んで嬉しそうな顔をしているカワパンの姿を見せてる。

「音の速さは一秒間に大体340m、時速に直すと1200~1300km位か？そんなに速く走れる乗り物は、今の地球上ではロケットとか戦闘機ぐらいだろう。だから、戦闘機の速さでマッハという言葉が出てくる。

マッハは音速のことだ、音の速さのことだ。『こだま』は音の速さのことだらう？？ここにことは、新幹線『こだま』は1000km以上上のスピードを出すように思えるが、もちろんそんなことはない。

あくまでもイメージだ。そんなことをいつたら光は一秒間に地球を7周半だから、新幹線『ひかり』は一瞬のうちに世界中のどこにでも行けることになる。

新幹線の走る前の特急の名前は『つばめ』だからイメージだけは随分速くなつた。実際、特急と新幹線では2倍位速さが違うのだから、それぐらいイメージとしては違うかもしれない。

それでも『こだま』と『ひかり』では全然速さが違うと思つが、音の速さと光の速さは太陽と月の関係のように対のものだから問題はないだろう。

雷が光つて少し経つてから轟音が聞こえるなんて、まさに光と音が対になつていることを表している。

この世界で光よりも速いものはないのだから、今の新幹線より速い列車が将来出来たら名前はどうするのだろう。

光より速いものがあえて言つならタイムマシンだからタイムマシンとつけるのだろうか

なんて話を、修学旅行で僕達が新幹線に乗るといつじで誰かが話していた。

僕達の修学旅行は新横浜から新幹線『こだま』に乗る。

東京から乗れれば『ひかり』に乗れるのに、と細井は格好つけて

言つていたが、僕はひかりでもこだまでもどっちでもいい。新幹線に乗れるということが嬉しい。

何しろ僕が家族で初めて新幹線に乗るのだから家族にも鼻が高いし自慢もある。きっとお母ちゃんは周りの人に「息子が今度新幹線に乗るんですよ」と自慢して歩くだろう。それほど今回の修学旅行で新幹線に乗るということはポイントが高いのである。

新横浜には三島から菊名に行き、そこで乗り換えればすぐに着く。周りはみんな原っぱで、大きな道が碁盤の目のように駅前から中原街道まで続いているのだけがよく目立つ。

長兄が「こんな所に駅を作つたってしようがないだろ。新幹線の駅が出来たからここは坪50万もするんだぞ。高くて誰も買わないからここはずっと原っぱだよ」と言つていたが確かにこの風景を見ると納得してしまう。

新幹線の駅前は大広場となつてている。

『集まつてる、集まつてる』3年生全員だから300人近くの生徒が来ているはずだ。これだけいると7組の生徒をすぐ見つけることは難しい。

兄から借りたボストンバッグはパンパンで凄く重たい。

パンパンなのは僕達の班のおやつの半分が入つていてるからで、重いのは米が9合もボストンバックに入つているからだ。

米は京都で泊る旅館に渡すので、旅館までずつと持つていかなくてはならない。

「カワパン、こつちだ」

フカヒレの声がする。

フカヒレは7組の生徒を一ヶ所に集めようと歩き回つてゐるらしい。学級委員だからしているのかなと思ったが、立花も水口も何もしていないから自ら率先してやつているのだろう。

フカヒレは熊田が転校してきた時、熊田をからかったが、普段は結構面倒見がよい。しかし、人をからかうのは好きで時々それが度を過ぎてしまうことがあるが、クラスメートはそういうフカヒレの

性格をよく知っているので、度が過ぎても「仕方ないな」で終わらせてしまう。

ただ熊田の場合は転校生だったのでケンカになったが今ではもう仲のよい友達になっていた。

## 初めての新幹線

フカヒレの方にいくと、もうクラスの半分位は集まっていた。

「オッス」

照れ臭そうに寺本が声を掛けってきた。

「オッス、石山や草津はまだ来ていない？」

「まだみたい」

石山がいないと何か落ち着かない。言葉も詰まってしまつ。

『早くこいよ』僕はキヨロキヨロしている。落ち着かないのだ。立花が、横山や川田と嬉しそうに話している。これから修学旅行なんだ、誰だつて嬉しそうな顔をするだらう。

目を移動させると小泉が目についた。立花達の方をきつい目をして凝視している。

あいつ、立花達の方に行かないのかな。横山や川田と小泉は同じ班だから近寄つていってもいいのに。

僕がそんな事を思つていると「カワパン、早いな。昨日は嬉しくて眠れなかつたから、早く来たんじゃないのか」と石山がいつの間にか僕の後ろに来て声を掛けてきた。

「ばか言ってんじゃないよ。たかが修学旅行でそんなことある訳ないじやん、子供じゃないんだぞ。そんなこと言つてると俺のバックの中にある物、石山には食わせないぞ」

「きっとねえなあ。カワパン、だからおやつを持つ係になつたのか」

「当たり前だよ。昔から食糧を持ったものが権力を持つことが出来たんだから、おやつが欲しかつたら、石山は俺の家来になるしかないんだぞ」

「カワパンの家来になるなら、俺は野口の家来になる」と石山は言つと、ちょうど来ていた野口のそばに行き、「野口、俺を家来にしてくれ。そして、あの悪いカワパンを退治してくれ」と言つたの

で、野口は面食らつた顔をして何を言つていいのかわからない顔を見せたが、「ばか言つてんじゃないよ」と言ひ野口の言葉でこの寸劇はすぐに幕を閉じた。

### ヒュー

風のように新幹線ひかりが新横浜の駅を通り過ぎていく。目の前で新幹線を見たのは初めてだし、その速さを目にしたのも初めてだった。

僕の家の一階の窓から新幹線は見えるが、こんな風のような速さではなかつた。確かに他の電車よりは早いが、今通り過ぎた弾丸のような速さとは全く別で身近に見るといろんなに凄いのかと乗る前からワクワクしてきた。

僕達が乗るこだまは、何本か新幹線が新横浜を通り過ぎてからホームに入ってきた。  
一番に入りたかったが、順番に並ばされているのでそろはいかない。

### プシュー

外のドアが自動なのはわかるが、中のドアも自動なのには驚いたというより最先端の列車などと実感した。

広い、きれい。初めて新幹線に乗つた人は必ずそう思つだらう。こんな立派な席に座つていいのかなと僕はちょっと躊躇したが、出川がどかつと座席に腰を降ろし「まあ、いいクッショングだな」と偉そうに言つたので、僕も気が楽になり、座席に座つた。

座席も班で座るようになるから、お馴染みの班のメンバーが同じ並びに座る。

細井が「にこのイス、ま、回るんだぜ。お、俺、前も乗つたから、わ、わかつてんだ」と言い、座席をクルリと回したので僕と石山は大喜びで座席を回し向かい合わせの席を作つた。

「これで班の人間全員が同じ所にいられるな」と僕は満足そうな声をあげた。

「さあ、トランプやろうぜ」

席が向かい合わせになつたので、トランプをやるにはもつてこいである。

最初、班の5人でしていたのが、チンチンや長沢も「まぜてくれ」と入つてくると、次から次へと集まつてきて、気が付いたら10人位でトランプをやつっていて、まだ一緒にやりたいと言つ生徒が周りを取り囲んでいた。

仕方がないので僕は一時離れることにした。

席を離れると、僕達の塊と同じような塊が奥に見える。川田や横山、ホゾにフカヒレ、加山もいるし、熊田もニコニコしながらトランプを握っている。ニコニコしているのは、立花に水口、土屋といった7組のアイドル達がいるからだろう。

## 平凡パンチ

「カワパン、ちょっと」

僕の姿を見つけた小泉が僕の方にやつてきて、そのまま僕の手を引っ張り自動ドアを抜けて洗面所のところへ連れてきた。

「カワパン、頭にきちゃうよ。立花の奴、横山とすーと嬉しそうにしゃべっているんだ」

洗面所に着くなり小泉は僕にぐけっこぼし始めた。

「それが凄く嬉しそうな顔をしちゃってさ。立花は俺を好きだつて言つたんだから、俺と仲良くするべきだろ。昨日も立花に電話したんだよ。その時『俺はずつと見てたのに何で無視するんだよ』って言つたら、『気付かなかつた』って言つんだよ。だから『そんな訳ないだろ。俺のこと氣にしてたらすぐに気付くはずじゃないか』って言つたんだよ。カワパンもそう思うだろ。好きだつたら視線なんかすぐ気付くよな。それなのに立花は『しじうがないでしょ。気付かなかつたんだから』なんて言つんだよ。

信じられるか、それまでは上手くいってたんだよ。毎日お互い電話し合つて、2時間位話し合つたりしていたんだよ。さすがに1時間過ぎるとよしちゃんが『いい加減にしなさい』なんていつも邪魔なこと言つてくるんだ。『毎日学校で会つてゐるんだから、学校で話しなさい』なんて言うんだけど、学校じゃあ話せないから電話で話してるんじゃないか、全くわかつてないよな。

だから凄く俺達上手くいってたんだけどさ、横山の野郎がいけないんだよ、あいつ立花にじょっちゅう話しかけてるじやん。それに立花も微笑みながら応えちゃつてさ。

無視すればいいのに、それが俺に対する礼儀だと思わない。

立花は誰にでもいい顔する淫売だよ。あんな奴だとは思わなかつたな。

「小泉、淫売は言こ過ぎだらう

僕は立花は性格は良いと思っていたので小泉に苦言をした。

「カワパン、良いんだよ、それくらい言つても、でもカワパンが

そう言つうのなら八方美人に変えるよ。

俺は立花が淫売・・・いや、八方美人に見られても仕方ないから、立花に注意しようと電話したのに、あいつ、全然わかつちゃいないんだ。それでな、カワパン、一番頭にきたのは「と、小泉が機関銃のようになだつてた時、石山が「こんなところに一人で来て何やつてんだ。ホモか」と声を掛けてきた。

石山が来なかつたら小泉のお喋りはどこまで続いていたのだろう。もしかして京都まで続いたかも知れない。

石山がくると「じゃあ、またな」と言つて小泉は去つていった。委員長のことがあつてから小泉は石山としゃべるのを苦手としていたので、すぐにいなくなつたのである。

「どうしたんだよ」

「どうしたんだよじやないよ、小泉と仲直りしたのか」「仲直りしたという訳じやないけど何となくな」

「ふーん、まあいいけど、本山が隠れて平凡パンチを見ていたぜ」

「本当かよ。見に行こう、石山」

本山とは3年7組の副担任で、今年上原中学校にやつてきた若い先生二人のうち一人だ。もう一人は小西といい、明るくて、ユーモアがあるので生徒からの評判がすこぶるいい。しかし、本山は暗くて冗談も通じない堅い先生なので全く生徒から人気がなかつた。そんな堅い先生が平凡パンチを見ている。

平凡パンチといえば、Hなグラビア写真が載つているので有名だが、僕はまだ本の中を見たことは一度も無い。

そ一つと本山の近くに行くと確かに手元に平凡パンチが置いてある。

本山がトイレに立つたときに急いで平凡パンチを見ると、そこには裸の女性が…。

石山はすかさず僕達の座席に戻りボストンバックから鉛筆を取り

だすと、すつとんどに戻ってきた。そして、裸の女性の胸に矢印を書き『口見ちゃいやん』と落書きした。

「石山、本山来るぞ」

僕はずっと扉を見張っていたので石山にそう言つと、石山は平凡パンチを元あつたところに戻し、何食わぬ顔をして通路に戻った。

本山は生徒を眺めながら戻ってくる。

僕達は近くの座席に座り、本山の動向を見ていたが本山がグラビアページを見るることはなくそのため石山の落書きに気付くこともなかつたので、がっかりしてしまった。

「本山はむつりすけべだな」石山にひそひそと言つと「あの黒いメガネがすけべを顕してゐるよ。大体メガネを掛けてる奴はすけべが多い。前原もいかにもむつりすけべという顔してゐるじゃないか」僕は体育館の覗きを思い出し「そうだな」と言つて笑つた。

## 修学旅行はカップルばかり

新幹線は確かに速かった。新幹線の中でまだまだ遊びたかったのに、いつのまにか京都に僕達のこだまは到着していた。

京都の駅に着くとそこからは大型バスに乗り換える。

バスはクラスごとだが目的地に着くと他のクラスとも一緒に結構、こつた返し、クラスメートはみんなばらばらになつてしまつ。しかしそんな時こそ班での行動が必要になつてくるのに草津は、「ずっと班のみんなと一緒にいるのはかんべんしてくれよ。集まる時はすぐ来るから、それ以外は好きにさせてくれ」と生意気なことを言つてきた。

「そうすると草津、俺達のお菓子食べられないぞ」

「いいよ、みんなと一緒にいる時食べるから。ずっとみんなと一緒にいないといけないかと思うと息が詰まるから」と言い、片手をポケットに入れてもう一方の手を軽く上げて「じゃあな」と言つて去つていってしまった。

「草津の言つことも一理あるよ。一日中ずっと班のみんなでいなくちゃいけないというのは、確かに肩が凝るよな。

なあ、カワパン、なるべく班で行動するけど、お互いの自由行動は尊重するということはどうかな」と石山が提案したので、僕は寺本に「どう?」って聞いた。

「別にいいわよ」寺本の答えはいつもあっさりしている。

実際、4人とか5人でショッちゅう一緒にいるのは大変だし、面白くもない。

班で行動していると他の生徒と交わるのも難しくなるし、それよりも違うクラスの人間と接することはまず無理になつてしまつ。

僕は水口にふられた後、4組の後藤が好きだと石山に言つた。水口にふられた後、急に後藤が好きになつた訳ではなくむしろ逆で、後藤が好きだつたけど急に水口が好きになつてしまい、後藤はちょ

つと心の隅っこに隠してしまっていただけで、水口のことが好きでもなんでもなくなつた時、再び隠れていた後藤が心の中心に来ただけであつた。

「石山、やっぱり後藤がいいよなあ。」

「カワパンは変わり身が早いなあ、さすが小泉の友達だよ、よく似てる」

「やめてくれよ。俺と小泉じゃあ根本が違うよ」

「同じじだよ同じ。君達は似たものグループだ」と、石山には散々いわれたけど、今の僕の好きな子は後藤だと石山も認識している。

石山は1年の時同じクラスだった富沢が好きだと僕に言った。

二人とも7組の女生徒ではなく他のクラスの女の子が好きなため、

こういう他のクラスの生徒と接する機会は大チャンスなのだ。

実際、野球部のキャプテンの川田はし�ょっちゅう五組の茅野と一緒にいる。

まわりから激しい冷やかしが起つたが、全然そんなことはなかつた。

こういう旅行に出ると学校内とは違い、みんな違う感覚になるのかも知れない。

「川田と茅野、一緒に写真撮つてやるよ」なんて、あの冷やかし大好きなフカヒレが言つたりするんだから驚きだ。

それだけではない。よくまわりを見ると男と女が結構一緒に行動している。

別に班で行動している男女ではなく、気の合つ男女が一緒にいるみたいだ。

小泉のライバル横山と我が7組のアイドル立花が一緒に楽しそうに話しているところも見た。

まわりは立花が小泉に告白したことを知らないから、積極的に二人をくつつけようとしている。

川田なんか一人の写真を撮つてあげてもいる。

川田は茅野から小泉と立花のことを聞いていないのだろうか。知

ついていても川田は横山の味方をしているのかも知れない。

僕はなぜかわからないが、そんな立花を見て物凄く頭にきた。

小泉の言い分が全部正しいとは思わないが、仮にも一人で告白しあつたのなら、お互いの存在を認め合い、こつこつと一人でいるべきだろうと思つた。

実際、川田と茅野はそうしているし、他にも何組かのカップルがそうしている。

僕も出来れば後藤とカップルになりたい…と自由行動の時チョロチョロしたが、後藤を見つけることは出来ない。

一日の大半は団体行動だが、少しは自由な時間があるのでそういう時はしゃかりきにチョロチョロする。

後藤には会えなかつたが、富沢は見つけた

僕は大きな声で「富沢さん」と叫ぶと、石山が「やめろよ」と怒つたような、困つたような顔をして言つた。

富沢は僕の声に気付き僕達の方を見た。「あら」と驚いたような言葉を発したと思う。その声はあまりにも小さかつたので僕達には聞こえなかつた。

富沢は「石山君」とこれは僕達に聞こえる声を出し、手を振つた。石山は軽く手を上げると、僕の服を引っ張りその場をスタスタと去つてしまつた。

「なんだよ、石山。チャンスだつたじゃないか、何で逃げるんだ

よ

「俺はカワパンと違うんだ。別に富沢とどうにかなりたいとも思つてないし、喋りたいとも思つてないんだよ」

石山は少し怒つた声を出した。

「何だよ、それ。よくわからねえ

「いいんだよ、わかんなくても、俺はそうなの。俺、先にバスに行つてるから

石山はスタスタと早足で僕から離れていった。

『なに怒つてんだ』と僕は思いながらゆっくり歩いている。

石山が本気で怒っているとは思えないのに別に気にはしていなかつたが、僕はゆっくりバスに戻ろうと思つていた。

まだ集合時間には十分位時間があるから急いで帰ることはない。すると我が七組のアイドル立花の姿が見えた。どうこう説か一人である。

僕は立花の姿に気付いた瞬間、立花の方に歩いていき、「立花、少しは小泉のことも考えてやれよ」と言つてしまつた。

誰かが立花のそばにいれば、話しあげることはなかつたはずだし、石山が一緒にいれば近くに行くこともなかつたはずだが、二人とも一人でいたのが僕を立花に近づけ、尚かつ小泉のための言葉を立花に投げつけることになつてしまつた。

「何言つてんの」

立花は戸惑つた顔をしている。

「小泉から聞いたよ。立花、小泉のこと好きなんだから、それならもつと小泉のこと考えてあげてもいいじゃないか」

「そんなこと、カワパンに関係ないじやない。」

立花がそう言つたとき、水口の姿が見えたので、素早くその場を去つた。

バスに戻ると、石山が楽しそうにバスガイドのお姉さんと話をしている。

「よつ、カワパン、遅かつたな。後藤いたか」と石山は二二〇一〇した顔で僕に声を掛けってきた。

僕は立花と言い争いをしたために凄く興奮していく石山のジョークに付き合つ余裕はなかつた。

「どうしたの、カワパン。あつわかつた、後藤にふられたんだ。中沢さん、カワパン振られたみたい」

中沢さんはバスガイドの名字である。

僕と石山はバスの席を一番前に取り、しょっちゅうバスガイドの中沢をからかって喜んでいた。まだ、二十才位の中沢もそんな僕達を迷惑がらず結構話にのつてきたりしていた。

## 大浴場の争い

京都の観光巡りはほとんど寺を回る。僕と石山はさつと早足で境内を回ると、いつも一番にバスに戻るので、バスガイドの中沢と話をする機会が多かったのである。

僕は京都の寺は邪宗の寺だと思っていたので、なるべく早く出なければと心の中で題田をあげながら回ったが、石山はなぜかそんな僕に付き合い一緒に早く歩いてくれた。

僕はずっとバスの中で黙っていた。そんな僕の態度に対し石山は『どうしたんだろう、富沢のことで怒っているのかな』という顔をずっとしていたのが、僕にはよく分かった。

僕はバスが走り出し、しばらくして気が落ち着いた時「石山、何でもないよ。ちょっと、カツカすることがあつたんだけど、それは石山とは関係ないことなんだ」と弁解した。

「何だよ。俺と関係ないことって、教えるよ」と石山は言ったが、「ひみつ、ひみつ」と茶化した声を出したまかしたので、石山もそれ以上突っ込むことはなかつた。

僕は反省していた。なんで立花にあんな余計なことを言つてしまつたのだろう。何か言うにしても違う言い方があつただろう。あれは小泉の感情をただ代弁し感情をぶつけただけで、何の問題解決にもならない。

バスの中でチラッと立花を見たら、いつもニコニコしている立花の顔が、口を真一文字に閉じてきつい顔をしていた。けれど、夕食の時にはもういつものニコニコしている立花に戻っていたので、ほつとする僕であった。

京都の旅館は大きく、僕達の上原中学校だけではなく九州の中学校も来ていたが、生徒のガラが悪い。

「わいどま、どつから来たつや？」

ロビーの中で熊田に九州の生徒が強面の声を掛ける。

「川崎だよ、お前らは」

熊田も強面の声をだした。

九州の生徒は川崎という地名を聞いてびくっとした顔をしてそのまま「ふうん」と言って去つていった。

川崎という地名は、地方に不良の町として知れ渡つてている。

夕飯の前は風呂である。旅館の中には百人位入れそうな大浴場があり、それが修学旅行の楽しみの一つである。

ウキウキしながら風呂場に入ると、僕達上原中学校が入る時間なのに、九州の生徒10人位がまだ入つていて、女子風呂を覗いているところを熊田達が目撃した。

初日は5組から7組の生徒が先の時間に入つたので、僕達のクラスが九州の生徒とぶつかつてしまつたのだ。

特に熊田とフカヒレ、川田は「一番風呂に入るんだ」と言って風呂に入つたので、もろに九州の生徒とぶつかつてしまつた。

「お前ら何やつてんだ」熊田が叫ぶ。

「なんや、わいどんがまだ入つてくつとの早かっちやなかつや」

熊田の声に振り向いた男は、さつきロビーで出会つた奴だ。

「ふざけんじやねえよ、早く出ていけ」

熊田も負けていないが、相手はもつと負けてない。10人位がさーっと熊田、フカヒレ、川田の周りを取り囲んだ。

丁度その時、次々と上原中学校の生徒が風呂に入ってきた。僕と石山も何か風呂の中が騒がしいなと思うながら、風呂に入った。

20人以上上原中学校の生徒が入つてきたので、さすがに九州の生徒達も「どけ、どけ」と言いながら、風呂場から出て行こうとした。丁度その時に、脱衣所から風呂場に入つとしていた僕と石山にぶつかつた。

「何だ、あいつら」と僕は言いながら風呂場に入ると、湯船の真ん中で熊田が思いつきりの笑顔を見せているのが見えた。

「熊田凄いよなあ、あいつら追つ払つたぜ」

出川の声がよく響いて聞こえてくる。

熊田の武勇伝は、その日のうちに上原中学校の生徒達全員に知れ渡る。

熊田は3年になつてから転校してきたので、彼を知らない生徒がほとんどのため彼の容姿がかなり美化されて噂された。

## 英雄になつた熊田

夕食の時、女生徒達が僕達のクラスを注目する。噂の主、熊田を探しているのだ。

熊田を知つている男子生徒が熊田を指差すとがっかりする顔とやつぱりなという顔に分かれる。

よその学校の不良が女風呂を覗いたのを、毅然として注意した人物というイメージなら当然カッコイイ一枚目だらう。ところがよその学校の不良とケンカしそうになつたとこことなら熊田はピッタリだ。同じ穴のムジナということだ。とはいっても熊田が注目されているのは事実で、それは当然熊田も意識している。

いつも下品な熊田がとても上品なのだ。

「あ、すまないけれど、そこのしょう油取つてくれませんか、出川君」なんていうんだ。

「出川、そのしょう油取つてくれよ」と、どすのきいた声で頼むところより命令口調でいつもは言ひのと全然違う。

熊田のその態度は次の日の朝食も続いたが、だんだんとこちなくなつていいくのが目に見えてわかり熊田をよく知つている7組の生徒は笑いをこらえるので必死になつた。

背筋をピシッと伸ばし食事をしていたが、だんだん背中が曲がつてくる。曲がつてくるのに気付くと再びピシッと背中を伸ばす。そんなことを何回も繰り返す。

「ご飯を食べるのに口をあまり開けずゆつくり噛み少しづつ胃の中に落していくが、夢中になつてると大口を開け、口をグチャグチャ動かし、お茶をグワッと飲む、そこではつとした顔をし、そつと湯呑みをお膳に置くと、また、ご飯を少し口の中に入れ、ゆっくり噛んでいく。しかし、また、夢中になるとガツガツ食べ、それに気付くといけないという顔をして、おとなしく食べる。

そんな食べ方を3回繰り返した時、さすがに田の前に立てる中山が

くすっと笑つた。するとそれが合図かのように立花が大笑いして、7組の生徒全員が大笑いした。

熊田はきょとんとしている。何でみんなが大笑いしているのだろうとキヨ 口キヨ 口しているが、原因がわからない。すると我が7組のアイドル立花が「熊田君、なに気取つて食べてるのよ、いつものようにガツガツ食べなさいよ」と言つたから、さすがの熊田も状況がわかつたようで顔を真つ赤にし「なにを言つてんだ、いつもの通りだよ」と弁解したが、熊田が口を開くとまたどつと笑い声が部屋いっぱいに広がつた。

「俺はいつもこうだろ」

ど一つという笑い声。

「やめるよ、他のクラスの人間が誤解するだろつ」

ど一つという笑い声。

## 熊田殴られる

京都の名所を廻るのは全てバスで、僕達は点から点へと移動するということになるので、京都の町の概要を掴むことが出来ない。

寺や神社もそれぞれの特徴があり一つ一つみんな違う顔を持つているのだろうが、僕にはみんな同じに見える。なにしろ寺と神社だつて似たようなものだと思つてゐるのだから、両方とも邪宗の建物だ。

前原なんかは「ここが本願寺か、本願寺には東と西があるんだぜ」なんて寺に入る度にうんちくを述べるが、周りにいる生徒は「うんうん」と頷いているが、何にも聞いちゃいない。

女達はおしゃべりに夢中だし、男どもは何かいたずらをしたくてその材料を探すのに夢中だ。

寺の壁にいたずら書き等見つけるともう大変だ。次々、いたずら書きをその壁にする。

いたずら書きといつても『京都つて最高』とか『俺に京都は似合つてるぜ』程度のものだ。

似たような景色を見学してゐたが、清水寺の舞台だけはちょっと感激した。

そりやあ三十三間堂の廊下も、龍安寺の石庭でもそれなりに面白かったが、清水寺の舞台は自然を巻き込んだ景色なので自然の好きな僕はしばらくそこにいた。

石山も僕と同じような感動を覚えたらしく、一人で静かな風に身を置いていた。

もちろん一人だけでここにいるのなら、静かな風に身を置いていたという表現がぴったりかも知れないが、実際は、人、人、人あたりは自然を楽しむ雰囲気ではない。

こういう時はなるべく周りを見ないようにし、目を遠くに向けていればいい。

「おい、わい昨日宿におつた奴やろが。こっち来てんの」  
いい気持ちで風の音に耳を澄ませていたら、ドスのきいた声が聞  
こえてきたので振り返ると、熊田の脅えた顔が見える。そのまま見  
ていると熊田が五人の学生に衿を引っ張られ連れ去られようとして  
いた。

「石山、あれを見るよ」

僕の声に恍惚とした顔を見せていた石山は、ゆっくり首を動かす  
ときつい目をした顔になつた。

熊田と五人の男はゆっくり人込みを離れていく。知らない人間が  
見たら仲の良い六人グループに見えるかも知れない。

『何で熊田は一人だつたんだろう』と思いながら、僕と石山は6  
人の後を付けていった。少し歩くと木がうつそうと生えている場所  
に着いた。

遠くに人の声はあるが見回した限りでは人はいない。5人の生徒  
に気付かれないよう、そつと僕と石山は近くに行く。

「おい、昨日はがらい恥じばかかせてくれたね。わい、英雄にな  
つたつげなね」

同じ旅館に泊つたが食事する場所は違つたので、あれからあの九  
州の学校の生徒と一緒にすることはなかつた。しかし、同じ旅館の  
中だ。噂だけは彼らにも聞こえたのかも知れない。しかし、熊田は  
ツイていない。例え噂が彼等に聞こえたとしても、それから出会わ  
なければ何も起こらなかつただろう。

彼らにしてもわざわざ熊田を探して歩き、昨日のおとしまえをつ  
けようとしていた訳でもないだろう。たまたま今日偶然に熊田一人  
でいるところを見つけたので昨日の仕返しをする気になつたのだろう  
と思つう。

「ぼ、僕は別にあなた方に恥をかかそうとは思つていなかつた」

熊田は必死になっている。

「ほー、そぎやんたいね」と昨日熊田とやりあつた男が言うと、  
いきなり肘で熊田の頬を殴つた。

手でひっぱたくとその大きな動作で、ひっぱたかれると予想出来るが、肘の場合は動きが小さく済るので、その動きを予想することは難しい。

後ろに熊田は吹っ飛んだが、周りを囲んでいた男が吹っ飛んできた熊田を支える。

「今なんて言つたつや、よ一聞こえんかつたな。もういつへん言つてんの」

一発殴られ、5人の男が周りを取り囲んでいるので、熊田の顔にはもう戦意が無かつた。

「いえ、別に」

熊田はやつとやう言つと

「いえ別にや？ そいなら、わいは自分が悪かと反省しどうみたいね」

「反省します」

「よし、わかつた。なら慰謝料ばやれ。今持つとつ有り金ば全部やれ」

「え！ そ、それは」と熊田が言つた瞬間、再び肘が飛び熊田はまたまた吹っ飛んでしまった。

僕と石山はもうすぐそばまで来ている。

熊田が吹っ飛んだ瞬間、石山はスパートと5人の男の前に出たが、僕はあつけにとられその場に立ち尽くしてしまった。

5人の男はいきなりの石山の出現に戸惑つているため、後ろにいる僕には全然気付かない。

「てめえら、誰を脅してんだよ」

今まで聞いたことのない石山のドスのきいたヤクザ声に、僕は驚いたが、5人の男も驚いたようだ。

「わい、なんや」と言いながら熊田を肘で殴つた男が石山の前に出ると、石山は田に見えぬ早さで頭を下げるが、そのままその男の腹に頭突きをかました。

不意をつかれたのできれいにその一撃は決まりその男は「うぐ

と言いながら、腹を押さえながらお辞儀をした格好になると、今度は膝でその男の頭を石山は突き上げた。

そのまま後ろに倒れる男。まわりの4人はどうしていいのかわからない顔をしている。おそらくその男が5人のグループの大将なんだろう。大将が倒されたのでどうしていいのかわからなくなつたのだと思われる。

「てめえら、俺らは川崎の上原中だぞ、わかってんのか」再びヤクザ声を張り上げる石山。ただ川崎に強いアクセントを付けた。

川崎と言えば地方には不良の住んでいる土地として有名だ。何やら恐い中学だと、知らない人間には思ふことができるので、確かに恐そうだ。

石山の脅しに明らかに5人の男達は動搖している。

「俺達だつて修学旅行で無益な争いをしたいなんて思つてない。こんな時間はなるべく平和に過ごしたい。でもやるつて言つんだつたらてめえら袋だぞ。後ろを見ろ、てめえらの態度次第では仲間を20人呼ぶことになつてんだ」と石山が僕を指差した。

5人はそれぞれに僕を見る。僕は両手をポケットに入れ、なるべく震えているのがばれないよう、また、顔が引きつっているのがばれないようにした。

「おい、その寝転がってる奴。お前うちのものに一発食らわしだろう。だから俺もお前に一発食らわした。これでチャラだろ」

石山はニヤリと笑つた。

その顔は映画にでてくる石原裕次郎みたいだった。

明らかに石山はこういう場に慣れている。

相手の5人は石山の持つている気に押されたようで「わかつた」と言い、そのままになくなつた。

「熊田、大丈夫か」

石山の呼び掛けに熊田は小さな声で「ああ」と、言った。

「そろそろ集合時間だから行こうぜ」

石山の言葉に僕は「そつだな」と明るく声をだしたが、熊田は何も言わず黙つて歩きだした。

## カツプルからあぶれた熊田

「俺、おやじがヤクザなんだ。だから結構慣れてんだよ、ああいうの」

熊田はさつさと行つてしまつたので、石山と一人でゆっくり歩いている時、石山が僕の方を見ないでボソボソと言つた。

「そうか」石山がやぐさの息子だというのは分かつていた。そうはいつてもヤクザなんて僕は一度も見たことはないし、接したこともない。だから、いきなり石山がヤクザの息子だと言われても、どうしていいのかわからない。僕達一人はそれから何もしゃべらないで夕食まで過ごした。

「石山、おやじと一緒に暮らしているのか

夕食の時、隣の石山にボソボソと聞いた。

雨の日、殴られて家の外に投げ出された石山がずーっと気になつていたので、思いきつて訊いてみてしまった。

石山は、かなりの間を置いてから「どっちとも言えない」と答えた。

「そうか」と、僕は言つと「まあ人生いろいろあるからな。それより熊田を見ろよ。昨日と違つて背中を丸めて飯食つてるぜ。あいつがあんなにショボンとしているの初めて見たよ。あいつ右頬殴られてるからアザ出来るじやん。カッパに何て言つたどう?」と、わざと明るい声をだしたので、ずっと暗かった石山の顔にも明るさが戻ってきた。

「何て言つたんだ?」

「トイレで滑つて便器にぶつかつたつて言つたらしいぞ

「何だよ、もっとましな言い訳すればいいのに、そんなくせこ言い訳しか思い付かなかつたのか」

「うまい、石山。確かに臭いよな。でもなんであいつ殴られたつて言わなかつたんだろ」「

「そりゃあ、あいつにだつてプライドがあるだろう。よその学校の奴にやられたなんてみんなに知れたら、昨日の英雄が今日の弱虫になつてしまふだろう」

「そりゃあそうだな。あいつ、結構カッコマンだしな」

熊田の話をしだしてから、僕と石山は一人で飯を食いながらひそひそ話をずっとしていた。そして、夕食が終わる頃には、いつもの石山とカワパンになつていたのである。

修学旅行も三田目になると自由時間の時男女ペアになつて動いているもの達が多くなつた。

野球部のキャプテン川田と茅野は初日からペアになつっていたが、フカヒレとアイドルグループの一人、土屋もペアで動いている。

加山はベンチで僕を振った水口と話しているし、小泉のライバル横山は相変わらず立花を追いかけている。

委員長のホゾは生徒会書記に当選した神崎と行動を共にすることが多いみたいだが、これは7組の委員長と生徒会役員の関係で一緒に行動しているみたいだ。

驚いたことにめがねの前原が杉山と歩いているのを見てしまった。

「前原は小学校の時から杉山が好きなんだよ」と、石山は一人を見た時言つていたが、僕はそんなこと何にも知らなかつた。

クラスの噂のカツフルに関して僕は全て把握していたと思つていたのに、ショックである。

「昨日、熊田が一人だつたのは、こういうことだつたんだな」

石山が僕におかしそうな顔をして言つてきた。

「あいつ溢れたんだ。溢れたうえに殴られたんじゃあ、踏んだり蹴つたりだな」

熊田は転校してきてから日が浅いが、何人かとは仲良くなつていた。一番仲が良いのは加山とめがねの前原で、その次にフカヒレと委員長のホゾ、それにキャプテン川田と小泉のライバル横山ともまあまあ仲が良い。その仲の良い友達が全員女と一緒にいる時が多くなり、昨日は気が付いたら一人になつていたのだろう。

熊田が殴られた後、僕は熊田に、「なんで、一人でいたんだよ」と訊いたが、熊田は何も説明せず、「別に」と言つただけだが、今その訳がわかつた。僕は熊田の事を笑つていられなかつた。

こういう3年生全員で動いている時こそ4組の後藤に近づくチャンスなのに、彼女を見かけることもここ一日間出来なかつたのだ。

## 後藤を呼び出す

「カワパン、今日は一緒に動こうよ」寺本が声をかけてきた。

「そ、そうだな」と僕は返事をしたが本心は嫌であった。寺本や野口が一緒だと後藤に出会つてもなんにも出来ない。

僕の返事が曖昧なので寺本は嫌な顔をしている。

「カワパンは後藤と仲良くなりたいから一人で行動したいんだよ」石山がニヤニヤ笑いながら言つと、寺本はびっくりした顔をして、「え！ 後藤さん」とびっくりした声を出した。

「寺本、後藤知ってるの」石山の質問に、「だつて、同じクラブだもの」と、寺本は答えた。

僕は一人がアニメーションクラブに入つていたのはよく知つていた。時々寺本と後藤が肩を並べ学校から帰るところを何回も目撃もしていた。

「そうなんだ。それなら寺本、カワパンと後藤の仲を取り持つてやれよ」「別にいいよ、後藤さん呼んでくる」

石山は面白がつて言つていたが、寺本は無表情で喋つていた。

「よせよ、別にいいよ。今日は班で動こう。一日位、班行動しうぜ」

修学旅行は基本的に班行動であつたが、それを守つてている班はない。カッフルで動いている奴もいるが、ほとんどが仲の良い男のグループ、女のグループで動いている。

「カワパン、こんなチャンスないじゃん。寺本と後藤が、仲が良いなんて神様のお導きだよ」

僕も少しチャンスかなと思つた。

「どうするの、カワパン」寺本が怒つた声で僕に聞く。

「どうしようかなー」と僕はへラへラ笑つてゐる。

「わかった、今、後藤さんに話していくる

寺本は明らかに怒っているのだが、いつも男言葉を使っているため怒っている言葉には聞こえず、いつもの男言葉にしか僕には聞こえなかつたので、僕はずーとヘラヘラしていた。

石山が僕を突つつくが、僕は後藤の事で頭が一杯だから気が付かない。

「じゃあ言つてくるから、本当に行くよ」

「寺本やめろよ、冗談だよ」と、僕はヘラヘラしながら言つたが、寺本は踵を返しスタスターと行つてしまつた。

「石山どうしよう。本当に後藤を連れてきたら」

相変わらず、僕はヘラヘラしている。

頭の中では寺本が後藤を連れてきたらどうしよう、僕と石山と寺本と後藤でダブルデートをしてもいいな、なんて考えていた。

「カワパン、寺本怒つてなかつたか」

「なんで」

「いや、何となくいつもと違つような

「寺本はいつもああじやん」

「そうかなあ」

「寺本はいつもああじやん」

5分もすると寺本は本当に後藤を連れてきた。

「じゃあ、上手くやつて。私は野口さんが待つていてるから。じゃ

あね

寺本はそう言つた瞬間、怒つた顔をして僕達の前を逃げるように去つていった。

「俺もちょうど用事があつたんだ」

石山も逃げようとしたが、僕は石山の腕を離さなかつた。

「あの、どういう用事なんですか」

後藤が不安そうに質問する。

「寺本、なんて言つてたの」

後藤のそんな顔を見て石山が聞いた。

「あの、私に用事がある人がいるから来てと言われて」

「そなんだ、用事があるのはカワパンなんだ。俺は関係ないか

「じゃあな」と石山は言つてまた逃げようとしたが、僕は絶対石山の腕を離さなかつた。

「あの、用事つてなんですか?」後藤が僕に聞いてくる。

寺本がいれば「みんなで一緒に行動しない」とも言えるナビ、寺本はさつさといなくなつてしまつた。

最後まで責任持てよと寺本を恨んだが、恨んだだけじゃあ今どうしていいのか結論はでない。

僕がもじもじしていると、「いや、4組に中西つているじゃん。あいつ一年の時の友達なんだけど、おとなしいからちゃんと修学旅行楽しんでるかなって気になっちゃって、どうかな」と石山が訳わからぬ事を言つた。

「まあ、楽しんでいるとは思いますけど、私はよくわからない

「そうか、それなりいんだ。わざわざ悪かったな」

石山がそう言つと、後藤は何がなんだかわからないといつ顔をして去つていつた。

「石山どういう事だよ」

後藤が見えなくなると、石山に僕はちょっと怒つた声で言つた。

「カワパンこそ、後藤を呼んでどうしたかったんだよ。一人で付き合つたかったのか、告白したかったのか、デートしたかったのか水口の時は告白したかったとはつきりしてたじやないか。だけど今回はよくわからないよ」

「それはほら、最初は寺本と石山と僕と後藤でダブルデートするとか…そうじゃないか石山」

「寺本はいなくなつちゃつたじやないか」

「そなんだよ。あいつ何考えてんだか。冷たいよな」

「寺本にダブルデートしようつて、カワパン頼んでないじやないか」

「そういうのは、俺の気持ちを察してわかるものじやない?」

「言わないとわかんないよ。それに寺本はいなくなつちゃつたんだから、カワパンのとる道はデートに誘うが、告白するかどうか

だろ」

「そんな急に心の準備が出来てないよ、わかるだろう、石山」「そりやあいきなりだからな。だから仕切り直しをするために後藤にああ言つたんだ。カワパン、水口の時みたいに自分の気持ちをはつきりさせとけよ」

「だつて、いきなり寺本が後藤を連れてくるなんて思わないじゃん」

石山は、もうわかつたという顔をして「行こう」と言い、歩きだした。

僕は石山の後をちんたら歩き、集合場所の大型バスが何十台も待機している大駐車場に向かつた。

京都には全国から修学旅行にやつてくるし、今の時期は天候が良いため一番修学旅行をする学校が多い。当然、各観光地にはあちこちの中学生が入り交じつて見学している。

大型バスの駐車場にも、5～6校の大型バスが停っているので、大型駐車場には何十台もの大型バスが停つているのだ。

自分達のバスを探すのは結構大変である。いつものバスガイドを見つけると安心するが、今日からはバスガイドが変わるので、それを目印にすることは出来ない。

## 寺本失踪

「上原中学校3年7組の生徒さん」  
バスガイドが旗を持つて僕に聞いてきたので、「そうです」と言  
うと、バスを指差し、「乗って下さい」と言った。石山はもう乗っ  
ている。

「前のバスガイドの方が綺麗だつたな」

石山が笑いながら言うので、「そうだな」と僕は言つたが、声に  
力がない。まだ、後藤のことが尾を引いているからだ。

「みんな揃つたか?」

本山がバスの中に入り声をかける。

「寺本さんがまだ来てません」野口の声が後ろでする。

「おかしいなあ、俺達より先に寺本はバスに行つた筈なのに」  
石山が僕にそう言つたが、近くにいた本山にもその声は届いてい  
る。本山が腕時計を見ながら、「運転手さん、ちょっと待つて下さ  
い」と言つてバス外に降りたが、2~3分も経つと又バスに戻り、  
「寺本来たか」と僕に聞いてきたので、「まだ」と僕は答えた。  
バスに乗つた時は後藤の事で頭がいっぱいだったが、だんだん寺  
本のことが心配になつてきた。

「先生、俺ちょっと見てきます」

「心当たりがあるのか」

「いや、さつきまで一緒だつたので、その辺を見てこようかなと」

「それなら先生も一緒に行く」

僕と本山は、さつき寺本が後藤を連れて來た所に行つたが誰もい  
ない。バスに寺本が来ていますようにと願いながらバスに戻つたが  
石山が「まだ來てないよ」と言つた。

それから十分待つても寺本は來なかつた。

本山が「私がここに残つてますから」とカツパに言い、本山を残  
しバスは出発することになつた。

修学旅行の見学予定は簡単に変える事は出来ない。全て時間が決まっているのだ。

バスの中は始めの5分間位は寺本を心配する声もあつたが、すぐにいつもの「うるさい」バスに戻った。

「クソでもしてるんだろ」熊田の言葉に、「いやだあ、熊田君は」立花が声をあげたが、結構そんなものだうとクラスのほとんどは思っているみたいで、本気に心配しているクラスメートは少ない。僕と石山は同じ班だし、さつきまで一緒にいたのだから、クラスメートとは違はずっと心配していた。

「カワパン、やっぱり寺本がいなくなる時ちょっとおかしかったよ」

石山がそう言つて確かにいつもの寺本とは違っていたかも知れない。

「寺本、今日は一緒に行動しようって言つてたじやん。ここまでの修学旅行そんなに面白くなかったんじゃないのか」

「そうかなあ」

僕は曖昧な返事をしながら寺本の修学旅行を思いだしていた。新幹線の中では楽しそうだった。しかし、その後は普通であった。教室でいつも見せてている態度を寺本はしていた。しかし、いつもの寺本を見るのは食事の時間だけで、自由行動の時は石山といつも一緒にいたので寺本がどこで何をしていたかは全くわからない。

僕と石山はずつとハイテンションで修学旅行を楽しんでいたが、寺本や野口は学校生活そのままを修学旅行にもつてきている。

寺本と野口は、きっと修学旅行の間ずっと一緒に行動していたのだろう。

寺本が話しかけなければ野口はまず自分からは何も話さない。野口が話す時は、寺本が、「あの庭凄かったねえ」と言つと、「そうねえ」というように、ほとんど相槌みたいな言葉しか言わない。そのため寺本もそれ以上その話題を話すことが出来ない。もともと寺本もおとなしいが、野口はもっとおとなしい。

おとなしい子でも、おとなしい子同士集まるとそれなりにお喋りをするのだが、野口は全然そんな事はない。そんな野口だが、寺本は学校にいる時それが性に合つていて野口といふと落ち着くみたいだった。

しかし今は学校じゃない。修学旅行だ。

修学旅行は学校の時と違つてみんな ハイテンションになる。だからカップルが何組も出来るし、喧嘩もある。きっとあちこちで、「君が好きだ」なんて告白している奴も何人もいるに違いない。みんな中学生最大のイベントで、一番の思い出を作りうとしているのだ。

寺本と野口を見ていると、とても一番の思い出を作っている風には見えない。

フカヒレのグループや川田のグループは一番の思い出を、はたから見ても作っているように見える。

優等生グループは修学旅行というアイテムを上手く使っているが、劣等生グループはただ先生の決めたコースを見学するだけが修学旅行となつていて。寺本と野口は劣等生ではないが、おとなしいので劣等生と同じ様な修学旅行なのだ。

僕はかなり反省した。そして、心配した。修学旅行での自由時間の行動は班でするのが決まりだ。それを守っている奴はないが、寺本は班で動きたかったのだと思う。

昼食の時、本山が寺本を連れて食堂に入ってきたので、僕はホッとした。

寺本は神妙な顔をして野口の隣に座ると、野口が「大丈夫?」と聞いてきたので、「うん」とだけ答えると、その後は何も言わなかつた。

午後は自由行動となる所もなく、淡々と旅程をこなしていくが、寺本はずっと口を開かない。寺本が口を開かなければ野口も何も言わないので、どうして寺本が遅ってきたのか理由はわからないままだつた。

「どこ行つてたんだよ?」と僕が聞けばいいのだが、朝あんな別れ方をしたので声を掛けづらい。

寺本が遅ってきた訳は夕食の時わかつた。熊田が先生達のひそひそ話を聞きてきたからだ。

夕食はいつも旅館の大広間で食べる。300人近い生徒と先生が全員一緒に食べる事が出来るよう長長いテーブルが縦に五つくつついていて、それが8列並んでいる。一つのテーブルに向かい合いで16人食事が出来るので、一列80人が食事出来る。

それが8列並んでるので僕達の学校だけでなく、他校の生徒も一緒に食事をとることとなるから、その騒がしさといったら尋常じやない。

通常の座布団より一回り小さい座布団が自分の陣地である。物凄く狭いのでちょっと変な動きをするとすぐ隣の人とぶつかってしまう。

「こ飯は大きなお櫃にたっぷりと入っているので何杯もおかわりは

出来るが、おかわりは自分で盛る。おかわりの『ご飯を盛りにいくときが大変だ。みんなの座っている背中と背中のわずかな隙間を上手く通り抜けなくてはならない。それをするのが嫌なのか、女はまずおかわりをしない。

僕と石山は必ず2回はおかわりするし、大きな黄色いアルミの鍋に入っているみそ汁も1回はおかわりする。

『ご飯を並べる時は旅館の中居さんが何十人もせわしく動き、長いテーブルにががみながら、ご飯やおかずを置いていくが『『いただきます』がこだますると、大広間からはいなくなる。

600人近い人間が一同に食事するのだ。それもうるさい盛りの中学生。もう大広間は訳がわからない状態になつても不思議ではないだろう。そんなに騒がしいのに先生達は何も言わない。先生達だけに特別置かれたとつくりの酒をちびちび飲んで、結構先生同士楽しそうに喋っている。

食事が始まつてすぐに熊田が「寺本、お前間違つて、違う学校のバスに乗っちゃつたんだってな」とクラス全員に聞こえるような声を出した。大広間全体はもう五月蠅いの一言だから、熊田がどんな大きな声を出しても他のクラスにその声が届くことはないのだが、7組の生徒には熊田の声は届いた。

熊田が寺本の来なかつた理由を知つてている。7組のみんなは耳を澄ました。

「お前、ブレザーなんか着てるからだよ」と熊田が言うと、近くにいた中山が「どういうこと?」と聞いたので、熊田は得意満面な顔をして「違う学校に、ブレザーが制服の学校があつたんだよ。このバスに間違つて乗つてしまいバスが走り出してしまつたんだつてさ」と言い、さらに「お前、大体なんでセーラー服を着てこないんだよ。そんなにブレザーを自慢したいのか」と言つたが、寺本は下を向いたまま何も言わなかつた。

「お前のせいでみんな迷惑したんだぞ。ちゃんと謝れよ

熊田はしつこいぐらい寺本のことを罵る。

「30分もみんなの時間を潰したんだ。お前がブレザーなんか着ているからだぞ。みんなに謝るのが筋だる」と熊田が言った時、寺本は小さな声で「みんな、ごめんなさい」と言った。

寺本の謝る切ない声を聞くと、「謝ることなんか無いよ」と僕は大声を出した。

「何を着ようと個人の勝手だろ、熊田がとやかく言つことなんかねえだろ。生徒手帳見てみる、制服のところは学校指定の学生服を着ることと書いてあるが、セーラー服を着るとは書いてないぞ。学校では静文堂がセーラー服を売っているので、いつのまにかセーラー服が学校指定のように思われてているけど、ちゃんとした指定は無いんだよ。だから学生服だつたら問題は無いんだ。

寺本だつてみんなを困らせようとして、わざとよその学校のバスに乗つたんじゃないだろ。間違いだつたんだ。お前は人の間違いを指摘するほど偉いのか。クラスメートならまず寺本の無事を喜ぶのが普通だろ」

自分でも信じられないが言葉がスラスラ出てきた。

「カワパン、寺本のことかばうけど、お前は寺本の何なんだよ」  
僕の言葉に7組の生徒は賛成しているような顔をしたものがほとんどだつたので、形勢が悪くなつたと感じた熊田は話をえてきた。  
僕の答え次第では『カワパンは寺本が好きだからかばうんだ』と言つて、話を僕と寺本の恋愛関係にもつていつて、自分が寺本を非難したことをごまかそうとしているのだと思つ。

「俺と寺本は親友だよ」

とつさに僕はそう答えた。

その答えは熊田の予想外の答えであつたみたいだ。

「な、なんだよ、親友つてお前達男と女じゃないか、男と女に親友なんであるか」

熊田の言葉は、つつかえ、つつかえだ。

「あるよ、ここにあるよ」

「そ、そんなの勘違いだよ」

「勘違いかどうか30年後もつ一度俺にその質問を言えよ。30年後も俺と寺本は親友でいるから、その時はつきりするよ」

「な、なに言つてんだよ、カワパンはな」と熊田が言つた時、石山が「静かにしろよ、今は食事中だろ」と怒鳴つた。

熊田は石山の顔がちゃんと見られない。九州の中学生にやられた時、助けてもらつたからだ。

「わかつた、わかつた、『飯食べよ』と熊田は下を向きながら言い、この件は終わつた。

生徒手帳に学則が書いてあるが、読む生徒はほとんどない。一週間前、石山が『生徒手帳に書いてあること面白いぞ』と言つたので、一緒に隅から隅まで読んだ。その中に服装のことが書いてあり、男子は学校指定の詰め襟の学生服で、女子はセーラー服を着用と書いてあつたが、そこには『基本的には』と書いてあつた。つまり例外を認めるということだろう。

熊田がちゃんと生徒手帳を読んでいたら、やこのところを突つ込まれ、ややこしくなつたが、僕のハッタリが効いたようで無事に済んだ。

静文堂とは学校の隣に店を構えていて、学校で使つものは何でも売つていた。

体操着、帽子、上履き、文房具、パン等、全てこの店でほとんど

の生徒は学校生活の買物をする。

学校の中にも静文堂の小さな売店があり文房具と昼食の菓子パン

がここで売っていた。学校と完全に癒着した店が静文堂である。

翌日は修学旅行最終日だ。僕は石山に今日一日は班全員で行動しよつと提案し、石山も同意したので、寺本と野口に朝一番でそのことを伝えた。

石山は草津にそのことを伝えにいくと「カワパン、草津がぐたぐた言つてたから連れてきたぜ」と、草津の手を引きながら、旅館のロビーに来た。

僕は、草津、石山、寺本、野口の前で「今日は一班全員が一致団結して修学旅行を楽しむことにします」と宣言した。

「別に一致団結はいいんじゃないか」

「石山、何言つてんだよ。一致団結が重要ななんじやないか。寺本そう思つだろ?..」

「うん、思つ」寺本に明るい顔が戻つた。

「草津もそう思つだろ?..」

「くだらない、思う訳ないだろ?..」

「何、思わない?」僕は草津を羽交い絞めにして、石山に「やれ!」と命令したら、草津のお腹や胸を石山は笑いながらくすぐり始めた。

「やめるよ、カワパン。石山もやめる。子供だぞお前ら」

「そうだよ、俺達は子供だ。今日は子供になつたつもりで楽しむんだ。草津も賛成しろ」僕がそう言つと

石山も「そうだ、そうだ」と思いつきりの笑顔を見せて草津をくすぐつた。草津はすぐ降参し「わかった、わかったよ。全くひどい班に入っちゃつたよ」と、ぶつぶつ言つた。

草津はそう言つたが、奴もこの二日間、修学旅行がそんなに面白くなかったはずだ。一人でプラプラしているのを、何回も見ていたから、それは確信出来了。

途中から石山も僕が思つていた事がわかつたみたいで、全面的に僕に合わせてくれた。

5人での行動は特に凄い事件に出会つとか、面白い体験をすると

いう訳ではなかつたが、寺本と野口はずつと楽しそうな顔をしていた。

僕と石山の漫才のような掛けあいに退屈している時間は全く無く、時々出る草津の一人ブツブツもみんなの笑いを誘つた。

「カワパン、今日は良かつたな。修学旅行で一番良かつたよ」  
帰りの夜行列車内で石山はしみじみ言つたが、僕は「そつだな」と答えたが、すぐに遊びに夢中になつた。

夜行列車は四人掛けの対面座席で直角の背もたれだから眠れる訳がない。

トランプやつたり、しりとりやつたりと考えられる遊びは何でもやつた。

夜9時になると明かりが暗くなるが、そんなの何でもない。しかし、さすがに11時を過ぎると寝る者も多くなる。

「カワパン、気付いていたか。あそこに後藤がいるぞ」

石山が指差した方向に確かに目をつぶつて寝ている後藤が見える。遊びに夢中になつていたのと、僕の背中の方にいたから気付かなかつたらしい。

『かわいい』

後藤とは小学校4年の時同じクラスになつたことがある。

おとなしく、まるで若草物語にでてくるベスのようだと僕は中学になつて思った。中学になつて思つたというのは中学になつて若草物語を読んだからである。

若草物語では四姉妹が登場する。四姉妹で主役は次女のジョーだが、僕は身体が弱くやさしいベスが一番好きであった。

そんなベスに似ている後藤を見ていると胸がキュンとなる。

とうとう夜中じゅう一睡もしなかつた。そのツケはすぐにきた。夜行列車が川崎に到着し駅に降りると僕は吐いてしまつたからだ。それでも、家に着きひと眠りして、ご飯は腹いっぱい食べるとすぐに元気になるのだから、若いって素晴らしい。

夜、おみやげに買ったスルメのとっくりをお父ちゃんにあげると

予想以上に嬉しそうな顔をしたが、お母ちゃんにあげたこけしは、「食べ物の方が良かつたよ」であった。

## 次兄の影響

僕の次兄は人と少し違う。

どういう風に違うのかと質問されると説明もできないのだが、自分が凄い人間だと思っているのが強い人間だ。アイデアもたくさん出すし、行動力もある。

次兄が中学生で僕が小学生のとき、近くの製材工場に捨ててある廃材（置いてあるだけなのだが、其の廃材は風呂屋のまきになるので捨てるのと同じだと僕たちは思っている）を拾ってきて二階の天井裏の三角スペースに部屋を作った。

三角スペースは高いところで1メートル20センチくらいしかないから、ほとんどのところで背を伸ばすことができない低い空間であつた。

僕たちの家は5人兄弟、7人家族が住んでいる家だから部屋が狭い。

僕のプライベートスペースは一段ベッドの上のベッドだけであつたから自分の部屋にはとても憧れがあった。

次兄は僕と弟、そして次兄の部屋を其の三角スペースに作り、次兄の部屋は郵便局にした。

部屋といつてもたたみ半畳くらいで座るくらいのスペースしかないのだが僕たちは嬉しかった。

埃は凄かつたけど、そんなこと僕らはちつとも気にならなかつた。

次兄は天井裏に張り巡らせている電気配線から電気を取り電球をつけ三角スペースを明るくし、壁のトタンを切り、窓も作つた。

僕たちの家はノジ板にトタンを貼つてあるだけなので、冬寒く、夏熱い家であつたし、屋根裏はそれが倍化され夏は蒸し風呂のようであつた。

次兄が自分の部屋を郵便局にしたのは切手を売り出すためである。わら半紙に切手の形を書き、其の中にトサの絵を描いて5円切手を

発行するのである。

僕たちはその切手を買わされ、小遣いがなくなるということになる。

切手を貼つて手紙を出すこともでき、ちゃんとポストもある。と言つたつて、屋根裏の部屋間にしか郵便配達はないのだが。

だから1回しか郵便は出さなかつた。

次兄は「記念切手と同じようにこの切手は将来値上がるから使わなくたつていいんだ」と言つてたくさん買わせようとしていた。

『見返り美人』に『ビードロを吹く娘』なんかは高くてコレクションにすることは絶対無理だし、第一次の国立公園シリーズも高くて無理、せいぜい一次の国立公園シリーズが宝物の僕と弟はトサシリーズの値上がりを願つた。

僕たちは頻繁に天井裏の部屋に上がつたので、一度、弟が片足を、屋根裏を渡してある棧から踏み外し天井に大きな穴を開けてしまつた。

僕たちは紙を貼つて何食わぬ顔をしてごまかし、数日は怒られるだらうとドキドキして過ごしたが不思議と何も言われなかつた。

僕たちが小学生低学年のとき、次兄はよく湘南富岡に潮干狩りにもつれて行つてくれた。といつても僕たちは小学生以下の振りをして電車賃は払わないで行つたのでお金はかからない。

親から僕たちを連れて行くからとお金をせしめ、それは全て次兄の懐に入るから弟思いで連れて行つてくれているわけではない。

一度デパートのレストランでラーメンを食べたくて、次兄がラーメンを一杯注文し、半分食べて、レストランの外にいた私を手招きし、僕が入ると（腰を落とし店の人を見つからないように入つた）次兄は去り、僕が半分食べると今度は弟と代わりラーメン一杯を皆で食べたことがある。

とてもドキドキして食べたけど其のラーメンは凄く美味しかつた。

僕たちの親はどこにも連れて行つてくれたことはないので長兄や次兄が遊びに連れて行つてくれただけであつた。だから両兄の影響

は  
大  
き  
い  
。

## キャンプが中止になつた理由

長兄は僕に漫画と花札、ポーカー・麻雀を教えてくれ、僕を遊び人に仕立てた張本人で、次兄は発想の違うやり方を教えてくれた。其の発想の違う例が夏休みの宿題で、次兄が中学生のとき岩石標本を夏休みの宿題で出し、かなりの評価を得たのである。

虫の標本、貝の標本は誰でもするが、岩石の標本なんて聞いたことがなかつた。珍しい発想だから評価も大きかつたのだと思う。だから、僕もいつか中学生になつたら岩石標本を夏休みの宿題で提出しようと考えていた。

岩石標本のことの中2年の夏休みに入ったとき加山に話したら、「カワパン、俺、夏休みの宿題何も考えていらないから岩石標本を俺がやつていいか、俺、今回はどうしてもいいものを提出したいんだ」と聞いてきた。

僕は3年になつたらやろうと思っていたので「いいよ」と答えた。しばらくして加山から「カワパンキャンプ行けなくなつた」と電話があつた。理由を聞くと「岩石拾いに行くから」と言つ。

「別に岩石拾いなんていつでもできるじゃあないか、何でキャンプの日に岩石拾いに行くんだ」と語氣を強めて僕は言つた。

「いや今年の夏は色々前から予定が決まつていて、もうそのときくらいしか自由な時間がないんだ。悪いなあ、みんなで楽しんできてくれよ」と言うのでそれ以上は説得をあきらめた。

加山が行けなくなり僕はキャンプが急につまらないようを感じてしまつていた。

中学2年の1学期は石山とも仲良くなり始めた時期だけど、やっぱり加山が一番の親友だつたから、加山のいないキャンプは行く気がなくなつてしまつたのである。

キャンプの三日前、小泉のところに皆が集まり最後の支度確認をする予定だったので、其のときにキャンプは止めにしようと提案し

ようと思つた。

加山が行けなくなつたからと言つ理由だと皆が納得しないだろうから、父が子どもたちだけでは行つては駄目だと言つたから行けないと言おうと考えた。

当日、加山は用事があつて来れないと言つたら皆はそれ以上の理由は聞いてこなかつた。そして父が子どもだけでは駄目だと言つたら、細川と出川も同じことを言いだした。やつらもキャンプには行けないと言つつもりだつたらしい。

石山だけはもう一度両親を説得しようと提案し、最後まで行こうと主張した。小泉はどうちでもいいよという態度だつた。

そこでもう一度両親を説得し、何とか行くよう頑張ろうといつことになつた。

キャンプ前日に最後の決定をすることになつたのだが、キャンプ

前日は朝から嵐で夏の台風が関東を襲い、

明日のキャンプは天候的に無理となつたので、両親の説得はもう問題ではなく、キャンプは中止となつた。

中学1年のときの夏休みは加山の家にかなり遊びに行つたのだが中学2年のときはまったく行かなかつた。

キャンプに行かないと加山が言つたのも行かなかつた理由の一つだが、何度か電話して「遊びに行つていいか」と聞いたとき、「今日はまずいよ」ということが2回あり、それ以上は電話もしなかつたし、加山からの電話もなかつた。

夏休みが終わり、夏休みの宿題に加山は岩石標本を提出し、それがクラスで一番評価を受け、市の展示会に出品されるところまで行つた。

僕はキャンプに加山が行かないと言つたのはまだ許せたが、加山が僕のアイデア（本当は次兄のアイデアだが）で、市の展示会まで行つたのが癪に障つていた。

加山は中学2年生の夏から体つきも人と付き合いも大きく変わつていつた。

身体なんていつぺんに一回りは大きくなつた感じである。

元々大きいほうだつたのに、そこから一回りだから完全に大人の体躯になっている。

夏休みが終わると加山は優等生グループと積極的に付き合うようになつた。

僕は石山と付き合つようになつたから必然的に劣等性グループとの付き合いが多くなる。

加山とは夏休み以降、付き合いがなくなつたというわけではないが、何となくぎこちない付き合いになつていつた。

中学3年になつたとき一番の親友は石山で加山は本当のところは一番にも入つていなかつた。

自分の本心を探れば加山を思う気持ちは強かつたのだが、加山の方で僕を親友とは思つていらないだろうなあと感じていたので、僕から加山に近づこうという行動は取らなかつた。

僕は小学校の付き合いを考えればチンチンもフカヒレもホゾも友人だつたし、中学1年の付き合いなら加山と小泉が友人であつた。でも今は石山だけが一番近い存在で、それは石山も同じで僕が一番近い存在であつた。他の友人は他のグループにも友人を持つていた。だから何かをやるのにも僕と石山は常に一緒だつたが他のメンバーは面白そうな企画なら乗るものもいれば乗らないものもいる。

この夏に企画したキャンプは、僕と石山は主催者だから参加するのは当然であつたが他のメンバーは流動的であつた。そんな状況だから僕が加山を誘わなくても別に誰もおかしいとは思わなかつたのである。

## キャンプの行き先

修学旅行が終わるとクラスの関心事は夏休みの過ごし方だが、まだ一ヶ月先なので本気で計画を練る奴はない。しかし僕と石山は夏休みにキャンプを計画しているので本気で計画を練つている。

一番の問題はどこに行くかだ。

そりやあ北海道とか九州なら最高だろうが現実性がない。現実性のあるところといったら、富士五湖と箱根であろう。

箱根は小学校の林間学校でも行つたし、長兄に何回か連れていつもらつたことがあるから、バス。だから、富士五湖が本命。

富士五湖といつても河口湖、山中湖、西湖、精進湖、本栖湖となり、その全ての湖にキャンプ場はある。ところが僕達はキャンプも目的の一つだが、山登りが一番の目的であった。

富士五湖で登山といえば、富士山である。しかし富士登山は僕達のイメージと違う。

「富士山のまわりにある山に登れ。」そしたら富士山がきれいに見えて最高じゃん」と言う僕の意見で、富士山のまわりの山に登るのが第一本命と決まったが、まだ決定ではない。夏休みは一ヶ月先にあるからまだ時間はある。

行き先の決定はもう少し後にすることにして、山登りの為の装備とかキャンプに必要な物の準備をすることにした。

その全ては登山地図に載つてるので、それを見ながらチェックする。

一番の問題はどこに行くかなら、一番田は誰と行くかだ。

僕と石山、細井、出川は去年の流れから決定している。問題は小泉だ。

小泉も去年のメンバーだったが、委員長のことがあったからキャンプには誘いたくないと、石山、細井、出川は思つてるので、どうしようか悩んでいる。

小泉以外に誘いたい人間がいる。誘いたい人間といつても さんというように、はつきりした人間ではない。はつきりした人間ではないというのは何かというと女だ。とりあえず女なら誰でもいいから誘いたいのである。

後藤や宮沢を誘えれば最高だが、それは現実的ではない。現実的に考えればやつぱり7組の女達だろう。

立花、水口、土屋のアイドルグループを誘い、オッケーしてくれたら最高だろう。坂部、杉山、三崎でもいいし、寺本、野口でもいい。

計画に魅力があれば一緒にくる可能性はある。そのためにも誰もが行きたがる計画を立てなければならぬのだ。

## 加山がライバル

季節は梅雨に入っている。憂うつな口が続くが、空さえ晴れれば、僕達は運動場に出る。最近7組の男子達にはS字という遊びが流行つてゐるためだ。

S字は地面に大きくSの字を白墨で書くが、白墨が無ければ、釘とか棒で書く。8の字なら（丸）が二つ上下に出来るが、S字だと二つだが、端が消える。その消えたところから出入りしてゲームを始める。

二つの にそれぞれ敵味方が入り、 の奥に宝のマークをつけ、それをお互い相手の中に攻め入り、足か手で触れば勝利となる。の中から出る時はケンケンして（片足を上げて歩く）進み、S字の外に四つの を書き、そこに入れば上げた足を着くことが出来るし、四つの のうち二つは中立の で、そこでは争ってはいけない、という遊びである。

僕達のS字は丸く作らず四角く作っている。そして、出入り口は人一人が通れるほどの幅にしている。

僕は攻撃より守りの方が得意である。なぜなら、守りの陣地では守備側の人間は倒れても死んだことにならないが、攻撃側は相手の陣地で倒れると死んだことになる。

僕は足をからませ相手に抱きつきその倒れた力を使い相手を倒すのが得意だから、守りの方が得意なのである。

相手を殺すにはどうしたらいいかといふと、今、説明した通り、自分の陣地で相手を倒すか、S字の外に出す。又は、S字の外でケンケンになっている奴を倒すか、片足以外のところを地面に着かせれば殺せることになる。

ルールは単純だが結構肉弾戦になつて、面白い。

S字が始まるとまず10人以上男は集まる。集まると一番強い奴が、弱い奴を一人決め、そいつが自分のチームにしたい奴をお互い

順番に選んでいって、チームを二つに分ける。

一番強いのは文句無しに加山だ。加山だけには誰もかなわない。

加山が一人で攻めてきた時、最低3人ないと絶対に止めることは出来ない。

一人だと簡単に弾きとばしていく。一度僕は正面から加山を迎えた。足を絡ませて相手に抱きつき自ら倒れて、倒してやれ、といつもの通り上手くやったが、加山は抱きついた僕をそのまま抱きつかせたまま、一直線に宝に向かい、足で踏んで勝負を終わらせた。僕はまるで大木に止まっているセミであった。

だから加山を選ばなかつたチームは、その時のナンバー2とナンバー3を無条件に手に入れることが出来るし、集まつた人数が奇数だつた場合一人多く取ることが出来る。

頭もよく、これだけ強い体躯を持っているのに、加山は7組で目立つ存在ではない。その証拠に学級委員になつたことはない。いつも一番後ろのはじつこが加山の席の指定席になつている。

席係は大抵、石山がやるので「石山、俺の席、いつものところにしてな」といつも加山は石山に頼んでいる。

身長が180センチある加山に頭を下げて頼まれれば断る奴はないし、石山もそうだ。だからいつも加山は教室で一番目立たない席に座る。

ホームルームの討論会でも自分から意見を言つことはなく、授業でも答がわかつてもまず手を上げない。なるべく自ら目立たないようになつて、学校生活を送つているのだ。

僕はそんな加山が好きであつたが中学2年生の夏休みから近づこうとはしていない。でも加山のよさはよく分かっていた。

加山が今一番仲のよいのは、ホゾとフカヒレそれに前原になつていた。そして熊田も最近仲間に加わった。

フカヒレと熊田のケンカを加山が上手くまとめたから、そこから仲良くなつたらしい。

熊田は全ての面で加山には勝てないので加山の前ではおとなしく

しているし、あの凄い鼻息もさせないでいる。  
そんな加山のグループが僕達のグループとライバルになった。

## キャンプの予定

僕達は夏休みのキャンプ地を本命の富士五湖から東伊豆に変更した。女を誘うにはやっぱり海だろう、という単純な理由だ。湖と山より海と山の方が絶対、女達はのつてくれると思った。

東伊豆なら今井浜にキャンプ場があり天城山系の万一郎岳なら山登りとしても面白そうである。

万一郎岳の頂上からちょっと下ったところにキャンプ場があるのも決め手となつた。

初日は海でキャンプをする。昼間スイカ割りをしたり、ビーチボールで遊び、夜は花火をする。これは絶対楽しいだろう。次の日は万一郎岳を登り頂上を極めたら、そこから少し下り、高原のキャンプ場で一泊する。

一泊目は夜に着くから、一泊だと高原を味わえないため、高原では絶対一泊必要だ。

海で楽しく遊び、登山で山の喜びを知り、高原で疲れを癒す。これほど完璧な計画はないだろう。

僕達はこの完璧な計画をよりパーソナライズするために、保護者と一緒に連れて行くことにした。昨年のキャンプが中止になったのは、台風がちょうどその時来たのもあつたが、保護者がいないため、親が反対してだめになつたことになつていてるからだ。最も、本当に保護者がいなくて泊りがけのキャンプを許すのは石山の家くらいなのだ。中学生だけの泊まりのキャンプは、まだ早いというのがどこの家庭でも常識であった。実際、中学2年の夏休みのキャンプのときも親に反対はされていた。

「かわいい子には旅をさせろっていうじゃない」と言つても

「かわいい子じゃない」と言われだし、

「親に迷惑はかけない」と言つても

「行かなければ迷惑を掛けることは絶対ない」と言われてしまつ

たので、お手上げであつた。でも、どんなに反対されても行くつもりだつたから、親の反対は僕には余り大きな問題ではなかつた。でも、保護者を連れて行けば親ともめることもない。

今年は大人を一人連れていく。そうすれば参加者は安心して参加できるし、きっと女達も安心して参加するに違ひない。

僕は親が反対しても絶対行くつもりでいたし石山も行くだろう。でも問題は女だ。女が行けるようにしなくては。

## 保護者のお願い

僕達にはアテがあつた。それは今年から上原中学校に赴任してきた熱血教師の中山であつた。中山は、本山と一緒に今年の四月から我が校に来た若い教師で生徒に絶大の人気を誇っていた。コーエモアがあり明るく兄貴的な中山は、僕と石山も大好きな先生で僕達が一緒にキャンプに行つてくれと頼めば絶対オッケーと言つてくれると確信出来る先生であつた。

僕と石山が代表で職員室に行き頼みにいくことにした。職員室の引戸を引く時はいつも緊張する。僕達生徒にとって職員室は聖域で気楽に入れる場所ではない。ちなみに校長室は神様の部屋ぐらいに思えるから覗くだけでもいけない場所だと思っている。

教室では騒ぎまくつている僕と石山だが職員室に入つたとたん神妙になる。中山がタバコを吸つて椅子に座つている。僕達は真っ直ぐ中山のもとに歩いていった。手にはキャンプ計画書が握られていく。

「中山先生」僕が声を掛けると「おっ、どうした」とさわやかに声を掛けてくれた。

「あの、僕達夏休みにキャンプを計画しているんですけど、先生と一緒に行つてももらえないかと頼みにきたのです」「出来るだけ丁寧に僕は喋つた。

「夏休み、キャンプ、ダメダメ」

中山の返事は早かつた。僕のお願いを聞いてから一秒も考えていな

い。

「そこを何とかならないですか~」

今度は冗談ぽくお願いする。中山先生ならこういう言い方の方が逆に真剣に考えてくれるのではないかと頼み方をすぐ変更した。

「ダメダメ、じゃあな」

返事も考え方も一緒であった。考へてもくれなかつた。

あの熱血先生が、生徒のことをとても大事に考えていると思つて  
いた先生の返事が信じられず、僕と石山はそこに立ち廻りしている。  
きっと、口の後5秒後に「なんちやつて、うそうそ」と笑いながら  
言つて「川上、手に持つているのは計画書か、よし、ちょっと見  
せてくれ。なになに伊豆か、うーん、いいなあ。いい計画書だ。よ  
し、先生も一緒に行くぞ」と言つに違ひない、と思つたが「用事は  
それだけか？ それじゃあ帰りなさい」と言われてしまつた。

「中山先生、伊豆の山を登るんです。登山は好きじゃないんです  
か？」

僕は必死に声を出した。その声は職員室全体に響いた。

「だから、ダメだと言つただろう。もう、ダメはダメ」  
全く考へてくれなかつた。断るにしてもじっくり考え、スケジュー  
ールを確認して欲しかつた。

がつくり肩を落としながら、僕と石山は職員室をトボトボ歩き、  
出ようとした瞬間、英語の国吉先生が「本山先生、登山好きみたい  
だから頼んでみたら」と言つてくれた。

本山、あんな暗い奴ヤだよ。僕と石山の想いは同じであつた。  
しかし、保護者は必要だ。中山はあんな断り方をしたのだから、  
本山に頼みにいったらどんなひどい断り方をされるだらうと考え  
と、保護者は必要だけど頼みにいくのは嫌であつた。

『なんで先生が、川上や石山とキャンプに行かなくちゃならない  
んだ』と断られるか、一言『嫌だ』で終わらせられるかも知れない。  
でも、行くしかない。

## 計画書

授業が全て終わった後、僕と石山は再び職員室へ。僕は付添いの大人がいなくても行けるよう親にどう頼むか、午後の授業ですつと考えていた。あの暗くて意地悪そうな本山が僕達の頼みを聞いてくれる訳ない。

職員室の引戸を引くと正面が中山の席でその右奥が本山の席である。昼休みに中山を訪ねた時、本山はいなかつたが、今は逆に本山はいるが中山はいない。

「あのー、本山先生」

「おっ、なんだ、川上か」

本山はびっくりした顔を僕に見せた。

上原中学校に赴任してから誰一人本山を訪ねる生徒はいないはずで、生徒が職員室に自分を訪ねてくるなんて考えられなくてびっくりしたのだと思う。

「あのー、僕達、夏休みに登山をしようと思いつのですが、本山先生も一緒に行つてもらえないませんか?」僕はやつぱり丁寧に聞いた。

「登山か、どこ登るんだ」

「伊豆の万一郎岳です」

「伊豆というと天城か…いいよ、行つても」

「本当ですか? 夏休み入つたらすぐなんですが。これが計画書なんですよ」

「へー、計画書まで作つたんだ。見せてくれるか

僕は右手に持つていた中山に見せよつと思つていた計画書を、本山に見せた。

予算…四千円(これは毎月銀行に積み立てたお金を使う)

お小遣い…基本的に自由

お菓子…リュックに入るのが基本。リュックに入らないお菓子は持

つてこない。

米…一人八合

飯ごはん…石山、川上、細井担当

鍋…川上担当

水筒…各自持参

地図…石山担当

テント…みんなで考える

寝袋…各自持参

水着…各自持参

ビーチボール…細井担当

トランプ…川上担当

ランプ…細井担当

缶切り…出川担当

梅干し…細井担当

コンパス、望遠鏡、食器、新聞紙、雨具、歯ブラシ、歯磨き、石鹼、

タオル等は

…各自持参

買う物…割りばし、花火、蚊取り線香、マッチ、スイカ、玉ねぎ、

ジャガイモ、

人参、カレー粉、缶詰

【予定】昭和四十四年七月一十一日（火曜日）出発

七月一十一日

朝六時…元住吉集合

十時半…今井浜到着

十一時…各自持参の弁当を食べる

十一時半…スイカ割りをしてそれをテザートにする

三時…おやつ各自が持ってきたお菓子と残ったスイカを食べる

四時…夕食作り 食事係 川上、石山（カレーを作る）

まき集め火を炊く係 細井、出川

六時…夕食ミカンの缶詰を開ける

七時…後片付け係 細井、出川

八時…花火

九時…消灯

七月二十三日（水曜日）

朝六時…起床顔を洗う歯を磨く

六時半…朝飯作り、昼のおにぎりも作る

食事係 出川細井

ご飯を炊いてみそ汁を作る、おかずサンマのかばやきの缶詰

七時半…食事

八時後…片付け係 石山、川上、出川、細井はテントをたたむ

八時…今井浜出発

八時半…伊豆急に乗る

九時…到着

十一時…景色の良いところで朝作ったおにぎりを食べる

四時…万二郎岳頂上

五時…キャンプ場 細井、出川テント係 川上、石山食事係

七時…夕食おかずは豚汁、ももの缶詰を開ける。肉は缶詰の肉を使

う

八時…後片付け係 出川、細井

八時半…キャンプファイヤー

十時…消灯

七月二十四日（木曜日）

朝七時…起床顔を洗う、歯を磨く

七時半…朝飯作り 食事係 出川、細井 ご飯を炊いて（昼のも炊

みそ

汁を作る（昼のために多めに作る）、おかずサバのみそ煮の缶詰

八時半…朝食

九時…後片付け係 石山、川上

九時半…キャンプ場のまわりで遊ぶ

十一時……朝作ったのもので昼食 おかげクジラの缶詰

十一時半……後片付け係 細井、出川

一時……キャンプ場のまわりで遊ぶ遊びはキャンプ場に行つたら決め  
る

四時……夕食作り 担当全員

六時……夕食 おかげは残った缶詰全部（イワシの缶詰は残す）

八時……後片付け係 石山、川上

九時……告白大会か、恐い話大会

十時……消灯

七月二十五日（金曜日）

六時……起床顔を洗つ、歯を磨く

六時半……朝飯作り 食事係 出川、細井

七時半……食事

八時……後片付け係 石山、川上 出川、細井はテントをたたむ

九時……出発

本山は計画書を見ながら「毎月銀行にお金を積み立てていたのか、  
修学旅行みたいだな」と、笑いながら、僕に言った。

## 小泉もキャンプに参加

本山は笑うとメガネの奥の目が優しそうに見えた。  
確かに積立金は修学旅行も毎月お金を茶色の封筒に入れ、学校に持つていったので、それを真似たのである。

「テントは大学に頼めば貸してくれるかも知れないなあ」

「本当ですか、凄い」

テントは悩みの種だつた。小さな四人用のテントはあるが四人用のテントといつても一人で寝るともういっぱいで、4人寝ると荷物の置場も無くなるのだ。だから一人用のテントも持つていこうと話し合っていたのだが、大きなテントが手に入れば一つで済むからキャンプが一段と楽しくなる。

本山は楽しそうに計画書を隅々まで見て「楽しみだな」と、優しく言った。

いつも優しく本山は僕達生徒に語りかけていたのかも知れないが、僕達には気難しそうに言つてゐるように聞こえ、声を聞くのもイヤだつたのが、本山の見方を変えると、その言葉が違つて聞こえてくるのがおかしかつた。

僕は本山に心の奥では感謝しているのだけど、職員室を出て石山にすぐ言つた言葉は、「本山も俺達がキャンプに連れてつてあげるんだから嬉しいだろう」と、おふざけの言葉であつた。そして、石山も「あいつ、ラッキーだよな。夏休みキャンプに行けて」僕と同じようにおふざけの言葉を言つた。

一人とも本山に感謝しているが、素直に感謝する性格ならクラスのお茶られペアなんて言われやしない。

教室に戻り、細井と出川に報告するとこの二人は素直に喜んだ。

「よ、よかつたよ。や、やつぱり、ほ、保護者がいないと、お、親が許さないからな」

「ふざけんじゃねえよ。本当にこれでキャンプに行くことになつ

ちやつたじゃんか

しかし、素直に喜んだのはキャンプに行くことと、本山に感謝は全くしていないようであった。

「保護者が一緒に行けるとなると、女も行く気になるな」  
僕が教室で大声を出した。

教室内は掃除をしている班の人間が多少残っていただけで5～6人しかいなかつたから、大声を出すのに気を使う必要がなかつたらだ。ところが残つていた5～6人の中に小泉がいた。

小泉は僕の声を聞くと近くに寄つてきて、「カワパン、夏休みキャンプに行くのか?」と、訊いて来た。小泉は去年キャンプに行こうとしたメンバーの一人である。

「保護者って誰だ」

「本山だよ」

「何だよ、本山かよ。でも、本山が行くなら、確かに保護者同伴になるから、女も行くかもな」

小泉も去年のキャンプで保護者がいないと親が反対することはよく知つていた。

「まあな

僕が得意そうに返事をすると、すかさず小泉は「俺も行くよ、いいだろ、カワパン。去年は俺も行く予定だつたんだから」と、言つてきた。

僕達がキャンプに行くことはクラスのみんなに内緒にはしていい。むしろ、積極的に言つてきた。小泉だつて当然知つていたが、今まで一緒に連れてつてくれなんて、頼んでこなかつたのに、いきなり僕達の仲間になりたいと言つてきたのだ。きっと保護者同伴となると、女が行くと思ったから自分も参加したいと思つたのだろう。

「どうする、石山」

僕一人で決められることではないので、石山の顔を見た。

「俺は別にどっちでもいいけど、細井と出川は」

「お、おれは、い、いいよ。」と、細井。

「小泉かよ、ふざけんじやねえよ、お前お金あるのかよ  
いいとこ突く出川。」

「あるよ、お年玉がまだ残ってるよ」

小泉のその答えが、小泉もキャンプの仲間になることの決定を意味していた。

「おい、女は誰誘うんだ?」

小泉が嬉しそうに言つ。

「まず、寺本と野口だろ」

僕の答えを聞いて、明らかに嫌な顔をする小泉。

「もつと、明るい奴を誘おうぜ。そうじゃなくちや楽しくないじ  
ゃん」

「じゃあ小泉、誰がいいんだよ」

小泉の誘いたい女はみんなが知っているが、みんなあえてその名  
を言わない。

「そんなのわかってるじゃん、なあ、カワパン」

「じゃあ、小泉が誘えよ」

「俺が? 俺って、ほら、シャイじやん。だから無理だよ」

「お前、立花と上手くいってたんじゃないのか。上手くいってた  
なら、誘うなんて簡単じやんかよ」

僕が立花の名前をだすと、事情を知らない石山達3人は驚いた顔  
をした。

委員長のことがあつたから、僕以外の3人は小泉とほとんど付き  
合っていない。だから、小泉の情報は何も知らない。あれから初め  
て知った小泉の情報が、立花とうまくやつていて、じゃあ驚くはず  
だ。

「それがよ、立花の奴、最近冷たいんだよ

「ふられたのか?」

「いや、ふられたとかそういうんじゃないよ。立花ってほら、ハ  
方美人じやん。あちこちにいい顔するから、俺のことちやんと考  
てくれないんだ」

淫売より八方美人の方がましだが、好きな女の子に使つ葉じやない。

「じゃあ、小泉が立花を誘えば、ちゃんと話せて、上手くいくじゃないか」

「それは、ほら、俺のプライドもあるし、カワパンがそこは上手くな、頼むよ」

これ以上話しても堂々巡りなので「わかった、わかった。誰が誰を誘うか後で決めよう。でも言に出しつければ俺だから、俺がまず立花を誘う。でも失敗したら、次はこの内の誰かが女を誘えよ」と、僕は強く言った。

「俺はヤだよ」と出川が言つと、その言い方に腹が立ち「ふざけんじゃないよ。全員平等に女を誘おうぜ。みんな一回は誘つことしようぜ」と、決めつけて言つた。

「そうだな、カワパンの言つ通りだよ。それじゃ順番をジャンケンで決めよう」「はい」と小泉はさう言つて手を振りかざし「ジャンケン」と、ゆつくり言い出した。

結局、ジャンケンで順番を決め、明日は女を誘つことをみんなで確認し合ひ、その日は解散した。

## 立花を誘う

夏休みまであと2週間で、期末テストはすぐそばにきていた。3年生になると受験がどうしても生徒にプレッシャーを与える、1学期の期末試験は大事な試験なのだが、僕達にはキャンプの方が表向き大事であった。

僕は受験勉強が重要で大事なことだと、よくわかつていたが、どうも受験勉強が基本的に出来る体質ではないらしい。毎日、家に帰ると教科書を出し、一日3時間勉強すると目標を立てるのだが5分もすると、頭の中は勉強とは違うことを考え、気が付くとマンガを見ているかテレビを見ていつも寝る時、自己嫌悪に墮ちている。明日の朝早く起きて勉強しよう。『人間、朝起きてすぐ勉強するのが一番頭に入るというしな』と寝る時、明日の朝こそは勉強するぞと誓うのだが、その誓いを守ったことはない。

勉強が出来ないモヤモヤとキャンプに行く楽しみが『じりや』『じりや』に混じりあいながら7月を過ぎ、今はそれプラスひとつやつて立花を誘うか、と言つ事も頭の中に入ってきたので、頭の中はめちゃくちゃになる筈なのにどういう訳か『コント55』号の裏番組をぶつ飛ばせ』を見て笑っている。まあ、面倒くさいことは明日考えよう。

家の暮らしさは学校で何があつてもいつも同じだ。情けなく皿皿嫌悪にしおりちゃう堕ちているが、大事なテレビとマンガは必ず見る。

我が7組のアイドル立花はクラスの中でも気楽に声を掛けられる女の一人だ。しかし、キャンプに誘うとなると気楽に声は掛けられない。別にデートに誘う訳ではないのだが、女の子を遊びに誘うのはやはりドキドキしてしまう。

「立花、夏休みキャンプに行くんだけど、行かない？」と声を掛けたのは、昼食が終わつた昼休みであった。

「キャンプ、どこ行くの？」

「伊豆の海。伊豆の海は凄くきれいだぞ」

僕達は神奈川に住んでいる。だから海といえば、湘南の海である。湘南の海は波が高くて、海水は汚く、とても良い海水浴場とはいえない。しかし、日帰りで行けるのは、湘南の海なので、夏休み海水浴と言えば、湘南の海に行くことが多い。

僕達があこがれる海水浴場は伊豆と千葉の海水浴場で、その海水浴場に行つた生徒は、その海がきれいだったことをみんなに自慢する。だから女の子に伊豆の海に行こうと誘うのは結構有効なのであった。

「伊豆の海」伊豆と聞いて明らかに立花の目は輝いた。

「誰が行くの？」

「えーと、俺じゃん、石山に細井と出川、それに小泉と本山先生」小泉と聞いて立花は複雑な顔を見せるが、口では「本山先生が行くんだ」と、言い「カワパン達がキャンプに行くといふのは知つていたけど、伊豆に行くのか、いつ行くの？」と、訊いて来た。

「7月22日から7月25日まで」

「えー、泊りなの、日帰りじゃないんだ」

「そりやあそしさ、キャンプだもの」

「伊豆の海ですっとキャンプするの？」

「いや、そのあとは山に登り、高原でキャンプ」

「そうなんだ、泊まるんだあ」

泊まりだとダメだと立花は言いそうになつたので、「いや、泊まるのが無理なら、日帰りでもいいんじやないか、10時半には伊豆の海に着くから」と、慌てて言った。

「10時半に着くの、うーん、女の子は誰が行くの？」

「それは今日初めて立花を誘つたんだから、まだ決まってない

「そうなのか、水口さんとかシンシンが行くと言えば私も行ってもいいかな」

シンシンとはアイドルグループの一人、土屋のことと、女の子同士だとそのあだ名で呼ぶ。

「じゃあさ、水口と土屋と相談してよ。伊豆の海を強調してな」

「わかつた」と、立花はいつも二口二口顔を僕に見せた。結構いい感触だ。泊まりは無理でも日帰りなら行くかもしれない。

立花、水口、土屋が一緒に行くとなると、これは最高のキャンプになるぞと僕は思い、キャンプに行く仲間に話したら、みんなも同じ気持ちなんだろう、嬉しそうな顔をした。

次の日、立花から返事を聞けるかなとワクワクしながら教室に入つたら、教室内は興奮した騒がしさで包まれていた。

## 加山がライバル

「カワパン、加山達も夏休み、伊豆に行くらしいぞ」

「僕より早く来ていた石山がすっ飛んできて興奮した顔を見せた。

「ふうん、そうなんだ」

去年のキャンプを思い出し、ちょっと怒りが出たが、「別に加山達も伊豆に行つてもいいじゃないか」と、僕は冷静に返事をした。

「加山のおじさんが伊豆の白浜に別荘を持つていて、そこに泊まるらしいんだけど、友達も呼んでいいということになつたんで、今、みんな大騒ぎしているんだよ」

「え？」と、僕は声を上げたが、まだ状況を把握していなかつた。

「それで当然フカヒレやホゾ、前原に熊田も行くつていうことになつて、今、女達も誘つてているみたいなんだ」

「おもしろそうだな。俺達も連れてつてくれつて言おうか？」

「ばか、カワパン、何言つてんだよ。あいつら行くのは7月22日なんだぜ」

「7月22日・・・俺達と一緒にやないか」

「そうだよ、俺達と一緒に日に行くらしいんだ。白浜までの電車代さえあれば、後は食事もみんな加山のおじさんが出してくれるらしいぜ」

「いいなあ

「そうだろ、誰だつて行きたくなるし、女達なんかもう大騒ぎだよ

「でも当然行ける人数は決まつてるんだろ」

「10人ぐらいだつて、さつきフカヒレが言つてたよ

「もう、決まつてんのか？」

「だからさつき言つたじゃん。フカヒレにホゾ、前原に熊田は行くつて。それに女達も誘つてるつて、きっと神埼に水口、立花、土屋を誘う筈だぞ」

「立花は昨日、俺が誘つていいい感じだつたぞ」

「俺等のキャンプと、加山のおじさんの別荘じゃ、勝負にならな  
いよ」

それはそうだと僕も思った。まさかこんな形で加山が僕達のライ  
バルになるなんて思つてもみなかつた。

その日はずっと教室内に熱氣を感じていた。

昼休み、小泉が俺のところに飛んできた。

「カワパン、聞いたか、加山の別荘のこと」

「加山じゃないよ。加山のおじさんのだよ」

「そんなことどうでもいいんだよ。俺が知つたのは2時間目の時  
でさ、さつき加山のところに俺も連れてつてくれつて頼んだら、も  
う人数が決まっちゃつたって言つんだよ」

「小泉、加山達が行くのは7月22日だぜ」

「だから」

「7月22日は俺達もキャンプに行く日じゃないか」

「ああ、そうだったな」小泉は軽く言つた。

「お前、俺達を裏切つて、加山達の方に行こうとしたのか?」

「カワパン、人聞きの悪いこと言うなよ。行く日につままで考えて  
いなかつただけじゃないか。同じ口だとわかつていたら、加山に頼  
みになんか行かないに決まつてるじゃないか」

小泉はそう言つたが、怪しいものだと思つた。

加山がオッケーと言つていたら、小泉はこの場で僕にキャンプに  
行けなくなつたって言うに違ひない。

僕は何だかメラメラと加山に対してライバル心が出てきて、その  
まま小泉を置いて我が7組のアイドル立花のところに行き、「どう、  
水口達と相談した?」と、努めて明るい顔で聞いた。

「それが、カワパン。加山君がさ、水口さんに伊豆の別荘に行か  
ないかつて、さつき訊いて来たのよ」

「それで当然断つたんだろ」

「何、言つてんのよ、カワパン。伊豆の別荘よ。加山君のおじさ

んつて、すつゞく金持ちだから、すつゞくステキな別荘らしいのよ。

それを断る訳ないじゃん」

立花はすつごくを強調し2回も嬉しそうに言つた。

「じゃあ、加山達と行くのか?」

「それは親に聞いてみないと。親がいいと言つたら、行きたいに決まってるじゃん」

「俺達のキャンプは、花火大会やスイカ割りをやって、楽しいぞ僕は精一杯の抵抗をした。

「もうカワパン、子供なんだから。加山君のところはバーベキュー

よ

バーベキューという言葉に、大人と金持ちという言葉が詰まつていで、僕はとても太刀打ち出来ないことを、立花の顔を見て悟つた。

## 寺本への誘い

午後の授業は、立花達の幸せそうな顔と、それを見て羨ましそうな顔をする女の子や、妬ましそうな顔をする女が、入り混じって授業を受けている。神田先生は不思議な顔をしていた。

放課後、キャンプに行く仲間が集まって作戦会議をした。

「どうする？ カワパン。キャンプやめるか」

「小泉何言つてんだよ。女と遊びに行くことが目的じゃなくて、キャンプに行くのが目的なんだぞ」

「だつて、女がないんじゃ、つまんないじやんかよ」

「確かにそれはそうだけど。別に立花達じゃなくたつていいじゃないか」

「そりゃあ、そうだ」僕の言葉に石山が賛同すると、

「そ、そうだよ。ほ、ほかの女でもいいぜ」と、細井も賛同する。「じゃあ、立花達はだめになつたから。昨日決めた順番で女達を誘つつていうことにするか」

僕の意見に、小泉はしぶしぶ納得し、他のメンバーも最初の取り決めだからと黙って賛成した。

その日の放課後。

「だ、だめだ」細井。

「ふざけんじやねえよ、カワパン」出川。

「俺は精一杯やつたぜ」小泉。

「頑張りました」二口二口顔の石山。

全員女を誘つのは失敗した。

「しうがねえなあ、もう全員女は誘つたのか

「カワパンのために、寺本と野口は残してる」

「石山が誘えばいいじやんか」

「順番はカワパンだろ」

来週から期末テストである。テストが始まればみんな浮かれた気

分はなくなり、テストに集中する。それは小泉、細井、出川も同じだった。ただ石山は、テストなんてどうだつていいと考えているのか、真剣にテストのことを考へてゐるのを見たことがない。

石山は別にして、皆テストで頭が一杯になるから、来週になれば、キャンプの話は一時凍結になる。メンバーの最終決定はあと一回しかないのだ。

次の日、最後の望みとして寺本に話しかけた。

寺本の親がキャンプの費用を出してくれるとは僕には到底思えなかつた。寺本がキャンプに行く気になればみんなでお金を出し合いで寺本の分を出してもいいと考えていたが、どうやってみんなにそのことを言おうか、悩みどころである。

「寺本、夏休みの始めにキャンプに行くんだけど、行かないか?」「キャンプ…誰が行くの?」

「俺と小泉、石山、細井、出川、それに本山」

「本山先生も行くんだ。じゃあ、安心だ」

「本山が一緒の方が不安だよ。でもあいつも行きたいって言うから仕方がないんだ。何とかみんなに迷惑を掛けないといいんだけどさ」

「何、言つてんのよ」と言つて寺本は笑つたが、「私は無理だな」と結論の言葉を最初に言つた。

「どうしてさ」

「ほら、うち弟と妹の世話、私がしないとダメじやん。だから、遊びになんて行けないよ」

「でも、三～四日なら、なんとかなるんじやないのか。せつかくの夏休みになんにも遊べないなんてつまんないじやん。親だつて頼めば、わかってくれるよ。お金だつて全然かかんないしさ」

「カワパン、いつもそういうの気にしてくれるね。ありがたいけど、結構苦しいよ。人にはさ、それぞれの幸せがあるんだよ。カワパンからすればキャンプが幸せかも知れないと、私には弟と妹を世話するのが幸せなんだ。人には与えられた環境で、どういう風に

幸せを探すか、という勉強もあるんだよ」

「それは、わかるけど、キャンプ行ってみなければわからないじゃん」

僕はちっとも寺本が言っていることがわからなかつた。ただ、寺本が凄く大人の言葉を言つてているという感じがして、それは僕がどう頑張つても勝てないな、とわかつていた。

「それはそうだ…でも、私は私で夏休みちゃんとやるから。カワパンはカワパンで夏休みちゃんと楽しんで。カワパン、私の知つてる限りでは、一番優しいけど」

寺本はそこで喋るのをやめてしまった。僕はそれ以上言うと寺本が泣くのではないかと感じ、「わかつた、諦める、じゃあな」と、言つて寺本のそばを離れた。すると寺本が「カワパン、親友だよ」と笑いながら言つたので「おー」と僕も手を上げ、そうだよ、とうポーズをした。

期末テストが終わると、加山が僕に話しかけてきた。

「カワパン達も伊豆に行くんだる。白浜に来ないか」

僕達が行く今井浜のキャンプ場と白浜は、近い所にあつたので、  
加山は誘つてきたのだろう。

「いや、俺達は俺達で結構忙しいから白浜まで行けないよ  
ちょっと悔しい気持ちが僕にそう返事をさせた。

本当は白浜に行きたい。そして、女の子達と一緒に遊びたい。クラスのアイドルグループ立花、水口、土屋と神崎が、加山達と一緒に行くということは小泉から聞いている。

「そうか、せっかく同じ伊豆に行くのにな、俺、カワパンとちょっと話したいことあつたんだ。カワパン達、今井浜だる。カワパンが来られないなら、俺がカワパン達の所、遊びに行っていいか?」

「別にいいよ

断る理由はない。それに女達を連れて来てくれるかも知れない、  
というスケベな気持ちも働いてそう返事した。

「良かつた。きっと7月22日の夜行くからさ、待つてくれよ  
「夜ならきっと花火大会をやつてるよ

花火大会と言つとけば絶対女達が来るだろうと僕は考えた。

『女達が来るかも知れない』僕は一人興奮してすぐ石山や小泉に  
言おうかと思ったが、当口驚かしてやろうと思つて、黙つてている事にした。

梅雨が終わり、空はこれ以上ないという青空を見せている。

昨日は早くから寝床に入つたが、興奮しているためなかなか寝付けず、5時半にセットした目覚まし時計が鳴るのを今か今かと待つていた。

家から元住吉の駅まで歩いて15分、朝起きて顔を洗い、服を着替えるのが10分、5分はゆとりの時間として、6時に元住吉に行

くのには、5時半に起きればいい。

支度は全て昨日のうちに済ませておいた。朝飯は食べている時間が無いので、昼のと合わせ5時半までにはお母ちゃんがおにぎりを作ってくれる約束だ。

全て問題なく進んだが、一つだけ誤算があった。リュックが異常に重いのだ。缶詰は小泉に、リュックは細井の係として渡したから、僕のリュックは彼等から比べれば軽い筈なのに、異常に重い。

家から数10メートルも歩けば、もう肩が痛くてリュックを降ろしたくなる。こんな誤算のため15分で着くところが25分かかってしまったが、起きてから家を出るのに5分とかからなかつたので、予定の6時には無事着くことが出来た。

朝は涼しい風が吹く。昼間の暑さから比べれば、天国だ。

まだ6時だというのに空は真っ青。僕が数分前に駅前の待ちあわせ場所に着いた時、小泉を除いたメンバーはみんな集まっていた。本山は綱島の駅で合流する。綱島の駅の近くで住んでいるらしい。

「小泉、遅いなあ」僕達がイライラし始めた頃、線路沿いの車一台通れるぐらいの道を走りながら、小泉が来た。

走るといつても重いリュックを担いでるので、ほんのちょっと歩くのより早い程度だ。

「よしちゃんが、もう朝ごはん食べてけつてつるさくて、食べてたら、遅くなつちゃたよ」

「小泉、言い訳はいいよ。早く電車に乗らないと間に合わないぞ」「小泉にみんな文句を言いたかったが、そんな時間はない。

朝六時だというのに東横線の電車の中はまあまあ人が乗っている。日吉を過ぎると、次は綱島だ。

僕は本山を見失うまいと一生懸命窓の外を見ているが、小泉は、細井を相手に、「明日のためのそのいちだ」と言つて、右手を細井の左手に向かい叩いている。少年マガジンで連載されている『明日のジョー』は僕達の間で凄い人気になりマンガを真似するのが流行つていてる。

僕はちばてつやの描いたマンガは『ハリスのかぜ』の方が好きだつたが、それはもう連載していないので、今は少年ジャンプの『男一匹ガキ大将』が好きであった。もちろん明日のジョーも嫌いではない。

「おい、ちゃんとみんな窓の外を見てろよ。もう駅に着くぞ」と僕が怒鳴ると、「いいよ、本山なんか、置いてつちやおうぜ」と小泉が相変わらず細井の左手を叩きながら言つ。

「ばか、言つてんなよ、もうやめろよ」

電車は綱島のホームに入つていぐ。本山の姿はすぐ見つかった。

「おはよう」

「口数の少ないこの先生は余計なことは言わない。普通の先生なら『朝飯食べてきたか』ぐらいは言こやつだが、かるづじて朝の挨拶だけである。

僕達もそんな本山の性格はよくわかっているので本山が何も話してこなくても気にしない。

「あ、あれ見たか、い、石山」

本山も合流して全員揃つたからとりあえず、余計な注意をしなくてもよくなつた時、細井は言いたくて言いたくて仕方がなかつたことを話題にしようとした。

『あれ』でそれが何を意味するか今日なら世界中の人人がわかる話題である。

「おー、見た見た。凄かつたな。エルサルバドルとホンジュラスのサッカーの試合がそのまま戦争になつたやつだろ?」

石山の『あれ』の答えに何が何だかわからない顔をする細井。

「な、なんだよ、え、えのさるとほ、ほんぎやあつて」

「何だよ、全く細井は無知だなあ。あんなに大騒ぎになつたのに、たかがサッカーで」

「お、おれが、い、いいたいのは、ア、アポロだよ」

「あー、そっちの方か」

石山は明らかに細井をからかつている。

今日、絶対話題になると言えば月面着陸のアポロ11号である。昨日の午前十一時五十六分にアポロ11号は月に着陸し、その模様をテレビが延々と映していたので、僕も延々とテレビを見ていた。「ガ一、こちらヒューストン、ガ一、こちらヒューストン、ガ一」同時通訳は日本語でアポロの乗組員とNASA管制室の言葉をテレビで流してくれたのでとても臨場感があり、何時間もテレビの前を離れられなかつた。

今日の新聞はこれが第一面だが三面記事の小さなニュースにサッカーで戦争という記事が載つており、石山は田代とくそれを見つけたのであつた。

「私にとつては小さな一步だが、人類にとつては大きな一步だ」と僕は言い、吊り輪にぶら下がり月面を歩くまねをした。

横浜駅にはいつの間にか着いていた。話に夢中になり本山が「降りるぞ」と言わなければ終点の桜本町まで行っていたかもしない。横浜から東海道本線で熱海まで車内は四人が向かい合わせに座れるボックス席だから、嬉しくなつてしまつ。朝ご飯のおにぎりも食べられるし、トランプも出来る。

昨日はなかなか眠れず今朝も早く起きたけれど僕は元気に騒いでいたが、本山は目をつぶり眠つているようだつた。

今井浜海岸の駅に着くとすぐ店が田につく。お土産を主に売っているがジュースも売つている。

「俺、サイダー」

「俺も」

「俺も」とみんながサイダーに手を伸ばす。まだ時計は十時だが太陽はギラつき汗がにじみ出でてくるため、水分が欲しくなるのだ。夏は甘つたるいジュースより、やっぱりすつきりとしたサイダーを飲むと気持ちが良い。

僕がサイダーを口につけると石山は駅前にある蛇口を開くと噴水のように水が上にでる水を飲んでいる。相変わらず買い食いはしない。

「おい、海に着くまでに八百屋を探せよ。スイカ買うんだから」みんなに聞こえるように僕は大きな声を出した。

大きな声を出したのは自分に力ツを入れるためにもあつた。何しろリュックが重いのだ。少しでも気を抜いたら背中から倒れそうになる。こんな重いリュックを担いで山に登れるのだろうか？

八百屋は海水浴場に隣接しているキャンプ場から歩いて5分もかかるところにあつたので、本山が、「スイカは先生がおごつてやる。みんなはキャンプの用意をしていなさい。八百屋が開く時間に先生が買って行くから」と言つたから、本山に何の期待もしていなかつた僕達は大喜びである。

## 今井浜でキャンプ

砂地にテントを張るのは難しい。

下地が砂のため鉄杭が簡単に入ってしまう、テントを支える役目をしないからだ。

キャンプ場は砂浜から少しづれた所にあるが、地面に砂が多い。おまけに出川や細井はテントを張るのは初めてで何の役にも立たない。

「おまえら、テントはいいから薪でも集めてみよ」

「薪つてどこにあるんだ」

「周りを見てみろよ、あちこちに木なんか転がってるじゃないか」テント張りに何の役にも立たない出川と細井に焚き火のための木を集めると言っても彼らはキャンプ自体初めてなので、何をどうしていいのかわからず、砂浜に打ち上げられているたくさんの枯れ木も田に入っていないみたいだ。

「あれが薪なの、あれ燃えるのか」全く出川は使えない。

「出川、物は何でも店屋で売っていると思ってんじゃないのか」「何だよ、ふざけんじやねえよ。そんなことないぜ」と出川は言ったが、あいつはそう思っていたに違いない。だから薪を集めると僕が言つた時、それはどこに売っているのか僕に訊きたかったのだ。薪がもしどこかに売っているとしても、それは「俺に訊くんじゃなくて自分で探せよ」と僕は出川のすぐ人に頼る態度に腹を立て石山にブツブツ言いながらテントを張つていた。

「お湯わかしてお茶作るだろ」と小泉が言ったので「そうだな、小泉、水汲んで来てくれよ。俺、テントを張り終わったら火をおこすのを作つておくから」と答えた。火をおこすのを作るとは竈を作ることだ。

キャンプ場の周りには人間の頭くらいの石がじろじろがあるので、それで周りを囲み、鉄の棒が火の上に掛かるように小枝をYとして

鉄の棒がかかるように作る。

鉄の棒も探し、結構見つかるものだし、それを支える丁度いい木の枝もキャンプ場の中や周囲には転がっている。

僕が小学校の頃、よく家の前の道路の端っこで古木や「ゴミを燃やしたものだつたが、最近は外で火をおこすということはほとんどない。焚き火をした後はサツマイモを入れ焼きイモを作るがここ数年はその焼きイモも食べた記憶がない。

キャンプでは焚き火でご飯も焚くし、おかずも作る。そして最後は焼きイモだ。ただ焚き火をするだけでも楽しいのに火が消えた後でも楽しむことが出来る。

鼻歌まじりで竈を作つていると本山が大きなスイカを持ってきた。昼食は家から持つてきたおにぎりにお茶だけだが、楽しい食事に文句を言うやつはない。

「今ごろ加山達は別荘に着いたかな」

せっかく楽しい気分でいたのに、小泉が余計なことを言つ。誰だってテントを張つたキャンプより金持ちの別荘の方がいいに決まつている。それにクラスのアイドル達が一緒ならそこは天国だろう。なるべくそのことは思わないでいたのに。

「あ、飯食つたら加山の別荘に遊びに行こうか」

小泉の提案にグラッときたが、夜に加山が女の子達を連れて遊びに来ると言つていたから、こっちから行く必要はない。

女の子達を連れてくるとは言つていなかがきっと連れてくるだろう。しかしそれは驚かすためにみんなには言つていなかから小泉みたいに加山の別荘に遊びに行きたくなるのはわかる。

「ばか言ってんじゃないよ。むこうはむこう、こっちはこっち。最初からキャンプをするために計画したんだから加山の別荘は関係ないよ。小泉行きたいなら一人で行けよ」

石山が怒り気味に言つたので小泉もそれ以上、その話題をみんなの前で言わなかつたが、食器を洗つている時こっそり僕に「石山はかたいよな、カワパンだつて行きたいだろ」と言つてきたが僕が「

別に「と答えたたら、当てがはずれた顔をして今度こそ本当にその話題は口にしなくなつた。

## 溺れる

今井浜の海は波が荒いが、海の中に入つても自分の身体が見えるぐらい海水はきれいである。海の中に入つて身体が見えるのは当たり前のように誰もが思うだろうが、湘南の海は濁つていて海に入つても身体が見えないし、よく潮干狩りに行つた湘南富岡の海なんて真っ茶色の海で海から上ると身体がヌルヌルするのだから海水に顔をつけるなんて絶対出来なかつた。

「カワパン、台風が日本の近くにあるらしいぞ」

「知つてる知つてる。でもこっちの方には来ないみたいで、九州とか台湾の方に行くみたいだぜ」

天気予報はキャンプに来るまでいつも気にしていた。去年は台風でキャンプは取りやめたし、海と山でキャンプするのだから台風にあえれば中止しなくてはならない。幸い日本の近くに台風は来ているようだが、本州に上陸する気配はなかつた。

「そうみたいだけじ、台風は上陸しなくとも近くに来れば海は荒れるから、下手すると海水浴禁止になるかもしけなかつたから良かつたよな」

腰の高さまで海水がくる所に僕達は歩いて來た。ビーチボール遊びをするためだ。昼飯を終え、スイカ割りを楽しんで一息入れた後、早速海の中に入ろうと僕達ははりきつた。

今年初めての海水浴である。場所は伊豆の海、もう身体がウズウズしてしうがない。ビーチボールは柔らかくて軽いから海の中で遊ぶには最適だ。遊ぶといつても丸く広がりビーチボールを打つだけなのだが、結構面白い。取れないボールに飛び付いても海の中だから危なくない。これが土の上でやつたら飛び付くなんて出来ないし、もしやれば絶対身体のどこかを擦りむいたり、癌をつくつてしまつ。

夢中になつてビーチボールを追つていると女の声がした。

「ねえ、私達も仲間に入れて」年上の大人の女だ。

「いいよ、いいよ」小泉が嬉しそうな声を出す。

僕が遠くに飛んだビーチボールを取りに行つて振り返ると三人の大女の女がにこやかな顔をして僕達の輪の中に素早く入つていた。僕がビーチボールを打ち上げるとさつきとは違い、キャツキャツという黄色い声が響く。

「おねえさん、大学生？」

小泉が隣の女性に二コ二コしながら聞くと「そうよ」という答え。

「しょん便臭い女よりやっぱり大人の女だな、カワパン」暇を見つけて小泉が僕に耳打ちしてきた。

さつきまで5人で遊んでいたので、ボールを打つ回数が多く無駄話をする暇などなかつたが、8人もいると結構暇な時が出てくる。

「何、そこ、おしゃべりしてるの」

女子大生の打つたボールが勢いよく僕目掛けて飛んできた。

このようなビーチボールで遊ぶ場合、普通は上に上げるトスを打つのですが、今はスパイクが飛んできたので僕は受けそこない頭に当ててしまつた。

「オーモーレツ！」

僕が思わず叫ぶと女子大生の三人は大笑いした。

小川ローザのCMで、スカートがひらりとめぐり上がり、その時オーモーレツと言うのだが、それが今流行つているのだ。

楽しい時間はすぐに過ぎた。女子大生達も少し遊んだら「じゃあね」と言つて去つてしまつた。

「細井、まだ遊びぼうつて誘えよ」と小泉が言つたが「や、やだよ」で簡単に却下されていた。

女子大生がいなくなると小泉と出川も浜辺に戻つていった。ビーチボールも飽きたので、残つた3人はもう少し深く、ちょうど波が白くなる所まで行き、波に巻き込まれ流れしていく遊びを楽しんだ。そこまではよかつた。

さすがに遊び疲れ浜辺に戻る時、僕は危ない目に合つた。右足が

つたのだ。石山や細井は僕の前を歩いていたが、片足をつったぐらにならなんとか浜辺まで戻れるだろうと左足を踏ん張り、歩いていった。

踏ん張ったのがいけなかつた。今度は左足までつてしまつたのだ。つまり両足をつてしまつたから、当然その場に倒れてしまつた。結構浜辺に近いところまで来ていたから大声を出せばみんなに声は届く。石山も細井も小泉達のすぐそばまで行つていた。

「おーい、両足つった」

僕は出来るだけの大声を出して倒れた。

みんなはまた僕がふざけているのだろうと指を差して笑つてゐる。海水は膝ぐらいの深さだから両腕を突つ張れば顔を上げることが出来るが、波が来るたび顔は隠れる。

「おーい、冗談じやないんだ。助けてくれー」

まだみんな笑つてゐる。

「ふざけてるなよー」という声も聞こえてくる。

一体何回くらい波を頭からかぶつただろう。誰も海面が膝ぐらいの所でおぼれているなんて思いやしない。浜辺で仲間が笑つてゐるからふざけているとしか周りの人間は思わないだろう。

「おーい、本当につってるんだ」

最後にふりしぼつた声、この声が芝居には聞こえなかつたのだろう。本山が慌てて海の中に入つてきた。本山の慌てぶりにみんな大笑いしている。

『カワパンにだまされて本山は馬鹿だなあ』と思つてゐるに違いない。

僕は本山が走つてくる姿は見えなかつた。ただ大声を出した後、ほんの少し経つて「大丈夫か」と知らない男性に腕を引っ張られホッとした。

「両足をつてしまつて歩けないんですね」

やつとの思いで僕がそう言つた時、ハアハア言いながら本山が來た。

「川上だった」

「先生、両足つって歩けないんです」  
さすがに浜辺にいたみんなもおかしいなと思い始めたようで、笑い声はしない。

「おーい、誰か来てくれ」

本山の声に石山が飛んできたが、僕がまだふざけているのだろうと半信半疑の4人はゆっくり海の中を歩いて来た。

本山は僕を助けてくれた男性にお礼を言い、石山が来るまで僕を支えていた。

石山と本山に支えられやつとの思いで浜辺に着くと一応みんな神妙な顔をして僕を迎えたがその顔はまだ僕がふざけているのではと疑う顔でもあった。

「ひつかかった、ひつかかった」と僕が言い砂浜を走って逃げて行くだらうと期待の顔もある。

「おまえら、何で助けに来ないんだ」

僕がみんなを非難すると石山も「そうだ、そうだ、おまえら友達が助けを呼んでいるのに笑ってただらう」と怒った顔をして言った。

「石山、おまえが一番笑ってたじゃないか」

小泉の言い分に「ばれた」といつも屈託のない顔を見せ「でも本当にあほれているなんて誰も思わないよな。あんな浅い所で」と弁解した。

「俺だつて、初めてだよ。片足つるのはよくあるけど、両足つるなんて、もう少し深いところでおこなつたらどうなつてたか」

昨日はよく眠れず、朝も早くから起きて全く休まないで海の中で遊んだため、いくら若いといつても身体に変化が起きたのだろう。少し休んだらもうそのことは僕を含めみんなの頭から飛び去り、夕飯の仕度に興味が移っていた。

## 飯盒ご飯

なにしろ自分達で全部作らなくちゃあいけないし、ガスコンロも電気釜もないのだ。

米は飯盒で炊く。細井や出川は米をといだることもないので、米に水を適当に入れ火にかければご飯が炊けると本氣で思っていたのだから恐れ入る。

「飯盒でご飯を炊いた時は最後に火から下ろし、ひっくり返すんだぞ」

僕にも兄がいるが石山にも兄がいて、その兄に飯盒炊飯の注意を石山は聞いてきたらしい。しかしおかず作りは兄に教わることは難しい。小泉には姉さんがいるから、教わってきてもよさそうだが、小泉は結構男尊女卑のところがあり、男が台所に立つなんて考えられないという人間なので、小泉も全く期待できない。細井と出川は問題外だ。特に出川は薪で火をおこすことも出来ないし、飯が炊けているか確認しようとして平氣で火にかかるっている飯盒の蓋を素手で開けようとし、蓋に手をつけた瞬間「あつちい」と言って火傷をするような間抜けだ。そんなメンバーだからどうしてもおかず作りは僕が中心になる。

カレーなら何度か作つたことがあるから簡単だ。石山と小泉は意外と器用なので、野菜の皮を結構うまく包丁でむいていく。

「カレー粉は包丁で細かく切つた方がいいぞ」と小泉が僕にそう言つたので、僕が「へえー、よく知つてゐるな」と言つたら「よしちゃんがカレーを作るならつて教えてくれたんだよ」と答えた。小泉も家でキャンプのことをいろいろ話したのだろう。

僕はお母ちゃんにキャンプ行くよと言つて行く場所を教えただけで兄弟達にはこれといってキャンプのことで話はしなかつた。下手なことを言つてリュックのお菓子を取られたりするのをおそれたからだ。もっとも長兄はもうお父ちゃんの仕事を手伝つてしているので、

仕事が忙しく、僕とほとんど話もしないし、

次兄は今高校三年生で大学受験の勉強で頭がいっぱいだから僕のことはとかまつっている余裕はない。だからキャンプの仕度も全部一人でしたし、兄達が持っていたキャンプ道具はお母ちゃんが見つけてくれたので、問題はなかつた。

兄達が持っていたキャンプ道具でも基本的に親が買つてくれた物は家族の物でその所有権は親にあるため親にことわればいいことになつていて。だから僕のリュックを弟が親にことわれば勝手に使っても僕は文句を言わない。ただ僕が使おうと思っている時、弟が持つていつたらお母ちゃんに文句は言つ。お母ちゃんは僕達のスケジュールを全て知つていてるからだ。

カレーは思つた以上に美味しかつた。僕と小泉は三皿も食べた。僕は飯盒の蓋で食べたから三皿というのか、三蓋というのかはつきりしないが、いつもの倍食べたのははつきりしている。どうして外で食べるところなんに美味しいんだろう。

食事を食べ始めた時はまだ周りはなんとか明るかつたが、二蓋目に入ると暗くなつてきた。しかしそれは食事にはいい方に作用した。外での食事は飯の中に虫や灰が結構入つてくるので食べる時それを見てしまつと食べる気がしなくなる。真っ暗だと飯の中は全く見えないから、気にせずただ味だけを楽しむことが出来るから、暗くて良かったのだ。

家で食事した場合、僕はご飯やおかずにたとえ小さな虫でも入つていたら全体がもう食べられなくなつてしまつし、お母ちゃんの化粧のにおいや食器洗剤の匂いが少しでもついていたらそれも全く食べられなくなつてしまう。だから家中でこんな食事をしたらきっと僕は全く食べられなかつたかもしれない。しかし、今は暗いといふことが大半を占めるが、自分達で作ったということも食事に対しても粗末に出来ないという気持ちが出てきてちょっとぐらいの虫や灰が何だという気持ちになつていてる。

## 加山たち来訪

夕飯が終わると僕はソワソワしあじめた。加山が女の子達を連れてくる…みんな連れてくるのだろうか？

電車で来るなら結構時間がかかるから、女の子達は来ないと言つて結局中止になるかも。下手に「加山が女の子達を連れて夜来るぞ」って言わなくて良かつたかもしない。よく考えたら、同じ伊豆でも白浜と今井浜じゃあ歩いて来られる距離ではないから簡単に遊びに来られる訳ないな。

加山一人が来るということも考えられるが、さすがに加山のおじさんの別荘にみんなを置いて加山が一人で来ることは出来ないだろう。

食事が終わり、腹が重くて砂浜に寝転んでいる時、そんなことをずつと考えていたが気持ちはソワソワしていた。

「そろそろ花火しないか」

食器を洗い終えた出川と細井が戻つて来ると小泉がテントに入り、手には花火を持ってそう言つた。

「そうだな」

「やろう、やろう」

みんなそれぞれの言い方で賛成するが僕は何も答えない。もし加山が女達を連れて来るなら花火はその時やりたいと思つてゐるからだ。

「カワパン、どうしたんだよ。ノリが悪いじゃん」

小泉が今にも花火に火をつけるぞとマッチを手にし、言つてきた。

「小泉、ちょっと待てよ。実は加山達が遊びに来るかもしないって言つてたんだ」

「かつ 加山が」

加山イコール立花という計算式を小泉の頭は作つてゐるから、びっくりした顔をしている。

小泉がびっくりした顔を見せたその時ちょうど「おーい、カワパン、どこだあ」と大きな声がした。フカヒレの声だ。グッドタイムング、加山達がちょうど来たみたいだ。

「ここだよ、フカヒレ」

僕も大きな声で答える。すぐにフカヒレが懐中電灯を持って焚き火をしているところに現れたが、すぐ後ろに神崎と立花がいる。

「カワパン、楽しい？」

「口ニコした顔で立花が声をかけてくる。

「カレー、作ったんだ。美味しかった？」

神崎がまだ鍋に残っているカレーの匂いをかいでいる。みんなびっくりした顔をしていたが、石山が「食べるか？」と言つた。

「もうお腹いっぱい。夕方の五時から加山君のおじさんがバーベキューやってくれて、たくさん肉食べたからもうお腹いっぱい」嬉しそうに神崎が言うと「こんばんは」と知らないヒゲをはやしたおじさんが声をかけてきた。

「おじさんなんだ。車で送ってくれたんだよ。車ならここまで10分とかからないからっておじさんが言ってくれて」加山がヒゲのおじさんの紹介をする。

ヒゲのおじさんは本山に挨拶をすると手に持つていたワインを見せ「飲みませんか」と誘つた。

本山は嬉しそうな顔を見せ「これはフランスのワインですか」と訊くと「ボルドー産です」とヒゲのおじさんは答えた。

本山はフムフムと頷きながら「ボルドーか」とつぶやき、しげしげとそのボトルを見ていた。

きっとボルドーなんて言葉、何が何だかわからないくせに知ったかぶりをしているのだろうと僕は横目で眺めていた。

## 立花たちが来る

「バーべキューの残りを持ってきたのよ、食べるでしょ」立花の手には

皿いっぱいに焼かれた肉の山。

「ここちに遊びに来たい者って誘つたら、フカヒレと立花と神崎が手を

上げたから4人で来た。あとのみんなは疲れたって言つて由比浜の家で休ん

でる。」加山がみんなに話しかける。

「今日ね、ヨットに乗つたの。凄かった。波の上をピューって走るのよ」

立花が、今日みんなが疲れている理由を楽しげにしゃべる。

「沖に出てみんなで海の中に入つたの。もちろん私は浮き袋を使つたわ

よ。でも、加山君、カッコよかつた。浮き袋なんか使わないでスイースイ

「って泳ぐの。凄く速かった」

立花の心境は複雑だらう。最初僕達の誘いを受け、少しはその気になつ

たが、加山のおじさんの別荘の話に、そいつの方が断然いいから乗り換え

てしまつた。だから僕達に負い田があるから、バーべキューの肉をせ

めてもの罪滅ぼしにと持つてきたのだらう。でも加山には世話をなつたか

ら、その意識が立花を必要以上におしゃべりにさせているようだつた。

「ああ、みんなみんな、食べて。これ、私が焼いたのよ。薪でお

## 肉を焼

くなんて私初めてだから結構焦げてしまつたところも多いけど、おいしい

わよ。なんたつて牛肉だから。牛肉なんて私、ここ何ヶ月も食べたことな

いから感激しちゃつた」

僕なんか何年も食べたことない。すき焼きの肉はいつも安い豚肉を使う

し、肉料理といえば豚の細切れを使う料理が我が家の中の料理であつて、決して牛肉を使うことはなかつた。もちろん宗教上の理由なんかではなく値段的な理由だ。

立花が持つてきた肉に小泉が一番に飛び付いた。次に細井出川、石山が

続いたが僕は躊躇した。なぜなら、お腹がいっぱいできれい以上何ひとつ入

りそうもなかつたからだ。小泉も僕と同じくらい食べているはずなのに、

凄いやつだ。でも僕の躊躇も20秒ぐらいのものだ。

「カワパン、食べないのか？」と誰かが不思議がつて声をかける前に、

僕の手は箸を掴み牛肉を一切れはさんでいる。

小泉はカレーを三蓋食べたのにまだそんな食つのかといふくらい食べているが、「カワパン、カレー三杯も食べたのにまだそんなに食うのかよ」と逆に小泉に言われてしまった。

「どうキャンプ楽しい？」

神崎が石山に話しかけると石山も今日起こつたことを一生懸命神

崎に話

している。小泉は立花に加山のおじさんの別荘のことがアツアツのこと

とを一

生懸命聞いてくる。フカヒレと鮑井、出川は淡々とお互いの今日一日の出

来事をしゃべっている。本山はヒゲのおじさんといこ氣持ちになり

ワイン

を飲んでいる。必然的に僕と加山が話をすることになった。

「カワパン、ちょっと歩かないか

僕は腹がいっぱいでも歩くことなんか出来やしない。でもわざわざ

来てくれた加山に誘われると石山や小泉に返事するような「ふざけ

るなよ、

腹いっぱいで動ける訳ないだろ」なんて言えず、「わかった」としか答えられなかつた。

## 加山の変化

焚き火を離れると海の音が急に聞こえてくる。あれだけ人の声であたりは充満していたのにほんの少しその場を離れただけで、音が変化する。

「星がきれいだな」加山に言われ、初めて上を見上げた。

加山の言う通り満天の星である。田舎に行かなければ見られなかつた天の川もよく見える。

「ここまで来れば星がきれいだらうと思つたから歩いたけど正解だつたな」

僕はあまりの美しさに「みんなを呼ぼう」と言つたが、「むこうはむこうで盛り上がつてゐるから、今邪魔するのは悪いよ」と加山が言つたので、加山の言つたことを考えた。

盛り上がつてゐる……何が……立花と小泉か……そつかも。石山も神崎と話して楽しそうだつた。なるほど加山つていろいろ見てるのだなと改めて見直した。

加山と初めて出会つたのは、中学1年の時である。ガタイのよいやつがいるなあが第一印象であつた。僕は小学校からの流れでヤマと仲が良かつたんだけど、ヤマがてつちゃんと仲良くなり、てつちやんの親友が加山で、四人で遊ぶことが多くなり、それが段々と僕と加山が一人だけでも遊ぶようになつていつた。そして1年生の後半はもう一番の親友になつていて。

1年のときも2年のあの夏までは加山はあまり目立つ存在ではなかつた。いや身体が目立ち始めてはいた。でもそれはクラスメートからしてみればただ身体が大きくなつたというだけで、目立つてきただということでもなかつた。

それが、夏休みが終わると明らかに加山は変わってきた。でもその変化は僕だけが分かる変化かもしれない。きっと他のクラスメートは加山の変化には気づかなかつただろう。3年になり急に誰もが

わかるくらい加山は目立ってきた。熊田とフカヒレのケンカを止めたのも加山の変化の一つだ。確かにあれだけの身体を持っているのだから、ケンカも止められるだろうが、そんな度胸があるとは誰もが思わなかつたからだ。気が弱くておとなしいと思っていたがどんでもない。能ある鷹は爪を隠すであつた。

能ある鷹は爪を隠すといえば、7月初めに行われた学年でやる期末試験の一斉試験でなんと一番になつたということももう一つの爪だ。これには3年全ての生徒が驚いたし、先生達も驚いたようだ。

2年の時も決して成績が悪いということではなく、クラスで5、6番にはつけていた。しかしクラスで5、6番ということは学年で40番前後ということである。

2年の時は、学年一斉試験は行われなかつたので、40番前後としか順位を予想できない。中間試験や期末試験はクラスごとで採点し、順位をつけて通信簿にその評価を載せていたが、3年の1学期期末試験だけは3学年全生徒の結果に順位をつけ職員室の廊下に貼り出されたのである。

貼り出されたのは上位50名だけだから僕の名前は出ていなかつた。7組で50名に入つたのは5位に神崎、7位にホゾ、23位に水口、35位にフカヒレ、38位に立花、50位ぎりぎりに熊田が入つたので、加山も入れ7人であつた。

加山はいきなり1位である。もしこれが生徒会役員の選挙の前に行われていたら加山は川田を押しのけ生徒会会长に7組の代表として出て見事に当選したかもしれない。

学年一斉試験が発表されてから加山の人気はつなぎ登りになり、そんなところに加山のおじさんの別荘に行こうんだから、立花達はメロメロになつてもしようがないだろ。

## 加山の告白

「加山、学年トップになつたから凄いよな」

思わず僕は加山を褒めてしまつた。クラスの人間を褒めるなんて僕は絶対しないタイプだ。それが褒めてしまつたのは加山に対してのコンプレックスなのか、素直に認めたのかは自分にもよくわからなかつた。ただ、キャンプに来て自然な海の音と星の美しさに感動して素直になつたのだろうと後で思い返した時、結論した。

「あれはおじさんのおかげさ。おじさんがテストに出そなところを全て教えてくれて、一ヶ月みつちり僕に勉強を教えてくれたんだ。実は2年の夏からおじさんが僕に色々教えていたんだ。おじさんは勉強の教え方が凄くうまくて、カワパンもおじさんに教わつたら一番取れるさ」

加山の言葉に僕は何も言えない。

「そうか、俺今回は凄ーく頑張つたからな」ぐらいの言葉なら「そうか、凄ーく頑張つたのか。凄ーくがよかつたんだな」なんて1年のときのように軽口を言えるのだけど、それを凄く真面目にしゃべる加山に対し、軽口をたたけないなと思つてしまい、何も言えず黙つてしまつたのだ。

「カワパン、水口に告白したんだろ」と加山が次の言葉を言つた時、これには驚いて僕は言葉を言えなくなつた。

誰に加山は聞いたのだ。僕の頭は犯人探しをするが加山は僕の頭の中のことはおかまいなしに言葉を続ける。

僕の犯人探しの結論はすぐに出たが、「立花に教えてもらつたんだけど」と僕が出した犯人を加山はすでに口にした。

「カワパン、凄いなあと俺は感心したよ。実は俺も水口に告白したんだ」

びっくりした。加山は誰もが大人だと思い、大人にまだ成りきつていなかつ組の生徒なんか相手にしないと思っていたからだ。もち

ろん僕が告白した水口に加山も告白したということも驚いたが、比べれば大人の加山が中学生に告白したというイメージが僕にはどうしてもおかしく感じ、そっちの驚きが大きい。

「水口は俺の申し出を受けてくれて、付き合つことを承知してくれたんだ。水口と付き合っている時、立花とも結構話しするようになつて、特に修学旅行でいろいろ話すうちに、カワパンの話になつてその時聞いたんだ」

僕は相変わらず何も言えない。夜で良かつた。それに月明かりがなくて良かつた、とつくづく思つている。もし、少しでも明かりがあつたなら今僕は1万円落とした時よりも情けない顔をしているだろう。

「カワパンのこと2年のあの夏の時から気にしていたよ。俺、自分で勝手にカワパンを過小評価してたんだ。おじさんが友人は選べと忠告してたから自分なりに選ぼうと思い、あの夏から変えたんだ」加山の告白は僕を馬鹿にした告白だったけど其のときは正直加山が何を言つているのか理解できずにいた。

加山の独り言のような告白は続いた。

「でも、俺気づいたんだ。カワパンは凄いって。カワパンは、ホーミルームではいつも手を上げて自分の意見を言うし、しおつちゅう面白いことを言つてはクラスのみんなを笑わせているだろう。そういうことつて唯のお調子者だと馬鹿にしていたけど、それは、実は凄いことなんじゃあないかとこのごろ思うようになつてきたんだ。俺が水口に告白し、立花からカワパンも最近水口に告白したと聞いて、同じ人を好きになつたんだなあと何か妙な連帯感をカワパンに持つようにもなつたんだ。

修学旅行の夕食の時、カワパンが寺本をかばつて熊田と衝突したじゃん、俺感激したよ。特にカワパンが寺本のこと親友つて言つた時、俺泣きそうになつた。俺もああいうことをみんなの前で言つたかつたつて。カワパンに自分が中で求めているものを見た思いがしたんだ」

僕が寺本に親友だと言つたことに感激した人間がいる。僕にすればとつさに出た言葉で熊田が僕を追い詰めてきたから親友だつて言ったまでだ。

寺本のこと『好きだから』とは、そんな感情がないから言えないし、同じ班の人間だからじやインパクトが弱い。女の子に親友はおかしいかなとも思ったが、ほかに言葉が見つからなかつたから寺本を親友だと言つてしまつたに過ぎない。その言葉は熊田に対抗して思わず出た言葉であつて、加山が感激するというものではないのではと僕は思った。実際、周りのクラスメートはみんなカワパンが苦し紛れに寺本のことを親友だと言つたのだろうと思っている。

僕は変な気持ちである。『瓢箪から駒』的な僕の行動に感激されてもと思っている。

「カワパンが、生徒手帳に書いてある校則を使い熊田を言い負かしたじゃん。俺、あの時はちょっと笑った。俺も生徒手帳の校則は読んでいたから。結構、上手いハツタリをするなあと笑つたけど感心もしたよ。ああいう場面でハツタリが出来るなんてたいしたものだつて。

30年後つて言つた時も凄かったよ。30年後なんてよく考えたら余りにも長すぎて、本当に30年後になつたらもうそんな話は忘れているだろうから、実際意味のない約束だよ。

でもあの時カワパンが言つた30年には凄く重さがあり、感激したやつも結構いたと思うよ。寺本なんか本当に嬉しかつたと思う。修学旅行でもカワパンのこと凄いなあと思つたし、こうやって自分達でキャンプの計画を立て、それを実行するのも凄いと思う

僕は凄く照れ臭かつた。自分が褒められるなんてほとんど経験したことがないからだ。勉強も運動も普通よりちょっと上というレベルでは人から褒められるところは何もない。自分は人とは違う、いつか自分の力を世の中に示すことが出来るとか、もっと凄いと自分が世界の中心だと心の中で思つている人はたくさんいると思う。僕もそうだ。しかしそう思うのと同時に自分の現実の姿を見て、せめて人並みの学校に行き人並みの会社に入つて世間の落ちこぼれには絶対なりたくないという思いも心の中にはある。いつも世間から落ちこぼれることを恐れ、人並みの暮らし了出来ればとりあえずいいのではと考えていた。中学生のくせに。そんな僕の心の奥底を加山はくすぐつてきたのだ。

「カワパンは、寺本を守つたように優しさがあるし、水口に告白したように勇氣もある。そして熊田に向かつていつた正義感と熊田を打ち負かした知恵もある。それにキャンプをこのように出来たんだから実行力もある。そしてリーダーシップの資質も当然みんなを

キャンプに連れて来たのだからあるだろう。人間として素晴らしい長所がたくさんある

僕は自分で自分を褒めたつてこんなに素晴らしい自分のことはいえない。いったい加山って何なのだろうとポカーンとしてしまった。僕の思考能力では加山という人間を量ることは出来ない。

暗闇が加山を隠してくれているから僕はなんとか自分を保つられる。

「俺、随分ペラペラしゃべるからカワパン驚いただう」

僕は頭を縦に振るがそれが加山に見えたかはわからない。

「俺、一年のときはそんなにお喋りでなかつたけど本当は結構おしゃべりなんだ。でも二年の夏からは俺本来のお喋りが出始めたみたいなんだ。

ホゾはよく俺のことが分かつていてるけどホゾってそういうことに話さないだろ。だからクラスの皆には俺が実はお喋りなんて分かつているやつはあまりいない

もう加山は僕の想像出来る範囲を越えてしまってるので、僕は加山の話に割り込むことは出来ない。話が終わるのを待つしかない。最初波の音がうるさかつたが、今は加山の声しか聞こえない。

「おじさんは凄い人なんだ。事業で成功して凄い金持ちになつて、俺もおじさんみたいになりたいって言つたら、おじさんみたいになりましたから中学生からそのことを意識して生きろって言うんだよ。普通の中学生みたいな学生生活をただ何の目的もなく楽しむのではなく、意識を持つて中学生活を送れっていうんだ。特別な世界を目指す人間は中学生から特別な生き方をしていくつてさ。

プロ野球を目指すなら中学生からそれを意識して練習した方がいいし、歌手を目指すなら中学生の時からプロにならつた方がいい。若ければ若いほど基礎が身に付き、後でそれが自分にとつて最高のものとなるつて言うんだ。それは何となくわかるだろ、カワパン」暗闇で頭を縦に振るが本当のところはよくわからない。加山の言つている意味はわかる。でも実感がないのだ。プロ野球の選手とか、

歌手になるなんて僕の周りで本気で考えているやつなんかいないから、実感を持ってない。

「じゃあ、おじさんみたいになるには何を意識すればいいのって聞いたら、まず人間を観察しろって言うんだ。客観的な目でクラスの友達を見ろって、するといろんなことがわかるはずだから。それがおじさんに近づく第一歩だつて言うのさ。

自分が主観的になつたら、その世界に入つてしまい、本当に正しいことを見失つてしまう。それが事業で一番悪い結果をもたらすと言つてた。この辺のところは俺にもよくわからないけど、おじさんがいつも俺にそのことを話してくれるから、意味はわからなくても覚えてしまつてるんだ」

僕もよく意味はわからなかつた。ただ本当はよくしゃべる加山だけど、それもきっとあのヒゲのおじさんの影響なんだらうなあということはわかつた。

「三年になつてもう客観的に人を観察しなくてもいひつて言われ、自分の好きなように友達と付き合いなさいって言われたんだ。でもいきなり好きなようにつて言われてもそう簡単には無理だろ。でも嬉しくて、友達と好きなこと言い合つたり、クラスで目立つてもいいのかつて聞いたら、好きなようにしなさいって。ただ中学生活は後たつた一年だから、自分に合つた仲間を一人でも見つけると後の人生において絶対プラスになるから、仲間を見つけることを意識しろつて課題を出されたんだ。

仲間はクラスに結構いるよつて言つと、それは友達だろ、友達と仲間は違う。仲間とは信頼出来るやつを言うんだ。そして友達は大切にする存在だとも言つんだけど、俺にはその違いがわからなくておじさんに質問した。カワパンはわかるか

加山の言つてることはわかるが意味はよくわからない。『信頼』も『大切』も友達には必要なことだろつ。

「信頼つて信じられるつてことだろつ。『走れメロス』ではそのことを教えてくれてるよな。だから友達とは信頼することが大事な

んじやないか。信頼しているから友達を大切にすることには当たり前なんじやないか」

加山は僕のことを認めてくれるようなことをずっと言つてくれていたので、ここで何か言わなきやと思いつつも、何でもいいから口に出さなければと考えて、友情といえば『走れメロス』だと思いとつたことを言つた。

「カワパン、その通りだよ。俺とおじさんは何回も話し合つているんだ。今はそれを全部つないで話してるけど、本当はおじさんが友達とは何か考えなさいとかいうようなことをいつも宿題に出して、それを俺が考え、次に会った時、その答えを言つてことでもつてるんだ。

友達は大切にする、仲間は信頼するという宿題で俺も『走れメロス』を考え、カワパンと同じような答えをおじさんに言つたんだよ。やっぱりカワパンは俺と感性が合うのかな」

僕はしゃべることによつて落ち着くことができ、加山の話がさつきようはわかるようになった。

「おじさんは仲間と友達は違つて言つんだ。大切にする友達はたくさん出来るだろうが、信頼できる仲間はなかなか見つけられない。一人見つけることが出来れば人生は物凄く変わる。

仲間とは人生と一緒に生きていける人間だから感性が合わなければ無理だ。友達なら感性が合わなくても性格が合わなくても何も合わなくとも友達になれるけど、仲間はそうはいかないって。だから家が近いからとか、クラスが一緒だから、席が近いというようなこと全部取つ払つて人を見て、誰が仲間になるかよく観察して探せつて。

俺もおじさんの言つことよくわかんないけど、友達と仲間の選び方は違うんだなっていうことはわかつた。年をとつていけばどんどんそのことがわかるはずだけど、そのことを意識するだけで本当の仲間を見つけることが出来るつて言つんだ

加山がここまでしゃべつたが、ほめてもらつた気持ちよさと何か

が違うという気持ち悪さが両方僕の気持ちに起こつた。でもそれを言葉にできない。ただ素直に加山に同調できない自分もいた。

「おーい、カワパン」という小泉の声が聞こえた。

「小泉が来たみたい」と僕が言うと「俺だけ早口でいろいろしゃべっちゃつたけど悪かつたな。どうしても今カワパンに話したかつたんだ。続きはキャンプから戻つたら話そう」と加山が言うと小泉はもう目の前に来ていた。

「おまえら、何やつてんだよ。みんなで花火するから探しに来たよ

ハアハア、言っている小泉。走つて來たからだ。

「おー、わかった、行こう」

僕の頭はクラクラしていた。加山の話は中学生の話ではない。僕も結構友達とは何か、友情とはなんて喋りたがるが、加山はレベルが全然違う。そんな加山に僕が他のクラスメートとは違うようなことを言われたらそりやあ嬉しくなるが……。

じゃああの一夏休み、キャンプを断つたのはそれが理由なのか。嬉しさと怒りが同居する。でも加山のヒゲのおじさんは金持ちだから、加山と仲良くなつたら結構いい目が見られるかもしねり、なんてことも考えている。

もつとも、いい目といつてもスキーに連れていつてもらうとかしか思ひ浮かばないが。何しろ加山は僕とは違ひ大人の世界に入つてゐるんだ、ということだけは加山との話で僕の脳裏に焼き付いた。花火をすると加山達はヒゲのおじさんと帰つていた。

加山の話を聞いて、僕はまだそのショックから抜け出せずにいたため、花火は面白くなかつたし、いつの間にか終わつていた。ただ目には小泉が花火の時ははしゃぎ周り、立花が車に乗つた時、残念そうな顔をしたのが、映画を見ているように映つていた。おかしなもので一晩寝たらもう頭の中は今日の山登りのことでいっぱいになつていた。

## 登山

昨日のテントの中でシユラフにくるまで5分もたたない「ひし」と僕は寝てしまった。みんなも僕と似たり寄つたりだったみたいで、みんな目をつぶつたらすぐに寝てしまつたようだ。寝る前はシユラフに入つても眠れないだろうと思っていたが、みんなアツいう間に寝てしまつた。相当疲れていたみたいだ。

一晩寝ると昨日のモヤモヤは全て吹つ飛び朝の仕事をテキパキこなしていった。

重いリュックを担いで山を登るのだ。

昨日は平地を百メートル歩いただけで一休みしてしまつたのに、坂道を何時間も歩かなくてはならないのだから、いつたいどうなつてしまふのだろうか。

今井浜海岸の駅から伊豆熱川の駅へ着くと車が通る舗装された普通の道を山に向かつて登つていいく。登山道を最初から歩くんだと予想していたから少しうつむけた。

不思議なことに山を登るのだと意識したら重いリュックを長い時間担ぐことが出来た。とはいっても30分歩くと、全員リュックを我先にと下ろし、5分休んだ。

2回目の休みの後、歩き出すとみんなバラバラになりだし、僕と石山は一番最後を歩くよになつた。

「みんな最初から飛ばしてどうすんだよ

「ペース配分が出来ないんだよな」

一番後ろを歩いていてもまだ元気だから、ペチャクチャしゃべりながら歩く。時々車が僕達を追い越していくが、数分に1台だからそんなに頻繁に車がこの道を通りている訳ではなかつたし、スピードを出している車も少なかつた。

「石山、トラックが通つたら、乗せてつてもらわないか

僕と石山はゆっくり歩いていたので、いつの間にかみんなの姿は

見えなくなつてしまい、それを挽回しようと僕が石山に提案すると

「そりゃあ、いい考えだ」と石山は大賛成した。

僕達がそう話して1分もたたないうちにトラックが後ろから来たから、不思議だ。

僕と石山は両手を振つてトラックに合図をした。トラックは地元の人なのだろう。ゆっくり走つているから、すぐに僕達に気づき、ゆっくり止まつてくれ、「どうしたんだい」と訊いて來た。

「万二郎岳に登るんですけど、入口まで乗つけててくれませんか」と僕が言うと「林道の入口までなら乗つけてやってやるぞ」と言うので、僕と石山は大喜びで荷台に乗り「すいません、僕達の前にも4人いるんですけど、乗つけてつてもらえませんか」と言つと トラックの運転手は気軽に「いいよ」と言つてくれた。

トラックはゆっくり走る。きっとこの運転手さんの性格なんだろう。荷台に乗つている僕達はそれが嬉しく、トラックの取っ手を掴んで立ち上がり、正面からの風を楽しんだ。

スピードが速ければ立つことが出来ず座つたままトラックのどこかにしがみついていただろ。

トラックが少し走るとすぐに前を行く4人が目についた。

「すいません、あれです」

僕が言うより早く、運転手さんは気づいたみたいで、4人を追い越すと静かに止まった。

4人を追い越す時、僕と石山は「後から来ーい」と大声を上げた。するとすぐに小泉が「きたねえ」と大声を出したので、本山をはじめ全員が、トラックに乗つてゐる僕と石山に気づいた。そして気づいた瞬間、トラックが止まつたのでみんな嬉しそうにトラックに集まつてくる。

「トラックに乗せてくれるって」

「林道まで連れてつてくれるってさ」

僕と石山が重なるように声を出すとみんな大喜びである。本山もまだ登山道ではないので、いいかという顔をしてトラックの荷台に

乗り込んできた。

トラックは少し走つただけですぐに林道入口に着いた。しかし、これだけの距離を歩いたなら2、30分はかかったかもしれない。こんな登山道ではない一般道を歩いても全然山登りという気がしなかつたから、とてもラッキーだったと言えるだろう。

## 一輪車盗む

林道は今までの一般道よりはましだったが、それでも登山道という感じはしない。ただ舗装されているかされていないかぐらいの感じにしか見えない。

「またトラックが来たら乗せてもらおうぜ」 と石山は言ったが、林道なので車は一台も通らなかつた。

「畑がこんなにあるんだから、きっとトラックは通るよ」

石山も僕にそう言つたが、やはり車は一台も通らない。

トラックを期待していたので僕と石山は再びビリになり、みんなはだんだん見えなくなり、しばらくすると全く見えなくなるぐらい離れてしまった。

「カワパン、いいのがあるぞ

石山が指差したのは畑の隅に転がっている一輪車であつた。

石山はさつさと畑に下りる。畑といつても一輪車が置いてあつた場所は何も作物を作つていない。だから畑といつより原野かもしれない。しかしその原野の隣は何やらわからないが確かに作物と呼ばれるものが規則正しく植わっているからそこは畑だろう。

石山は一輪車を手にするときつと林道まで持つてきた。これが畑に一輪車が置いてあつたら、持つてくるのはためらつたはずだが、原野に置いてあると捨ててあるように見え、捨ててあるなら持つてきても良いのではないかと多少罪の意識はあるが、その罪の意識は簡単に払えたので持つてきてしまつたのだと思う。

「カワパン、これにリュックを乗せようぜ」

「ナイスアイデア

一輪車にリュックを載せ、それを手で押して林道を歩くのは背中の重みがそれ樂である。樂だからスイスイ林道を登つていく。すると5分もすると前の4人が見えてきた。また僕達がトラックを捕まえてくるかもしぬないと小泉は時々後ろを振り返つていたのだろう。

僕達の姿と、一輪車を発見し「きつたねえ、なんだよ、それは」と大声を出した。僕と石山はへラへラ笑つて「いいだろう」と得意げに言つた。

小泉の声に本山を始めみんな振り返り僕達の一輪車を見つけた。本山が怖い顔をして僕達の方にさつと走ってきた。走るといつてもリュックを担いでいるから歩くのよりちょっと速い程度だ。

「おまえら、それどうしたんだ」

「捨ててありました」

「うそをつけ、捨ててあつたのではなく、置いてあつたんだろう」「そうかもしません」

「すぐに元にあつたところに置いてこい」

キャンプに来て初めて見せる本山の怒りの顔。今までは僕達が好きないようにしていたのを黙つて見ていたのに、いきなり学校の先生になつた。

僕と石山は学校の先生になつてしまつた本山にはかなわない。

「わかりました」と言つて一輪車を引っ張つて元来た道を引き返した。後ろで小泉と出川の罵声が聞こえる。

「おまえら、ズルするなよ」

「悪事はすぐばれるぞ」

「ふさけんじゃねえよ」

「悪の栄えた時はない」

「世の中のルールを勉強しろ」などなど気持ひよとさうに大声を出している。

「本山のやうひ、何様だと思つてるんだ」

「連れてきてあげたということを自覚してないよな

「ばかに言つてもしょうがないけど

「俺達は大人だからな」

みんなが見えなくなるまでヒソヒソ声で僕と石山はしゃべつた。自分達が悪いことをしたのはわかっている。それに対し反省もしているし、本山が注意してくれて心の隅に引っ掛かっていた罪悪感

がなくなりホッと安心もした。しかし、その反動が本山の悪口として口から飛びだした。照れ臭くて心の中のことを素直に口に出せないものである。

「ここに置いてもう戻るか

石山がまだ半分くらいしか戻つていかない場所で反省のないことを言った。

「そうだな、ここならあの畠からそんなに遠くないし、きっと持ち主がいるなら気つくだろう」

僕もつい反省のない言葉で石山に同調したが、やっぱり元の場所まで持つていった方がという意思もあった。しかし、ほとんど捨てるあつたように見えたから、そこまで持つて帰らなくても大丈夫だという考え方があった。

自分の考えがはつきりしない時は相手の意見に賛成してしまう弱い僕がいる。リュックはさつき本山達と合流したところに置いてきたので、一輪車を置くと手ぶらである。何にも持つていなければ林道を歩くのは全く苦にならない。スキップでも踏んで行きたくなるような気持ちで登つていくと、本山をはじめみんなまださつき合流したところにいた。

僕と石山の計算ではもつと先に行つているからリュックを担いでゆっくり追いかけるつもりだったのに計算違いだ。

「おまえら、どこに置いてきたんだ。もとの場所にちゃんと置いてきたのか。戻つて来るのが早すぎるぞ」再び本山の怒りの声。

「えっあの、ちょっと……」と僕は言い、そのまま回れ右をして一旦散に一輪車を捨ててきたところに駆けていった。もちろん石山も一緒だ。再び小泉と出川、そして今度は細井も加わって好き放題の罵声を後ろから飛ばす。

「信じられねえな、本山」

「執念深いやつだな、本山」

一輪車を押しながら、また石山と一人でブツブツ言いながら下つていった。

今度はちゃんと元に置いてあつた場所に一輪車を置き、リュックを置いた場所に戻つた。戻つてみるともう誰もいない。

「全くあいつら薄情だな」

「そうだよ、一人くらい待つてくれて、本当に本山が怒つていたか教えてくれてもいいのに」

「あいつら、友情という言葉を知らないんだよ」

再び僕と石山はブツブツいいながら、リュックを抱ぎ歩いている。しかし、しばらくするとしゃべることは辛くなり、ほとんどしゃべらなくなつた。

## 湧き水

遠くにみんなが休んでいる。

「おーい、カワパン、石山。早く来いよ、湧き水があるぞ」  
小泉の声が聞こえる。あいつはいつも嬉しそうな声を出す。

「カワパン、湧き水がおいしいぞ」と小泉は湧き水をグイッと飲む。

湧き水なんて飲んだことがない。水は水道から出るものと飲むものだと物心ついた時から思っていたから、湧き水なんて不潔そうで飲むと病気になるのじゃないかと思い、飲めるものじゃない。小泉はよくそんなものを飲めるなど小泉のたくましさにちょっと感心した。

小泉の次に本山が湧き水を手にするとうまそうに飲み「うん、この水はおいしい、山を登ると必ず湧き水に出会うんだけどそれが楽しみなんだ」と言い、小泉に続き僕達に湧き水を飲むのを勧める。しかし、みんな躊躇して誰も湧き水に手を伸ばさない。すると本山が自分の水筒の水を全部捨てて空にすると湧き水を水筒に入れ始めた。

「水道の水なんかより、湧き水の方が断然うまいぞ」

本山はそう言うと再び「一口でも飲んでみたら」と勧めるので、石山が湧き水に手を入れゴクッと一口含むと「うん、うまい」と言いい「カワパン、西山、堀金、飲んでみろよ」と石山も勧めてくる。僕は思いきって湧き水に手を当てる。冷たい、こんなに冷たいのかと驚く。口に含むとその冷たさはおいしさとなつて喉を喜ばす。「うん、確かにうまいなあ。本山先生、これ汚くないんですか? 飲んでも身体は大丈夫ですか?」

一口湧き水を飲んでうまいとはわかったが、やはり心配で本山に訊いた。

「大丈夫だよ。土の中で濾過されたものがこいつやって出てくるの

だから、出たばかりの水は清潔さ

確かに本山の言つ通りだなと頭では理解したが、まだ僕の身体は完全に理解出来ないみたいでおいしい水だと感じてもたくさん飲みたいと思わないようだった。だから五口まで飲んだが、それ以上は飲めず水筒の中を入れ換えることもしなかった。

「細井も出川も飲めよ」

今度は僕が一人に勧める。

橋の上から川に飛び込む度胸試しみたいで、どうも飲んだ順から次のやつに勧めたがるみたいだ。

「俺はいいよ。まだ水筒にたっぷり水が入ってるから」と出川は僕の勧めを断り、出川の返事に続き細井も「お、おれもいいや」と湧き水を飲むことを拒否した。

二人の気持ちはよくわかるので、誰も無理強いはしない。

「それじゃあ、行くか」と小泉が先頭を歩き出したので僕もそれにすぐ続いた。一休みして喉も潤つたから元気が少し出ってきた。

「カワパン、昨日加山と何話してたんだ」

小泉の隣りを歩くとすぐに小泉は声をかけてくる。

「ちょっとな、そんなことより立花とはどうなったんだよ」

加山と昨日話したこととはたとえ石山にさえ上手く説明出来そうになり。

「立花か……、昨日は結構よかつたよ」小泉の顔がほころび。

「おまえら、うまくいってるのか」

「まあまあだよ」

「小泉が立花のこと淫売だなんて言つから、俺も修学旅行の時、小泉のこともつと考へてやれって言つたんだぜ」

「俺、立花のこと淫売だなんて言つてないぞ」

「言つたよ」

「言つてないよ」

「言つたつて」

「まあいいよ、そのことは。それより昨日、加山のおじさんと話

したけど、あのおじさんいい人だな

「ヒゲのおじさんか」

「そうそう、あのヒゲカツコいいよな。俺も大人になつたらヒゲのばそつかな、どう思うカワパン」「どうでもいいよ、ヒゲのおじさんと何話したんだ」

「いろいろとな

そこまでしゃべると小泉の足取りはちょっと遅くなる。

僕は先頭に立ち力強く前に進んだ。しばらくすると小泉はだいぶ後ろの方に下がり、代わって石山と細井が僕の近くに迫ってきた。それにしても暑い。汗がしたり落ちてくる。その汗で目が痛くなるし、視界も悪くなる。林道の道は幅も広いし、上りの角度も大きくはない。だから一般の山道に比べれば登りやすいのだろうが、変化がないので精神的に辛い。それに道が広いということは太陽に当たる面積が大きいため、直射日光が当たる時間が長くなり、汗を大量にかいてしまう。

遠くにカーブが見える。あそこまで行けば景色が大幅に変わるのではといつも期待してカーブまで行くが、その先に再び同じようなカーブが見えるだけで景色は何も変わらない。

## リュックの中身

一人で黙々と歩く。隣に誰かいてもしゃべることは出来ないだろう。視線もだいぶ下がってきて足元のちょっと先を見ながら歩くのが大半になってきた。

誰ともしゃべっていないと、昨日の夜、加山が僕に話したことを思い出す。加山はなぜあんなことを僕に言つたんだろう。僕に何を求めていたのか。友達になりたいということか……。いや、友達ではなく、仲間になりたい……。その二つは同じことで、ただ言葉が違うだけの気がするけど。カレーライスとライスカレーの違うのような気がするけど。

「カレーライスはカレーとライスが分かれていて、ライスカレーはご飯の上にカレーがかかつてゐる。だから同じカレーでも全然違うものなんだ」とホゾが得意げに言つていたけど、僕には同じ食べ物に思える。

「カレーライスの方が洒落てて、ライスカレーは大衆的だから、値段が違うし、味も洒落た味と大衆的な味に分かれる」ホゾのカリーの解説にフカヒレが付け加えた解説だ。

加山が言つていた友達と仲間もその程度の違いじゃないのか。

友達は大切にする。仲間は信頼する。石山はどうだろう、小泉はどうだろう。

小泉は学級委員長のことでの信頼を失った。立花の話でも自分の言葉に責任を持つていいない。とても信頼出来るやつではない。でも僕にとつては大切な人間だと思う。そうなると小泉は仲間ではないが友達なのか。

石山はどうだろう。石山は約束を破つたことはないし、修学旅行で熊田が不良にからまれた時、カツコよく助け出したりもした。だから信頼できるというより頼りになる。当然僕には小泉以上に大事な人間だ。だから友達というより親友というべき存在だろう。仲間

とか友達より親友のほうが格上だ。親友とは何だろう。

大事にする、信頼する。その人間のためには命まで投げ出す。うーん、そこまでは出来ないか。片足ぐらいなら……足より手ならまだいいかな。片手がなくなつたら不便かな……。指の一本ぐらいなら親友のために失つても……、ちょっとせこいな……。

加山のおじさんなら明確な答えを持っているのかな……。

加山はどこまでそういうことがわかっているのだろう……。

加山は、背は高いし馬力は凄い。頭もいい、クラスのリーダーになれるどころか、学校のリーダーになる器を持っているのに、わざとそういうのから遠ざかる生き方をしている。

僕が好きだつた水口に僕と同じように告白し、僕はふられたが、加山はうまくいった……。

加山のことを考え、一步一步大地を踏んでいつたら、いつの間にか開けた場所に出た。適当な木陰にリュックを下ろすと肩の力がスーっと抜けていくような感覚になりホツとする。後ろを振り返ると石山と細井の姿が「おーい、景色がいいぞー」僕が叫ぶと一人は歩く速度を速めた。

「おー、いい景色」

「か、風がき、気持ちいい」

もちろん二人ともすぐにリュックを下ろす。

「あー、極楽、極楽」

「いてててて」

石山は僕と同じホツとした顔をしたが、細井は顔をしかめる。

「どうしたんだ、細井」

「リ、リュックのな、中に入つてゐるか、缶詰がか、身体に当たつてい、痛いんだよ」

「どれ、ちょっと見せてみる」

石山がリュックの紐をほどき、中を点検すると「おい、これじゃあ、痛くなるに決まつてるよ。田茶苦茶な入れ方してるもの」

「そ、そうか」

「リュックは段ボールとか厚い紙で周りを囲んで形をしつかりさせないと中の物があつちに行つたり、こっちに来たりして田茶苦茶になるんだよ。カワパン、新聞紙持つてないか」

石山にそう言われ僕はリュックから新聞紙を取り出し渡した。石山は自分のリュックからも新聞紙を取り出し、その新聞紙をリュックの内側に囲うように置き、リュックの形を固定させ缶詰とか一番重いものを下に置き、その上に次に重い物というふうに順々に入れ多少ガチャガチャやつても中の形が変わらないようにした。

「これで、さつきよりましになつたと思うけど、本当は新聞紙より段ボールの方が丈夫でいいんだよな。リュックの紐も肩に担ぐところを通せばもっとしかり固定されるよ」

石山はしゃべりながら紐を上手く通していく。

「これでリュックを担ぐ時、肩にタオルをいれとけばいいよ」

細井のリュックから取り出しておいたタオルを石山は細井に渡す。

「サ、サンキュー」

細井が石山に礼を言つてゐる時、本山と小泉が着いた。

「出川は？」僕が聞くと「もうすぐ来る」と小泉は辛そうな顔をしてハアハア言いながら答えた。

小泉の言う通り、十秒もしないうちに曲がり角に出川の姿が見えたが、出川の顔も死にそうな顔になつてゐる。

「先生、ここ風が吹いてて気持ちいいから、お昼にしようよ」  
その広場の南側は大パノラマになつていて向いの山がきれいに見え、とても開けてるので風が強く吹いている。

僕の提案に本山も時計を見て「そうだな」と言つた。

腕時計は本山と細井だけが持つてゐるので僕は時間はわからなかつたが、腹時計は1・2時になつてていたので昼食にしようと言つたのだが、20分と狂つていなかつたようである。

## 山彦大会

昼食は朝、飯盒で炊いたご飯のおにぎり。飲み物は水筒の水だがなまぬるい。家では絶対に飲みたくないぬるさだが、身体が水分を欲しがつてしているので喉越しなど関係ない。

おにぎりは手に持つて食べられるので歩きながらでも食べられる。僕は一番見晴らしのいい所に行き額に心地よい風を受けながらすくすくと立ちおにぎりを食べた。

「おーい」

「おーい、おーい、おーい……、向いの山に大声をぶつけたら山彦が返つてくる。山彦が幾重にもぶつかるから僕の声は5～6回聞こた。僕が面白いことをやつているなと見て小泉もすぐ僕の隣りに走つてくる。

「ヤツホー」

ヤツホー、ヤツホー、ヤツホー……。出川、細井、石山も来る。

「石山だー」

イシヤマダーダー、イシヤマダーダー、イシヤマダーダー……。

「出川だー」

デガワダーダー、デガワダーダー、デガワダーダー……。

「ほ、細井だー」

ホ、ホソイダーダー、ホ、ホソイダーダー、ホ、ホソイダーダー……。

みんな大笑いである。

「何だよ、自分の名前呼んだって仕方ないだろ？」「

小泉の文句に対し「ヤツホーなんて、おまえ古いこと言つてんじやないよ」と石山は応酬する。

「じゃあ、何て言えばいいんだよ」

「そうだな、じゃあ好きな女子の名前を叫ぼうぜ」「

石山の提案に僕がすぐ賛成した。出川と細井は「そんな子供じみたことやめようぜ」と言つが小泉も石山の提案にのつたので、多数

決で好きな女の子の名前を叫ぶことになつた。すぐに5人でジャンケンをする。順番を決めるためだ。

1番は小泉、2番は石山、3番出川、4番細井、5番が僕という順番になつた。

「立花が好きだー」

タチバナガスキダー、スキダー、タチバナガー……

言葉が長いとこだまが重なり合つてしまつ。

小泉が立花を好きだということはみんな知つてるので、誰も冷やかさないし驚かないから注目もしていない。

2番目は石山だ。石山は誰が好きなのか誰も知らない。

僕は宮沢だと思っているが、もしかしたら違うかもしれない。みんなが石山の叫び声を期待する。

「園まりが好きだー」

ソノマリガスキダー、スキダー、ソノマリ……

「ふざけてんじやないよ。好きな歌手を叫ぶなんて汚いぞ」

小泉が怒る。

「だつて俺、園まりが好きなんだから、しょうがないじゃん」

石山が応酬する。

「ふざけんじやねえよ」

「い、石山、な、何だよ」

出川も細井も小泉に味方し、一斉に石山を非難する。

「俺は恥ずかしいけど、ちゃんと好きなやつ叫んだぜ。石山、男らしく俺を真似しろよ」

みんなが石山を非難するので、石山も觀念し、「わかつたよ、今、好きな子叫ぶから……男らしくな……。でも小泉の真似じゃないぞ。小泉の真似だけは絶対嫌だからな」

石山は笑いながらそう言つと「何でもいいよ」と小泉は舌打ちする。

向いの山に身構える石山。両手を頬の横に置き、「宮沢が好きだ

ミヤザワガスキダ一、スキダ一、ミヤザワガ一……と僕が予想した女子の名前を叫ぶ。

「誰だよ、富沢つて」

小泉が聞くと出川が「一年の時、同じクラスだったやつだよ」と答える。

「知らないやつ叫んでもなあ」

小泉が文句を言うが、「しじうがないだろ。さあ、次は出川だ」と石山は言い、自分の番は終わつたという顔をしている。

「俺はいいよ」と最後まで出川は抵抗したが、結局他のクラスの女子の名前を叫び、細井は結構喜びながらこれも他のクラスの女子の名前を叫んだ。

僕は当然後藤の名前を叫んだが、「みんな俺の知らないやつばかりじゃないか」と小泉がブツブツ文句を言った。石山が笑いながら、「しょうがないだろ、好きなんだから」で山彦大会は終わった。

## 2回目の湧き水

午後の陽射しは午前中と同じように強いが、林道を登つて行くのは慣れて来たのか、午前中より楽になった。とは言つてもしたたり落ちる汗の量は半端ではなく、大事に飲んでいた水筒の水もだんだん中身がなくなつていいく。

「誰か水をくれないか」

出川が昼食後、二回目の休みの時、周りに聞く。

「お、俺のをす、少しやるよ」

細井が気前よく水筒の水をふるまうが出川はまだ飲み足らず再び水をくれと周りに頼む。

「出川、ちゃんと計算して水を飲めよ。おまえみたいに喉が渴くと水筒の水をガブ飲みしてたらすぐなくなっちゃうだらう」

石山の注意を「わかつたよ、もういいよ」と出川は素直に聞いた。2回目の休憩所を離れてすぐ、「出川は甘え過ぎなんだよ。みんなちゃんとと考えながら水を飲んでるのに」と石山は怒り氣味に言う。山登りで水は貴重品だ。下手をすれば命の分かれ目になることだつてある。山を登る時、常に大事なのは水だぞ、と兄から聞かされている僕や石山は水の大切さを考えながら水を飲んでいるが、出川は何も考えない。なくなつたら誰からもらえばいいと考えている。石山が怒るのは当然だ。

歩き始めてすぐは石山もブツブツ言つていたが、だんだんそんなゆとりはなくなり、しゃべることはなくなつた。そしてそれは石山一人ではなく、全員そうであつた。

出川と細井は午後一番では威勢よく歩き出し、トップを歩いていたが、3回目の休みからだんだん後方に下がるようになつた。

出川と細井がトップから下がると代わりに石山がトップをしばらく歩いていたが、5回目の休みから小泉がトップを取り、僕は2番手を歩いている。そしてそこからはしばらく僕と小泉が代り番こに

トップを競い合い、8回田の休みから一人でトップを張り合ひながら並んで歩いていた。

右側に車が10台ぐらい止まれそうな広場が見える。

「小泉、あそこで休もうぜ」

僕の提案に小泉も「そうだな」と言つて賛成する。

その広場の周りは草が生い茂つていたが、中央はそれほどでもなかつた。時々走る車がここでピターンしたり、休憩するので草があり生えてこないのかもしれない。

「おい、水の音がするな」

僕の声に小泉は耳を澄ました。

「遠くに川が流れてるみたいだな」

遠くに川が流れているような音がするが、よく耳を澄まさなければ聞こえない。

リュックを下ろし、地面に腰を下ろすと気が緩むので、結構おしゃべりをしてしまう。そのため水の音は普通なら聞こえなかつたのだが、その時はあまりにも疲れていたため話もせず、地面に寝転がつて休んだため聞こえてきたのだ。

「寝てるなよ、カワパン」

石山がやつてきた。次に本山、だいぶたつて細井、その後に出川。僕と出川とではだいぶ差がついていた。

「さあ、行こうぜ」

僕が腰を上げると「まだ俺、着いたばかりだぞ。ふざけんじやねえよ」と出川が息をハアハアさせながら言つ。

「もう少しみんなで休もう」

あまり先頭と最後が離れてはまずいと考えてか、本山が僕を止めた。

「しあわせねえな、出川、もう少し頑張れよ」と僕は言つて、腰を下ろした。

「先生、水の音が聞こえるでしょ？」

僕の声に本山は耳を澄ます。

「うん、聞こえるな。下の方に川が流れているんだ」  
「川だったら、飲めますかね。」

「いや、川の水は飲まない方がいい。湧き水なら安心だけどな」

本山は笑顔ひとつ見せず答える。学校の先生の顔だ。

出川の疲労が多少とれた頃、全員で出発したがすぐに僕と小泉のトップ争いになつた。僕と小泉は十分に休んだので、出だしは強い。

「カワパン、湧き水だ」

僕と小泉がトップ争いをしてすぐに左側の切り立つたところから湧き水が出ているのを発見した。

さつき休憩した場所から5分ぐらいしかたつていらない場所で運良く湧き水を見つけたのである。すぐにリュックを下ろし休憩をした。みんなもすぐ後ろに来ていたので、僕と小泉が湧き水を飲むのをみると走るように湧き水の周りに集まつた。最後の出川もほとんど同時にみんなの後に続き湧き水の所に着いた。

「うまいなあ」

湧き水は2回目なので、今度は躊躇しないで僕は口に含み、満足な声を出した。

出川と細井も水筒の水がカラなので、さすがにこの湧き水は口に含んだ。こわごわだが。一通り腹の中に湧き水を流し込むと今度は水筒に湧き水を入れる。

はじめの湧き水を見つけた時、本山は水道の水を全て湧き水に変えたので半分くらい水筒の中には水が入つていたが、石山の水筒にもまだ三分の一くらい水が入つていたのには驚いた。他の4人はみんな水筒に水は入つていなかつたからだ。

## 自然の中でのキャンプ

水筒に水を入れれば出発である。水を思う存分口に入れることが出来たので、みんな元気を取り戻した。

相変わらず先頭争いは僕と小泉であったが、ビリと先頭の僕達との差は見える範囲なのでそんなに差はついていない。

20分くらい歩くと万一郎岳登山道入口の看板があった。

やつと林道が終わり、ちゃんとした登山道を歩くことが出来る。登山道は狭い道である。林道みたいに全員が横一列に並んで歩くなてことは絶対に出来ない。一人並んで歩くのも結構無理がある狹さなのだ。当然一人ずつ縦に並びながら進むことになる。

登山道に入るといきなり辺りが暗くなる。木々が周りを囲んでいるからとこりともあるし、日がだいぶ傾いてきたからとこりともある。

登山道を歩き始めて5分もたたない所で本山は腕時計を見ると、「さつき、みんなで休憩した広場に戻るぞ」と言つた。

「何ですか」と素早く僕が聞くと「あそこで今日はテントを張る。近くに湧き水が出てたからちょうどいい場所だ」と本山は答える。

確かにテントを張るには広さもあるし、近くには水もある。しかし、まだ日もあるし頑張ればキャンプ場まで日があるうちに行けるだろうと僕と石山と小泉は考えブツブツ言いながら登山道を引き返した。特に僕と石山はこのキャンプに対し今までずっと計画を立て、ちゃんと距離と時間を計算し、今日はキャンプ場まで行けると確信していたから、本山の決断におおいに不満であった。特にせっかく登った距離を失うことが頭に来ていた。

「全く、あいつには冒険心がないよ」

「石橋を叩いて渡らないタイプだな」なんて好き勝手なことをヒソヒソ言しながらもと来た道を下りていく。

上りはきついからしゃべることが辛かつたが、下りは歩くのが楽なので口から言葉は幾らでも出でくる。

「細井、今何時」

「よ、4時だよ」

「ほら、まだ2～3時間はあるよ。2～3時間あれば楽勝でキャンプ場まで行けたよな」

「キャンプはキャンプ場でしたいよ。こんな何にもないところでしたくないよ」

僕と石山のヒソヒソ話に小泉も参加する。

本山は一人で先頭に立ち、さっせと行つてしまつたので、僕達とばかり距離が出来てしまい、好き勝手なことが言えるのだ。

さつき休憩した広場に着くと細井と出川がテントを張る場所を作つていて「遅いぞ、ふざけんじゃねえよ」と僕達3人に文句を言つたが、誰も出川の言葉なんか相手にしない。

「よし、俺テント張るよ。小泉、さつきの湧き水の所に行つて米をといで鍋に水を入れて持つて来てくれよ」

「いいよ、でも一人じゃ無理だから」と小泉はみんなを見渡す。

「俺、テント張るから、細井と出川は小泉と行けよ」

石山はこれ以上歩くのが嫌だから、テントを張る方がいいと考えたのだろう。僕もそうだった。しかし出川と細井はあつさり「いいよ」とオッケーした。

きつとあいつらはテントを張るのが面倒で水を取りに行くのはただ歩くだけだから、何も考えなくていいと思い、水の方を選んだのだろう。

テントを張るのは2回目だから楽であった。地面が砂ではなく土なので鉄杭を木槌で打つのも気持ちが良い。

テントはアツという間というほどではないが、まあまあ簡単に張れたので今度は竈の用意をするのだが、本山がすでにそれは一人で終わらせていた。

「先生、さつき水の音がしたから、それ探しに行つていですか

出川達はまだ戻つて来なかつたので、時間を持て余していた。

「いいけど、声が届かない所は行くな」

僕達は「わかりました」と言い、水の音に神経を注いだ。

「どう聞いてもこの辺だよな」

テントを張つた広場の北側は崖になつてゐる。崖といつても木や草が生えているので下りようと思えば、下りられる。水の音はその崖の下から聞こえてくるのだ。

「よし、この崖、下りようぜ」

僕と石山は一手に分かれ、草や木に手をかけながらゆづく崖を下りていつた。下りるのに厳しいところは最初だけでそこをクリアーしたら後はしっかり気をつけて行けば楽に下りて行けそうであつた。

「おーい、石山」

「聞こえるぞー」

時々大きな声を出し、お互の所在を確認する。そして大声を出した後、耳を澄まし水の音に神経を集中させる。

『あまり水の音の大きさは変わらないなあ』僕が神経を集中させていると石山の声が「カワパン、川があつたぞ」

僕は大急ぎで下ってきた所を今度は上り、テントを張つた広場まで戻つた。少しして石山も戻つて来て、「ここを少し下りていくと小さな川があるから食器を洗うことが出来るぞ」と報告した。

「そんな近くにあるのか」

「おー、驚いたよ。あんな近くにあるとはな。結構水の音って遠くに聞こえるもんだな

小さな川だから遠くに感じたのだろう。

## 満天の夜空

パチパチ音がする。本山が火をおこした音だ。しばらくすると小泉達がにこやかな顔をして戻ってきた。重いリュックから開放され、背中には何も重しがないことがその顔を作っているのだと思う。

「今日が海のキャンプだつたら、このまま海に入つて身体の汗を流したいよ」

小泉の言葉に全員うなずく。疲れて頭を縦に振らないやつも心中では振つているだろう。汗は下着をビショビショにしたが、暑い陽射しはその下着を乾かした。だから身体も下着もガビガビ状態である。

「下に川を発見したから身体を洗つたらどうだ」

石山が小泉に言つと、小泉はちょっと考え「いいよ、川の水冷たいだろ」と答えた。

『俺達は男である。これくらいの汗臭さは何ともない』そんな男達だから当然誰も川で身体を洗おうなんて言う奴はない。おこした火で飯盒の米を炊き、鍋の中にいろいろな野菜をぶち込み味噌汁を作る。

食事を食べる時にはもう太陽は空に見えない。辺りはまだ明るいがすぐに暗くなるということは誰にでもわかる明るさである。

食事が終わる頃にはもう真っ暗で焚き火を離れると本当に一寸先も見えぬほどの暗闇だ。

「食器洗いは明日の朝だな」

石山の言葉に「当然だよ。俺、おしつこしたくなつた」と僕は言うと、テントの中から懐中電灯を取りだしテントを張つた広場の道路を挟んだ反対側に行つた。

「カワパン、俺も俺も」

石山が僕を追いかけてきて、一人で連れショーンをする。おしつこをするとなぜか、上を見上げたくなる。別に夜空を見ようとは顔を上

げたのではなかつたが、日にした夜空に思わず驚きの声を上げた。

「すげえ」

昨日、加山と一緒に見た夜空を思い出す。

僕の驚いた声に石山も空を見上げた。

「すげえ」

石山もまつたく僕と同じ台詞をはいた。

「カワパン、懐中電灯消してみな」

すぐに懐中電灯を消すと、夜空には無数の星明かり、こんなにたくさんの星を僕は生まれてから一度も見たことがない。昨日よりもっと凄い。

しばらく夜空を見上げてからテントの方に目を移すと、焚き火の周りだけは明るいが、そのほかは真っ暗である。懐中電灯を点けなければ歩くのは一歩でも怖い。

「おーい、みんな来いよ」

僕の呼びかけにゅつくりとみんな焚き火を離れて來たので僕は懐中電灯で足元を順々に照らす。

みんなが揃つたところで懐中電灯を消す。当然みんな驚きの声。

「何でこんなに星が出てるんだ」

小泉の疑問に「きっと台風が日本には上陸しなかつたけど、近くまで來たので雲をみんな吹き飛ばしたんだ。それに今日は新月だから。」本山は中学の先生らしく答えた。

「新月つて」と出川の声。

「おまえ、習つただろう。月が出ていないつていうことだよ」

小泉の得意そうな声。

自然の暗闇はこんなに深く、空にはあんなに星があるということは学校では絶対に教えてくれない。僕達のキャンプはたつた一日間だけど、教科書とは違う自然の勉強をたくさん僕達に与えてくれた。

一日中林道とはいえ、山道を歩いたのである。それも肩に食い込むリュックを担いで。星を見て感激したが、その感激の興奮より疲れの方が勝り、アツといつ間に僕達を睡魔が襲う。

## 天然クーラー

朝の仕度も一日目になるとだいぶ慣れてくる。キャンプ場だと水道が引かれている洗い場があり、トイレもあるがこの場所でも自然がトイレで川が洗い場なのでそれほど困らない。ただ川で洗う時は何人かが協力して手渡しで食器を運ぶということをしなくてはならないが、時間はかかるないので朝の出発が遅くなるということはない。

「昨日もここ歩いたのにな」

「本当、もつたいないよな。あのまま行つたら今じろキャンプ場でのんびりしてたんだぜ」

「こんなところじゃ、ウンコも出来ないよ」

テントを畳み、朝九時には出発したが、朝早いとどうしても馬力が出ず、ちんたら最後を石山と一緒に歩き、相変わらず一人でブツブツ本山の悪口を言つていた。それでも登山道入口に着く頃には元気も出てきて、登山道の先頭を僕は歩くことにした。

細い登山道である。先頭とラストを歩く人間はしつかりした者でなくてはならない。ラストは本山が歩くことになったので、先頭は自分だと考え「俺が先頭行くから」とみんなに言つたが、誰も反対する者はいないので、先頭を力強く歩き始めた。

登山道の始まりは楽であった。道は狭いが別に道を踏み外しても草むらを踏むだけだから、何の危険もない。しかし、そんな道は最初だけで、そのうちにだんだん山の斜面のへりに出来た道を歩くようになりはじめた。

斜面の角度がきついとへりの道はとても危険である。足を滑らせ道を外れて落ちればただでは済まない。それに斜面の角度がきつくなればなるほど道幅も狭くなるので、危険度は増す。

斜面の道をしばらく歩いていると道が大きくカーブしているのが見えてくる。いわゆる山の谷側にある登山道だ。大きく曲がってい

る道は一直線ではないので、道としてはかなりの距離があるのだが、行先はすぐ近くに見える。つまりこの字に道が出来ているということである。そのこの字の下からモクモク霧が上がってくる。朝だから起きる現象なのか、上から霧が下がつて来るのはなく、下から上がつて来るのである。

今日も朝から暑く、あせもビッショリかいでいるので、その霧は僕達には冷たいクーラーのような感じで「わー、天然クーラーだ」と言つて喜んだ。

涼しくなるのは有り難かつたが、霧のために視界が悪くなり歩くのがとても困難になる。リュックを下ろして休むには余りにも道が狭い。道の左側は崖なので足を踏み外すと死ぬことはないと思うが、大ケガはしそうである。そんな訳で霧が多少晴れるまでリュックを担いだまま立つて休む羽目になる。有り難いのか、迷惑なのか何とも言えない霧の来訪は3回続いた。

片方が切り立つた崖の道は1時間あまり続き、こんな危ない道だったのかと思い、昨日あのまま進んだら、思い掛けない事故に遭つたかもしれないと少し反省した。

片方が崖の道を越え、しばらく歩くと十字路にぶつかり、標識が倒れていた。

「この標識どこに立つていたんだろう

左の道は明らかに万二郎岳頂上に行く道ではないが、真っすぐか右なのか標識が倒れているためわからぬ。結局真っすぐ行くことにしたが、一時間後にはその道が間違っていることに気が付いた。いくら歩いても頂上に着かないからだ。おまけに上りがきつくなり明らかに頂上に向かう道ではない。ここまでキャンプをしたのも3時間が過ぎた。昨日、あのまま登つていたら、丁度この辺りで日が落ちていた計算になる。こんな狭い道しかない所でとてもじゃないが、テントは張れない。昨日の本山の決断は正解だったとにかく今まで来ると全員にわかつた。

「まあ、あれだなあ。いわゆる亀の甲より年の功とこやつかな

と訳のわからないことを僕は石山に言ったが、石山も「そうだな」と言つたので、僕の言いたいことはわかつたみたいだ。僕と石山は反省して、本山の悪口は言わなくなつた。

## ゴルフ場に到着

時刻は12時を過ぎたので、腰を下ろせる所を見つけ、朝にぎりたおにぎりを食べることにした。

「ちきしょう、やっぱ右だつたんだよ。右行つてれば、今じろ頂上で飯だつたのこ。この道どこ行くんだよ」

小泉がおにぎりを食べながら、ブツブツ言つと「この道は迂回路だと思うからきっと頂上に行つた道とどつかで交じりあうと思つぞ」と本山は小泉をなぐさめるように言つ。

僕達は訳のわからない登山道をそれから一時間余り歩いた。歩き続けるとだんだん道が狭くなり、とうとうブッシュで埋もれてしまつた道を歩くようになつてしまつた。ブッシュで埋もれているが道は確かにあるから、道に迷つた訳ではない。

昼食を食べてから道は草や小枝に囲まれてはいたが危険性はないので、縦の列に差がつき始めた。僕と小泉が先頭に立ち残りの4人にかなりの差をつけている。

ブッシュに囲まれた道も余り長く続くようだつたら、一度そこでみんなを待つつもりだつたが、いきなり開けた所に出てしまつた。

「おい何だよ、ここ」

辺り一面きれいな緑色。とても美しい所だ。

「カワパン、ゴルフ場だぞ、ここ」

小泉がそう言った瞬間、僕にもここがゴルフ場だとわかつた。

何で万二郎岳の頂上を田指して登つていたのに、ゴルフ場に出るのだと思つたが、足はいきなり楽な所に出たので、元気よく歩いている。

「カワパン、あそこに休憩場があるぞ」

小泉が指差した所には小さな小屋があつた。近づくとそこは売店兼休憩場だとわかつた。ゴルフをプレーした人が途中で少し休む小屋だ。

「カワパン、水もらおうぜ」

小泉に同意し、二人で小屋に入り、すぐ「すいません、お水もらえないでしょうか」と頼んだ。

「あら、あなた達、どこから来たの」  
ゴルフ場の中である。この小屋に来る人間は「ゴルフをプレーしている人間に限られているから、リュックを担いだ中学生が現れたらびっくりするに決まっている。

小屋の中には40代ぐらいのおばさんが一人いた。  
「あの万二郎岳を登つてて、そしたらいきなりここに出来やつたんです」

「まあ、どこから出たのかしら」  
僕が出てきた場所を指差すと「あの七番グリーンの横から来たのね。そしたらフェアウェイをずっと歩いて来たんだ。ゴルフをプレーしてると会わなかつた」

小屋のおばさんは早口で聞いてくる。僕と小泉は大きく首を振る。  
「まあ、よかつた。ボールが身体に当たつたら大変なことになるからね。でもゴルフコースの真ん中を歩いて来たんだから、気持ち良かつたでしょ」

「もう、最高でした」

僕がにこやかに笑いながら大きな声で言つたので、一人のおばさん達は嬉しそうな顔をした。

「はい、お水」

早口のおばさんの隣にいた緑の帽子をかぶったおばさんが、僕と小泉に氷の入つた冷たい水を渡してくれたので、僕達はその水を一気に飲み干してしまつた。のどがカラカラだったので冷たくつよいしい。

「そんなにのどが渴いてたんだ。僕たちカルピスも飲む

早口のおばさんが、優しく聞いてくる。

「はい」

「はい」

僕と小泉が元気よく答える。

カルピスは大きな透明グラスに入ってくれたので、普通のコップの一 杯半ぐらいある。ちゃんとストローも入れてくれたし、もちろん氷も入っている。今度は一人ともゅっくり飲んだ。

「あのキャンプ場に行きたいんですけど、どう行つたらいいんですか」

「キャンプ場……、今日はそこでキャンプなんだ、いいわねえ。キャンプ場はゴルフ場の隣だから、その日の前のところを向こうに真つすぐ歩けばすぐわかるわよ」

緑の帽子を被つたおばさんが、小屋から出て指を差して教えてくれた。

「あそこまではゴルフ場だから、はじっこを歩いていってね」

緑の帽子を被つたおばさんはそう言つと小屋の中に入つていつた。

僕と小泉は、小屋の外でゆっくりストローからカルピスを吸つて いると、僕達が出たブッシュから本山を始め全員姿を現わし、ゆつくり僕達のいる小屋に向かつてくる。

「おーい、今頃来たのか」

僕と小泉は、カルピスの入つたグラスを右手に上げ、嬉しそうに 呼び掛けたが、みんなは疲れているのか返事もなく黙々とフェアウエイを歩いている。

「この先を行くと、キャンプ場だつて」僕が指差して言つと「分かつた」と、テンションの低い返事を石山がした。

僕達が嬉しそうにカルピスを飲んでいるのが、非常にムカついて いるみたいだ。本山もムカついた顔をして、フェアウエイを挟んで 小屋とは向かい側のラフを歩き、通り過ぎていく。全員、僕達の近 くにきて言葉を交わそうとしない。

「あいつら、怒つてるのかな」小泉が不安そうに聞く。

「カルピスぐらい飲んだつていだろ」

自分達も飲みたかつたら、この小屋に寄ればいいのに。

「カワパン、俺等も早く追っかけよう

小泉はそう言つと、急いで残りのカルピスを一気に飲み、小屋の中に入りお礼を言つてリュックを担ぎ追いかけていった。僕もこれは早く追わないままよいと思い、小泉と同じようにお礼を言つて追いかけた。

僕達がみんなに追いつくとすぐにキャンプ場の入口に着いた。本当にゴルフ場の隣にキャンプ場はあつたので、さつきの小屋から数分しか歩いていない。

キャンプ場に入りリュックを下ろし一休みすると、本山をはじめ怒っていたみんなは、いつもの態度になつていた。みんなもカルピスを飲みたかつたが、全員で小屋に行き「カルピスを飲ましてくれませんか」なんて乞食みたいなこと恥ずかしくて言える訳がない。だからこそ、勝手にカルピスを飲んだ僕と小泉に腹を立てたのだろうが一休みしたら冷静になり、『しあわせがないな』っと怒るのにばかりしくなつたのだった。

## 高原のキャンプ

「やつせ、キャンプ場の受付の所で薪が売つてたな」

石山がそう言つので、二人で受付まで行つたら、薪の束が売店の横に山のように積まれていた。大きさは、50センチ位に切られた丸太がいくつにも割られているのが、縄で一束にくくられている。

一束の太さは、電信棒を二まわり位大きくした太さだ。一束70円。けつこう高いが薪の束なんてすつごくカツコよく見え、二束思い切つて買おうと石山に提案したら、石山は「薪なんて捨えばいいじゃないか」と反対する。これが一束20円位なら石山も買うことに賛成しただろうが、ちょっと僕達の予想を超えた値段なので、買うのを躊躇しているのだ。

「おい、お前ら薪を買いに来たのか？」

いつの間にか、本山が僕達のそばに来ていた。

「そう思つたんですけど、ちょっと高くてその辺の木を捨おうと思つてたんです」

僕の返事に本山は「よし、先生が薪を買つてやるから持つていけ」と気前よく言つてくれたので「四束いいですか?」と僕は思わず言つてしまつた。本山は一瞬ひるんだが「まあ、いいぞ」と、無理した顔をして言つた。

僕と石山は、両手に薪の束を持つてテントまで戻つたが、けつこの薪の束は重く、疲れた身体にはちょっとしたきつさがあった。しかし逆にその重さが嬉しくも感じた。獲物を仕留め持つて帰る猟師の喜びみたいなものである。

キャンプ場に着いたので気が緩んだのか、テントを張り終え一息ついた時にはもう4時になつていた。今まできぱき動いていたのに、だれかしらどつかに遊びに出掛けたりするし、テントを張るものんびりやつたので時間があつと言つ間に過ぎてしまったのだ。もっとも今回のキャンプのゴールがこのキャンプ場なので、何事も

急いでやる必要は全く無いと全員思つてゐるからゆつくりテントを張つたことに反省する奴はない。今まで一生懸命動いていたのを、今度は逆にのんびり最後の場所を味わおうとしているのだ。明日の朝には、ここからバスに乗つて帰らなくてはいけないのだから。そんな気分だから、夕食作りもゆつくり支度をした。

残つた食材は明日の朝食分を残し、全部使い切つてしまつ。飯盒に入れる米も少し多めにした。このキャンプ場は今井浜のキャンプ場より全てにおいて設備が整つていたので何をするのにも気持ちが良い。

静かな湖畔の森のかげからもう起きちゃ いかがとカツ コーが鳴

くー

「このキャンプ場に湖はないが小さな池はある。そして森の中だからここの歌のイメージそのままでつい鼻歌がでてくる。今までキャンプした場所はただテントを張つたという感じだつたが、このキャンプ場はまさしく夏高原の涼やかなところで、ちょっとリッヂな気分にさせてくれる。高原と言つても原っぱではなく森の中だが、太い木々に囲まれている方が、いかにもキャンプという感じで、僕達の気分は最高に高揚してゐた。

「おい、本物の薪だぜ」小泉は嬉しそうにそう言つた。

食事が終わるとまだ薪が余つてゐたのでキャンプファイヤーをした。ちゃんとしたキャンプ場、ちゃんとした薪によるキャンプファイヤー、昨日のキャンプも将来大人になつたときつといい思い出になるのだろうが、今は断然こっちの本物のキャンプがいい。

燃えろよ燃えろーよ 炎よ燃えろ

隣のテントでもキャンプファイヤーをやつており、そこから歌声が聞こえてくる。遠くの方でも歌声はする。そうだよ、これだよ、この楽しい雰囲気がキャンプだよ。これなら加山の別荘でやつたバーベキューにも負けないのに、立花達、絶対こっちの方が楽しかつたのに。この後、本当にこの歌のとおりなるとは思わなかつたが。隣や遠くで聞こえる歌声には女の声もする。その声を聞くと、僕達

のキャンプにも女がいたら楽しかったのにと悔しくなつてしまつ。キャンプファイヤーの炎が段々小さくなる。明日のための薪を確保したら、もうこの炎の中に入れる薪はない。

ホー、ホー、

ふくろうの声だ。初めて聞く。

「おい、今の聞いたか」

石山が言つたが、みんな『何言つてんの』って顔をしている。

「ふくろうの鳴き声だよ」石山が言つと「聞こえないよ」と小泉があつさうに言つ。

「ふせけんじやねえよ。何かの聞き間違いだよ」と、西口も言う。『いや、俺も聞いた』と僕は口に出さない。なぜなら、炎がどんどん小さくなるにつれて、僕の身体のエネルギーも段々小さくなつてしまつたからだ。

「俺、もう寝るよ」

僕はそつとテントの中に入り、一番奥の寝袋にゅっくり入つていつた。急に疲れが出てきたのか、寝袋に入つるともう身体が嬉しそうに、全ての力を抜いている。

「おい、蚊取り線香は出川の番だぞ。最後にひやんとテントの入口に置いとけよ。蚊が入つてくるからな」

石山の声が涅槃の近くで聞こえているようだ。

みんながガサガサやつててゐるところまで意識があつたが、その後は深い眠りに僕はついた。

## テントが火事

「カワパン、起きろよ、カワパン」  
誰かが僕の耳元で激しい声を出す。

『誰だよ、眠いなー』僕の意識はほとんど向こう側にいつている。

「カワパン、起きろ、火事だ」

『火事……』

「カワパン、火事だつて」石山の声だ。

火事……まだ半分は意識が向こうから戻つてこないので、回路  
がつながらない。

「カワパン、目を覚ませよ、火事だ」

石山の必死の声……目を開けて見る。渦を巻いた煙がテントの  
天井をうごめき回っている。

『ああ、火事が起こったのか』。

「みんな、早く外に出ろ」

本山が外で怒鳴っている……『眠い、火事は消したんだろ、そんな  
に慌てなくてもいいじゃないか』。

「カワパン、早く起きろ」

石山が強引に僕を寝袋から引っ張り出す。上半身を嫌々起こすと  
二つ隣りに寝てた細井も今やつと起きたようでのんびりと寝袋から  
出ていたところが見えた。

「もう、消えたんだろ。俺眠いから、寝るよ」

テントの外では必死になつて本山が「早く、外に出ろ」と壊れた  
レコードのように繰り返している。

「カワパン、何言つてんだよ。外に出るぞ」

天井に煙は充満していたが、火は見えないし、寝ていれば煙を吸  
うことないと考えた僕は、そのまま寝る方を選択したかったが、  
石山が強引に手を引っ張りテントの外に出そうとするので、力の抜  
けきつた僕にはそれに逆らう力はなく、しぶしぶ外に出た。

テントの外に出ると風が頬をつつ。涼しいところより、ちょっと冷たい。

テントの目の前で本山をはじめ全員腰を下ろし、茫然とした田でテントを見ている。その後ろには、いつの間にか集まつたやじ馬達が、ワイワイ何やら好き勝手なことを喋つているが、何を言つているのかわからない。

僕も小泉の隣で腰を下ろしテントを見た。黒い煙がテントの尖つた先端から、モクモクと勢いよく出ている。火は消えたのに何でまだこんなに煙が出るのだろうと疑問に思うが、それ以上にこんなに煙がテントの中に充満していたのだとびっくりした。最後まで中で寝ようとしていた自分に恐ろしさを感じる。

恐ろしいと思った瞬間、僕の意識は完全に戻り冷え冷えとした冷気を身体全体に感じた。

「どうも蚊取り線香の火がテントに燃え移ったみたいだ」

僕の目がちゃんとしたなと石山もわかつたのだろう。火事の説明を冷静にしてくれる。

テントに火が移つたのを一番初めに気付いたのは本山で、急いで火を消すと同時に大声を出し、みんなを起こしたそうである。そんな騒ぎ全然気付かなかつた。疲れがひどく深い眠りについていたようだつた。もし、誰もいなく一人でテントに寝て、火事にあつたら、僕は死んでいたことになる。危なかつた。

「出川、お前ちゃんと蚊取り線香を置いたか？」

小泉の問い詰めに「置いたよ。俺はちゃんと決められた場所に置いてたぞ」と出川は答えた。

原因は蚊取り線香の火だと推測出来たが、なぜ、蚊取り線香の火がテントに移つたかは、わからなかつた。しかし、わかる必要もなく誰かの足か手が誤つて蚊取り線香を倒したのだろうと予測は出来、その犯人を探したところで寝ていた時のことだから罪もなく結局みんなで決めた蚊取り線香の場所が悪かつた訳だから、責任は全員にあると言えるのだ。

煙がテントの中から全て抜けるのに意外と時間がかかった。目はすっかり覚めている。

「さあ、寝よう」

煙が全く見えなくなつた時、本山が力なくつぶやく。  
テントの入口は焼けただれ、三角の壁が完全に無くなつていた。  
そして、そこから外気がテントの中に入り、というより、ほとんど外で寝るのと同じで外気も内気もない。ただ屋根があるという状態だったので、寝袋から出ている顔がひんやりしている。これは簡単に眠れないなと思ったが、5分後には簡単に眠っていた。

次の日、朝起きた時気分は最低であったが、5分もすると普通の気分に戻っている。燃えたテントは本山の卒業した大学から借りてきたので、テントに対し誰も責任を問われない。ただ一人本山を除いて。だから、5分もすると普通の気分に僕はなつたが、それは本山を除いて全員そつみたいだった。

「二コ二コしながら、「昨日は凄かつたな」「カワパンと細井ずっと寝てるんだもの、お前らおかしいよ」「ふざけんじゃねえよ、お前ら」「なんて、軽口を叩いているのだから、誰一人本山が暗い顔をしているのを気付かなかつた。

キャンプの最終日、もう何の予定もない。朝食を食べ、テントをたたんだら、バスに乗つて帰るだけである。そのため、全てのことをのんびりやつていた。今までせわしく動いていたのと対照的に、最後のキャンプの時間をかみしめていた。

「カワパン、このキャンプ場、温泉があるぞ」

朝食をとつている時、小泉が口を激しく動かしながら、言つてくれる。昨日の夜、あれだけのことがあつたのに遅い奴だ。

「温泉があるのか、飯食つたら行こうか」

よくみんなの顔を見ると、ススだらけである。昨夜の火事で顔にススが付いたものと思われる。

「石山、温泉行こう」と僕は隣の石山に言い、小泉は隣で細井を誘い、石山は隣の出川を誘つて、食事が終わる頃には、みんなの頭の中は温泉でいっぱいになつた顔をしている。

「先生、温泉があるんですけど、入つてもいいですか?」

食事が終わつた時、本山に聞くと「温泉か」と少しつぶやいた後、「まあ、いいけど。テントをたたみ、帰る支度を全て終わらせてからな」と、力の無い声で言つた。

「先生は、入りませんか?」

「先生は残っている。みんなで行つてこい。ただ、バスの時間には遅れるなよ。10時半だぞ」

「わかりました」と、そばで聞いていた全員元気よく返事をし、俄然やる気になつて、食事の後片付け、帰り支度をしたが、本山はうつろな目ですつとテントを見ていた。

当初の予定では昨日一日をキャンプ場で楽しむ予定だつたが、山登りが思つたより時間がかかつてしまい、キャンプ場で楽しむ時間が無くなつてしまつたので、温泉はこのキャンプ場で楽しむ唯一のイベントになつてしまつたそんなわけだから、浴槽で温泉をかけてはしゃぐは、潜ぐりっこをし、誰が一番息を止めていられるかとか、身体を洗うのをほつといて遊んでいた。

わいわいしゃべりながら笑顔いっぱい温泉を出ると、本山が恐い顔をして待つていた。

「お前達、バスの時間は10時半だと言つただろう。今10時半なんだぞ。今からどんなに急いだつて10分はかかる。なんで約束の時間を守らないんだ」

本山は僕達を横一列に並ばせ、怒鳴つた。

本山の怒鳴り声が止むと、ミーン、ミーンと蝉の声が響いてくるが、本山にその声は聞こえないだろう。

本山は一番はじに立つてゐる小泉から順々に平手を頬に打つた。やさしい平手打ちではないが、そんなに痛くはない。最後に僕を平手打ちした後、がっくり肩を落とし「もういい、帰る支度をしろ。先生は帰りが遅れたので電話をしてくる」と寂しそうな背中を見せ、森の道を歩いていった。

「おい、本山イライラしていなか?」

小泉が何にも考へないで聞く。

「当たり前だろ。あれ大学から借りたテントだぞ。入口まるまる焼いたんだから、頭の中はどうしようつて、いっぱい」

石山が無神経な小泉の発言にあきれ顔で答える。

「ふざけんじゃねえよ」

出川は意味なく意味がわからないことを言つが、誰も出川の言葉をまともにとつていないので、無視している。

「でも、ぶたれるとは思わなかつたな」僕が言うと、「先生だつて人間だぜ」石山が大人ぶつたことを言つ。でも確かにそれは正解だ。僕達は本山を先生だと思い接しているが、社会人で考えればまだ新米先生で、大人の1年生みたいなものだ。人間的成長はこれから的人生で作っていくもので、今はまだ始まつたばかりなのだ。僕達の前では一生懸命先生として接してくれたけど、テントが燃えたことで、一個人になつてしまつたのだろう。

今日は帰るだけだからバスの一本や二本僕達は遅れても全然構わないと思っていた。大体このキャンプ自体計画通りに行なわれたことはない。また、計画通り全て行おうとしたら無理が生じ、楽しくないし、事故が起ころるものかもしれない。昨日までの本山はそのところがよくわかっていて、僕達の好きなようにやらせてくれていたし、僕達の行動に文句を言つことは無かつた。ただ、危ないことが起こりそうな時だけ、僕達を注意したり計画の変更を指示しただけで、基本的には僕達の行動を僕達に任せていた。だから、10時半のバスに乗り遅れたつて、昨日までならそれもよしとして、次のバスに何も言わず乗つただろう。

## 加山が海に落ち行方不明

リュックはキャンプ場の受付に預けているので、そこに向かっているが足取りは重い。リュックを担いだらもうバスに乗るしかないのだ。次のバスまでまだ四十分もある。まだまだこの辺を遊び歩きたい。キャンプ場のまわりは面白いことがいろいろありそうだが、もうそれも確かめられない。昼食をキャンプ場で食べて午後出発してもいいのだが、リュックを担いだらもう帰るしかないだろう。

本山があんな状態でなければ、「まだ、もう少しいましょうよ」と言えば、本山も黙つてうなづくだろうが、あんな状態だと黙つて帰るしかない。

受付でリュックを受け取るとみんな黙りながらバス停に向かい、バス停に着いても「ふざけんじやねえよ」と出川が小さな声でつぶやく以外誰も喋らない。祭りの後の淋しさを全員感じているのだ。下を向いて本山が来るのを待つ。

下を向いているといつても時々顔を上げる。何度も目の顔を上げた時、本山が走つてこちらに来るのが見えた。何をあんなに急いでいるのだろう。バスの時間はまだまだあるのに。

本山はハアハア言いながら、僕達の前に来るとすぐ何かを言おうとしているのだが、ハアハアという息づかいが強く言葉が出てこない。それでも何とか口を開く。

「大変だ、加山が海で行方不明になった」

本山が何を言っているのか、きっと誰も理解しなかつたと思つ。僕をはじめみんなポカーンとしていたからだ。

「昨日、加山がヨットに乗つていて、海に落ちたらしいんだ

本山の次の言葉でやつと事態が飲み込めた。

「それでどうなったんです?」

「加山は見つかったんです?」

「まさか死んだという事はないですよね」

みんな一斉に本山に質問をぶつけるが、みんな一斉に喋ったので、本山も何を答えていいのかわからず、「今のところわかっているのは、それだけだ。先生はこれから白浜にある加山の叔父さんの別荘に行こうと思うから、お前達はバスに乗って修善寺に行き、帰れ」とみんなの質問を無視し答えた。

加山が海で行方不明。意味はわかるが現実感がない。僕の今まで生きてきたなかで、知りあいが大病する、事故に遭う、死んでしまう、ということはほとんど無い。敢えて上げれば、小学2年の時、クラスのかずえちゃんが、バス通りを斜めに渡ろうとして車にぶつかり腕の骨を折って全治一ヶ月。小学3年の時、担任の村上先生に赤ちゃんが出来て一週間入院。そして僕の一番上の兄が、オートバイで倒れて足の骨を折って二ヶ月ギブスをしていたくらいだ。

加山が海に落ちて行方不明になつたということはそれらの事故とは比べものにならないほど重い。昨日海に落ちたならもう一日余り加山は海の中にいることになる。大人の体力を持ちそれに何日だって泳ぐことが出来ると言いたことがある加山なら、たつた一日ぐらいい海の中についても死ぬことはあるまい。

本山はバスの案内所に行き、東伊豆に行くバスがあるか調べにいつた。

「俺、本山と一緒に白浜に行くよ」

石山にそつと言つと、石山も一緒に行くと言つ。みんなにも白浜に行くと言つと、小泉も行くと言い、細井も行くと言つたので、迷つていた出川も行くと言つた。

本山が戻つてくると全員で「ついていきたい」と言つたら、本山も「わかつた。バスはすぐ出るみたいだから急いで切符を買おう」と言つた。

バスに乗つてから段々事の深刻さが襲つてくる。それは僕だけでなく全員同じみたいでみんな言葉数が少ない。普段ならバスの外の景色を見ながらあーだ、こーだ喋つたり疲れた奴は眠つたりするのだが、みんな一樣に口を閉じ、目を余り動かない。

頭の中は冴えている。スカーンとしている。何でこんなに頭の中が冷静で落ち着いていられるのか。みんなに今、僕の頭の中を見られたら、友達のことを心配しない非人に思われるかも知れない。

バスの窓から見える景色も凄くはつきりいつもより見える。色がとても鮮やかに見えるのだ。こんな時は動搖して加山の安否だけを願うのが普通なのだろうが、いろいろなことを考えてしまう。もちろん加山の安否も一番考えているのだが、加山が死んでいたらどうなっちゃうのだろうとか、水口はもうこのことを知っているのか、もし加山が死んだら葬式には何を着て行けばいいのだろうなんて、本当にばち当たりな事も考えてしまうのだ。

## 加山のおじさんの別荘

加山とは2年の夏から親しくはしていなかつた。ただキャンプ初日、加山から褒められ、僕と仲間になりたいみたいなことを言つたので、これから僕と再び特別な仲になつたかもしだい。3ヶ月後には、あの加山の様子なら、何かしらの関係になつていていたであろう。でも今はまだ2年の夏の前と同じ関係にもなつていな。ただ、加山という人間の大きさには憧れでいるし、又、仲良くなれたら素敵なことだとはわかつてゐる。

僕の複雑な心境は、いろいろなことを頭の中に浮かばせる。これが石山なら、単純に身の安否だけを考えていたかもしだい。

「カワパン、今井浜のキャンプの時、加山達が訪ねてきたけど、あれカワパンが呼んだのか？」

バスの中で隣に座つてゐる石山が小さな声で聞いてくる。

「いや、加山が遊びに来たいと言つたんだよ」

「ふーん、そうか。あの時、加山と何話してたんだ？」

「加山、俺達と仲間になりたいとか言つてさ、そんなこと話してた」

僕は、僕と仲間になりたいとは言わず、僕達と仲間になりたいと嘘を言つてしまつた。そつちの方が石山も加山に対し、悪感情は持たないと思つたからだ。

「そうか、加山、俺達の仲間にになりたかったのか。何となくわかるな」

石山はしみじみといつと、また口を閉じた。

バスは1時間で、僕達の登山の出発点伊豆熱川の駅に着いた。

僕達はまっすぐ万二郎岳を目指し歩きそこからゴルフ場にたどり着いたが、大まわりに舗装された道が天城高原、ゴルフ場まで運行していたのだ。

一泊二日かけてやつとたどり着いた所から1時間で出発点に戻つ

た僕達は、そのまま伊豆急に乗り下田に行つた。昼食の時間は過ぎていたが誰も飯のことは言わない。

下田の駅に着き、本山は前もって聞いていた加山の叔父さんの別荘の住所を、タクシーの運転手に見せる。タクシーに乗るなんて、僕は生まれて初めてである。

「川上、お前は石山と小泉と一緒に後ろのタクシーに乗れ。ちゃんと住所も言つたし、先生のタクシーを追いかけてくるから大丈夫だ」と本山は言うと、出川と細井を後ろの座席に乗せる。

トランクにはリュックが一つしか入いらなかつたので、細井と出川の間にもリュックを一つ入れていた。僕達も同じようにリュックを載せると、急いでタクシーに乗つた。初めて乗るタクシーに、心ははしゃがない。

加山の叔父さんの別荘に近づくにつれ段々胸に圧力がかかってくる。息をするのも苦しい。タクシーは重苦しい雰囲気をのせ走る。10分位経つただろうか、白浜の海岸が見えてきた。

国道が白浜の海岸に平行して走つている。その国道を直角に山に登つすぐのところに加山の叔父さんの別荘があつた。

真つ白な家だ。タクシーを降りると下に白浜の海がきれいに見える。歩いても数分で行けそうだ。

白浜の海はエメラルドグリーン、砂浜はそれこそ白くて、僕はこんな美しい海を見たのは初めてであつた。今井浜と白浜はすぐ近くで車なら10分位で行くことが出来る。それなのに全然海の色も砂浜も違う。立花達も当然この海に感激したのだろうが、全然そんなことは言つていなかつた。

ゆつくり話せば海の色の話や砂浜の白さの話もしたかも知れないけど、立花達にはヨットとバーベキューが一番印象に残り、それを一番に僕達に伝えたかったのかも知れない。それに夜になつて僕達のキャンプ場を訪ねたのだから、今井浜の砂浜も海も色がついておらず、同じような海だと勘違いして、すぐに言つ必要はないと思つたのかも知れない。

もし僕達もキャンプに行かず加山の別荘に来ていたら、この海を何のわだかまりもなく感動出来ただろう。このちょっとした高台からずつと海を眺めていても退屈しないし満足出来たと思う。

みんなもこの海の色を当然見ているのだが、それに対し何か言う者はいない。

タクシーからリュックを降ろすと本山は別荘のチャイムを押す。扉のドアが静かに開くと本山は「上原中学の教師で副担任の本山です」と静かに言うと、応対に出た人は「中はどうぞ」と僕達をリビングに案内してくれた。

玄関の広さに普段の状態ならびっくりするだろうし、リビングにはもつと驚くだろう。照明はシャンデリア、ソファーハは柔らかそうな皮で包まれている。壁には何やら高そうな絵が掛っているし、食器棚には見たこともない皿やティーカップがきれいに飾られている。大きなテレビから音がしているので見てみると色がついている。

カラーテレビだ。

新聞のテレビ欄にカラーという文字が番組によつてついている。僕はカラーテレビが見られるのかと、そのカラーとついていた番組にチャンネルを合わせたが全然色はついていなかつた。カラーテレビという値段の高いテレビを買わなければ、色のついた番組が見られないと知つたのはだいぶ経つてからである。

ソファーの下には豪華に見える絨毯。きっと値段が高くて高価だと思う。台所には大きな冷蔵庫が見える。あれはきっとアメリカ製だ。日本製であんな大きな冷蔵庫は見たことない。大人四人位いないと運べそうもない大きさに見える。

リビングに入いると部屋の中が涼しい。扇風機による風の涼しさではない。万二郎岳を登った時、下から沸き上がってきた霧の涼しさだ。あの時は天然クーラーであつたが、これは本物のクーラーである。

「カワパン…カワパン達も来たのか」  
フカヒレが僕達を見て近寄ってきた。

いきなり別世界に入ってしまい、オドオドしていた僕達は、フカヒレの姿を見てホッとした。

「今、キャンプ場から来たんだけど、どうなんだ？」

僕がそう聞くと、本山も状況が知りたくて、フカヒレのところに来た。リビングの中は20~30人、人がいたので、本山も取りあえずどこに行くか迷っていたみたいだ。

「まだ、見つからないんだ」

フカヒレが喋り始めた時、ホゾ、神崎、前原、熊田、土屋という加山の別荘に遊びに来ていた仲間が集まってきた。水口と立花はどうしたのかとリビングを見回すと、暖炉の横で頭を垂れ、肩を丸めている水口と、その隣で水口の肩に手を置いて慰めている立花を目にした。

「俺達も今日の午前中に来たんだ。加山が海に落ちて行方不明になつたと知つたのは、昨日の夜九時頃で、取りあえずこの別荘に遊びに来た奴に連絡して、今日の朝一番で来たんだよ。カワパン達と別れて次の日俺達ヨットに乗せてもらつたんだけど、その時は、少しほど波がたつていただけどそれほどひどくはなかつた。だから、みんな凄く楽しんで喜んで家に帰つたけど、加山はこの別荘に2週間いる予定だと言うから、下田の駅で別れたんだ。そして、昨日いつものように加山の叔父さんと下田港からヨットに出て、午後の2時頃海に落ちたらしいんだ。

台風は日本に上陸しないで九州の方に行つたけど、昨日は結構波がたつていて、海は荒れていらし。それでも加山はショウちゅうヨットに乗つていたらしく、まさか海に落ちるなんて…。

悪いことに昨日も結構暑かつたろう。思わず救命胴衣を外して汗を拭つていたらしく、そこに波が当たつてヨットがドーンと傾いた瞬間、海に投げ出されたらしいんだ。

昨日の夜中のニュースと今朝のニュースでもそのことがテレビで流されたから、もうほとんど学校の連中もこのことは知つているとと思う。カップと校長ももうすぐここに来るらしい。

今、テレビついてるじゃん。情報があれば電話がすぐ来ることになってるんだけど、一応テレビのニュースもつけておいた方がいいと言つことでつけるらしい」

フカヒレがひと通りの説明をすると本山は僕達のそばを離れ、リビングの中に入つていき、知らない大人のところに近づいていった。フカヒレからひと通りの説明は受けたが、他の情報も知りたくてホゾや神崎からも話を聞いた。それによると、加山のヒゲの叔父さんはヨットだけでなくクルーザーも持つていたらしく、そのクルーザーで加山を探しているらしい。そして、加山の両親は下田警察署で安否を祈つているらしく、今この別荘にいるのは、加山の父の妹の叔母さんがいるらしい。

この別荘にいる他の大人達は加山の親戚、加山のお母さんの親戚、ヒゲの叔父さんの会社の社員、そして警察と消防署と役場の人間も、一人ずついるそうだ。

本山は大人達の中を歩き回り、加山の叔母さんをやつと探して、あいさつをしている。

この別荘にいる人達は、ただ加山が助かる事を祈つて待つしかなく、時々鳴る電話のベルにビクッとなり耳をそばたてる。

加山はまだ死んだとは決まっていない。死んでしまったなら、自分の気持ちに浸り、ただ、頭を下げて嘆き悲しむこともいいかも知れないが、今はまだわからないのだ。ただ、この別荘で連絡を待ち、重苦しい雰囲気の中で加山の無事を祈つているだけというのは、僕にとってとても苦しい時間であった。

加山を助けるため、今なら何か出来ないかと考えた時、急に海に探しに行こうと閃いた。

「石山、俺、加山を探しに行こうと思つんだけど、キャンプで残つたお金あつたら出してくれよ」

閃くとすぐ石山に相談した。

「カワパン、海に行つてどうすんだよ」

「船を出して海を探すんだよ。船を借りるとなるとお金がいるだ

う

「ボートだと無理だぞ」

「そりゃあそうだよ。漁船とかエンジンの付いてる船を借りるさ  
石山は承知すると小泉、細井、出川を呼び、僕の言つたことを説明し、みんなからキャンプで残つたお金を集めめた。お金は僕のお金も入れ全部で1万1500円集まった。

「今から、カワパンと俺とで行くから、本山やみんなには上手く言つといってくれ」

石山はそう言つと僕に「さあ行こう」と言い、さつさと玄関に向かつた。石山も僕の提案に賛同し、自分も一緒に行くとすぐ決意したのだろう。ただ、待つていろより、動いていた方がいいのは、石山も同じだったのだと思う。

別荘の玄関扉を開いて外に出るとホツとする。さつきまでの重たい気持ちはどこかに素つ飛んだ。加山を助けようということだけ考え動くのは、エネルギーが湧いてくる。別荘から海に向かっての下りの道を走つていったら、そのまま海岸まで着いた。海岸に隣接している国道は車がびっしり詰まつていて渡るのには苦労したが何とか上手く擦り抜けた。

海岸は海水浴客で賑わっている。みんな楽しそうな顔をしているが何かそれが今の僕には不自然に見える。

「すいません。ここの辺で船を借りる所ってありますか?」

取りあえず田川についた海の家に入り、そこのおばさんに聞くと

「あそこにあるよ」と手漕ぎボートを指差した。

「違うんです。エンジンの付いた船を捜しているんです。友達が海で行方不明になつて、それで海を捜そうとしているんです」  
いい加減に聞いていたおばさんは、僕の必死な声と行方不明の言葉に反応し「ちょっと待つて」と言い、店の奥に入つていった。  
そしてすぐに男の手を引っ張つてきて「あなた、ほらテレビのニュースでやつてたでしょう。中学生がこの辺で遭難したつてこの子達同級生みたいだけど、船で探しに行きたいんだって」と早口でそのおばさんのだんなと思われる男に言った。

「そうか、そりゃあ大変だ。でもこの海岸に船はないぞ。隣の港か下田の港に行かなくちゃな。そうだ、ちょっとここで待つてろ」と言うと、その男は海の家を飛び出し、道路の方に駆けていった。  
海のおじさんがいない間、海の家のおばさんは僕達にサイダーと焼きとうもろこしを渡し「食べなさい」と言ってくれた。

とうもろこしを食べていると、海の家のおじさんは、真っ黒に焼けしわくちゃの顔をしたこれこそ海の男の見本というような、歳はとつているけど年齢がわからない顔の男を連れてきた。

「おい、坊主達。」のおじさんにさつきのことについて頼んでみな海の店のおじさんに言われ、僕はとうもろこしを思わず口から離した。

本当にさつきまではお腹が空いていなかつたのだが、加山を助けるのだと加山の叔父さんの別荘を飛びだし一生懸命走つたら急にお腹が空いたようで、海の家のおばさんのだした焼きとうもろこしがとてもいい匂いがして、思わず食らいついてしまつた。

「あの……」

焼きとうもろこしを食べるのに夢中になつていたところへ、いきなり説明しろと言われたので、頭が真っ白になつていて。それに連れてきた男はいかにも恐そうだ。

「えーと」と僕が口ごもつていると、「友達が昨日海に落ちて行方不明なんです」と、石山が喋りだした。

「僕達なんとか友達を助けたいんです。それで、船を捜してゐるんです」と石山が喋り、海の男の反応を見た。全くさつきと変わらず口を真一文字に結んでいる。

「加山君は、泳ぎが上手いんです。一日も一日なら泳げるんです。だから、まだ海の上で泳いでると思うから、何とか助けたいと思つてるんです」

僕は石山に続き頼んだ。喋つた後、ちらりと海の男を見たが、顔は変わらない。

「あの、これ僕達の全財産です。このお金で走れるだけ船を出してくれませんか?」

僕はそう言いながら、ポケットから千円札を11枚と百円玉5枚を出して見せた。

「ついて来い」

海の男は初めて口を動かした。動かすと同時に踵を返しさつと歩いていく。

海の家のおじさんは「ついていけ」と言つたので、サイダーの空き瓶ととつもろこしの芯を店に置き、慌ててついていった。

海の男はどんどん歩く。国道に出ると海を右手に見ながら国道を少し歩き、また、海に向かつて歩くと、漁船が五、六隻つないである小さな漁港に着いた。

海の男の歩くスピードは変わらない。僕達も必死についていく。海の男は変わらないスピードで漁港に着くと、そのまま船に乗り、隣りの船とつながつて、ロープを手際良く外していく。

船は大きくて無い。全長十メートル位だろうか。操舵室は天井があるが後の部分は吹きさらしだ。

僕と石山は埠頭で立ち渴くしていると、「早く乗れ」と海の男が命令する。海の男の声は恐い。僕と石山は、慌てて船に飛び乗つた。

僕達が船に乗ると海の男はロープを一本持ってきて、僕と石山の

腹にそれぞれ結び、片割れのロープを船に結びつけ「このロープの範囲でしか動くなよ」と言つた。

このロープは救命胴衣の代わりなのだろう。これなら間違つて海に投げ出されても船から離れないで安心だ。

海の男が操舵室に行くと、すぐにエンジン音がして船がゆっくり埠頭を離れていく。そして湾を越えると波がてきた。船は波を乗り越える度に大きくたてに揺れる。しばらく船が海の上を走ると、陸地が段々小さくなる。

「友達の名前を呼べ」海の男が叫ぶ。

エンジン音がうるさく船の上では大声を出さないと声が通らない。僕と石山はエンジン音に負けないぐらい大声で、「加山」と、叫んだ。

左舷には石山、右舷には僕、お互いが半分ずつ受け持ち、叫びながら海面を凝視する。沖に出ると波も少し緩やかになつたが、それでも波が邪魔して海全体を見るのは難しい。これが嵐の日なら一面見渡してすぐ次の場所に移動出来るだろうが、波があるとそういうかない。

「加山」  
「加山」

果てしなく僕と石山の叫び声は続く。すると遠くの方にキラリと光るもののが、僕は急いで海の男の所に行く。ロープが身体にくるまつているが、僕達の場所から操舵室までは5歩も歩けば着くので問題はない。

「おじさん、あそこに光るもののが

僕が指差すと船は方向を変えあつという間に光るもの所まで行つたが、それはただの流木であった。がっくり肩を落とす僕と石山、その後、海のおじさんが6個、僕と石山が2個漂流物を見つけた。流木、浮袋、ビニール、段ボール……ズボンを見つけた時はみんな色めきたつたがその代わりズボンとわかつた時の落胆は他の漂流物以上だった。

船を走らせて1時間以上になる。加山のおじさんの別荘を出たのが2時前だから、きっと今は3時半から4時位だと思つ。ぎりつゝ太陽はほんの少しだけど、ぎらつきが少なくなつた。しかし、僕達の疲労は極限まできている。

海のおじさんがビールを僕達に渡し「飲め」と言つたので、のどの渴きには勝てず飲んでみた。とても苦い。こんな状態でなけりやあ一口しか飲まないだろうが、石山と一人で一本飲んでしまつた。石山は眞そくにビールを飲んでいる。その飲み方は飲み慣れているという感じだ。喉が潤うとまた声に力が入る。

「加山ー」

「加山ー」

遠くに白い船が見えるとその船はどんどん大きくなる。どうやらこっちに向かってきているみたいだ。

ブルルルールー、ジャー

エンジン音と波をかき分ける音がどんどん近くなる。白い船は僕達の船のすぐ近くに来た。真っ白なクルーザーだ。こっちの漁船に比べると明らかにカッコいい。西洋の白亜の御殿と僕の家位の違いがある。クルーザーから男が大声を出す。

「この辺で男の子が流れていなかつたですかー」

よく見ると加山のヒゲの叔父さんだ。あのクルーザーはヒゲの叔父さんのクルーザーで加山を探しているのだ。

海の男は船のエンジン音を小さくして「こっちも捜しているんだー」と叫んだ。

クルーザーのエンジン音も小さくなつた。

「どういうことです」

ヒゲの叔父さんの問いに「こいつらに頼まれたー」と海の男が答える。

船が止まっているので僕と石山はテッキにつかりながら立ち上がり、ヒゲの叔父さんにおじぎをした。ヒゲの叔父さんは僕達の顔をじつと見て「ありがとう」と言い、エンジンの音を大きくして、

あつという間に去つていった。

それから一時間位の間に漂流物を全員で4つ見つけたが、加山の姿は見つけることが出来なかつた。

「加山ー」

僕と石山の声はすっかりかすれ、喉が痛くなつてゐる。あれからもう一本、海の男はビールをくれたが一人とも少しずつ口に含むことにした。ビールで酔つ払うことを恐れたためだ。

もう時刻は6時を過ぎてゐるだらう。西に浮かぶ太陽がそれを教えてくれる。太陽が、ある角度から下に落ちていくと、いきなり海が見づらくなる。

「もう、今日はここまでだな」

太陽が傾いてきたことと僕達の疲労を見て、海の男は優しく言う。初めて聞く海の男の優しい声だ。それはきっと慰めるつもりの声でもあつたに違ひない。

「でも港に着くまでずっと搜します」

かされた声で僕が言うと「わかつた。ゆっくり走るから、よーく見ろ」とまた優しく言つてくれた。

船はゆっくり海の上を走る。大分遠くに来たみたいで、なかなか出港した港には着かない。太陽がだいぶ西の空に落ちていく。空の色が静かに変わつていて、波がいつの間にか出てきた。

「加山ー」

僕も石山も涸れた声を振り絞つて出しが、段々それが涙声になつていく。諦めが涙となつたか、悔しさが涙となつたか、僕にはわからぬし、きっと石山もわからないだらう。

船が小さな漁港に着く頃には、太陽が今にも沈みそうな位置にあり、空がだいだい色になつっていた。西側だけでなく空一面がだいだい色なのだ。

「もう誰かが見つけてるかも知れないぞ」

海の男が優しく僕達に言う。確かにそうかも知れない。今頃にこやかな顔をした加山が別荘で冒険話をみんなにしているかも知れない

い。まあそこまではなくてもビニカの病院で疲れ果てて寝ているかも知れない。

船が漁港に着くと、僕はポケットからお金を全て手に持ち海の男に渡そうとしたら「そんなのもらえる訳ないだろ。海で遭難した奴は仲間だ。仲間から金はもらえねえ」と海の男は言い、お札を持った僕の手を押し返した。

船から降り、海の男にお礼を言つと海の男は、「あきらめるなよ。お前達があきらめなければ、友達もあきらめねえ」と、ゆっくりと船の上から僕達に叫んだ。再び僕は涙が出てきた。

涙が出てくる理由なんかわからない。身体は波しぶきをかぶつて、ずぶ濡れである。乾いた道路を歩くと濡れた足跡がつく。

石山とは声がかされているといふこともあって、一言も喋らない。ヒゲの叔父さんの別荘に着く頃にはすっかり陽が落ちてわずかな明かりだけが残っていた。力なく別荘のチャイムを押し玄関ドアを開けると、フカヒレや小泉をはじめ、たくさんの人が出てきた。

「カワパン、どうだつた?」

小泉がすぐ声をかけてきたが、僕と石山は首を横に振った。

「あなた達、和ちゃんのために探しに行つてくれたの。ずぶ濡れになつて早く入いりなさい。すぐお風呂に入つて着替えなさい」玄関には入つたが、ずぶ濡れのため、上がるのをためらつていると優しそうなおばさんが僕達のところにきて手を引っ張りながら声をかけてくれた。

僕と石山は靴と靴下を脱ぎ、ズボンのまだ乾いてそういう足の裏をあて水をぬぐい家の中に上がつた。

「加山の叔母さんだ」小泉が僕に耳つちする。

「加山はまだ見つからないのか

かされて声が出ないが、やっとの思いで小泉に耳つちする。

「見つからない」小泉は短い言葉で答える。

「小泉から話は聞いた。今度から先生に相談してから行動を起せよ」と、本山が歩いている僕達に声をかける。

加山の叔母さんは僕達を風呂場に案内してくれたが、僕達は場所がわかると、リュックに着替えを取りに行き、それから風呂に入つた。

広い、全て大理石で出来ている。湯船は僕と石山が一人で入つてもまだ、空間が余る。

身体が結構冷えていたようで湯船に入いると凄く気持ちがよく疲れが一辺に出てきた感じがした。

「石山、身体洗うか」と言つたつもりだが、声が音になつて出ない。

湯船につかり安心したのか、今までガチガチだった身体がほぐれ代わりに声も出なくなつっていた。

「カワパン、声出ないのか」

石山の声もかすれてほとんど音にはなつていなかつたが、かろうじて意味はわかり、僕は頭をたてに振つた。

僕達が風呂から上るとみんな近くに寄つてきたが、石山が「声が出ない」とかされた声でかろつじて言つと、みんな「大変だつたな」「頑張つたな」といろいろ言つて、おにぎりとかみそ汁を持つてきた。

腹がもの凄く減つていたがあまり食べる気はしない。

「カワパン、少しでも食べないと」

立花が優しく言つ。神崎が冷たいオレンジジュースをグラスに入れ持つてきてくれたが、それは一気に飲み干した。不思議なものでジュースを飲むとおにぎりも食べられるようになり、一個すぐに胃の中に入れた。本山が近くに寄つてくる。

「みんな8時になつたから家に帰りなさい。ここにいてもみんなが泊まる場所がないからな。取りあえず家に戻るよ。」

石山と川上には言つてなかつたが、8時まではここにいるが、連絡がなかつたらひとまず帰ることにみんなで話し合つていたんだ。下田までは車で送つてくれるみたいだから早く支度をして

本山の言葉を合図に、みんな荷物を持って玄関に歩きだした。

「お前達が戻つてくるのが遅かつたら、近くの旅館にでも泊めようと思つてたけど、まだ、電車に間に合ひから早くリュックを持つてくるよつこ」

本山は、僕達にそつと自分のリュックを担いだ。急に海の男の言葉が甦る。

『あきらめるなよ、お前達があきらめなれば、友達もあきらめねえ』

僕は本山の手を引つ張ると「まだ、帰らない。今日はテントに泊まる」と言つたが、声にはなつていない。

本山は僕が何か言おうとしているので、ポケットから手帳と鉛筆を取り出した。僕は急いで鉛筆を取ると、手帳に『テントで泊まる』と書いた。するとそれを見ていた石山も「僕もテントに泊まる」と、かくれた声を出した。

「先生、俺もテントに泊まるよ」

小泉が本山にはつきり言つた。本山は少し考えたが「だめだ今日は帰れ。小泉、さつき相談して決めただろ」「と強く言つたので、玄関まで行つていたフカヒレ達も何があつたかと思い戻ってきた。僕は頑として「いかない」と口を開き、手を振つた。もちろん「いかない」という言葉は声にならないが、思いはみんなに届いた。

「先生、家に電話して親がいいって言つたらいいでしょ。」

小泉の意見に本山も折れ、親の承諾を得ればいいと言つことになつたので、フカヒレや熊田も残ると言つた。結局、親に順々に電話し、残ることになつたのは僕と石山、フカヒレ、小泉、熊田であつた。

僕の家には小泉が代わりに電話して、オッケーをもらつた。熊田とフカヒレは西山と細井から寝袋を借り、小泉は加山の叔母さんから毛布を何枚か借りていた。

僕達を今井浜のキャンプ場に車で送つてくれたのは、立花達を下田の駅まで送つたヒゲの叔父さんの会社の社員だった。車だと今井浜のキャンプ場は近い。ここでキャンプの初日にテントを張つたの

で、暗くても要領はわかっていて意外と簡単にテントは張れた。

テントの穴の開いた入口は小泉が別荘から借りてきた毛布を上手く紐でくくりつけ塞いだ。

本山は上原中学校から来た校長、カツパと一緒に白浜の旅館に泊まる予定だつたらしい。しかし、旅館に寄り、そこで食事をしていた校長とカツパに事情を説明し、僕達と一緒にテントに泊まることにしたようだ。

校長とカツパは僕と石山が出た後、夕方に別荘にきてひと通りのあいさつをし、しばらくは別荘にいたが6時を過ぎた頃、本山を残し旅館に行つたようである。

テントが張られるとみんなすぐに寝袋を出し、その中に入つた。疲れているが眠れない。それは僕だけでなくみんなそうみたいだつた。

「俺よう、今まで3回も転校してるんだ」

いきなり、熊田が寝ながら喋り出した。

テントの外ではキャンプを楽しんでいたたくさんの声が聞こえるが、熊田の声を遮るほどではない。

「だから、いろんな奴にあつたよ。でも加山みたいな奴は初めてだつた。フカヒレとケンカした時、加山が俺を掴んで止めただろう。俺、身動き一つ出来なかつたよ。凄い力だつた。

他の学校だつたら仲間がやられたら、そのクラスで一番強い奴が向かってくるんだ。俺はいつもそいつとケンカしてやつつけてやつたさ。だからフカヒレを殴つた後、次はこいつだと思つたけど、俺を掴んだ力の強さにビビッてしまつたよ。

そんな加山が、『フカヒレも悪気があつた訳ではないんだ。いつもならそんな人の悪口言つた奴ではないんだ』って一生懸命言つて俺にフカヒレと一緒に謝るんだよ。

今までの学校なら加山が俺を殴つて終わりだよ。それだけ力の差があつたから、でも加山はそんなことしない。あいつは本当にいい奴だ。

加山、最近、俺に『いつまでも友達でいよがぜ』って言ったんだ  
ぜ」

そこまで言つと熊田はペタッと喋らなくなつた。

『ヒック、ヒック』と、熊の吠え声のような泣き声が聞こえてくる。

「俺にも『卒業しても友達でいよがぜ』と言つてた」

フカヒレが熊田の泣き声を隠すように喋り出した。

「加山は身体もでかいが、心もでかかった。自分のことより友達のことを大事にする奴だつた。あいつほど友情を大事にしてた奴はないよ」

フカヒレの声も段々涙声になる。

僕は隣で寝ていた小泉の耳に口を持っていき「フカヒレや熊田に、友達ではなく仲間でいよがぜ言わなかつたか聞いてみてくれ」と言つた。

声は出ないが耳元ならスースーした空気の抜けたような声が何とか聞こえると思つたから耳元で喋つたが、思つた通り小泉にはちゃんと聞こえ、僕の言つたことを熊田とフカヒレに質問した。当然最後に「カワパンが訊いてる」と付け加えている。

「仲間なんて言わないさ。友達だよ。友達でいよがぜ言つたさ」とフカヒレが言えば、熊田も『ヒック、ヒック』言いながら「そうだよ、仲間なんてものじゃなく親友でいよがぜ、言つたんだよ」と答えた。

僕と石山がちゃんと喋れないでの、みんなの言葉は段々少なくなりいつの間にか誰も喋らなくなつた。

## 加山の死

次の日の朝、外が明るくなると同時にテントから一人また一人と起きて出ていく。みんなほとんど眠れなかつたのだろう。僕もうとうとしてどこかで何回かは寝ていたかも知れないが、自分の意識はずつと起きてた。

僕がテントの中で起き上がるとテントの中には誰もいない。ゆっくりテントを出るとやわらかな光が辺りを照らしているが、まだ、キャンプ場内はひつそりとしている。

キャンプ場を離れるとそこは海岸である。

『ズババーン』

波の音が急に大きくなる。

砂浜に座り海をじつとみんなが見ている。僕が歩いて近づくと小泉が気付き、「カワパンも起きたか」と呟く。もしかしたら、波の中で加山が手を上げてこちらに向かってくるのではないか、とみんなは海を見ているのかも知れないし、ただ海に癒されたくてポカンと海を見ているのかも知れない。誰も喋らないから、何もわからないうが、僕は起きたばかりなのでポカンと海を見ていた。

波の向こうに太陽はでていない。天気が悪いのではなく、まだ太陽が昇っていないのだ。太陽が昇つてないのに、まわりが明るいなんて僕は今まで思つてもみなかつた。

正月に日の出を見にいくことがよくあるが、僕は行つたことがないし、朝早く長兄に連れられ横須賀の海に釣りに行つたことがあるが、水平線は雲が多く、太陽が顔を現わすのはかなり時間が経つてからなので、僕は太陽が水平線の上に昇ってきて雲の中に存在しているから明るくなつたと思つていた。

今、水平線に少し雲はあるが太陽が昇ればわかるくらいの雲しかない。そんなことを少し思つていると、太陽が顔を出してきた。海にひとすじのだいだい色が走る。みんなの目が輝きはじめ、顔

がだいだい色の下敷きで見るような色になる。

太陽は昇りはじめると思つたよりずっと早く顔を見せてくる。全て見せるのに対して時間はかからなかつた。

日の出を見ることによつてひとかけらの希望を持つことができた。そしてきつとみんなもそう思つたに違ひない。

太陽がかなりのところまで昇り、まわりの明るさもしつかりしてきた時、小泉が「俺、テントたんとくよ」と言つたので、熊田とフカヒレも「俺も行くよ」とそれぞれ言つて、小泉についていった。3人がいなくなると海岸には僕と石山が残つている。

「カワパン、どうだ」

相変わらずかすれた声だが昨日の夜よりはいいようだ。

「何とか」

僕の声も何とか音にはなつてゐる。

9時にヒゲの叔父さんの社員が車で迎えにくることになつてゐるがその時間はかなり先だ。普段ならひと眠りすればそんな時間あつという間にきてしまふけど、今は時の流れが遅い。

「戻るか」と石山の言葉にそのまま従い、キャンプ場に戻るとテントはきれいにたたまれていた。熊田とフカヒレは火をおこしていく。

「昨日、加山の叔母さんにおにぎりはもらつたから、お茶を湧かして朝飯にしようぜ」

フカヒレの言葉にうなづく僕と石山。みんなじつとしているのが嫌なのだろう。何かしら動いて頭の中をそれに集中させなければ、どうしても嫌な事を考えてしまつから何か仕事を見つけたいのだ。

朝食が終わり、後片付けが終わつても何か動いていたくて、海岸に行つて流木を拾い集め焚き火を延々としていた。暖まるのが目的ではないし、料理の火でもない。全く意味の無い焚き火であつたが、みんな黙々と海岸に行つては流木を拾つてくる。

8時を過ぎた後キャンプ場は一番騒がしくなる。寝ぼけ眼でテントから出てくる奴、張り切つて朝食を作つてゐる奴、楽しそうにみ

んなで朝食を食べている奴、と表情はいろいろだが、キャンプ場は完全に眠りから覚めている。

「本山先生」

本山を呼ぶ声が遠くで聞こえる。みんなは気付いていない。僕が本山に知らせようと思つた瞬間、再びさつきよりは大きな声で「本山先生」と言う声が聞こえ、本山が「ここです」と返事した。

ヒゲの叔父さんの社員が厳しい顔をしてこちらに走つてくる。本山を見つけると「先生、和広さんが見つかりました」と暗い顔で言う。

「それで」

本山は加山の生死を聞きたいのだろうが、はつきりそれを言葉に出せない。

「三浦半島で見つかったらしいんですけど、息はしないみたいなんですね」

「息はしていない、それはどういう事です」

「私にもよくわからないのですが、そのような電話が入つたので、すぐお知らせに来たのです。社長とお兄さま夫婦は今、車で病院に向かっているところです」

『息をしていない』どういうことだろう。死んでいるということなのか。生きているけど何かしらの理由で息をしていないということなのか。訳がわからないのは僕だけではなく本山をはじめみんなそうであるのが顔を見ればわかった。

急いでヒゲの叔父さんの社員と一緒に車で別荘に向かった。別荘にはすでに校長とカツパが来ていて、本山が別荘の中に入いるとすぐに一人が飛んできた。

「三浦半島まで流されたらしい。今、身元確認でご両親が病院に向かっている」

カツパが本山に説明している。僕達も本山の側に行つた。

「息をしていないとはどういうことです」本山の質問に「それは医学上の言い方だろう。基本的に死亡というのは、病院で医者が死

んだのを確認して、初めて死亡と発表するんだ。だから、病院に運ばれるまでは、死んでいても死んだという言い方はしないんだよ」とカツパは淡々と説明する。

カツパの答えは非情な答えであつた。本山をはじめ全員、万が一の期待をもつていたから、どどめを刺された思いである。

その衝撃度は崖から落ちて地面に激突したほど凄かつた。

「加山は死んじゃつたんですか？」

フカヒレがカツパに必死になつて言う。

「だから、それはご両親が病院に確認しに行つてる。三浦半島に流されたのが加山なら諦めなくてはならない」

それから一時間位経つただろうか。重苦しい別荘の中で自分が何をしていたのか、後で考えると何も思い出せない時間を過ごしている。と、電話のベルが鳴つた。別荘の中には加山の叔母さんもいて、ヒゲの叔父さんの社員が電話を受けていた。

「はい、そうですか。はい、はい、わかりました。残念です」

最後の言葉で家の中にいた全員は事態が飲み込めた。社員は電話を切ると、くるりと振り返り「今、和広さんだと確認されました。あまり傷がなくきれいな身体だったそうです」と必死になつて喋っているのが誰にもわかつた。この社員も加山のことをよく知つていたのかも知れない。社員は電話の報告をすると目に涙がにじんでくるのが、僕にもわかつた。僕の目にも涙が出てくる。

『ウォーン、ウォーン』

熊の遠吠えのような熊田の泣き声が部屋いっぱいに広がつた。小泉も石山もフカヒレもみんな泣いている。

それから僕達は、本山に連れられて家に帰つたのだが、その時のことは何も覚えていない。ほとんど何も喋らなかつたし、目は何も見ていない感じだつたからだと思うが、何で何もおぼえていなかつたのか自分では理由がはつきりわからない。どこかの精神科の医者ならその時の僕の状態を説明出来るだろうが、僕の記憶では家に戻つて、お母ちゃんに「加山が死んじゃつたよ」と言ったところから

しか覚えていなかつた。

昨日の夜のニュースも、今朝のニュースも、加山が死んだことを流していた。中学生がヨットで死ぬということは、ワイドショーでも絶好のネタなのか、三浦半島の加山が流れ着いた現場に女性リポーターが駆けつけて喋っているのがテレビから聞こえてくる。

加山の遺体が家に戻ったのは昨日の夜になつたそうで、その間病院で死因を探すために解剖されたらしい。昨日僕達が家に戻る間、加山は身体を刻まれていたということをテレビで僕は知つた。

さつき、フカヒレから3年7組生徒全員で学校に午後4時に集まりお通夜に行くと電話があつた。そして、僕に、石山、草津、野口、寺本の一班全員に連絡してと言つたので、僕は草津に電話をしたら草津はびっくりしていた。

僕が、「知らなかつたのか、テレビのニュースでも話してたぞ」と少しかすれた声で言つと「テレビは余り見ない」と答えた。

僕は何か腹立たしく伝えることだけ伝えるとさつさと電話を切つた。次にかけた野口はもう知つていて声を落として返事をしていた。寺本の家に電話はない。呼び出しじよその家に電話をかけて呼ぶことも出来るが、僕は自転車に乗つて寺本の家に行くことにした。

石山からの電話はお昼にかかる予定だからまだ時間はある。昨日の夜、石山から電話があり「明日の昼頃また電話する」と言って電話を切つたから、その時、石山にはお通夜のことを話せばいいと思い、寺本の所に向かっている。

寺本はテレビのニュースで加山の死は知つていた。僕は簡単に集合時間を伝えると「石山から電話がくるから、じゃあな」と言つて、寺本の家を後にした。

じつとしているのは嫌で、動いていたいのだが、おしゃべりも今はしたくない。まだ、自分の中で加山の死をちゃんと受けとめられなく、どうしていいか、わからないからだ。

石山は約束通り正午ちょうどに電話をかけてきたので、学校で会おうと言つて電話を切つた。

僕は学校の校門前に3時半に着いたが、クラスのほとんどの生徒はもう来ていた。石山も出川も細井もいる。フカヒレが一生懸命人數の確認をしている。

約束は4時なのに校門の前にもうほとんどの生徒が集まつているから、10分前にきた生徒でも走つてくる。結構みんなおしゃべりをしている。一番話題になつてするのがワイドショーで加山が取り上げられたことだ。クラスの生徒がどんな形であれ、テレビで何回も流れたのだからその衝撃度は加山の死と同じくらいあるよで、死よりもテレビの方が大きく感じた生徒はヒソヒソとワイドショーの話をしているのだ。

加山は2年の時、目立つ生徒ではなく、付き合つてゐる人間も4～5人だつたから、付き合つてなかつたクラスメートにとつて、加山という人間がどういう人間かわかつてゐるもののが少なく、友達の死というより知り合いの死と感じてゐるクラスメートも多くいるようだ。

寺本が4時ちょうどに走つて校門にきた。フカヒレが「全員集まつたので出発します」と言つたので、僕が「前原や熊田、水口、神崎もないぞ」と言つと「あいつら、もう加山の家にいる」とフカヒレは答え歩き出した。

学校を出発した時は喋り声がうしろから聞こえていたがさすがに加山の家に近づいてくると、みんな押し黙つてゐる。あの角を曲がれば、加山の家が六軒先に見えるところまで来た時、騒がしい声や音が耳に入つてくる。

角を曲がつて初めて田に入つたのは、テレビカメラとテレビのレポーターのマイクだつた。

「同じクラスの生徒さんですか？ 加山君はどういう生徒さんでした？」

いきなりマイクが僕の前にくる。何がなんだかわからず黙つてい

ると、本山がやつてきて「さあ、早く入つて」と言いながら、テレビカメラの前に立ち、僕達を誘導した。

加山の家には何回も来ている。でも、クラスメートの大半は初めてみたいでみんなキヨロキヨロしている。

家は古い和風建築。玄関の前の庭が広く空いており、左にくにゃくにや曲がった松がよく目立つ。庭に入るとすぐ右側に大きなテーブルが置いてあり、それに白黒模様の布がかかっている。受付だ。

参列者はそのテーブルの前に行き、記帳し香典を置いている。庭には人があふれ家の中も沢山の人人が見える。家の外ではこれからお通夜に訪れる人とテレビクルーの人達がもみあつている。

フカヒレが代表で香典を受付に置いた。さつきまでお喋りしていったクラスメートの顔が、悲しみが襲ってきたためか全員緊張している。

ある線を越えるといきなり自分の感情が変化するということが人間にはある。職員室のドアとか校長室のドアもそうだ。今もその線を僕達は越えて加山の家に入った。

いきなり悲しみの感情が、みんなを襲う。女生徒のほとんどは涙を流しているし、立花なんか『ヒック、ヒック』声を上げて泣いている。

玄関で僕達が焼香を待つていると、加山の叔母さんが目の前に来た。

「みんな和ちゃんのお友達ね。ありがとう。和ちゃんも喜んでいる

「叔母さんはそう言つと深々と頭を下げた。ずっと泣いていたのだろ、下が赤くなっている。

叔母さんの後ろに神崎や熊田の姿が見えた。一人とも顔を伏せている。その隣に水口がいる。水口は誰ばかることなく次から次へと涙を流している。

3年になり加山から告白され付き合い出してから、まだ、二ヶ月位しか経っていない。きっと、両親、親戚を除けば、水口が一番悲

しいだろ？

焼香は淡々と進み焼香の終わった人はすぐに家から出ていった。

加山の親戚や知り合いの人達全員が加山の家に入ると家は満杯になるので、ほとんどの親戚や知り合いは近くの公民館を借りてそこに集まっているらしい。

近所の人やちよつとした知り合いは焼香を済ませたらそのまま帰つていく。そのため、お通夜に加山の家を訪れる人はたくさんいたが、家中の人数は常に一定である。

順番通り焼香が進まれていったので、いつの間にか加山の家の中は、ほとんどクラスメートで埋まっていた。

僕達3年7組の生徒が焼香する番になつた。熊田、水口、神崎、ホゾ、前原は、先に来て加山の家にいたが、3年7組の焼香が始まつたら立ち上がり、みんなのところに来た。一緒に焼香したいのだろ？

立花が水口に何か言つている。熊田はまだ『ウォーン、ウォーン』泣いている。前原は鼻水を流しながら泣いている。加山の笑つてゐる写真が目に入った瞬間、僕の目からさつきまで我慢していた涙がどーっと出てきた。

僕は焼香を済ますと、そのまま加山の家を飛び出した。家の外では相変わらずテレビのレポーターがうろちょろしていたが、構わず突破して去つていった。胸が押し潰されそうになるのを追つ払うために走つていった。涙はずっと出っ放しである。

「加山一」声を出すとますます泣けてくる。

「加山一」水口の涙の顔を思い出す。

「加山一」出来る限りの大声を出すと、向こうから歩いているおばさんが、びっくりした顔をしているのが見えたが一瞬である。すぐにおばさんは後方にいなくなる。

『加山、お前死ぬの早いぞ、まだ中学3年じゃないか。俺達これから人生が始まるんだぞ。お前が俺に言つたこと、俺まだ全然意味がわからないよ。お前にちゃんと聞きたかったよ。加山一、加山一』

一時間も僕は走ったかも知れない。時計がないから正確な時間はわからないが、空の色が変わってきたから、それぐらいは走つただろう。途中で何回かは休んだが、休んだ時間は短く、すぐ走つた。

走ることによって悲しみが消えるのではないかと、走りに走つているといつの間にか、慶應の山にぶつかり一気にそれも登つた。山の頂きに立つと下に新幹線の線路が見え、遠くに僕達の町並が見える。加山の家もきっと見えるのだろうが、屋根だけでは見つけることは難しい。空はだいだい色だ。加山を探しに海に行つた時見た空の色とそっくりだった。

風が涼しくなつた。走つていたので僕のシャツは汗でビショビシヨだし、顔は涙でガサガサになつていて。

カワパンは、凄いなーと思つた。

カワパンは、やさしさがある。

カワパンは、勇氣がある。

カワパンは、正義感がある。

カワパンは、知恵がある。

カワパンは、実行力がある。

加山の言葉が断片的に浮かぶ。加山の方が全然凄いじゃないか。俺なんか加山に比べたら大人と子供の違いがあるよ。だいだい色の光が僕を包む。

夕焼け海の夕焼け真っ赤な別れの色だーよ

頭の中ですつとスパイダースの『夕陽が泣いている』が聞こえる。

「この話で完結します」としなかったのでもう一度入れなおします。

昨日の夜のニュースも、今朝のニュースも、加山が死んだことを流していた。中学生がヨットで死ぬということは、ワイドショーでも絶好のネタなのか、三浦半島の加山が流れ着いた現場に女性リポーターが駆けつけて喋っているのがテレビから聞こえてくる。

加山の遺体が家に戻ったのは昨日の夜になつたそうで、その間病院で死因を探すために解剖されたらしい。昨日僕達が家に戻る間、加山は身体を刻まれていたということをテレビで僕は知った。

さつき、フカヒレから3年7組生徒全員で学校に午後4時に集まりお通夜に行くと電話があった。そして、僕に、石山、草津、野口、寺本の一班全員に連絡してと言つたので、僕は草津に電話をしたら草津はびっくりしていた。

僕が、「知らなかつたのか、テレビのニュースでも話してたぞ」と少しかすれた声で言つと「テレビは余り見ない」と答えた。

僕は何か腹立たしく伝えることだけ伝えるとさつさと電話を切つた。次にかけた野口はもう知つていて声を落として返事をしていた。寺本の家に電話はない。呼び出しじよその家に電話をかけて呼ぶことも出来るが、僕は自転車に乗つて寺本の家に行くことにした。

石山からの電話はお昼にかかる予定だからまだ時間はある。昨日の夜、石山から電話があり「明日の昼頃また電話する」と言つて電話を切つたから、その時、石山にはお通夜のことを話せばいいと思い、寺本の所に向かっている。

寺本はテレビのニュースで加山の死は知つていた。僕は簡単に集合時間を伝えると「石山から電話がくるから、じゃあな」と言つて、寺本の家を後にした。

じつとしているのは嫌で、動いていたいのだが、おしゃべりも今はしたくない。まだ、自分の中で加山の死をちゃんと受けとめられなく、どうしていいか、わからないからだ。

石山は約束通り正午ちょうどに電話をかけてきたので、学校で会おうと言つて電話を切つた。

僕は学校の校門前に3時半に着いたが、クラスのほとんどの生徒はもう来ていた。石山も出川も細井もいる。フカヒレが一生懸命人數の確認をしている。

約束は4時なのに校門の前にもうほとんどの生徒が集まつているから、10分前にきた生徒でも走つてくる。結構みんなおしゃべりをしている。一番話題になつてするのがワイドショーで加山が取り上げられたことだ。クラスの生徒がどんな形であれ、テレビで何回も流れたのだからその衝撃度は加山の死と同じくらいあるよで、死よりもテレビの方が大きく感じた生徒はヒソヒソとワイドショーの話をしているのだ。

加山は2年の時、目立つ生徒ではなく、付き合つてゐる人間も4～5人だつたから、付き合つてなかつたクラスメートにとつて、加山という人間がどういう人間かわかつてゐるもののが少なく、友達の死というより知り合いの死と感じてゐるクラスメートも多くいるようだ。

寺本が4時ちょうどに走つて校門にきた。フカヒレが「全員集まつたので出発します」と言つたので、僕が「前原や熊田、水口、神崎もないぞ」と言つと「あいつら、もう加山の家にいる」とフカヒレは答え歩き出した。

学校を出発した時は喋り声がうしろから聞こえていたがさすがに加山の家に近づいてくると、みんな押し黙つてゐる。あの角を曲がれば、加山の家が六軒先に見えるところまで来た時、騒がしい声や音が耳に入つてくる。

角を曲がつて初めて田に入つたのは、テレビカメラとテレビのレポーターのマイクだつた。

「同じクラスの生徒さんですか？ 加山君はどういう生徒さんでした？」

いきなりマイクが僕の前にくる。何がなんだかわからず黙つてい

ると、本山がやつてきて「さあ、早く入つて」と言いながら、テレビカメラの前に立ち、僕達を誘導した。

加山の家には何回も来ている。でも、クラスメートの大半は初めてみたいでみんなキヨロキヨロしている。

家は古い和風建築。玄関の前の庭が広く空いており、左にくにゃくにや曲がった松がよく目立つ。庭に入るとすぐ右側に大きなテーブルが置いてあり、それに白黒模様の布がかかっている。受付だ。

参列者はそのテーブルの前に行き、記帳し香典を置いている。庭には人があふれ家の中も沢山の人人が見える。家の外ではこれからお通夜に訪れる人とテレビクルーの人達がもみあつている。

フカヒレが代表で香典を受付に置いた。さつきまでお喋りしていたクラスメートの顔が、悲しみが襲ってきたためか全員緊張している。

ある線を越えるといきなり自分の感情が変化するということが人間にはある。職員室のドアとか校長室のドアもそうだ。今もその線を僕達は越えて加山の家に入った。

いきなり悲しみの感情が、みんなを襲う。女生徒のほとんどは涙を流しているし、立花なんか『ヒック、ヒック』声を上げて泣いている。

玄関で僕達が焼香を待つていると、加山の叔母さんが目の前に来た。

「みんな和ちゃんのお友達ね。ありがとう。和ちゃんも喜んでいる

「叔母さんはそう言つと深々と頭を下げた。ずっと泣いていたのだろ、下が赤くなっている。

叔母さんの後ろに神崎や熊田の姿が見えた。一人とも顔を伏せている。その隣に水口がいる。水口は誰はばかることなく次から次へと涙を流している。

3年になり加山から告白され付き合い出してから、まだ、二ヶ月位しか経っていない。きっと、両親、親戚を除けば、水口が一番悲

しいだろ？

焼香は淡々と進み焼香の終わった人はすぐに家から出ていった。

加山の親戚や知り合いの人達全員が加山の家に入ると家は満杯になるので、ほとんどの親戚や知り合いは近くの公民館を借りてそこに集まっているらしい。

近所の人やちよつとした知り合いは焼香を済ませたらそのまま帰つていく。そのため、お通夜に加山の家を訪れる人はたくさんいたが、家中の人数は常に一定である。

順番通り焼香が進まれていったので、いつの間にか加山の家の中は、ほとんどクラスメートで埋まっていた。

僕達3年7組の生徒が焼香する番になつた。熊田、水口、神崎、ホゾ、前原は、先に来て加山の家にいたが、3年7組の焼香が始まつたら立ち上がり、みんなのところに来た。一緒に焼香したいのだろ？

立花が水口に何か言つている。熊田はまだ『ウォーン、ウォーン』泣いている。前原は鼻水を流しながら泣いている。加山の笑つてゐる写真が目に入った瞬間、僕の目からさつきまで我慢していた涙がどーっと出てきた。

僕は焼香を済ますと、そのまま加山の家を飛び出した。家の外では相変わらずテレビのレポーターがうろちょろしていたが、構わず突破して去つていった。胸が押し潰されそうになるのを追つ払うために走つていった。涙はずっと出っ放しである。

「加山一」声を出すとますます泣けてくる。

「加山一」水口の涙の顔を思い出す。

「加山一」出来る限りの大声を出すと、向こうから歩いているおばさんが、びっくりした顔をしているのが見えたが一瞬である。すぐにおばさんは後方にいなくなる。

『加山、お前死ぬの早いぞ、まだ中学3年じゃないか。俺達これから人生が始まるんだぞ。お前が俺に言つたこと、俺まだ全然意味がわからないよ。お前にちゃんと聞きたかったよ。加山一、加山一』

一時間も僕は走ったかも知れない。時計がないから正確な時間はわからないが、空の色が変わってきたから、それぐらいは走つただろう。途中で何回かは休んだが、休んだ時間は短く、すぐ走つた。

走ることによって悲しみが消えるのではないかと、走りに走つて

いるといつの間にか、慶應の山にぶつかり一気にそれも登つた。

山の頂きに立つと下に新幹線の線路が見え、遠くに僕達の町並が見える。加山の家もきっと見えるのだろうが、屋根だけでは見つけることは難しい。空はだいだい色だ。加山を探しに海に行つた時見た空の色とそっくりだった。

風が涼しくなつた。走つていたので僕のシャツは汗でビショビシ

ヨだし、顔は涙でガサガサになつていて。

カワパンは、凄いなーと思つた。

カワパンは、やさしさがある。

カワパンは、勇気がある。

カワパンは、正義感がある。

カワパンは、知恵がある。

カワパンは、実行力がある。

カワパンは、知恵がある。

加山の言葉が断片的に浮かぶ。加山の方が全然凄いじゃないか。

俺なんか加山に比べたら大人と子供の違いがあるよ。

だいだい色の光が僕を包む。

夕焼け海の夕焼け真っ赤な別れの色だーよ

頭の中ですつとスパイダースの『夕陽が泣いている』が聞こえる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4612o/>

---

カワパン

2011年1月16日08時25分発行